

長野県松本市

松本城下町跡

*HONMACHI*

本 町

—第8次発掘調査報告書—



2019.3







松本市教育委員会





## 例 言

- 1 本書は、平成27年8月3日～平成28年9月13日に実施された、長野県松本市中央2丁目20番2ほかに所在する松本城下町跡本町の第8次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、信濃毎日新聞株式会社松本本社移転新築事業に伴う緊急発掘調査であり、信濃毎日新聞株式会社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査、整理・報告書作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆分担について、本文冒頭に記名のないものについては、以下のとおりである。  
第I章を宮下亮、第II章第2節を鈴木仁美、第III章第4節1・2を竹内靖長、第III章第4節3を高山いず美、第III章第4節5を小山奈津実、その他を原田健司が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。  
遺物洗浄・注記 天野雅代・井内南奈香・内田和子・洞澤文江・三澤栄子  
遺物保存処理・接合復元 天野雅代・内田和子・洞澤文江・三澤栄子  
遺物実測・トレース (土器・陶磁器、瓦、埴埴) 久保田瑞恵・竹内直美・竹平悦子  
(木製品) 久保田瑞恵・竹内直美・中澤温子  
(石製品) 白鳥文彦・原田健司 (金属製品) 洞澤文江・古林舞香  
陶磁器デジタルカラー実測 直井慎之介・直井由加理  
遺構図整理・トレース 荒井留美子  
写真撮影 (遺構) 白鳥文彦・鈴木仁美・竹内靖長・原田健司  
(空中写真) 株式会社地図測量 (遺物) 宮嶋洋一  
DTP 白鳥文彦・高山いず美・竹内直美・直井慎之介・直井由加理・原田健司・古林舞香・壬生量子
- 5 本書で用いた略記は次のとおりである。  
第○号建物址→建○、第○号敷地境遺構→敷地境○、第○号石列→石列○、第○号溝状遺構→溝○、第○号炭範囲→炭○、第○号土坑→土○、第○号ピット→P○
- 6 図中で使用した方位は真北を示す。また、遺構図中に示した国家座標値(世界測地系・第8系)は、東北太平洋沖地震後の補正值である。
- 7 図類の縮尺は、遺構：1/40・1/80、土器・陶磁器・瓦・埴埴：1/4、木製品：1/3・1/4・1/8、石製品：2/3・1/3、金属製品：1/1・2/3・1/2で掲載した。写真図版の縮尺は、遺構：不同、遺物(俯瞰)：不同、遺物(平置き)：木製品1/4・1/3、石製品は2/3・1/3、金属製品は1/1・1/2・不同で掲載した。
- 8 本書では以下のものを遺構図にスクリーントーンで表した。

	焼土		攪乱
	粘土		推定ライン
	炭化物		遺物
- 9 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 10 土器・陶磁器実測図の断面の塗り分けは、白：土師質土器・瓦、黒：陶磁器である。
- 11 発掘調査実施と報告書作成にあたり次の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申しあげる。  
梅崎恵司、河西克造、北垣總一郎、後藤芳孝、笹本正治、菅沼加那、諏訪間順、関口かをり、原明芳、平林彰、藤沢良祐、保柳康一、満田良順、南山孝
- 12 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒399-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に保管している。

# 目次

例言

目次

## 第I章 調査の経過

第1節 調査の経緯	6
第2節 調査体制	7

## 第II章 遺跡の位置と歴史

第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	12

## 第III章 調査の方法と成果

第1節 過去の調査	18
第2節 調査の方法	19

### 第3節 遺構

1 A区第I検出面	20
2 A区第II検出面・B区第I検出面	22
3 B区第II検出面	23
4 A・B区第III a・b検出面	24
5 A・B区第IV検出面	24
6 A・B区第V検出面	26

### 第4節 遺物

1 土器・陶磁器	56
2 瓦	60
3 木製品	85
4 石製品	95
5 金属製品	98
6 自然遺物	101

## 第IV章 鑄造関連資料について

## 第V章 自然科学分析

第1節 樹種同定	123
第2節 放射性炭素年代測定	124

## 第VI章 調査のまとめ

写真図版

報告書抄録

## 写真図版目次

写真図版 1	調査区から松本城を望む合成写真	写真図版 18	石製品
写真図版 2～7	遺構	写真図版 19	金属製品
写真図版 8～13	土器・陶磁器、貝類	写真図版 20～24	鑄造関連資料
写真図版 14～17	木製品		

## 表目次

表 1	御使者宿の変遷表	表 18	石製品一覧表
表 2	本町に係る災害年表	表 19	金属製品一覧表
表 3	過去の調査一覧表	表 20	金属製品分布表
表 4	建物址一覧表	表 21	哺乳類骨出土地別一覧表
表 5	敷地境遺構一覧表	表 22	鳥類・爬虫類・魚類骨出土地別一覧表
表 6	石列一覧表	表 23	二枚貝出土地別一覧表
表 7	集石遺構一覧表	表 24	巻き貝出土地別一覧表
表 8	溝状遺構一覧表	表 25	種子類出土地別一覧表
表 9	水道遺構一覧表	表 26	種名表
表 10	礎石一覧表	表 27	銭座一覧表（中世・近世・近代）
表 11	炭範囲一覧表	表 28	古銭（中国銭）一覧表
表 12	土坑一覧表	表 29	古銭（寛永通寶）一覧表
表 13	ピット一覧表	表 30	古銭分布表
表 14	土器・陶磁器一覧表	表 31	埴塙一覧表
表 15	軒丸瓦一覧表	表 32	放射性炭素年代測定結果
表 16	平瓦一覧表	～ 34	
表 17	木製品一覧表	表 35	松本城下町跡（本町第8次調査）における樹種同定結果

## 図目次

図 1	調査地の位置と周辺遺跡	図 36	A・B区IV検 遺構図
図 2	事業対象地と調査区の範囲	図 37	土器・陶磁器 (1)
図 3	調査地周辺の航空写真	図 38	土器・陶磁器 (2)
図 4	土層断面図	図 39	土器・陶磁器 (3)
図 5	元禄 10 年（1697）5 月本町家主間数絵図	図 40	土器・陶磁器 (4)
図 6	本町好味御預り家屋敷目録	図 41	土器・陶磁器 (5)
図 7	4 丁目へ移転後の御使者屋敷間取り図	図 42	土器・陶磁器 (6)
図 8	寛文 9 年（1669）本町復元図	図 43	土器・陶磁器 (7)
図 9	享保 9 年（1724）本町復元図	図 44	土器・陶磁器 (8)
図 10	幕末期（1853～1869）本町復元図	図 45	土器・陶磁器 (9)
図 11	屋敷移転の願い書	図 46	土器・陶磁器 (10)
図 12	A 区 I 検 全体図	図 47	土器・陶磁器 (11)
図 13	A 区 II 検・B 区 I 検 全体図	図 48	土器・陶磁器 (12)
図 14	B 区 II 検 全体図	図 49	土器・陶磁器 (13)
図 15	A・B 区 III a 検 全体図	図 50	瓦
図 16	A・B 区 III b 検 全体図	図 51	木製品 (1)
図 17	A・B 区 IV 検 全体図	図 52	木製品 (2)
図 18	A 区 I 検・B 区 II 検 推定御使者宿範囲図	図 53	木製品 (3)
図 19	A 区 II 検・B 区 I 検 推定御使者宿範囲図	図 54	木製品 (4)
図 20	A 区 I 検 遺構図①	図 55	木製品 (5)
図 21	A 区 I 検 遺構図②	図 56	木製品 (6)
図 22	A 区 I 検 遺構図③	図 57	木製品 (7)
図 23	A 区 I 検 遺構図④	図 58	石製品
図 24	A 区 I 検 遺構図⑤	図 59	金属製品
図 25	A 区 II 検・B 区 I 検 遺構図①	図 60	寛永通寶 (1)
図 26	A 区 II 検・B 区 I 検 遺構図②	図 61	寛永通寶 (2)・中国銭
図 27	A 区 II 検・B 区 I 検 遺構図③	図 62	鑄放（バリ付寛永通寶）(1)
図 28	A 区 II 検・B 区 I 検 遺構図④	図 63	鑄放（バリ付寛永通寶）(2)
図 29	B 区 II 検 遺構図	図 64	埴塙 (1)
図 30	A 区 III b 検・A 区 IV 検 遺構図	図 65	埴塙 (2)
図 31	A 区 IV 検区画 1 遺構図	図 66	暦年較正年代グラフ（cal BP、参考）
図 32	A 区 IV 検区画 2 遺構図	図 67	暦年較正年代グラフ（cal BC/AD、参考）
図 33	A 区 IV 検区画 3 遺構図	図 68	長州藩銭座図模式図
図 34	A 区 IV 検区画 4 遺構図	図 69	大阪「摂津国西成郡難波村鑄銭出張所之近景全図」
図 35	A 区 IV 検区画 5 遺構図		

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査の経緯

信濃毎日新聞株式会社（以下「信毎」という。）により松本市中央 2 丁目 20 番 2 ほかで松本本社移転新築事業が計画されたが、予定地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である松本城下町跡（本町）に該当していた。平成 26 年 12 月 10 日付で文化財保護法 93 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が信毎から長野県教育委員会（以下「県教委」という。）宛に提出された。松本市教育委員会（以下「市教委」という。）では既存建物の解体に立ち会い、土層状況を確認するため、平成 27 年 6 月 18 日～7 月 13 日に事業地内で工事立会調査を実施した。立会調査の結果をふまえ、事業者である信毎と保護協議を行い、発掘調査とこれに係る事務処理については市教委が実施することとし、信毎と松本市の間に平成 27 年 8 月 3 日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成 27 年 8 月 3 日～平成 28 年 9 月 13 日に実施した。調査終了後、平成 28 年 10 月 3 日付で県教委に発掘調査終了報告書を提出した。また、9 月 16 日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、10 月 4 日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け平成 29 年 4 月 6 日付で出土文化財譲与申請書を県教委に提出し、4 月 12 日付で出土文化財の譲与についての通知を受けた。

本発掘調査に係る文書等の記録は以下のとおりである。

〈平成 26 年度〉

- 12 月 10 日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」を信毎が市教委に提出
- 12 月 16 日 上記届出と「松本城下町跡に関わる保護意見書」を市教委が県教委に進達、提出
- 12 月 18 日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」県教委から信毎と市教委に通知（立会）
- 1 月 14 日 第 1 回埋蔵文化財保護協議実施

〈平成 27 年度〉

- 4 月 3 日 第 2 回埋蔵文化財保護協議実施
- 6 月 18 日～7 月 13 日 市教委が工事立会調査実施
- 7 月 1 日 第 3 回埋蔵文化財保護協議実施
- 7 月 13 日 第 4 回埋蔵文化財保護協議実施
- 8 月 3 日 信毎と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
- 8 月 3 日～3 月 31 日 市教委が発掘調査実施
- 3 月 31 日 松本市が信毎に埋蔵文化財発掘調査完了報告書提出

〈平成 28 年度〉

- 4 月 1 日 信毎と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結（発掘・整理作業）
- 4 月 1 日～9 月 13 日 市教委が発掘調査実施
- 9 月 16 日 「埋蔵物発見届」「埋蔵文化財保管証」を市教委が松本警察署、県教委に提出
- 10 月 3 日 「発掘調査終了報告書」を市教委が県教委に提出
- 10 月 4 日 「文化財の認定及び県帰属について」県教委から市教委に通知
- 10 月 17 日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」を信毎が市教委に提出
- 10 月 20 日 上記届出と「松本城下町跡に関わる保護意見書」を市教委が県教委に進達、提出
- 10 月 24 日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」県教委から信毎と市教委に通知
- 3 月 31 日 松本市が信毎に埋蔵文化財発掘調査完了報告書提出

〈平成 29 年度〉

- 4 月 1 日 信毎と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結（整理作業）
- 4 月 6 日 「出土文化財譲与申請書」を市教委が県教委へ提出
- 4 月 12 日 「出土文化財の譲与について」県教委から市教委に通知
- 3 月 27 日 松本市が信毎に埋蔵文化財発掘調査完了報告書提出

〈平成 30 年度〉

- 4 月 1 日 信毎と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結（報告書作成）

## 第2節 調査体制

---

<平成27年度(発掘調査)>

調査団長：赤羽郁夫(松本市教育長)

調査担当：竹内靖長(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、原田健司(主事)、白鳥文彦(囑託)、鈴木仁美(同)

発掘協力者：井内南奈香、井口方宏、岩井健一郎、白田岳大、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、金井秀雄、黒崎奨、小岩井洋、坂口ふみ代、曾根原裕、田中勇一郎、西村一敏、平出賢一、道浦久美子、宮澤文雄、百瀬二三子、百瀬泰宏、柳さおり、矢満田伸子、古屋美江

整理協力者：荒井留美子、井内南奈香、市川二三夫、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、村山牧枝

事務局：内城秀典(課長)、直井雅尚(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、竹内靖長(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、三村竜一(埋蔵文化財担当係長)、櫻井了(主査)、吉見寿美恵(囑託)

<平成28年度(発掘調査・整理作業)>

調査団長：赤羽郁夫(松本市教育長)

報告担当：原田健司(主事)、白鳥文彦(囑託)、鈴木仁美(同)

発掘協力者：朝倉秀明、芦沢雅量、井口方宏、今井文雄、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、金井秀雄、坂口ふみ代、曾根原裕、田中勇一郎、古屋美江、道浦久美子、宮澤文雄、百瀬二三子、百瀬泰宏、柳さおり、山崎素行、矢満田伸子

整理協力者：天野雅代、中澤温子、原田梨恵、前沢里江、三澤栄子

事務局：木下守(課長)、直井雅尚(埋蔵文化財担当係長)、櫻井了(主査)、吉見寿美恵(囑託)

<平成29年度(整理作業)>

調査団長：赤羽郁夫(松本市教育長)

調査担当者：三村竜一(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、原田健司(主事)、島岡祐輔(事務員)、白鳥文彦(囑託)、鈴木仁美(同)

整理協力者：天野雅代、荒井留美子、内田和子、柏原佳子、沢柳宜子、竹内直美、中澤温子、洞澤文江、三澤栄子

事務局：大竹永明(課長)、三村竜一(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、百瀬耕司(主査)、吉見寿美恵(囑託)

<平成30年度(整理作業・報告書刊行)>

調査団長：赤羽郁夫(松本市教育長)

報告担当：竹内靖長(課長補佐・南・西外堀整備担当係長)、玉川元気(主任)、原田健司(主事)、小山奈津実(同)、白鳥文彦(囑託)、宮下亮(同)、高山いず美(同)、鈴木仁美(同)、古林舞香(同)、壬生量子(同)

調査員：宮嶋洋一

整理協力者：荒井留美子、柏原佳子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、直井槇之介、直井由加理、洞澤文江、宮本章江

事務局：大竹永明(課長)、三村竜一(課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、百瀬耕司(主査)、吉見寿美恵(囑託)



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史

### 第1節 地理的環境

#### 1 松本城下町跡付近の地形・地質の外観

調査地は、松本城天守閣の南約 600m、標高約 587m 地点に位置する。北には女鳥羽川、南には薄川が流れており、それぞれ約 150m と約 750m の地点にある。

松本市街地は海拔 600m の等高線が円形に取り囲み、付近では最も標高が低くなっている。ここに女鳥羽川や薄川、田川などの河川が流れ込み、複合扇状地を形成している。ボーリング調査によると、基盤である第三紀層の上に 100m 前後の河川堆積物が確認できる。

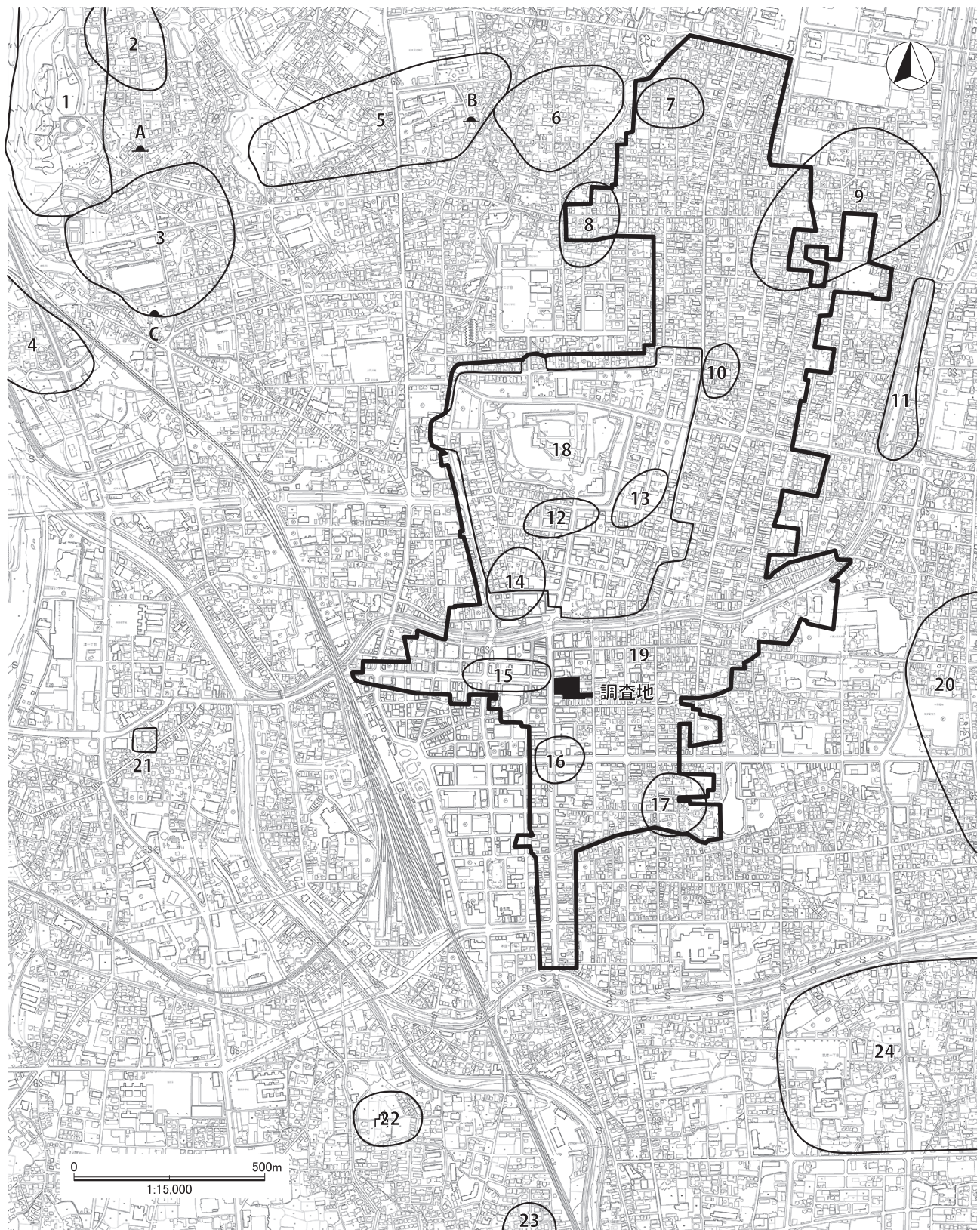
女鳥羽川の旧流路は稲倉から城山の山頂部に向かって流れていたと言われている。城山方面の隆起とともに川筋が東へ移動し、水汲方面へ流路を変えていったと考えられている。そのため、女鳥羽川扇状地を開析して右岸には河岸段丘が形成されている。薄川は三峰山北西斜面を源流とし、大小様々な支流が合流し、田川へ注ぐ。下流部では舟付橋付近を扇頂として扇状地ができています。この女鳥羽川扇状地と薄川扇状地の扇端部付近に松本城が築かれ、扇状地の伏流水を利用した堀が造られている。

#### 2 調査地点の地形・地質

今回の発掘調査地点は松本市中央 2 丁目にあり、すぐ北側を蛇川が西流する。調査地付近の旧地形は基本的には北東から南西にかけて緩やかに傾斜している。

地山面を最大 2.6 m 覆う土壌は、すべて戦国時代～現代までの整地客土層である。その基本構成は、現地表から -0.6m までが碎石等現代の客土、以下 -1.5 m までが現代の建築基礎構造物及び客土で、それ以下が江戸時代後半以前の整地土層である。-0.6 から -1.5m までの間には、現代の建築基礎構造物の攪乱を受けていない範囲が限定的だが残っており、遺物等から幕末から明治初期の整地土層と考えられる。江戸期整地土層は、A 区で上位から第Ⅰ検出面（17 世紀後半～ 18 世紀後半）、第Ⅱ検出面（17 世紀中頃～ 18 世紀中頃）、第Ⅲ検出面（16 世紀末～ 17 世紀初頭）、第Ⅳ検出面（14～ 15 世紀、16 世紀末～ 17 世紀初頭）があり、B 区で第Ⅰ検出面（17 世紀中頃～ 18 世紀中頃、A 区第Ⅱ検出面に相当）、第Ⅱ検出面（17 世紀中頃～ 18 世紀初頭）、第Ⅲ検出面（16 世紀末～ 17 世紀初頭）、第Ⅳ検出面（14～ 15 世紀、16 世紀末～ 17 世紀初頭）が確認された。A 区Ⅰ・Ⅱ検と B 区Ⅰ・Ⅱ検に差が出るのは、A 区調査時に捉えきれなかった土層を B 区調査時に捉えたためである。従って検出面に A 区もしくは B 区を追記して遺構・遺物の所属を区別した。また、同検出面中の各遺構の帰属時期に大きく幅ができるのは、調査区内に複数の武家屋敷地が存在するため、各屋敷地の整地面の成立時期に時期差があったためである。第Ⅳ検出面の直下は地山である女鳥羽川起因の堆積土が確認できた。調査区北西部では、厚さ 0.9m 以上の礫層が、中央部では腐食したアシ・ヨシなどの繊維を多く含むシルト層が、西部ではシルト質土と砂礫層が混在する土石流を捉えることができた。シルト層上端から 9 世紀代の須恵器杯が出土したことから、9 世紀以降に堆積した土層と考えられる。





遺跡

- |          |           |          |           |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 1 犬甘城址   | 7 堂町遺跡    | 13 丸の内遺跡 | 19 松本城下町跡 |
| 2 放光寺遺跡  | 8 田町遺跡    | 14 土居尻遺跡 | 20 県町遺跡   |
| 3 城山腰遺跡  | 9 岡の宮遺跡   | 15 伊勢町遺跡 | 21 渚城址    |
| 4 宮瀨本村遺跡 | 10 片端遺跡   | 16 本町南遺跡 | 22 井川城址   |
| 5 蟻ヶ崎遺跡  | 11 女鳥羽川遺跡 | 17 天神西遺跡 | 23 小島遺跡   |
| 6 沢村遺跡   | 12 大名町遺跡  | 18 松本城址  | 24 筑摩遺跡   |

古墳

- |            |
|------------|
| A 開き松古墳    |
| B 饅頭塚古墳    |
| C 勢多賀神社裏古墳 |

図1 調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/15000)



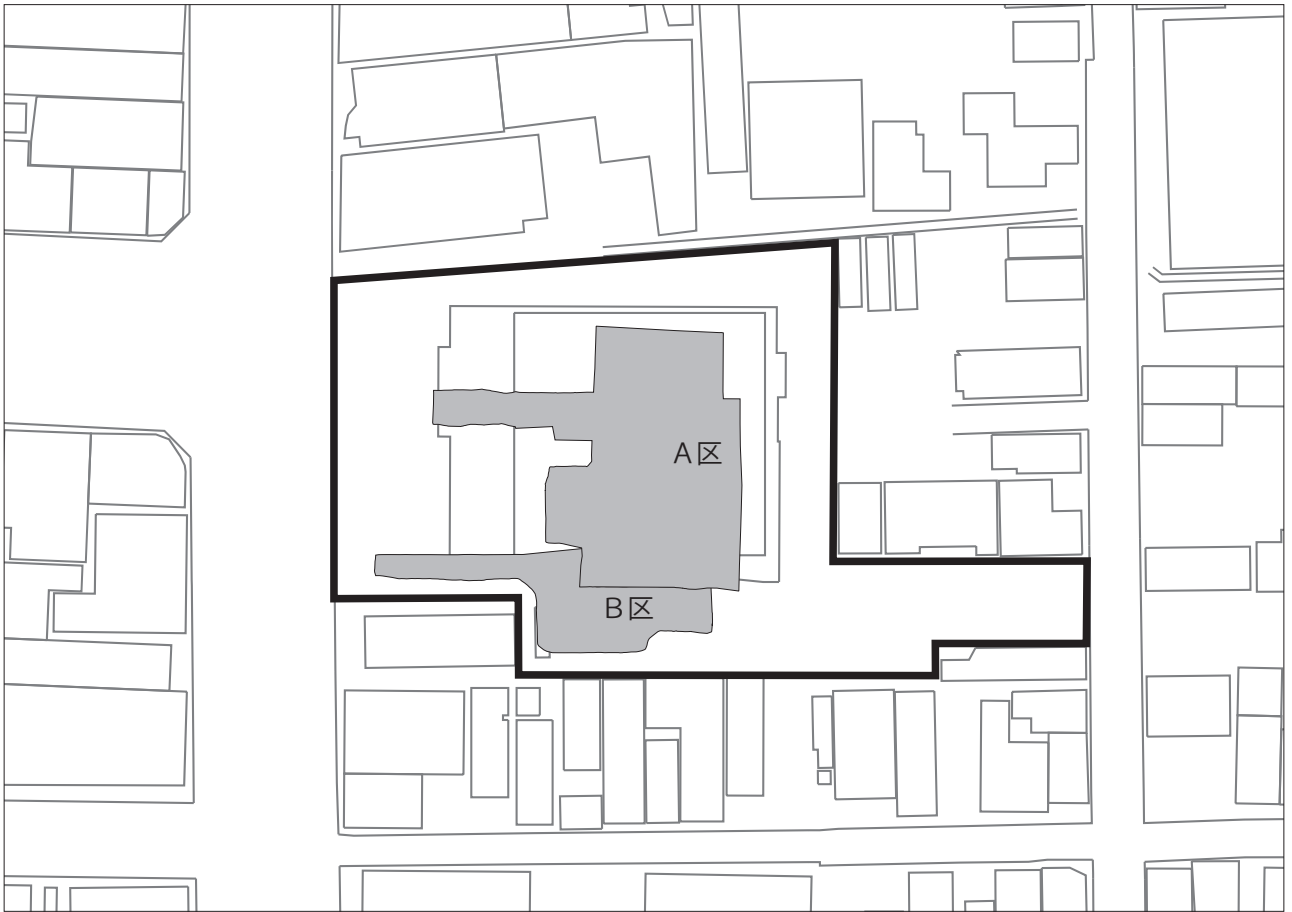


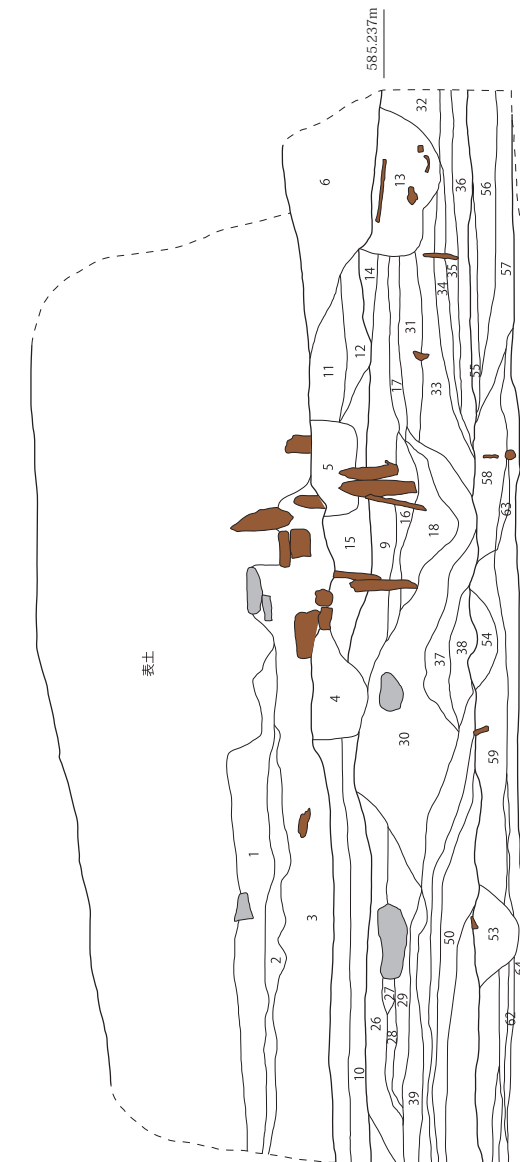
図2 事業対象地と調査区の範囲 (S=1/1000)



図3 調査地周辺の航空写真 (S=1/1000、平成25年撮影)



A 区西壁断面図

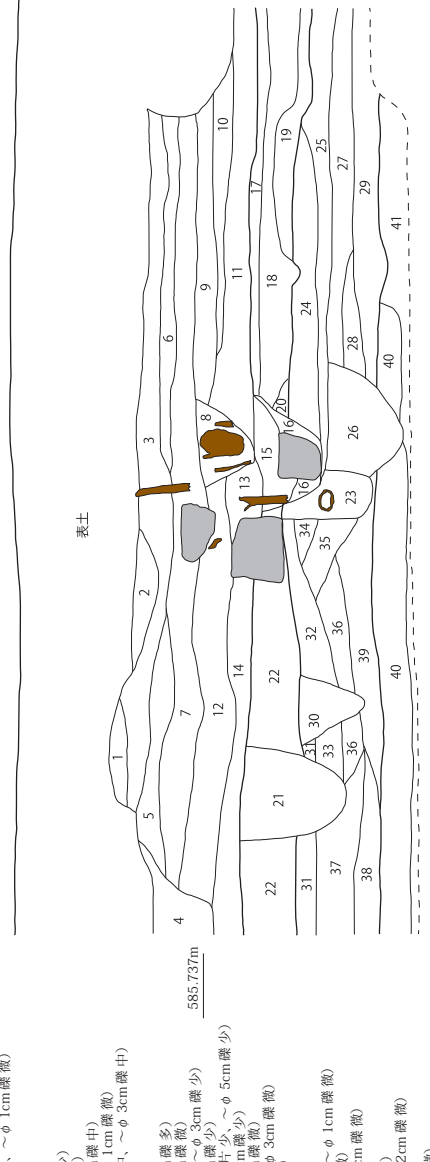


- A 区西壁
- 1: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物中、粘土多、 $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 2: 2.5Y 3/2.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物多、粘土中、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 3: 2.5Y 4/3 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (炭化物微、鉄分微、 $\sim \phi$  1cm 礫少)
  - 4: 2.5Y 4.5/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物微、 $\sim \phi$  2cm 礫中)
  - 5: 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物微、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
  - 6: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂 (粘土中、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
  - 7: 2.5Y 3/2 黒褐色 砂質シルト (木片少、炭化物少)
  - 8: 2.5Y 3/2.5 黒褐色 細砂 (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫少)
  - 9: 2.5Y 4/5 黄灰色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫少)
  - 10: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (炭化物少、鉄分微)
  - 11: 5Y 3/2 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト ( $\sim \phi$  2cm 礫微)
  - 12: 2.5Y 3/2.5 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物微)
  - 13: 2.5Y 4/3 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 ( $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 14: 2.5Y 4/3 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 ( $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 15: 5Y 4/2 灰オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 16: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (粘土中)
  - 17: 2.5Y 4/3 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (木片微、炭化物微)
  - 18: 2.5Y 3.5/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (木片少、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
  - 19: 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂 (炭化物少、 $\sim \phi$  1cm 礫微)

- 20: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物微)
- 21: 2.5Y 2/1 黒色 細砂
- 22: 2.5Y 5/3.5 灰オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (炭化物微、鉄分微)
- 23: 2.5Y 4.5/3 黄褐色 細砂 (鉄分微)
- 24: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 25: 5Y 4/2 灰オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 26: 10R 3/3 暗褐色 土質 (細砂少、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 27: 2.5Y 4/3 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (炭化物微、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
- 28: 2.5Y 5/3 黄褐色 細砂 (木片微、炭化物少)
- 29: 2.5Y 4.5/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物少)
- 30: 2.5Y 3/2.5 黒褐色 砂質シルト ( $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 31: 2.5Y 6/3 土質 (黒色 細砂、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 32: 2.5Y 3.5/2 黒褐色 細砂 (木片少、炭化物微)
- 33: 2.5Y 3.5/2 黒褐色 細砂 (木片少、炭化物微)
- 34: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 35: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 細砂 (木片微、炭化物微)
- 36: 2.5Y 3/2 黒褐色 細砂 (木片少、炭化物微)
- 37: 10R 2/3 黒褐色 土質 ( $\sim \phi$  5cm 礫少)
- 38: 礫層 ( $\sim \phi$  5cm 礫大)
- 39: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物少)
- 40: 2.5Y 5/4 黄褐色 細砂
- 41: 2.5Y 4/4 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 ( $\sim \phi$  2cm 礫多)
- 42: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト ( $\sim \phi$  3cm 礫中)
- 43: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 ( $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 44: 2.5Y 7/2 黄褐色 細砂 (炭化物微、鉄分多)
- 45: 2.5Y 5/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物微)
- 46: 2.5Y 3.5/2 暗灰黄色 細砂 ( $\sim \phi$  5cm 礫微)
- 47: 2.5Y 5/3 黄褐色 細砂 ( $\sim \phi$  1cm 礫少)
- 48: 2.5Y 3.5/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 49: 2.5Y 3.5/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト ( $\sim \phi$  5cm 礫微)
- 50: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫微)
- 51: 5Y 3/2 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫少)
- 52: 礫層 ( $\sim \phi$  5cm 礫多)
- 53: 2.5Y 2.5/1 黒色 砂質シルト (炭化物微)
- 54: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (鉄分微)
- 55: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト ( $\sim \phi$  1cm 礫微)
- 56: 2.5Y 3/2.5 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 57: 2.5Y 3/2.5 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、鉄分少)
- 58: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、鉄分微)
- 59: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、鉄分微)
- 60: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (木片微)
- 61: 2.5Y 3.5/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物微、鉄分少)
- 62: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (鉄分中)
- 63: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 64: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微)
- 65: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 細砂 (炭化物微、鉄分微)
- 66: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂
- 67: 2.5Y 4/1.5 黄褐色 砂質シルト (鉄分微)
- 68: 2.5Y 3.5/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物微、鉄分少)
- 69: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト
- 70: 2.5Y 4/1 黄灰色 砂質シルト

図 4 土層断面図

A 区東壁断面図



- A 区東壁
- 1: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 2: 2.5Y 3/2.5 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (粘土多、炭化物多、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
  - 3: 5Y 3/2 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物中、粘土中、鉄分微、 $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 4: 2.5Y 3/2 黒褐色 砂質シルト (炭化物多、粘土中、 $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 5: 礫層 ( $\sim \phi$  5cm 礫大)
  - 6: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物中、粘土中、 $\sim \phi$  3cm 礫微)
  - 7: 2.5Y 3.5/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物多、粘土中、 $\sim \phi$  5cm 礫中)
  - 8: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 粘質シルト (炭化物中、木片微)
  - 9: 5Y 3/1.5 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 粘質シルト (炭化物中、木片微)
  - 10: 5Y 4/1.5 灰オリ $\rightarrow$ ア 褐色 粘質シルト (炭化物中、木片微)
  - 11: 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質シルト (炭化物中、鉄分微)
  - 12: 2.5Y 3/2.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物少、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 13: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物少、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 14: 2.5Y 3/2 黒褐色 砂質シルト (炭化物中)
  - 15: 2.5Y 3/2 黒褐色 砂質シルト (炭化物少)
  - 16: 2.5Y 3.5/1 黒褐色 細砂 (炭化物微、 $\sim \phi$  3cm 礫少)
  - 17: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物中、 $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 18: 2.5Y 4/1.5 黄褐色 砂質シルト (炭化物中、 $\sim \phi$  3cm 礫中)
  - 19: 2.5Y 4/2 暗灰黄色 細砂 (炭化物中、鉄分少、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 20: 2.5Y 4/1.5 黄褐色 砂質シルト (炭化物中、 $\sim \phi$  10cm 礫大)
  - 21: 2.5Y 4/1 黄灰色 中砂 ( $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 22: 10G 4/1 暗緑灰色 中砂 ( $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 23: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫多)
  - 24: 2.5Y 3/1 黒褐色 砂質シルト (炭化物中、木片少、 $\sim \phi$  3cm 礫少)
  - 25: 2.5Y 3.5/2 黒褐色 砂質シルト (炭化物中、木片少、 $\sim \phi$  3cm 礫微)
  - 26: 2.5Y 3/1 黒褐色 粘質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  2cm 礫少)
  - 27: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物中、木片微、 $\sim \phi$  3cm 礫少)
  - 28: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物中、木片微、 $\sim \phi$  3cm 礫少)
  - 29: 2.5Y 3/2.5 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  5cm 礫微)
  - 30: 2.5Y 3/2.5 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物中、 $\sim \phi$  3cm 礫微)
  - 31: 5Y 2.5/1 オリ $\rightarrow$ ア 褐色 粘質シルト ( $\sim \phi$  10cm 礫中)
  - 32: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 33: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 34: 2.5Y 3/3 暗オリ $\rightarrow$ ア 褐色 砂質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 35: 2.5Y 3/2 黒褐色 粘質シルト (黄褐色 砂中、 $\sim \phi$  1cm 礫微)
  - 36: 2.5Y 3/1 黒褐色 粘質シルト (炭化物微、木片微)
  - 37: 2.5Y 3/2.5 黒褐色 粘質シルト (炭化物微、木片微)
  - 38: 2.5Y 3/1.5 黒褐色 粘質シルト (炭化物微、木片微)
  - 39: 2.5Y 3.5/2 暗灰黄色 粘質シルト (炭化物少、 $\sim \phi$  2cm 礫微)
  - 40: 2.5Y 3/2 暗灰黄色 粘質シルト (炭化物少、木片少)
  - 41: 2.5Y 3/2 黒褐色 粘質シルト (炭化物微、 $\sim \phi$  2cm 礫微)

## 第2節 歴史的環境

### 1 松本城下町の略史

松本城下町跡伊勢町第23次調査において、城下町下層より12～13世紀の遺構・遺物が見つかったことにより、周辺に中世の集落があったことが判明した。この中世集落は、伊勢町東部から本町にかけて広がる安定した砂質層上にあり、低湿地のなかに縞状に残った微高地上に形成されたと考えられる。この地に鎌倉期の集落が形成され、やがて城下町時代に野麦街道や善光寺街道を通し、伊勢町・本町等の主要な城下町が造られたと推定できる。

松本城は、本丸・二の丸・三の丸とその曲輪の周囲に水をたたえた内堀・外堀・総堀で囲んだ城内と、本町を中心とした城下町で構成される。今からおよそ420年前、関白豊臣秀吉が天下人であった頃に和泉国(現大阪府南部)から移封した石川数正・康長父子によって松本城の築城が始められた。松本は善光寺道(北国西街道)と千国街道、西は野麦街道などのいくつもの街道が交差し、物資や文化の中継地として古くから栄えていた要衝の地であり、西国の秀吉にとっては東国の大名たちを監視・牽制するにあたっての重要な場所であった。

天正18年(1590)の天下統一後、秀吉の拠点整備が急速に行われるなか、石川氏も天守をはじめ城下町の建設を進め、城域を拡大しながらその後入封した水野氏の頃(1642～1725)に凡その完成をみたとされる。今も松本城域の地割はほぼ当時のまま残っており、これは松本城を軸に町が発展してきた証である。

### 2 文献史料にみる調査地周辺の様相

松本城下町の様子を記した絵図は、17世紀から幕末期に至るまで原本・写しともに多数現存する。ここでは、史料を通して本町が持つ特徴や位置的役割についてみていくこととする。

#### (1) 問屋・酒屋が多かった本町

城下町建設以来、交通・交易の要衝であった親町には問屋・大店・旅籠を扱う商家が集中していた。親町以外の枝町・小路には、それぞれ医者業、紺屋業、鍛冶屋業など、中小手工業者を中心に配置されており、町ごとに住み分けがされていた。後述する「御使者宿」が常設で置かれ始めた寛文7年(1667)頃は、松本では酒造業が発達し、城下に75軒あった酒造屋のうち3割が本町に集中していた。また、18世紀初頭の『松本市中記』<sup>文献3</sup>には、松本に酒造関係者が63人(酒屋54人・杜氏9人)いたと記されており、やはり酒造が盛んであったことがうかがえる。その下支えとなったのには、源智の井戸などの松本ならではの豊富な湧水と、安曇郡などから集まった米などによるものが大きい。

元禄10年(1697)5月作成の本町家主間数絵図によると、本調査地一帯には「御使者屋敷」をはじめ北隣に「山田や」「大坂や」「嶋や」といった商家が並んでいたことがわかる(図5)。間口6間の町屋がこれだけ建ち並ぶのは中でもこの箇所だけである。立派な店構えの大店が建ち並ぶさまは、当時松本を訪れた人々の目をさぞかし引いたことであろう。

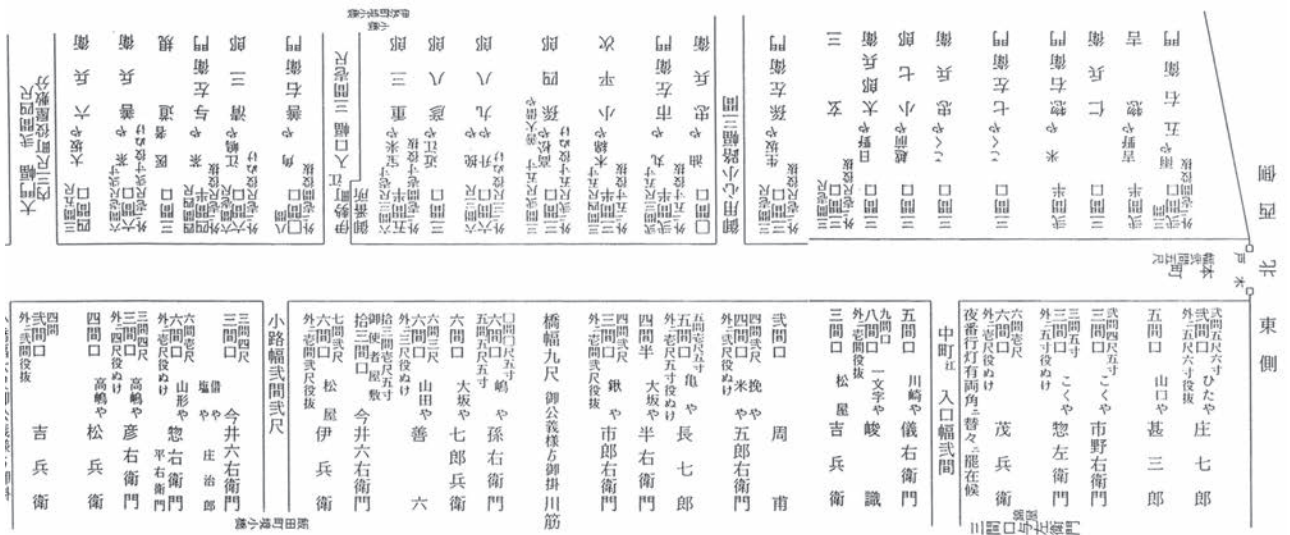


図5 元禄10年(1697)5月本町家主間数絵図<sup>文献3</sup>

(2) 本町におかれた御使者宿

先に述べたとおり、主要街道に面する親町三町は宿場町の機能や流通交易の中心的役割を果たしているが、本町のもう一つの特徴として、大名や幕府要人・諸藩からの使者を接待し、御用飛脚などを宿泊させる「御使者宿」という藩の公的施設が挙げられる。宿は、身分の高い人が宿泊する場合にも差支えないだけの立派なものであり、城の細工師によってつくられた内部は、まるで御殿と同じ作りになっていたと言われる。御使者宿については、藤牧氏の先行研究<sup>文献7</sup>を参考とし、再検討を試みることにする。

ア 立地と運営者

図5に示したように、伊勢町を通る野麦街道との突き当たりに「御使者屋敷 今井六右衛門」とある。ここが現在信濃毎日新聞株式会社松本本社ビルが建つ敷地の一角にあたる。人宿の運営を担った今井家には、屋敷の規模を記した文書が伝えられてきた(図6)。

- 本町好味御預り家屋敷目録
- 一、表拾三間 裏へ三拾七間之屋敷
  - 一、本家 表七間 但シ裏二三間三間之蔵有 裏八間 式間三間ひさし有
  - 内二
    - 一、表拾九疊 戸式拾本
    - 志ようし三本 から紙四本
    - いろ里ふる三ツ こたつ巻ツ
    - 釜 巻口 表裏之大戸式本
    - ふみつき板巻枚 式正立ノ馬屋有り
    - 一、檜之間 式間四間 外二巻間三尺半之ろうか有り
    - 内二
      - 一、疊式拾六疊 内一疊小疊 戸拾巻本
      - ふすましよう志五本 志ようじ五本
      - こし志ようし式本 れんじ戸巻本
      - 一書院 五間四間 内式間式間のかこい有
      - 内二
        - 一、疊四拾三疊半 から紙八本
        - こし志ようし九本 小志ようじ拾四本
        - 志ようじ四本 戸拾本
        - どうこ巻ツ すひつ巻ツ
        - き口け戸式本 すて路次ノ戸式本
        - 一ゆとのせんちん
        - 内
          - 一、戸式本
          - 一門長屋 式間五間
          - 内二
            - 一、疊八疊有り 戸巻本
            - 一路次口大戸巻本
            - 一表長屋借り主 四人
            - たなちん五兩三分年中
            - 内巻両あきたな
            - 残テ四兩三分
            - 延宝四年 辰五月廿六日
            - 両となり八左衛門
            - 同 平十朗
            - むかい 与左衛門
            - 同 五右衛門
            - 同 九兵衛
            - (今井家文書)

図6 本町好味御預り家屋敷目録(文献8をもとに作成)

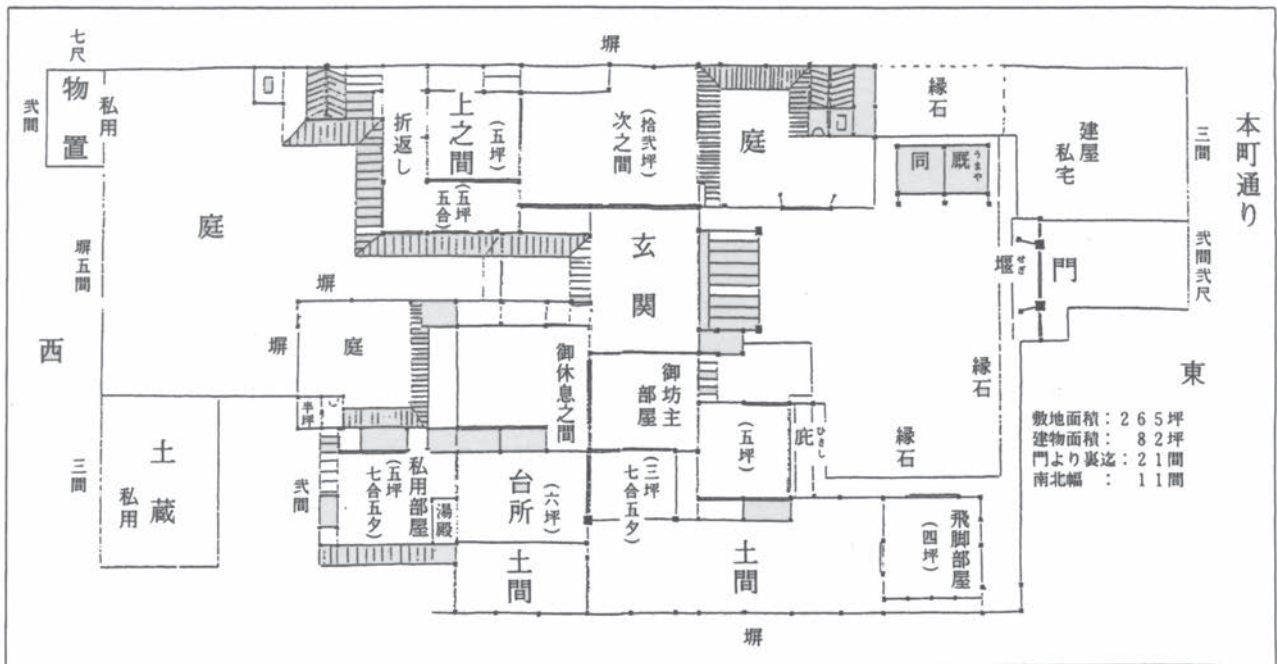


図7 4丁目へ移転後の御使者屋敷間取り図<sup>文献5・6</sup>

御使者宿の変遷については、藤牧氏の研究<sup>文献7</sup>に則り中村家から今橋家、そして明治初期まで最も長く運営を担った今井家に至るまでの3段階に分けて辿り、表1にまとめた。

表1 御使者宿の変遷表

(ア) 中村家段階	(イ) 今橋家段階	(ウ) 今井家段階
時期：天正～寛文6年	時期：寛文7年～延宝元年	時期：延宝2年～幕末
運営者：中村三二郎 同 三郎右衛門 同 六兵衛	運営者：今橋好味 同 恵介 (のち6日間吉田伝十郎預り)	運営者：今井六右衛門(世襲)、 俊之、貞知、之道、俊之、 俊高、俊克、俊英
場所：親町三町の持ち回り	場所：本町2丁目東側 (旧中村邸)	場所：旧中村邸 天明3年以降は同4丁目西側

#### (ア) 中村家段階

御使者宿が寛文7年(1667)に常設として設けられる以前の様子については、「倉科家文書」<sup>文献8</sup>に「他所より御使者有之節ハ、三町二而廻りニ御宿相勤候」とあり、宿の運営やその人足は親町が当番制で勤めていたことがわかる。中村氏は元武士で、山家城城主折野氏の家臣であった。三十郎の子三二郎が、慶長14年(1610)に本町に下って城下建設に携わり、町人へ転身して代々本町庄屋役を勤めたとされる。

世襲で庄屋役を勤めてきた中村家だが、六兵衛とその子が早世したことで、後継がなく断絶となる。これにより、中村邸の所有を巡る騒動が起こり、その結果所有権を得た三郎右衛門の妹婿の村山氏が中村邸を藩に献納した<sup>文献8</sup>。

#### (イ) 今橋家段階

藩預りとなった旧中村邸は、藩が寛文7年(1667)に常設の御使者宿とした。こうして城下町の中に本陣並みの機能を有する施設が設けられた。本調査地の南側の一角がそこにあたり、藩はこの宿の管理・運営



を今橋家に命じた。今橋家については、高野聖の家とあるが詳細ははっきりとしない。2代勤めるが、中村家同様に後継がなく断絶となってしまふ。

### (ウ) 今井家段階

今橋家の断絶後、藩は延宝元年（1673）に中町の吉田伝十郎という者に運営を申し付けるが、その死亡により翌年、本町5丁目の大商人であった今井六右衛門俊之が選ばれることとなった（庄屋役も兼ねる）。中村氏と同様、元武士で小笠原氏の家臣であった今井氏は、小笠原貞慶が松本を領有した天正10年（1582）の城下町整備が本格化する頃に総町支配となる肝煎2役の一人に任命された。その後、城主が目まぐるしく交代していく中にあっても町支配の上役を代々任命されており、城主の信任の厚い有力者であった。

天明3年に、本町2丁目から4丁目西側へ場所を移し、江戸時代を通して今井家7代が管理・運営を勤めるが、明治21年に起きた火災によって御使者宿は焼失し、その役割を終えた。

### イ 御使者宿と本陣・脇本陣

他藩から訪れる大名や役人などの宿泊施設といえば、本陣や脇本陣が挙げられる。松本藩も所有していたにも関わらず、なぜ本町といった城内に程近い地で似た施設を設けて町人に運営・管理を任せただろうか。それには、使者の滞在目的や有力町人ならではの優れた経営的手腕が関係している。例えば、来訪する使者のうち休息のみの場合は本陣を利用することが多く、また、小笠原家が旧領松本へ祖先の廟所参詣の折に休息は本陣でとり、藩への用事の際には御使者宿を利用するなど用向きによって分けていたとわかる記録が残っている。このように、御使者宿は本陣・脇本陣とはその機能を異にする。あくまでも御使者宿の機能範囲は、公務上来藩した人々が任を果たす場としてのみに止まるのである。

御使者宿を管理・運営していた中村家・今井家に共通していることは、元は上位の武士という点である。今井氏は、領主に従い各地を回るなどして培われた優れた情報収集能力や、遠方との取引に強く広い人脉を持ち合わせており、小笠原長時（貞慶の父・1583年没）に黄金を献上し喜ばれたエピソードを持つなど、経済に明るく商いを得手とする武士であったことがわかる。中村家についての記録は少ないが、御使者宿として利用された旧中村邸は城主も度々訪れていたと言われている。再建せずとも迎賓施設として申し分ない佇まいの屋敷の規模からみても、中村氏の身分や待遇に相応の理由を推察することができそうである。このように、藩から認められた有力な町人によって御使者宿が運営されていたことが読み取れる。

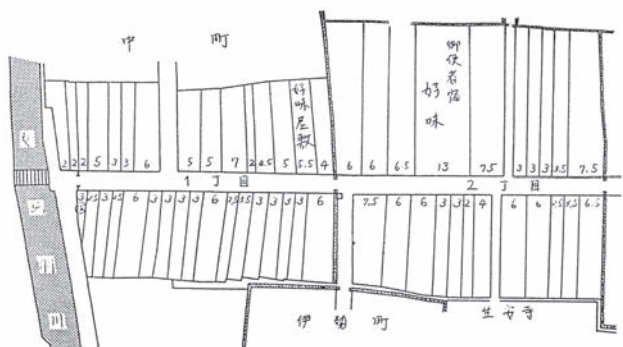


図8 寛文9年（1669）本町復元図<sup>文献6</sup>

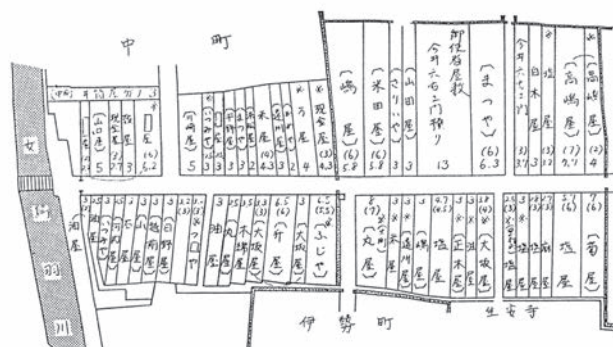


図9 享保9年（1724）本町復元図<sup>文献6</sup>

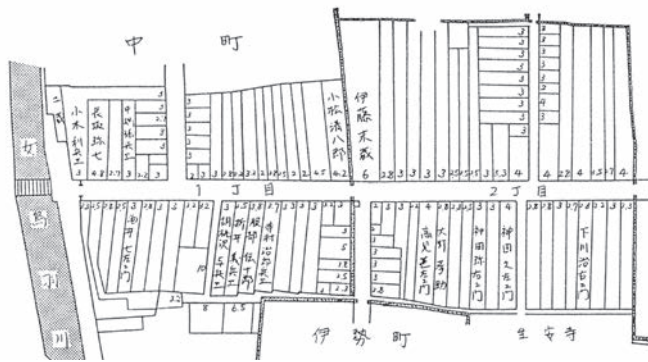


図10 幕末期（1853～1869）本町復元図<sup>文献6</sup>  
本町4丁目に移転後調査地は間口3間程の町屋が建ち並ぶ。

### (3) 災害と本町

江戸時代を通して城下町は災害に見舞われることが多く、特に火災による被害は甚大であった(表2参照)。木造建の家々が密集した地でひとたび火災が起きると、町はたちまち火の海となった(松本城下町で瓦が葺かれ始めるのは明治21年以降)。安永5年の大火では、三の丸や本町を含め北は安原町、南は小池町に至るまで城下町の東半部のほとんどが焼失する被害が出た。水害についても薄川、田川、女鳥羽川といった一級河川に囲まれた松本周辺は、大雨の際に川が度々決壊し町中が浸水する被害が多発した。安永8年(1779)の洪水では、本町1丁目および2丁目一帯の家屋が床上や腰まで水が及んだとの記録がある。

御使者宿が移転を余儀なくされた一因にこうした天災が含まれていたことが記録から窺うことができる。天明3年(1783)、今井六右衛門が藩の町奉行に宛てた願い書をみると、生安寺への参詣客で平日であっても物騒がしく用務に差し障ることのほか、四方を建物に囲まれる立地のために火災時の類焼が多いこと、東側の地面が高く水捌けも悪いため雨天の際に西側の玄関一帯が水溜りになることなどを述べ、4丁目への移転を強く申し出ている(図11)。

覚

一本町式丁目 御客家之儀、本町飯田町并生安寺小路等、四方共建込之中故、古来方火災之節ニ相通れ不申、類焼仕候殊ニ生安寺小路近候故、平日物騒敷、御用向節ニ差障ニ相成候

一 右地所之儀、裏高<sup>ニ</sup>水吐悪敷、雨天之節者玄関前一圓<sup>ニ</sup>水堪、御用向之節甚差障申候、水之節猶以之儀<sup>ニ</sup>御座候

一 四丁目之儀者、本町通表家斗<sup>ニ</sup>、式丁目卜違、格別物静<sup>ニ</sup>御座候、殊<sup>ニ</sup>裏下リ<sup>ニ</sup>御座候而水吐甚宜、別<sup>ニ</sup>満水節水吐宜御座候

一 一家作之儀、成丈裏に引寄相建、玄関前広仕、并兩隣境等明候様<sup>ニ</sup>仕、万<sup>一</sup>火災之節防方手都合宜様仕申度候、殊<sup>ニ</sup>式丁目卜違近辺空地広御座候

一 本町西側之儀、生安寺大門方光明院前之間、切レ間一向無御座候間、表門別<sup>ニ</sup>相建、三間程切間明置、兩脇長屋之家根高塀作<sup>ニ</sup>仕、万<sup>一</sup>火災之節者、門引崩し候様相建候ハハ防方宜可有御座奉存候

一 西裏広御座候間、万<sup>一</sup> 御休泊之節等火災等御座候<sup>ニ</sup>而茂御退場宜御座候、右之通心附候故奉申上候、宜御勘考可被下候

以上

天明三癸卯八月  
今井六右衛門  
関口稻右衛門様  
村瀬磯□七様

図11 屋敷移転の願い書(文献8をもとに作成)

御使者宿は藩の施設のため修築・再建は藩の負担で行うが、時代が下るにつれ逼迫していく藩財政の中では、実質的には御使者宿再建の資金の調達、立て替えなどを今井氏が負担していた。御用達の今井家としても度重なる高額出費には頭を悩ませたことだろう。御使者宿は、城下町建設以来藩と密接な結びつきをもった町人の経営手腕が成せた特殊な「宿」であったと言える。

表2 本町に係る災害年表

発生年	災害の種類	詳細
享保13年 (1728)	水害	降雨10日間続き、13日午前薄川は小松下で切れ、蛇川・中川と合して源智へ浸水、続いて南町全体浸水。女鳥羽川は御堀と合水し一面浸水、白板村人家押流さる、一ツ橋・新小路橋流失、また新橋・熊倉橋落ち、川西方面との交通は半月ばかり耐えた <sup>文献1</sup> 。
安永5年 (1776)	火災	中町綿屋より出火。城内の東と南ほぼ焼く、大手門東門が焼ける。六九御馬屋、町役所、郡役所、御預役所、大手橋落ちる。二の丸御蔵2棟、生安寺、浄林寺山門以外、全久院山門以外、乾瑞寺、光明院、彌勒院、北馬場数軒、高堀矢倉、城内屋敷57軒、土蔵295棟焼く <sup>文献1</sup> 。
同8年 (1779)	水害	25日女鳥羽川が氾濫し繩手の堀と川が一つになり六九通りは水深が腰まで及んだ。薄川が小松で切れ宮村町・小池町・飯田町が浸水。本町1～2丁目も床上、腰まで浸水し、27日に大橋付近の家が流される <sup>文献1</sup> 。
天明2年 (1782)	火災	中町裏小路ふじやより出火。中町147軒、本町127軒、伊勢町49軒、鍛冶小路5軒、全久院焼失 <sup>文献2</sup> 。
寛政7年 (1795)	火災	本町3丁目西側茶屋治左衛門宅裏屋より出火。本町1～4丁目、中町、飯田町、小池町、宮村町の西裏通り、正安寺小路、新小路一ツ橋表小路が焼失(『万留書』 <sup>文献2</sup> )。
文化5年 (1808)	火災	本町1丁目大坂屋七郎兵衛宅より出火。本町3丁目以北、中町、宮村町、大手、正安寺小路両側飯田町境まで全焼、伊勢町から鍛冶小路両側、鍋屋小路東角、全久院、332軒焼失(『松本城主代々記』 <sup>文献2</sup> ほか)。
天保5年 (1835)	火災	本町5丁目松屋左衛門宅より出火し130軒焼失(『庚申講連中勘定帳』 <sup>文献2</sup> )。4・5丁目両側、飴屋小路、飯田町142軒が焼失 <sup>文献2</sup> 。
弘化4年 (1847)	地震	善光寺地震。城内の屋根・壁・瓦が落ちる。侍屋敷・土蔵の壁が落ちる。城下町は土蔵2棟全壊し2棟が半壊。49脚の橋が落ちる(『むしくら日記』)。二の丸の石垣20間崩れ、櫓2か所・家中屋敷17か所壊れる <sup>文献4</sup> 。
文久2年 (1862)	火災	本町1丁目飛騨屋より出火。2丁目まで69軒、土蔵3ヶ所焼失 <sup>文献2</sup> 。

参考文献

- 文献1 松本市教育委員会 1933 『松本市史』上巻  
 文献2 松本市教育委員会 1995 『松本市史』第2巻歴史編Ⅱ近世  
 文献3 松本市教育委員会 1995 『松本市史』第4巻旧市町村編Ⅰ  
 文献4 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1957 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻歴史上・下  
 文献5 松本城下町研究会 2004 『よみがえる城下町 松本』郷土出版  
 文献6 中藤 淳 1986 「近世松本城下町における変遷課程」東京学芸大学大学院修士論文  
 文献7 藤牧志津 2002 「松本藩の御使者宿」『信濃』54巻10号 信濃史学会  
 文献8 『今井家文書』、『倉科家文書』松本市立博物館所蔵



# 第Ⅲ章 調査の方法と成果

## 第1節 過去の調査

本町ではこれまでに7回の発掘調査が実施されており、16世紀後半から19世紀後半までの間に複数回整地盛土造成が行われたことを確認している。整地盛土造成が最も厚く堆積した箇所では3m程度を測り、9層以上の整地層が認められた。各調査次の詳細は表3を参照されたい。

表3 過去の調査一覧表

調査次	調査年	調査原因	調査面積	発見された遺構		特記事項		
1次	平成8年(1996)	中央西區画整理事業	のべ約177㎡	1 検 (17c 末)	建物址2軒、集石遺構1基	戦国時代末～江戸中期の7つの整地層を確認した。第1検出面は火災後の整地層で、出土遺物と古文書の記録から元禄3年(1696)の大火の痕跡と推定できる。また、各面から建物の基礎部分が、良好な状態で検出された。		
				2 検 (17c 後)	建物跡1軒、ピット1基			
				3 検 (17c 中～後)	建物跡1軒、土坑3基、ピット2基			
				4 検 (17c 前～中)	建物址1軒、土坑3基、鍛冶跡1基			
				5 検 (17c 初)	建物址1軒、土坑3基、ピット3基、集石遺構1基			
				6 検 (16c 末)	土坑1基、ピット12基			
				7 検 (16c 後)	ピット4基(建物址か?)			
2次	平成8年(1996)	中央西區画整理事業	のべ約163㎡	1 検 (18c 末～19c 初)	土坑6基、礎石1基、土間状遺構1基	5つの整地層が良好に遺存していた。このうち、文献資料でも確認されている4回の火災の痕跡を確認した。また、部分的に350cmまで深く掘り下げたところ、16世紀後半～19世紀までの生活面(整地層)が13層確認できた。		
				2 検 (18c 末)	土坑1基、建物址1軒(礎石列1基、礎石3基)、土間状遺構1基			
				3 検 (18c 後)	礎石3基、土間状遺構1基			
				4 検 (18c 後)	礎石2基、土坑1基			
				5 検 (18c 前～中)	礎石2基			
3次	平成9年(1997)	中央西區画整理事業	のべ約360㎡	1 検 (18c 末～19c 前)	建物址1軒、土坑2基(寛政7(1795)年の火災痕)	6つの整地層を確認した。第1～3検出面では火災の痕跡がみられ、出土遺物と古文書の記録から実用年代が比定できる。敷地内の土地利用では、18～19世紀は、敷地奥に土蔵等の建物が位置するが、17世紀以前では、ゴミ捨て場として使用されていた。		
				2 検 (18c 前)	建物址1軒、土坑7基(天明2(1782)年の火災痕)			
				3 検 (18c 後)	建物址1軒、土坑9基(安政5(1776)年の火災痕)			
				4 検 (18c 中～後)	建物址1軒、土坑3基、ピット2基			
				5 検 (18c 前)	建物址1軒			
				6 検 (17c 中～後)	土坑11基(ゴミ穴群)			
4次	平成9年(1997)	中央西區画整理事業	のべ約247㎡	1 検	建物址10軒、土坑38基、埋設桶5基 水道遺構2条(木樋1、竹管1、溜枦3、溜井戸1)、溝状遺構3条	2つの整地層を確認した。遺存状態の良い水道遺構、基礎構造がよくわかる建物址、2000点以上の礎石が出土した廃棄土坑、遺物では廃棄土坑から出土した人形、墨書荷札「文政十年」「文化二年」の墨書のある桶蓋などが注目される。		
				2 検	土坑3基、埋設桶1基、建物址複数軒			
5次	平成11年(1999)	民間貸店舗ビル建設事業	のべ約574㎡	1 検 (19c 後)	建物址1軒	紙間屋嶋屋の跡地から7つの整地層が確認できた。上面(第1～3検出面)は昭和40年の区画整理の際に殆ど失われている。第3・5検出面において19世紀初、18世紀中という二つの時期の水道施設を検出し得た。特に第5検出面で検出した竹管は、凡そ2～3尺置きにジョイントを設置し、その上に板を渡して竹管を保護しているのが確認された。屋敷地境を通し、集水桶で分水して2軒の屋敷内の桶に溜まる構造になっている。		
				2 検 (19c 中)	建物址1軒			
				3 検 (19c 初)	建物址3軒、土坑2基、ピット1基、石組遺構1基			
				4 検 (18c 末)	建物址5軒、ピット2基、集水井戸2基			
				5 検 (18c 中)	建物址3軒、土坑1基、ピット1基、集水井戸1基			
				6 検 (17c 中)	建物址3軒、土坑3基、ピット7基			
				7 検 (17c 初?)	建物址1軒、土坑5基、ピット2基、石組遺構1基			
6次	平成15年(2003)	民間貸店舗ビル建設事業	のべ約119㎡	1 検	建物址1軒、木桶1基	80cmの表土下から、9つの整地層を確認した。第4検出面では、焼土廃棄土坑内を中心に、多くの布類が出土した。また被熱した二朱金が出土している。第6検出面では上面と様相が異なり、屋敷地内を南北に通る溝状遺構が確認されている。第7検出面においてもこの溝はみられる。面的には第9検出面までの調査を実施した。その下についても、重機による深掘りを行ったところ、さらに下からゴミ穴が確認された。それより下は、シルト層、礫層となっている。		
				2 検				
				3 検 (17～19c)	集石遺構2基			
				4 検 (17～19c)	土坑3基(内1基は焼土廃棄土坑)			
				5 検 (17～19c)	礎石1基、石列1条			
				6 検 (17～19c)	礎石1基、溝状遺構1条、炭化物(莫産?)			
				7 検 (17～19c)	礎石1基、溝状遺構1条			
				8 検 (17～19c)	集積遺構1条			
				9 検 (17～19c)	土坑1基			
9 検より下層	ゴミ穴1基以上							
7次	平成15年(2003)	中央西區画整理事業	のべ約119㎡	東側		西側		地下約60～280cmの間に6つの整地層を確認した。深さ約150cmで東西方向にのびる木樋を確認した。火災層は少なくとも2面見られ、出土状況や遺物等により19世紀前半と18世紀後半の火災に対応すると考えられる。その焼土層の下から認められた東西に長くつながる石列は、屋敷境を示すものと考えられる。調査区西側では、4段の間知石を確認したが、裏込めの上2段と下2段の間に火災層が見え、構築時期が異なることが分かる。西側の推定鍛冶炉に関連するファイゴや鉄滓はなかったが、坩堝が出土している。また、西側の埋設糞はトイレの可能性が考えられる。
				1 検 (19c 前半)	木樋、石列、焼土範囲	1 検 (17c 前～19c 初)	間知石列	
				2 検 (17c 前～19c 初)	石列、土坑3基	2 検 (17c 前～19c 初)	埋設糞、石列	
				3 検 (17c 前～19c 初)	石列、土坑3基	3 検 (17c 前～19c 初)	間知石列、木組み遺構	
				4 検 (17c 前～19c 初)	石列、溝状遺構、木組み遺構、焼土範囲、土坑5基、ピット1基	4 検 (17c 前～19c 初)	集石	
				5 検 (17c 前～19c 初)	土坑2基	5 検 (17c 前～19c 初)	東側の3検に対応	
				6 検 (16c 末～17c 初)	溝状遺構、土坑1基			



## 第2節 調査の方法

---

### 1 調査区の設定

今回の事業予定地は 3,930㎡に及ぶものであった。事前の工事立会において、遺構面が残存している範囲を確認し、建物建設予定範囲を中心に 1,115㎡を調査区として設定した。調査は A 区と B 区に分けて行った。B 区は、A 区の南側を拡張するように設定した。

### 2 発掘手順

解体工事立会の結果、地表面から深さ 1.5m 前後が以前の建物の基礎によってほぼ全域が破壊されていた。まずパワーショベルを使用して、A 区の攪乱土を除去し、最上面で検出された生活面を第Ⅰ検出面とした。その後、人力による検出を行い、検出の終わった遺構から遺構番号を命名し、人力による掘り下げを開始した。なお、遺構番号は各面ごとに 1 番から順に命名した。掘り下げの終了した遺構は写真と測量図を作成し、記録を行った。すべての遺構の掘り下げと記録が終了した後、重機を使用して第Ⅱ検出面までの掘り下げを行った。その後、第Ⅴ検出面まで同様の手順を繰り返した。A 区第Ⅳ検出面を調査中に B 区の掘削を開始した。A 区同様に第Ⅴ検出面まで調査を行った。なお、発掘調査終了後すぐに建設工事が着手する予定であったため、A・B 区共に埋め戻しは行わず、発掘調査の現場における工程を終了した。

### 3 測量・写真記録

遺構測量に係る基準は国家座標（世界測地系）を用いた。調査地周辺にある四等三角点、3 級基準点を基に調査地内に基準点を複数設置し、これらを基に 3m グリッドを設定した。測量基準点は X=25971.000、Y=-47642.000 を NS0、EWO とした。

平面図は簡易遣り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図の縮尺は 1/20 を原則とし、詳細図が必要なものは 1/10 で作成した。

写真は発掘調査の各調査段階と遺構等の遺物出土状況及び完掘状況を 35mm 一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタル一眼カメラで撮影した。また、調査区全景はラジコンヘリコプターによる空中写真を撮影した。

### 4 整理作業

発掘作業に並行して写真・図面等の整理を行った。図面類は平面図・土層断面図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはトレース作業を行った。遺物は洗浄・クリーニングを行った後、土器・陶磁器、瓦は注記（遺跡名、調査次、通し番号、帰属遺構名等）を行い、木製品、石製品、金属製品、自然遺物は台帳登録を行った。その後、遺構単位で接合作業を行い、遺存度の良好なものや特徴的な遺物を中心に実測・トレースを行った。

## 第3節 遺構

今回の調査では両地区を通じて数多くの遺構を検出し、遺構番号を付した。しかし、中には整地土中の土質の差を遺構として認定した可能性のある遺構があると考えられる。また、遺構の名称が適切かどうか、あるいは検出面の設定の問題、遺構の帰属検出面の問題もあるが、本書では現場段階で欠番とした遺構以外はすべて遺構図に掲載した。屋敷地境の遺構が検出され、区画が明瞭に分かったことから、図化した遺構を中心に各屋敷地ごと検出面ごとに以下に概要を述べる。

### 1 A区第I検出面

東西に延びる石列や杭列など敷地境と考えられる遺構が4条検出され、調査内において5区画分の屋敷地が見つかった。出土遺物から検出面全体として17世紀後半から18世紀後半の面であり、さらに各屋敷の廃絶時期に若干の差があることがわかった。18世紀前半に描かれた絵図(図9)を参考にすると、今回の調査で確認できた各屋敷の間口とほぼ整合することがわかり、南端の区画は御使者宿跡である可能性が非常に高い。調査区の北から町屋1～4と命名し、南端の区画は推定御使者宿として、それぞれの概要を述べる。

#### (1) 町屋1(帰属時期不明)

A区石列3・4とA区建2の間に敷地境があったと想定され、それより北側を町屋1とした。調査区の北端で敷地境が検出されたため、石列以外の遺構は検出されなかった。

#### (2) 町屋2(18世紀中頃～後半)

A区建2 町屋2で検出された2～3段に積まれた石列状の建物基礎である。規模は南北9.4m、東西14.8m以上ある。石材の多くは間知石状に加工されており、サイズが概ね統一されている。敷地境2とははっきりとした切り合いの土層は確認できなかったことから、同時期に造られたものであろう。建2の内側の空間に、土坑3基、溝1条、石列3条が確認できたが、建物との関係は不明である。

A区石列1・2・6 いずれも建2の内側に位置しているため、建2と関連していたものと考えられるが、根拠は見つからなかった。

A区土39 長径2.6mを超える大型の土坑で、礫片や木片を主体に陶磁器片や木製品が大量に認められた。検出面からの深さは0.5m近くあり、シルト層と砂層が交互に堆積している状況が確認できた。これは、廃棄したごみを隠すためにその上に砂を入れるという行為を複数回行っていたと考えられる。

A区土60・76 直径約70cmの木桶が並んで検出された。当初、土60と土76は切り合い関係にあると考え、別々に遺構番号を付したが切り合いの土層は確認できなかった。遺構名はそのまま使用しているが、1つの遺構である。

A区土72 東半には、長さ50～70cm程の長細い礫が横倒しに敷かれ、その両脇は礫を立たせて据えられている。これらの礫は焼土塊や炭化物が多く混ざる土で覆われていた。また、西半は木板で南北を囲われ、その中に20本以上の薪と考えられる棒状の木材が出土している。本址は、検出状況から竈跡と考えられ、東半が炉床で、西半が燃料のストック場と推定される。本遺構の直上は現代の攪乱を受け、上部構造は不明であった。

A区土73・75 竈跡で、軸が約90度違う状態で切り合うように検出された。土73は土75を切り、東西方向に長軸をもつ石組の竈跡である。竈内に粘土が敷き詰められ、レンガ状の礫が組まれている。火床に

は長細い礫が敷かれ、表面が被熱により脆くなっている。埋土は竈を壊したときに発生した粘土と礫が多量に含まれていた。石組の無い東半は部分的に木製の囲いが検出され、竈本体との位置関係から、作業スペースのような場所であったと推測される。土 75 は南北に長軸をもつ。土 73 と違い、石組みはなく、半地下に掘り込まれただけのものである。北半に焼土が広範囲に確認でき、火床部分と思われる。南半は土 73 の東半と同様に木製の囲いが確認できた。

### (3) 町屋 3 (17 世紀後半～18 世紀中頃)

敷地境 2 町屋 2 と 3 の敷地境で、建 1 と建 2 の間に胴木と石列が確認できた。敷地境 1 と同様に 2 条の胴木と石列できている。南側の胴木は建 1 の北側の胴木とほぼ接しており、寸法など似たような木材が用いられている。石列は胴木の上に置かれているが、東側の一部では胴木の下にも石列が確認できた。これがどういう意図なのかは判然としなかったが、地盤固めや、高さ調整のためなどが推測できる。

A 区建 1 町屋 3 に長軸 7.92m と短軸 4.28m を測る建物基礎の胴木が検出された。胴木は全部で 14 本確認され、それぞれにホゾやホゾ穴がみられる。これらは建築部材を転用し、建物基礎として用いられたと考える。また胴木を設置した際の掘方が不明瞭であったことから、盛土造成と同時並行で建物基礎が造られた可能性がある。屋敷地内の位置関係やその規模から、土蔵の基礎であると考えられる。

A 区土 25 剥板を 1 辺約 45cm の正方形になるように並べられ、その内側にそれぞれの剥板を固定するための横木が打ち付けてあるような、箱形の木製品が据えられていた。底は作られておらず、遺物の出土も皆無であった。

A 区土 31 建 1 のすぐ西側に位置する直径 40cm 程の貯蔵用と考えられる木桶が据えられた土坑である。

### (4) 町屋 4 (18 世紀中頃～後半)

攪乱が大きく入り、遺構の残存状況は良くない。西半では、遺構がほとんど検出されなかった。町屋 3 との境は、はっきりとした敷地境遺構は確認できなかったが、杭が東西に延びるように列状に検出されたことと絵図に見る敷地割りから、1 つの屋敷割りがあったと考えられる。

A 区土 22 木材や瓦片、陶器製播鉢片、肥前産染付碗等の遺物が多量に廃棄されており、ごみ穴と考えられる。

### (5) 推定御使者宿 (18 世紀前半～後半)

A 区敷地境 1 町屋 4 と御使者宿の敷地境である。布掘基礎状の溝に胴木が 2 条平行するように敷いてあった。胴木には、固定のためと考えられる杭が複数打ち込まれており、部分的に胴木上に石列が確認できた。敷地境 1 の南側は、推定御使者宿の敷地である。

A 区土 12 遺物の出土状況からごみ穴と考えられる。18 世紀後半に製作された拳骨茶碗や、漆継ぎの肥前産磁器碗、灰釉の仏飯具などが出土している。

A 区土 16・20 木桶が埋設された土坑である。側板の損傷が大きく、遺存状態は悪い。土 20 からは、18 世紀中頃から後半にかけての陶器碗が出土している。また、「今」と焼印された桶蓋と考えられる木製品も認められた。

礎石 扁平な大礫が複数個並んでいるのが確認できることから、礎石建物があったと考えられ、その規模は東西 7 間以上、南北 2 間以上と推定される。松本城下町では、17 世紀前半から 18 世紀中頃まで礎石建物が主流で、18 世紀後半から布掘基礎建物が多く見られるようになる。町屋 1～4 で検出された建物は、布掘基礎建物に移行していたが、御使者宿では礎石建物のままであったことがわかる。

出土遺物から本検出面の推定御使者宿の帰属時期は 18 世紀前半～後半紀と考えられる。御使者宿は天明 3 年（1776）に本調査地のある本町 2 丁目から本町 4 丁目へ移転している<sup>文献 7</sup>ため、移転直前の様子が検出されたことになる。

## 2 A 区第Ⅱ検出面・B 区第Ⅰ検出面

当初、A 区Ⅱ検と B 区Ⅱ検が同時期と考えていたが、遺構図や遺物の整理によって B 区Ⅰ検が A 区Ⅱ検と同時期の面であると判明した。B 区Ⅱ検は A 区に対応する面がなく、Ⅱ検より若干時期が遡ると考えられる。3 区画分の屋敷地が確認できた。北半に町屋 5・6 が位置し、南半の屋敷地の範囲は A 区Ⅰ検とほぼ同じで、推定御使者宿である。17 世紀後半に描かれた絵図（図 8）と各屋敷地の間口幅が一致することがわかった。

### (1) 町屋 5（17 世紀中頃～18 世紀前半）

A 区水道 3・5・6 竹樋で造られた水道管である。水道 3 と 6 は、途中、調査区外のエリアを挟むが、同一の水道遺構である。水道 5 と 6 の間は、土 125 に埋設されている集水柵で繋がる。水道 6 の東端と土 125 の間にジョイントがかましてあり、無理やり水道 6 と土 125 が繋げられている。

A 区水道 7 水道 5 の敷設時に破壊されている。また、土 125 付近で切り取られている。位置関係から、水道 6 と繋がっていたと考えられる。

A 区水道 8 町屋 5 に位置し、木を削り抜いて作られた木樋である。その勾配から東から西に水が流れていたと想定でき、途中で南西方向に向きを変え、土 133 に据えられている口径 1.2m を超す大型の木桶に接続している。木桶に接続している樋は 1 か所だけであることから、ここで水が貯められていたと考えられる。

A 区土 82 竈と考えられる遺構である。西半は、土 141 に切られており、全形を把握することはできない。東半の壁面は被熱のために赤化し、硬化していた。底は、灰が固められたように、著しく硬く引き締まっていることから火床面と考えられる。また、火床面から西に 60cm ほど離れた位置で直径約 40cm の範囲に炭化物が集中して検出されている。

A 区土 93・99 遺物の出土状況から、いずれもごみ穴と考えられる。土 93 は、直径 2.74m、深さ 0.43m を測り今回調査で検出されたごみ穴としては大型の部類である。本址からは、漆塗りの膳や匙、9 点の大小の楔等の木製品が多量に見つかったが、陶磁器類の出土はほとんど認められなかった。土 99 は、長さ 3.2 m、幅 0.7m の細長いプランをしている。出土遺物は、木製品が主で、陶磁器類はわずかであった。

### (2) 町屋 6（17 世紀中頃～18 世紀前半）

A 区石列 1 位置関係と規模から敷地境の機能があると考えられる。1～2 段の石列で、その背面には幅 1m 前後のグリ石層が確認できた。石列に使用されている石は、A 区Ⅰ検で検出された石列の間知石積みとは違い、基本的には野面積みで、扁平な石材が用いられ、荒割り加工されている箇所もあった。すぐ北脇を石列と平行するように水道 3 が位置している。

A 区土 56・136 遺物の出土状況から、いずれもごみ穴と考えられる。土 56 は、長軸 2.94m、短軸 1.49m を測る隅丸長方形を呈し、木札や曲物などの木製品や陶磁器類が多く出土している。土 136 は、長径 2m 程の隅丸方形をしており、その最大深度は 1.58m を測る大型のごみ穴である。羽子板や子供用の下駄など多量の木製品が出土したほか、17 世紀前半の瀬戸・美濃産の天目茶碗や美濃産の肩衝茶入れなど陶磁器類、砥石など様々な遺物が認められた。



### (3) 推定御使者宿（17世紀中頃～18世紀中頃）

A区の南端とB区は、上層であるA区I検の状況と出土陶磁器類の帰属時期から御使者宿の推定位置と考えられる。

溝3・4 S17～18の間を東西に延びる溝で、A区I検の敷地境1とほぼ同位置にあるため、溝3・4も敷地境に係る遺構と考えられる。A区I検の敷地境遺構で見られるような胴木や石列は確認できなかったが、おそらく敷地境遺構の掘方のみが検出されたのであろう。溝3と4は平行しており、場所によって接するところや、プランが不明瞭なところもあった。A区I検と同様に、御使者宿の北側に設けられた敷地境で、複数回改修した痕跡であるとする。

A区水道1・2とB区水道1～3それぞれ繋がって1つの水道施設を形成している。水道管は竹製で、約0.75～1.5mおきに竹樋の口径に合わせた穴がつけられた木製の台形状部材に通されていた。台形状部材は全部で25点確認でき、そのうち上部に「か」や「た」等の平仮名が墨書されていたものも確認できた。これは各部材を設計通りの位置に配置するための記号であると考えられる。A区水道1と2の接合部分は、集水桝ではなく丸太を削り抜いたジョイントが使われていた。B区水道1と3の接合部分は、攪乱を受けていたものの、木桶の柵が確認できた。また、B区水道2の中間に、木桶の柵が据えられ、町屋6から延びてきているA区水道4と繋がっている。

B区建1 南側は調査区外に続き、西側は遺構のプランがはっきりせず、全形は把握できなかったが、東側に胴木と石列がL字状に検出されたため建物の布掘基礎と考える。北辺の東西に延びる基礎は、東半に石列のみ、西半に胴木のみが検出された。建1以外にも、礎石が複数見つかっているため、礎石建ちの建物もあったと想定している。

B区溝1～3 胴木のような木材が「コ」の字状に出土した。出土状況からこれらの溝群は合わさって一つの建物の基礎を構成している可能性がある。

出土遺物から、本検出面での御使者宿の帰属時期は17世紀中頃～18世紀中頃と推定される。A区I検で見られた礎石建ち建物の位置には礎石は確認できず、土坑が集中して検出された。礎石建ち建物は西側でみられ、南側には布掘基礎の建物が認められる。これは時期によって建物の配置が異なっており、敷地の利用を考える上で重要である。宿の北側敷地境沿いを通っていた水道管は、途中で南に方向を変えた後にまた西方向へ流れることが確認できた。

## 3 B区第Ⅱ検出面

出土遺物から17世紀中頃～18世紀初頭の生活面であると考えられ、推定御使者宿の範囲内である。

### (1) 石列遺構

B区石列1 30～40cm大の扁平な礫を、途中抜けているところもあるが、長さ8mに渡って9石確認でき、それぞれ30～40cmの間隔を空けて並べてあった。石列の長軸が方位に関係ないことや、建造物の基礎にするには不要に間隔がつけられていること、石列の位置が敷地の中央やや裏側よりであることから、裏庭に据えられた飛石である可能性がある。石列の設置は、土層断面を見ると各石材に対して掘方が確認できなかったため、B区Ⅱ検を整地造成する際に、同時に据え付けられたのであろう。

### (2) 溝状遺構

B区溝1 長さ12m以上、幅約1mの東西に延びる溝状遺構である。溝の東半では、拳大から人頭大の大礫が平らな面を上にして並べられている。大礫の周囲は拳大のグリ石が敷かれている。溝の西半では大礫やグリ石は希薄になる。大礫は一直線ではなく、意図的にジグザグに置かれているため、建造物の基礎とい

うよりは、石列2と同様に庭に設置された飛石の類と考えられる。

#### 4 A・B区第Ⅲa・b検出面（16世紀末～17世紀初頭）

出土遺物がきわめて多いため面調査を実施したが、遺構は少なく生活の痕跡が希薄であった。屋敷地の存在が確認できなかったため、A区とB区を一括して扱う。Ⅲ検の整地層は複数層に分けることができ、大きく上層をa、下層をbとし、調査を実施した。出土遺物の多くは被熱しており、高級茶器や白カワラケが多く含まれている。遺物の特徴や組成から、城内で火災等により発生した瓦礫を、本町の盛土造成に使用されている可能性が考えられる。造成土の帰属時期は、戦国時代末から慶長・元和期までの間と考えられる。

##### (1) 溝状遺構

B区Ⅲa検溝1 長辺約5mの「コ」の字状で検出された。本址から遺物はほとんど出土していない。

B区Ⅲb検溝1・2 約5mの間隔で溝1と溝2が南北に平行になるように位置する。溝2からは、イヌの骨が117点まとまって出土し、その骨の同定を行ったところ、最小個体数が4匹であることがわかった。

##### (2) 炭範囲・焼土範囲

浅い掘り込みを持ち、炭化物もしくは灰が集中して認められた範囲を、特に炭範囲として扱った。焼土範囲は、炭化物や灰を伴わず焼土のみが検出された範囲を指す。Ⅲ検では、検出された遺構の大半が炭範囲である。内耳鍋や火鉢を伴うことがあることから、整地造成中に焚き火等をした痕跡と考えられる。

A区Ⅲa検炭15・21 内耳鍋片が出土している。炭21は、他に土師質灯明皿の完形品が逆位の状態で見つかっている。

A区Ⅲa検炭19、B区Ⅲa検炭1・2 灰層の直下で、焼土化した火床面が検出された。

A区Ⅲb検炭1 土師質火鉢が据えられており、その直下は炭化物と灰が堆積していた。

##### (3) 土坑

A区Ⅲb検土4 西側壁面沿いに木桶の箍と考えられる木材が半周程度見つかり、その木材に接するように粘土塊が検出された。木桶と粘土がセットで見られるのは、A区Ⅱ検土125や土133、B区Ⅰ検土18のように、水道遺構に係る集水榭である可能性が高い。ただ、Ⅲ検では他に生活痕跡がほぼみられないため、水道遺構があったのかどうかは検討が必要である。

A区Ⅲb検土2・3 土坑の中心部に直径20cm程度の丸太が据えられ、さらに2本の角材が十字になるように丸太に取り付けられてあった。これと似たような遺構が松本城三の丸跡六九第4次調査の第Ⅲ検で検出されている。報告書では、同軸上に三間程度の間隔で並んでおり、構造物の基礎と解釈されている。

#### 5 A・B区第Ⅳ検出面（14世紀～15世紀、16世紀末～17世紀初頭）

I～Ⅲ検と比べると遺物量はかなり減少し、遺構の分布状況も激変する。Ⅳ検で検出した溝状遺構が東西方向と南北方向に延び、方形状の区画を造る。近世の短冊状屋敷割りができる以前の、中世によくみられる屋敷割りである。上層の面に比べ出土遺物は非常に少なく、帰属時期の決定は困難であるが、概ね2時期に分かれ、古い時期は14～15世紀、新しい時期はⅢ検とほぼ同時期である16世紀末～17世紀初頭と推定される。このうち新しい方の時期は、小笠原貞慶期～石川数正・康長期の城下町の形成時期であると考えられる。遺構の検出状況から、城下町の初期段階は、まだ中世的な雰囲気を残していたことがわかった。5つの区画を想定し、以下に区画ごと概要を述べる。

### (1) 溝状遺構

A・B区で計8条の溝状遺構を確認した。このうち4条は、位置関係やその規模から各屋敷地を仕切る敷地境の性格を持つと考えられる。

A区溝1 A区の南端部に東西方向に延びる溝状遺構で、区画2と3の間の敷地境と考えられる。

A・B区溝2 南北方向にやや蛇行しながら延び、その長さは30m以上で幅は0.2～1.3mを測る。溝の兩岸に1,000本以上の杭が打たれていた。さらに、溝の中央部の最深部にも杭が打たれていた箇所が確認できた。多くの杭の先端は、手斧のような道具で上から下に向かって削られ、尖らせてあったことから、先端の加工は打ち付けた後に行われたことがわかる。また、杭の多くは先端部の表面が被熱で炭化していることも確認できた。これは腐食防止のために意図的に焼き目を付けたものと考えられる。ただ、被熱していない杭も多く確認されている。密集した杭の中で狙った何本かだけに焼き目を付けることは困難であるため、打ち込まれた時期が違う杭が混ざっていると解釈した方が自然である。

溝の覆土から、砂層が底の方に堆積していることから、水が流れていたと考えられる。また、杭の先端部が水磨による、加工とは違う先細りが観察できたため、水面が杭の先端部付近まであったと考えられる。

本址から東に約1.4m離れたところに、径3～4cmほどの杭の列1条が本址と並行するように検出された。本址に関連するものと考えられるが、詳細は不明である。

A区溝3 (B区溝1) 南北に延び、ちょうどその兩岸をA・B区溝2とA区溝7に切られる。覆土には直径10～40cm大の礫が敷き詰められていた。遺物は少なく、年代観やその用途は不明である。

A区溝4 A区溝2から西に延びる。幅は0.6m程度である。溝4も敷地境遺構と想定している。

A区溝5 東西に延びる溝状遺構である。東端は調査区外に延び、不明である。西半は、浅く覆土がわずかし確認できず、W12あたりで途切れる。さらに西側では、A区溝7があり、若干膨れるところが検出され、本遺構と繋がる可能性がある。つまり、A区溝5と7は同時期に造られた溝であると考えられる。

A区溝7 A・B区溝2とA区溝3 (B区溝1) に平行するように位置し、南端は溝1に切られ終息する。

### (2) 区画1

A区溝5とA区溝7で区画された範囲で、その北東側は調査区外に延びている。

A区土44 長径1.39m、深さ0.72mのごみ穴である。上層で検出されたごみ穴と同様に出土遺物の主は木製品であり、下駄や円板の出土が特に目立つ。

ピット群 掘方から柱穴痕と考えられるものが多く見つかった。P92やP100、P101等は柱材も確認されている。

### (3) 区画2

A区溝1とA区溝5、A区溝2・3・7で区画された範囲で、その東側は調査区外へ延びている。

A区土10・19 いずれも長径1mを越す円形のプランで、大量の礫が投げ込まれている土坑である。

A区土18 長軸3.41m、短軸1.28mを測る細長いプランをした土坑で、出土遺物に17世紀前半の志野皿や黒織部沓茶碗が含まれている。時期的にⅢ検以降に帰属するため、上層に帰属すべき遺構の可能性はある。

A区土30 長径1.7mを越す大型の土坑で、底には木材が廃棄されており、その上の直径25cm大の礫3石が敷かれてあった。

ピット群 掘方から柱穴と考えられるものが複数基検出できた。柱穴の中には、P42やP44、P45などのように柱材を残すものも多く見られる。土27はその直径から土坑と命名したが、掘方から柱穴痕が2基見

つかり、そのうち1基は柱材が残る。

#### (4) 区画3

B区溝1・2とA区溝1で区画された範囲で、その南東側は調査区外に延びている。本区画の北側で、10～40cm大の礫が広範囲に多量に検出されている。

B区土2 本址北半で礫がまとまって検出されているが、本址に帰属するというよりは、本区画北側の礫群の一連と考えるべきであろう。

B区P9 直径20cm大の大礫が据えられてあり、礎石と考えられるが、周辺に同様の礎石は確認できなかった。

ピット群 他の区画と同様に、ピットの多くは柱穴と考えられ、B区P12のように柱材が残るものが見つかっている。

#### (5) 区画4

A区溝2・3・7とA区溝5で区画された範囲で、その北西側は調査区外に延びている。

A区土50・73 長軸2mを越す大型の土坑で、浅い掘り込みの中から礫や木材が出土した。用途は不明である。

A区P85・87・124 おおよそ1間間隔に南北に並んで検出された柱穴である。

A区P90・91・123 3基の柱穴が1間間隔にL字に位置している。北東側では柱穴が検出されなかったが、これらを合わせて、1間×1間の小屋のような建造物があったと想定される。

#### (6) 区画5

A区溝2・3・7とB区溝1・2、A区溝5で区画された範囲で、その南西側は調査区外に延びている。

B区土6・7 長楕円形を呈し、B区溝3・4と同軸上に位置していることから、これらはもともと1条の溝を形成し、底の部分が断片的に検出されたものと推測される。

ピット群 A区P50・51・53は等間隔に南北方向に並ぶ。P51・53はA区溝2に切られる。B区P20・26・42・46・60は南北にほぼ1間間隔に並び、さらにその東側にもP21・32・50が南北に並んでいる。これらのピットの中には柱材が残っているものもあり、合わせて1軒の掘立柱建物を構成している可能性が考えられる。柱穴と考えられるピットは本区画に密集しており、複数回建て替えがあったと推定される。

### 6 A・B区第V検出面

城下町建設に係る盛土造成前の自然面をV検として調査を実施した。遺構は検出されなかったが、女鳥羽川由来の堆積層が確認でき、調査地一帯の旧地形を垣間見ることができた。

A区北西部に設定した東西トレンチでは、拳大以上の礫を主体とする礫層が検出された。西端は調査区外へさらに続いている。礫層の堆積状況から、本流規模の流路であると想定される。

A区東壁は、女鳥羽川の氾濫土と湿地堆積土が交互に見られる。A区東壁の南端部で見られる砂礫層には土や植物が混ざっているため、土石流の可能性もある。旧地形の傾斜から、氾濫原の中心はもっと北側と考えられ、調査地以東に北から南に流れる小河川があったと考えられる。

上記の礫層と氾濫層の間は粗砂から砂質シルト土が堆積しており、西に向かうほど砂の粒度が細くなっている。調査地以東にあったと考えられる小河川があふれて形成された堆積である。砂層上面からは須恵器杯が出土していることから、この小河川の堆積物は9世紀前半以降に形成されたと推定できる。



表4 建物址一覧表

区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	I	2			
B	I	1			

表5 敷地境遺構一覧表

区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	I	2			

表6 石列一覧表

区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	I	2			
A	I	3			
A	I	4			
A	I	5			
A	I	6			
A	I	7			
A	I	8			
A	II	1			
B	II	1	土3・P4		

表7 集石遺構一覧表

区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1		土47	
A	I	2			
A	I	4			
A	I	6			

表8 溝状遺構一覧表

区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	I	2			
A	I	3			
A	II	1			
A	II	2			
A	II	3			
A	II	4			
A	II	5			
B	I	1			
B	I	2			
B	I	3			
B	II	1		P2・17	
B	II	2		P7	
B	II	3	溝4	土26	
B	II	4		溝3	
A	IV	1	溝7	P116・土8・土72・溝3	
A	IV	2	溝3		
A	IV	3		溝2・7	
A	IV	4			
A	IV	5		土44	
A	IV	6		土52	
A	IV	7	溝3	溝1	
B	IV	1	溝2	P13	
B	IV	2		溝1	
B	IV	3		P54・55・56	
B	IV	4		P38・37・36・35・土8	

表9 水道遺構一覧表

調査区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	II	1			
A	II	2			
A	II	3			
A	II	4			
A	II	5			
A	II	6			
A	II	7			
A	II	8			
B	I	1	土19	土14・18	
B	I	2			
B	I	3	土19	土14・18	
B	I	4			A区II検水道4と共通

表10 礎石一覧表

調査区	検出面	No.	新旧関係		備考
			旧	新	
A	I	1			
A	I	2			
A	I	3			
A	I	4			
A	I	5			

表11 炭範囲一覧表

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A	III a	7	楕円形	27	22	2			
A	III a	8	不整形	91	87	13			
A	III a	9	不整形	111	54	2			
A	III a	10	楕円形	212	99	12			木材
A	III a	11	不整形	152	121	9			杭
A	III a	12	円形	21	20	3			
A	III a	13	円形	27	24	6			
A	III a	14	不整形	137	92	3			
A	III a	15	方形	127	127	12			杭
A	III a	16	楕円形	52	37	4			
A	III a	17	不整形	128	68	12			
A	III a	18	楕円形	54	41	3			
A	III a	19	長方形	77	56	2			内耳鍋
A	III a	20	円形	38	35	6			
A	III a	21	楕円形	77	40	4			
A	III a	22	不整形	40	23	7			
A	III a	23	楕円形	37	28	5			杭
A	III b	1	楕円形	55	40	4			火鉢
A	III b	2	楕円形	35	28	7			
A	III b	3	楕円形	61	51	3			
A	III b	4	円形?	32	-25	3			
A	III b	5	楕円形	69	57	11			
A	III b	6	不整形	160	118	33			杭
A	III b	24	円形	55	53	3			
A	III b	25	円形	30	25	2			
A	III b	26	楕円形	30	20	4			
A	III b	27	楕円形	33	23	3			
A	III b	28	楕円形	40	30	6			
B	III a	1	楕円形	22	15	4			
B	III a	2	楕円形	58	35	6			
B	III a	3	円形	26	26	5			
B	III a	4	不整形	117	95	9			

表 12 土坑一覽表

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A	I	3	不整形	168	162	48			
A	I	6	楕円形	70	58	8			礫多
A	I	8	円形?	94	(46)				攪乱
A	I	9	楕円形	(52)	67	4			攪乱
A	I	12	楕円形	164	86	22			遺物多量出土
A	I	16	円形	114	112	32			木桶
A	I	20	円形	96	92	15			木桶
A	I	22	楕円形	188	100	13			遺物多量出土
A	I	23	楕円形	126	71	11			
A	I	24	楕円形	71	34	8			
A	I	25	方形	(66)	(66)				木拵(角杭)
A	I	26	楕円形	69	39	15			礫多
A	I	27	楕円形	85	68	17			
A	I	28	楕円形	137	(74)		± 29・43		
A	I	29	楕円形?				± 28・43・44・45		
A	I	30	楕円形?	(74)	88	13			攪乱
A	I	31	円形?	66	(66)	28			木桶
A	I	32	楕円形	62	48	7			
A	I	34	円形	56	55	16			周りを石組(火床)
A	I	36	楕円形	(132)	93	13		± 42	
A	I	37	楕円形	81	71	15			杭多
A	I	39	楕円形	266	162	47	建 2		礫多・ごみ穴か?
A	I	42	円形	70	68	16	± 36		
A	I	43	楕円形	(174)	(90)	12	± 28・29	± 44・45	礫多
A	I	44	楕円形	109	84	21	± 43	± 45	
A	I	45	円形?	(50)	62	8	± 43・44		
A	I	46	楕円形	66	33	11			
A	I	47	円形	58	53	29	集石 1		礫多
A	I	48	円形	58	54	17			
A	I	60	円形	76	76	42			木桶。± 76 と並ぶ
A	I	63	円形?	50					桶蓋?
A	I	65					± 74		水道遺構(木樋)
A	I	66	円形	123	118	22			礫多
A	I	67	円形?	111	(52)	9			礫多
A	I	68	不整形	260	108	31			杭多・礫多
A	I	69	不明						礫多
A	I	71	楕円形	192	102	24			礫多。粘土貼る
A	I	72	長方形	222	89	30	± 8 1		木拵と石列。粘土貼る。木多
A	I	73					集石 2・± 75		木拵(方形)。礫多。かまど
A	I	74	楕円形	(98)	58	10	± 65		礫多
A	I	75					± 73・P17		木拵(方形)一部。かま
A	I	76	円形	76	75	31			杭・木片・木桶。± 6 と並ぶ
A	I	81	楕円形?	215	(153)	29		± 72	
A	II	1	円形?	61	(36)	7			
A	II	2	円形?	(71)	(44)	5	± 3		
A	II	3	楕円形	(216)	(86)	11		± 2・4	
A	II	4	楕円形	121	82	10	± 3	± 5	
A	II	5	円形	58	49	8	± 4		
A	II	6	楕円形	117	69	10			礫多
A	II	7	楕円形	86	40	8	± 8		
A	II	8	楕円形	(87)	80	15		± 7	礫多
A	II	9	円形	48	42	10	溝状 4		礫多
A	II	10	円形	75	(60)	24	± 11		
A	II	11	楕円形	254	138	5	溝状 4	± 10・48	
A	II	12	楕円形	76	(30)	10			攪乱
A	II	13	長円形	68	16	19			柱痕?
A	II	14	円形	82	67	21	± 15・P11		
A	II	15	楕円形	(50)	52	4		± 14	
A	II	16	円形	52	42	6			礎石?
A	II	17	不整形	108	(36)	22		P10	
A	II	18	楕円形	62	(45)	6			
A	II	19	楕円形	59	48	10			礫多
A	II	20	円形	70	64	7			礫多
A	II	21	楕円形?	(201)	(84)	4			
A	II	22	円形	52	50	14			礫多
A	II	23	楕円形	105	65	9	± 24	P21	
A	II	24	楕円形	(68)	50	7		± 23	
A	II	25	楕円形	154	123	14	± 26・34	P19	礫多
A	II	26	楕円形	108	(84)	18		± 25・34	
A	II	28	楕円形	(84)	77	16			
A	II	29	楕円形	(87)	55	6		P30	
A	II	30	長円形	222	48	26	± 34	± 33	礫多
A	II	31	楕円形	80	61	12			
A	II	32	不整形	94	(54)	20		± 33	
A	II	33	円形	92	84	26	± 32・30		
A	II	34	楕円形	384	(160)	10	± 26	± 30・25	
A	II	35	楕円形	70	(32)	23		± 36	
A	II	36	楕円形	122	57	12	± 35		
A	II	38	円形	58	54	24	± 41	± 42	
A	II	39	長円形	(96)	18	4		± 44	
A	II	40	隅丸方形	45	(27)	7		± 44	
A	II	41	隅丸長方形	(78)	47	3		± 38	
A	II	42	楕円形	128	88	10	± 38・P32		
A	II	43	長円形	114	44	17			
A	II	44	隅丸方形	78	75	11	± 39・40		

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A	II	45	円形	86	80	26			
A	II	47	隅丸方形?	(85)	(78)	14			± 55
A	II	48	楕円形	96	58	13	± 11		
A	II	49	楕円形	82	68	13			
A	II	50	隅丸長方形	119	66	9			
A	II	51	楕円形	154	96	19			
A	II	52	長円形	154	18	11			溝状
A	II	53	楕円形	85	56	7			
A	II	55	隅丸方形	80	(72)	51	± 47		杭・礫多
A	II	56	隅丸長方形	294	149	53			
A	II	81	楕円形	(86)	58	7	± 141		
A	II	82	不整形	(238)	111	45			± 141
A	II	84	楕円形	126	80	21			± 96
A	II	86	不整形	114	82	12			礫多
A	II	87	楕円形	122	(54)	13	溝 5	± 86	
A	II	89	楕円形?	(116)	(77)	12	石列 1		
A	II	90	楕円形	(70)	60	35	溝 5		礫多・礎石?
A	II	93	楕円形	274	243	43			± 105
A	II	96	楕円形	256	174	10	± 84	± 97	
A	II	97	円形	104	92	11	± 96		
A	II	99	長円形	320	70	17			木製品・板・木材多
A	II	100	不整形	76	48	11			
A	II	102	溝状	(344)	143	15			
A	II	103	楕円形	(290)	91	35			
A	II	104	楕円形	74	58	6			
A	II	105	楕円形	108	45		± 93		礫多
A	II	106	円形	62	(51)	13	P37		
A	II	107	楕円形	49	42	11			礫多
A	II	108	楕円形	62	52	8			杭
A	II	109	楕円形	53	29	6			
A	II	110	円形	96	90	14			
A	II	111	楕円形	68	52	4	± 113・114		
A	II	112	円形?	56	(42)	8	± 114		
A	II	113	円形	76	74	7	± 114	± 111	礫多
A	II	114	楕円形?	(286)	(115)	未掘			± 113・111・112
A	II	115	楕円形	118	59	13			± 114
A	II	118	楕円形	71	56	7			礎石?
A	II	119	楕円形?	(161)	(122)	8	水道 7	± 121	礎石?
A	II	121	円形?	(81)	(24)	9	± 119		
A	II	122	方形?	95	(82)	17			
A	II	123	楕円形	52	32	5	水道 5		
A	II	124	楕円形	(73)	(70)	20		± 142	礫大多
A	II	125		(78)	(65)	34	水道 6		
A	II	126	円形?	237	(98)	11	水道 6		
A	II	127	楕円形?	206	(48)	33			礫多
A	II	128	楕円形	106	(40)	10			± 129
A	II	129	不整形	128	53	18	± 128		
A	II	130	不整形	92	75	6			
A	II	131	楕円形	213	148	10			
A	II	132	楕円形	65	38	7			礫多
A	II	133	円形	(80)	(80)	100	± 134	± 135	
A	II	134	楕円形?	268	(104)	23		± 133	礫・杭多
A	II	135	楕円形	134	70	12	± 133		
A	II	136	隅丸方形	217	204	158			
A	II	141	隅丸方形	272	(218)	50	± 82	± 81	
A	II	142	楕円形?	102	(22)	26	± 124		木材多
B	I	1	円形?	98	(72)	10			
B	I	2	不整形	(104)	65	未掘			溝 1
B	I	3	楕円形	(63)	58	10			礫多
B	I	4	不整形	139	(76)	11			礫多
B	I	5	円形	47	45	7			
B	I	6	隅丸長方形	72	48	7			
B	I	7	楕円形	60	46	28			焼土範囲内
B	I	8	長方形	137	75	33			杭・木片
B	I	9	楕円形	111	55	11			礫多
B	I	10	楕円形?	(210)	(40)				
B	I	11	楕円形	57	43	21			
B	I	12	楕円形?	104	(44)	11			
B	I	13	不整形	176	(103)	21			P10
B	I	14	隅丸方形	114	107	25	水道 1・± 102	± 18	内耳銅片多
B	I	15	隅丸長方形	100	64	11			
B	I	16	方形	(108)	98	60			
B	I	17	楕円形	50	37	12	P7		
B	I	18	楕円形	68	53	41	± 19	± 14	桶
B	I	19	長方形?	(120)	127	25		± 14・18・水道 1	一部未掘
B	I	20	円形?	(133)	(98)	9			
B	II	1	楕円形	80	58	9			礫多
B	II	3	楕円形	70	50	8			
B	II	4	不整形	208	(150)	3			杭
B	II	7	楕円形	(70)	63	13			± 9
B	II	8	楕円形	61	36	7	± 9		
B	II	10	楕円形	59	48	11			
B	II	11	円形?	128	(72)	32			礫多
B	II	13	長円形	177	46	9			木材多
B	II	14	円形	50	49	5			礫
B	II	15	円形	56	54	50			
B	II	16	楕円形	73	62	12			

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
B II	17	円形	50	47	5				
B II	19	円形	66	62	7				
B II	20	楕円形	74	65	6				
B II	21	円形?	46	(16)	29				
B II	22	楕円形?	91	(45)	19				
B II	23	円形	(83)	81	12				
B II	24	楕円形	54	(37)	7				
B II	25	楕円形	55	44	5			礫多	
B II	26	円形	51	50	31	溝3		木柱(杭)	
B II	27	楕円形?	84	(31)	47				
A III b	2							杭と礫	
A III b	3							杭と礫	
A III b	4	円形	180	(98)	25		土5	桶	
A III b	5	円形	(116)	98	27	土4		礫多	
B III b	1	楕円形	164	(48)	17				
B III b	2							II 検に帰属の可能性	
B III b	3	円形	165	160	26				
B III b	4	楕円形	111	71	10		攪乱		
A IV	1	円形	(41)	40	11				
A IV	3	楕円形?	(150)	68	8				
A IV	7	不明	(120)	(68)	6		III 検土坑・土8	杭・礫多	
A IV	8	隅丸長方形	382	134	7	土7・18	III 検土坑	杭・礫多	
A IV	9	楕円形	130	110	19				
A IV	10	円形	118	113	34			礫多	
A IV	11	楕円形	(180)	114	6				
A IV	15	楕円形	(97)	72	8				
A IV	17	楕円形	274	(122)	9	溝7	土18		
A IV	18	不整形	(341)	(128)	(45)	溝7・土17	土8	骨多	
A IV	19	円形	113	110	24	溝7	P9・122	礫多	
A IV	20	楕円形	72	44	7	溝7			
A IV	23	不整形	108	61					
A IV	25	不整形	163	90	4				
A IV	27	楕円形	76	66	33			杭・柱穴?	
A IV	30	隅丸方形	176	167	48			大礫と下に木材組	
A IV	31	楕円形	114	85	8		攪乱		
A IV	32	楕円形	168	74	4	溝7		礫多	
A IV	33	楕円形	110	(61)	10		土34	礫多	
A IV	34	楕円形	97	71	8		土33	杭・礫多	
A IV	37	楕円形	61	46	10		P89・90		
A IV	38	方形	60	58	7			杭	
A IV	39	円形	51	50	25			杭・礫	
A IV	40	円形	50	48	10				
A IV	41	楕円形	94	62	4				
A IV	42	長円形	(315)	100	4	土43		溝状	
A IV	43	楕円形	(71)	58	7			中央柱痕か?	
A IV	44	円形	139	137	72	溝5		ごみ穴	
A IV	45	円形?	28	(15)	5	溝2		杭	
A IV	46	不明	(100)	(42)	11		攪乱		
A IV	47	円形	47	43	27			底に石	
A IV	48	楕円形	70	43	11		P68		
A IV	49	不整形	116	72	7			土73・攪乱	
A IV	50	不整形	(226)	(133)	9			礫多	
A IV	52	楕円形	156	104	6	溝6		木材多・礫	
A IV	54	長円形	95	22	5				
A IV	55	円形	60	57	3				
A IV	58	楕円形	77	51	23	溝2・7			
A IV	59	円形	53	46	3	溝7			
A IV	60	円形	66	65	10	溝7			
A IV	61	楕円形	86	64	5	溝7			
A IV	62	円形	55	50	11				
A IV	63	楕円形	(80)	75	12			III 検の遺構	
A IV	65	楕円形	41	34	29	溝7			
A IV	68	楕円形	78	52	6				
A IV	72	円形	92	(75)	10	溝1			
A IV	73	楕円形	(232)	(186)	20	21		礫多・木材	
A IV	75	円形	55	50	17		P6		
A IV	76	楕円形	135	(70)				礫・木	
B IV	1	円形	66	65	12			礫多・杭	
B IV	2	不整形	216	152	16			礫多	
B IV	3	楕円形	165	71	7				
B IV	6	長円形	79	23	8				
B IV	7	長円形	50	13	3				
B IV	8	隅丸方形	54	50	12				
B IV	10	円形	35	(26)	11				
B IV	12	円形	43	39	16				
B IV	13	隅丸長方形	46	33	19			柱痕	
B IV	14	円形?	40	24	8			礫多	
B IV	15	隅丸長方形	40	26	14				

※ ( ) 内の数値は残存値

表 13 ピット一覧表

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A I	9	円形	41	32	8				
A I	13	円形	24	23	7				
A I	17	楕円形	75	55	17		土75	礫・木片多	
A II	1	円形	36	32	9			礫多	
A II	2	円形	13	11	5				
A II	3	円形	15	13	9				
A II	4	円形	22	22	5				
A II	5	円形	14	13	9				
A II	6	円形	23	22	10				
A II	7	楕円形	42	27	5		P8		
A II	8	楕円形	(36)	24	3			P7	
A II	9	円形	21	17	6				
A II	10	楕円形	38	26	6		土17	粘土	
A II	11	円形	(32)	28	4			土14	
A II	13	楕円形	46	26	13				
A II	14	楕円形	41	25	18				
A II	16	楕円形	50	28	37			木片	
A II	17	楕円形	60	48	19				
A II	18	楕円形	50	38	32				
A II	19	円形	31	30	5		土25	礫多	
A II	20	円形	38	35	27				
A II	21	円形	20	17	4		土23		
A II	22	円形	46	44	7				
A II	23	円形	44	38	12				
A II	24	楕円形	60	32	12				
A II	25	楕円形	46	23	7				
A II	26	円形	32	30	2				
A II	27	楕円形	24	18	2				
A II	30	円形	36	34	11		土29	木片?	
A II	31	円形	46	39	9				
A II	32	円形	26	23	32			土42	
A II	34	隅丸方形	60	60	20			木器多	
A II	35	楕円形	62	44	16				
A II	36	楕円形	35	26	9				
A II	37	楕円形	(24)	26	9			土106	
A II	38	楕円形	36	25	15				
A II	39	円形	32	30	8				
A II	40	円形	18	18				礫多	
A II	41	楕円形	33	23	12				
A II	42	楕円形	35	25	4				
A II	44	円形	26	25	11			礫	
A II	45	円形	26	26	6			礫	
B I	1	円形	45	45	23			礫多	
B I	2	円形	35	30	16			礫多	
B I	3	楕円形	32	26	11				
B I	7	円形	57	(37)	10			土17	
B I	9	円形	44	41	4			礫多	
B I	10	楕円形	38	28	2		土98		
B II	1	楕円形	49	30	5				
B II	2	円形	35	34	10		溝1		
B II	3	楕円形	31	24	3				
B II	4	円形	48	(28)	2			石列1	
B II	5	楕円形	45	34	5				
B II	7	円形	38	38	4		溝2		
B II	8	円形	22	20	5				
B II	9	楕円形	(35)	30	15				
B II	10	楕円形	44	37	24			礎石?・杭	
B II	11	楕円形	52	45	31			木製棒?	
B II	13	円形	49	45	11				
B II	14	楕円形	40	32	3				
B II	15	円形	40	37	26				
B II	16	円形	45	44	21				
B II	17	円形	30	(18)	10		溝1	礫	
B III b	1	楕円形	40	33	10				
B III b	2	円形	31	27	24				
B III b	3	円形	39	35	23			礎盤	
B III b	4	円形	29	28	17				
B III b	5	円形	30	28	15			石	
B III b	6	楕円形	37	25	4				
B III b	7	円形	47	45	12				
B III b	8	円形	19	18	33				
B III b	9	楕円形	37	28	21			杭	
A IV	1	円形	26	24	5				
A IV	2	円形	28	27	13				
A IV	4	楕円形	29	21			溝7		
A IV	6	円形	37	33			溝7・土75		
A IV	7	円形	23	23	3		溝7		
A IV	8	円形	31	31	12		溝7	杭	
A IV	9	円形	34	32	5		土19	P122	
A IV	11	円形	35	33	3				
A IV	12	楕円形	48	26	7			礫多	
A IV	13	円形	35	30	5		溝7		
A IV	14	楕円形	27	21	7		溝7		
A IV	15	円形	28	27	9				
A IV	16	円形	31	26	13				
A IV	17	楕円形	28	21				礫多	
A IV	22	円形	33	30	31			柱痕?石	
A IV	28	円形	22	20	9				
A IV	29	円形	28	27	37			杭	

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A	IV	36	円形	40	40	36			杭・礫
A	IV	39	楕円形	(70)	41	4			
A	IV	40	円形	58	(55)	4			
A	IV	41	円形	28	23	7			
A	IV	42	円形	37	37	5	溝 7		
A	IV	43	円形	40	39	4			石
A	IV	44	円形	34	34	10			杭
A	IV	45	円形	28	26	5	溝 7		杭
A	IV	46	円形	30	27	5	溝 7		
A	IV	47	円形	22	20	4	溝 7		
A	IV	48	円形	22	21	10	溝 7		
A	IV	49	円形	21	20	28			杭
A	IV	50	円形	24	23	19			杭・石
A	IV	51	円形?	26	(20)	31	溝 2		杭
A	IV	52	不整形	52	43	7			
A	IV	53	円形?	39	(35)	32	溝 2		杭
A	IV	54	円形	39	37	10			
A	IV	55	楕円形	43	33	5			
A	IV	56	楕円形 (42)	31	45		P117		杭・礫
A	IV	57	円形	37	36	12			礫多
A	IV	58	楕円形	38	(33)	21	溝 4		柱穴
A	IV	59	円形?	(28)	33	6	溝 2		
A	IV	60	円形	28	28	12			礫
A	IV	61	円形 (50)	36	10		攪乱		杭・礫
A	IV	62	隅丸方形	44	28	5			
A	IV	63	円形	34	29	22			礫
A	IV	68	楕円形	35	20	9	土 48		
A	IV	69	楕円形	35	29	5			石
A	IV	70	円形	27	26	5			石
A	IV	71	楕円形	25	16	7			礫多
A	IV	72	楕円形	22	15	6			
A	IV	73	円形	22	21	2			
A	IV	74	円形	15	15	3			
A	IV	75	楕円形	17	13	22			
A	IV	80	円形	27	26	11			
A	IV	85	円形	26	24	10			
A	IV	87	円形	29	28	25			
A	IV	89	円形	34	(29)	4	土 37		
A	IV	90	円形 (25)	26	30		土 37		杭
A	IV	91	円形	38	35	34			底に石
A	IV	92	楕円形	25	18	12	溝 7		杭
A	IV	93	楕円形	46	33	33	溝 7		
A	IV	94	楕円形	37	29	12	溝 7		
A	IV	95	円形	21	19	7	溝 7		
A	IV	96	円形	28	27	22	溝 7		石
A	IV	97	楕円形	30	25	40			柱穴
A	IV	98	楕円形	30	17	22			
A	IV	99	円形	28	26	12			
A	IV	100	円形	24	22	5			杭
A	IV	101	円形	35	32	33			杭・柱穴
A	IV	102	楕円形	22	17	6			
A	IV	103	円形	24	21	6	P109		
A	IV	104	楕円形	32	26	31			柱穴?
A	IV	105	円形	19	18	8			
A	IV	106	円形	24	23	3			
A	IV	107	円形	23	19	7			
A	IV	108							
A	IV	108	円形	23	20	5			杭
A	IV	109	楕円形	41	28	10		P103	
A	IV	110	楕円形	35	23	15			杭
A	IV	111	円形	23	20	9			
A	IV	112	円形	22	20	15			
A	IV	113	円形	31	26	12			
A	IV	114	円形	22	21	8			
A	IV	115	楕円形 (29)	23	15				
A	IV	116	楕円形	26	21	11	溝 1		骨・礫
A	IV	117	楕円形	39	26	11	P56		杭
A	IV	118	楕円形	40	27	25			
A	IV	119	楕円形	28	22	9			
A	IV	120	円形	18	17	16			
A	IV	121	楕円形	24	18	8	溝 7		
A	IV	122	円形	28	26	40	土 19・P9		柱穴・底に石
A	IV	123	楕円形	35	27	19		Ⅲ検査構	
A	IV	124	楕円形	30	24	28		Ⅲ検査構	
A	IV	125	円形	19	19	35		溝 7	
A	IV	126	方形	24	21	52			
A	IV	127	楕円形	19	16	11	P144		
A	IV	128	円形	24	21	7			
A	IV	129	円形	25	24				A-4直下層
A	IV	130	円形	25	22				A-4直下層
A	IV	132	円形	30	24			P29	A-4直下層、底に礫
A	IV	133	円形	24	23				A-4直下層
A	IV	134	円形	24	21				A-4直下層
A	IV	135	楕円形	21	16				A-4直下層
A	IV	136	円形	25	24		溝 1		A-4直下層
A	IV	137	円形	25	23		溝 1		A-4直下層
A	IV	138	円形	20	19				A-4直下層、底に礫
A	IV	139	楕円形	23	16				A-4直下層
A	IV	140	円形	24	21				A-4直下層

区	検出面	番号	平面形	規模 (cm)			新旧関係		備考
				長径	短径	深さ	旧	新	
A	IV	142	円形	19	19				土 8 A-4直下層
A	IV	143	円形	15	13				土 8 A-4直下層
A	IV	144	楕円形	22	16			P127	A-4直下層
A	IV	145	円形	24	24			P7・8	A-4直下層
A	IV	146	円形	25	24			土 20	A-4直下層
A	IV	147	楕円形?	20	(14)			P148?	A-4直下層、底に礫
A	IV	148	楕円形?	(32)	32			P147?	A-4直下層
A	IV	149	円形	25	24			土 15	A-4直下層、底に礫
A	IV	151	円形	21	16	6			A-4直下層
A	IV	152	円形	21	20	10		土 25	A-4直下層
A	IV	153	円形	26	24	13		土 25	A-4直下層、底に礫
A	IV	154	円形	22	19	21		土 25	A-4直下層
A	IV	155	円形	27	26	6			A-4直下層
A	IV	156	円形	25	24	7		溝 1	A-4直下層
A	IV	157	方形	26	20	10			A-4直下層
A	IV	158	隅丸方形	30	26	10			A-4直下層
A	IV	159	円形	27	25	11		土 30	A-4直下層
A	IV	160	方形	18	14	12			A-4直下層
A	IV	161	円形	14	14	11			A-4直下層
A	IV	162	楕円形	13	8	4			A-4直下層
A	IV	163	円形	12	9	14			A-4直下層
A	IV	165	円形	12	9	6			A-4直下層
A	IV	166	円形	8	7	6			A-4直下層
B	IV	1	楕円形	36	26	5			
B	IV	2	楕円形	32	22	26			礫
B	IV	3	円形	23	22	4			
B	IV	4	円形	21	20	8			
B	IV	5	楕円形	38	26	6			
B	IV	6	円形	21	21	2			
B	IV	7	楕円形	25	18	7			
B	IV	8	楕円形	26	21	10			
B	IV	9	円形	28	25	6			礎石?
B	IV	10	円形	20	20	7			
B	IV	11	円形	28	25	9			
B	IV	12	円形	29	26	7			杭
B	IV	13	円形	32	30	26	溝 1		柱穴
B	IV	15	円形	14	11	7			
B	IV	16	円形	25	24	10			底に礫
B	IV	17	円形	23	22	19			
B	IV	18	円形	18	18	6			礫多
B	IV	19	円形	31	27	10			
B	IV	21	円形	25	24	22			
B	IV	22	円形	30	26	7			
B	IV	23	楕円形	30	23	5			
B	IV	24	円形	23	20	3			
B	IV	25	円形	24	24	18			
B	IV	26	円形	22	22	6			
B	IV	27	円形	21	21	11			
B	IV	28	楕円形	32	20	9			
B	IV	30	円形	24	24	13			
B	IV	31	円形	38	33	6			
B	IV	32	円形	23	22	6			
B	IV	33	円形	17	17	2			
B	IV	35	円形	30	28	8	溝 4・P38		
B	IV	36	円形	12	12	5	溝 4		
B	IV	37	円形	11	10	16	溝 4・P38		
B	IV	38	円形	34	(30)	10		P37・39	礫
B	IV	39	円形	26	23	12	P38		
B	IV	40	円形	36	35	17			柱痕?
B	IV	41	円形	27	24	8		P42	
B	IV	42	円形	23	20	10	P41		杭
B	IV	43	円形	17	16	6			
B	IV	44	円形	25	24	17	P45		柱痕
B	IV	45	楕円形	31	24	10		P44	
B	IV	46	楕円形	35	26	28			杭・礫
B	IV	47	円形	18	15	9			
B	IV	48	円形	28	27	10			
B	IV	49	円形	25	22	14			柱痕?
B	IV	50	円形	14	14	9			杭
B	IV	51	円形	14	14	6			
B	IV	52	楕円形	25	18	9			
B	IV	53	楕円形	36	29	13			
B	IV	54	円形	23	21	12	P55		
B	IV	55	円形	28	26	9	溝 3・P56	P54	柱痕、底に石
B	IV	56	円形	32	30	15	溝 3	P55	
B	IV	57	楕円形	21	10	6			
B	IV	58	楕円形	18	9	6			
B	IV	59	円形	25	23	20			杭・底に石
B	IV	60	円形	26	23	15	P61		杭
B	IV	61	円形	18	16	14		P60	
B	IV	63	円形	17	(12)	11			
B	IV	64	楕円形	23	15	17			
B	IV	65	楕円形	21	15	4			
B	IV	66	円形	20	17	3			
B	IV	67	円形	22	20	10			
B	IV	68	円形	22	20	7			

※ ( ) 内の数値は残存値

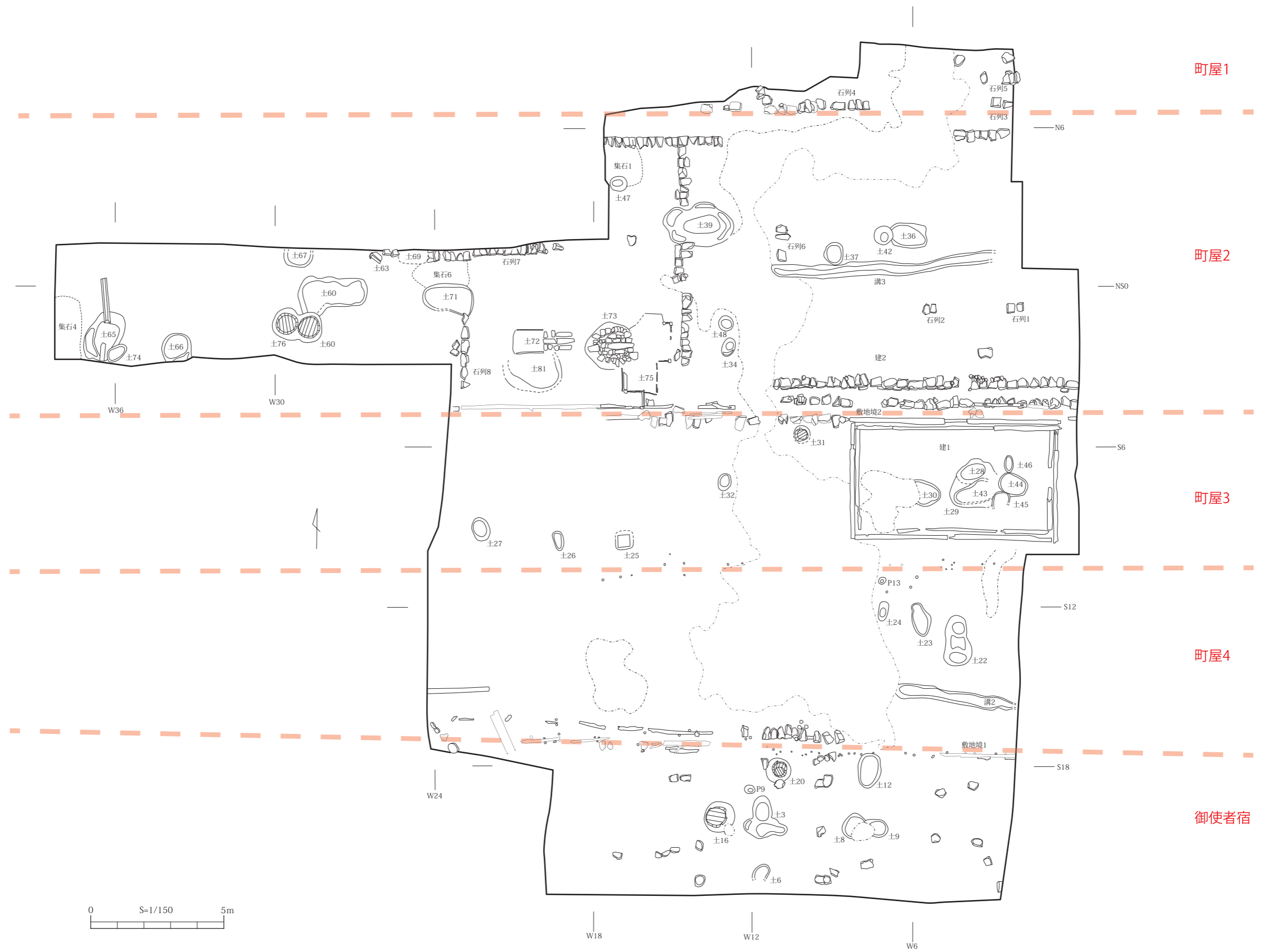


图12 A区I検 全体图

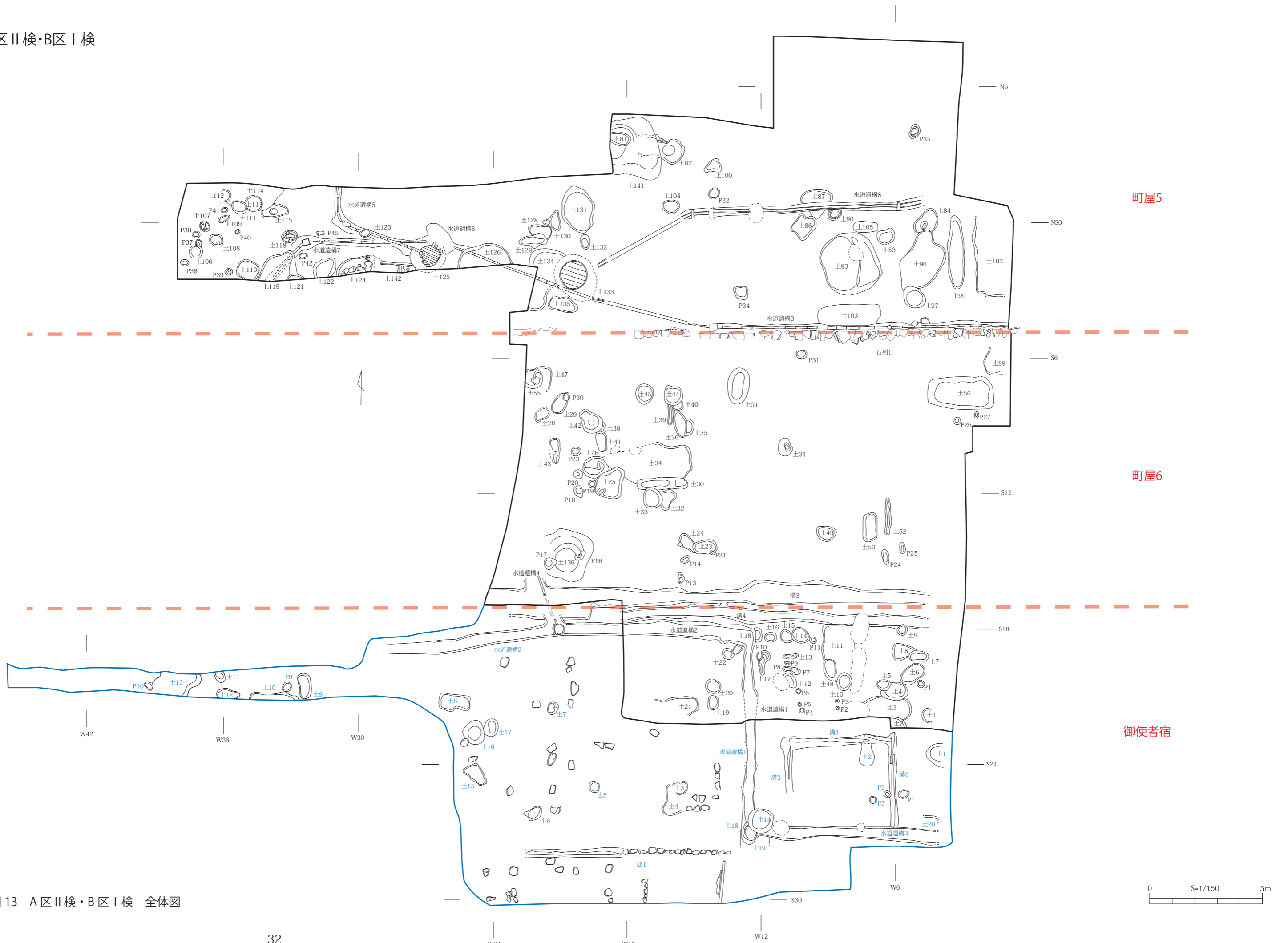
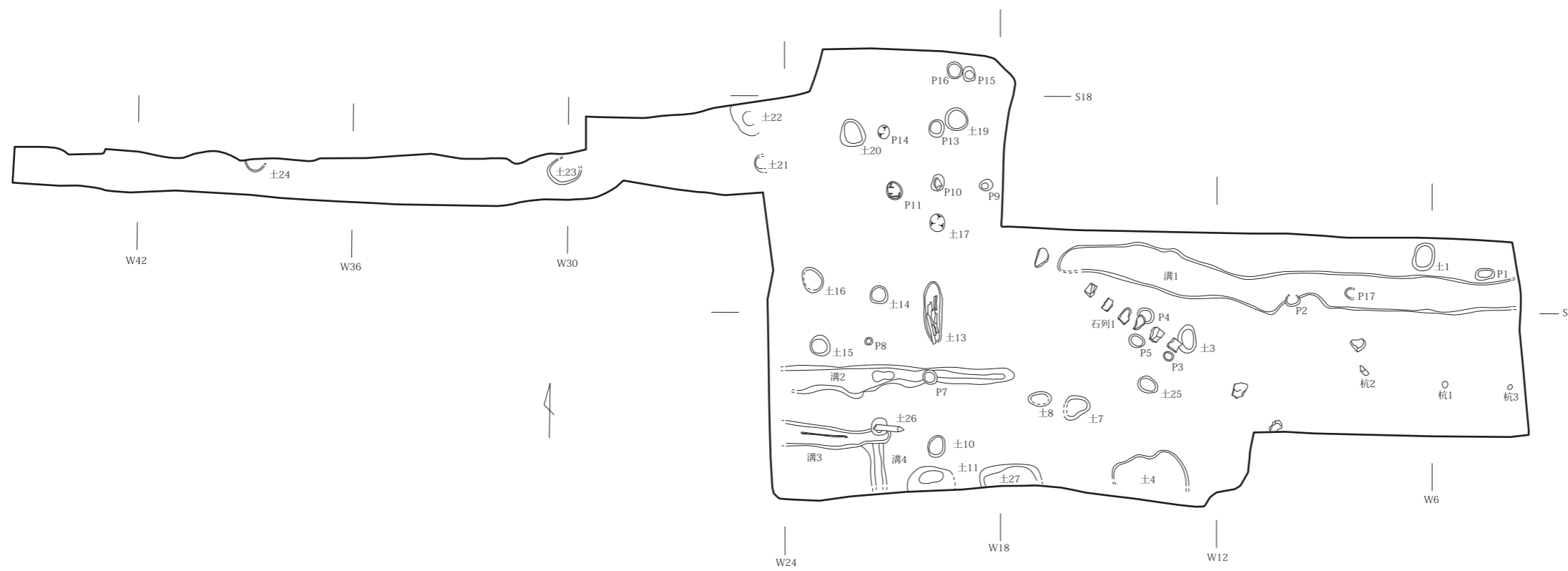


图13 A区II検・B区I検 全体图

B区II検



御使者宿

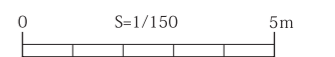


图 14 B区II検 全体图

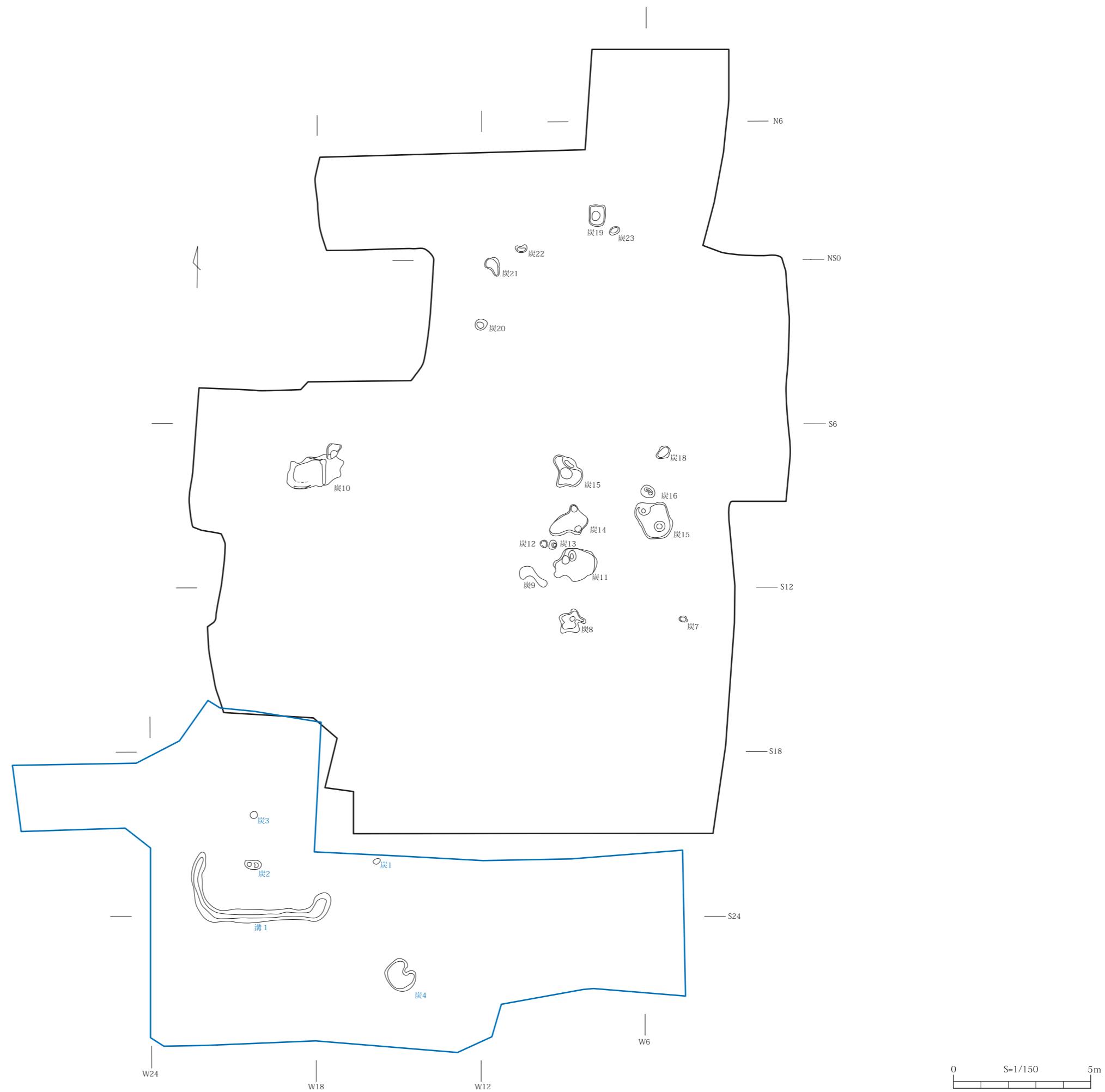


图 15 A・B区Ⅲa検 全体图



A·B区III b 検

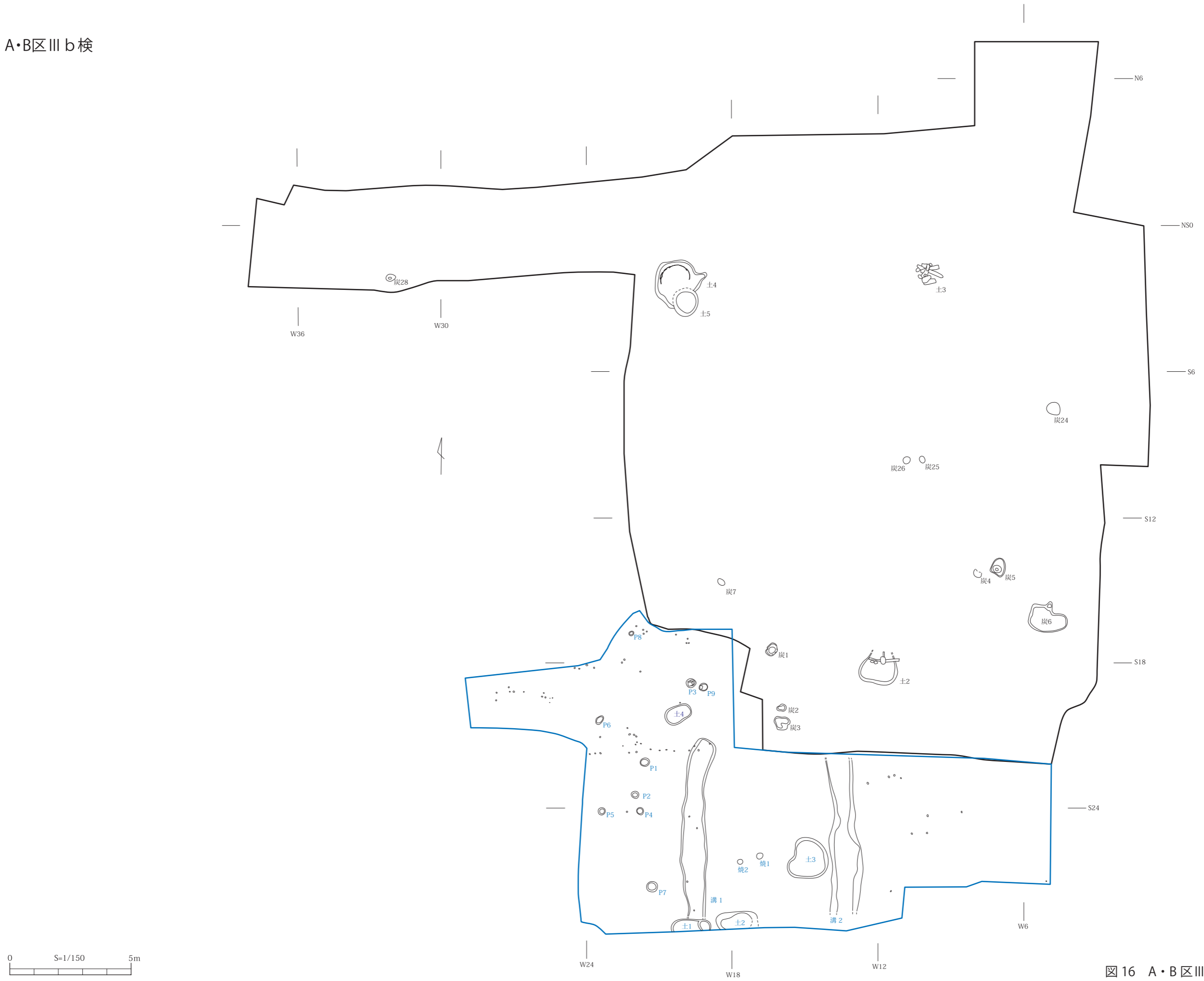


图 16 A·B区III b 検 全体图

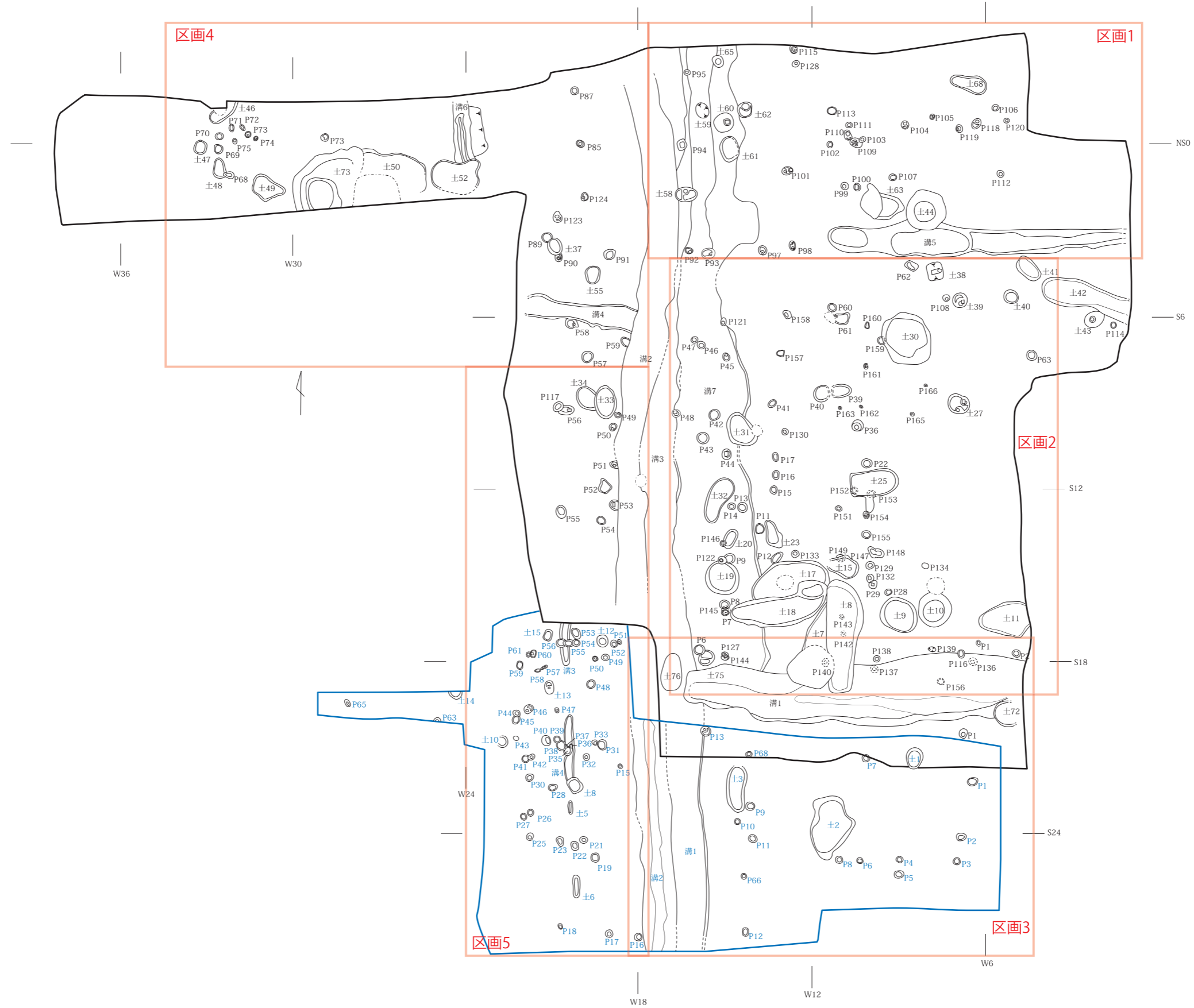
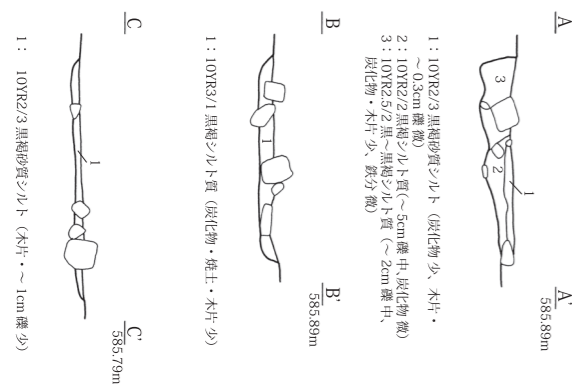


図17 A・B区IV検 全体図

A区I検  
御使者宿



B区II検  
御使者宿

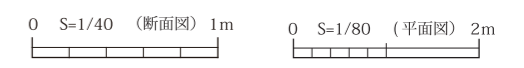
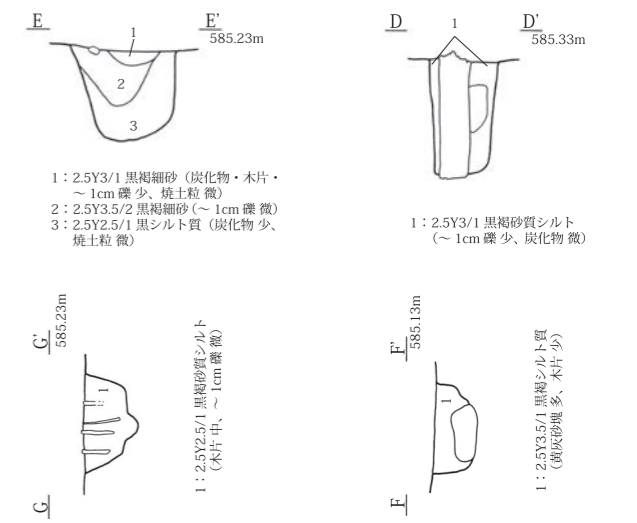


図18 A区I検・B区II検 推定御使者宿範囲図

A区II検B区I検  
御使者宿2



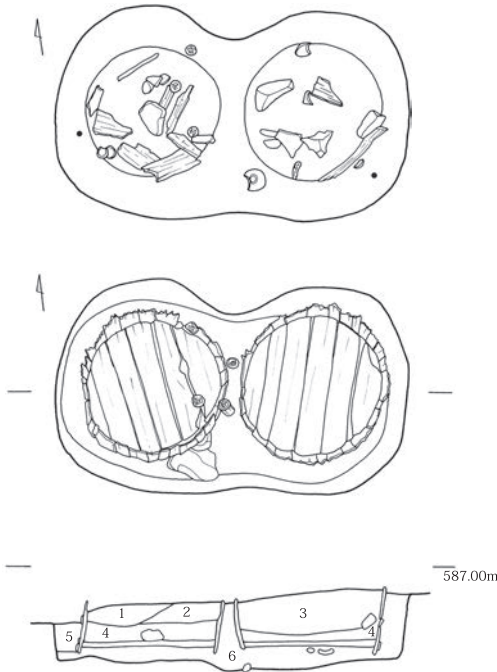
図19 A区II検・B区I検 推定御使者宿範囲図



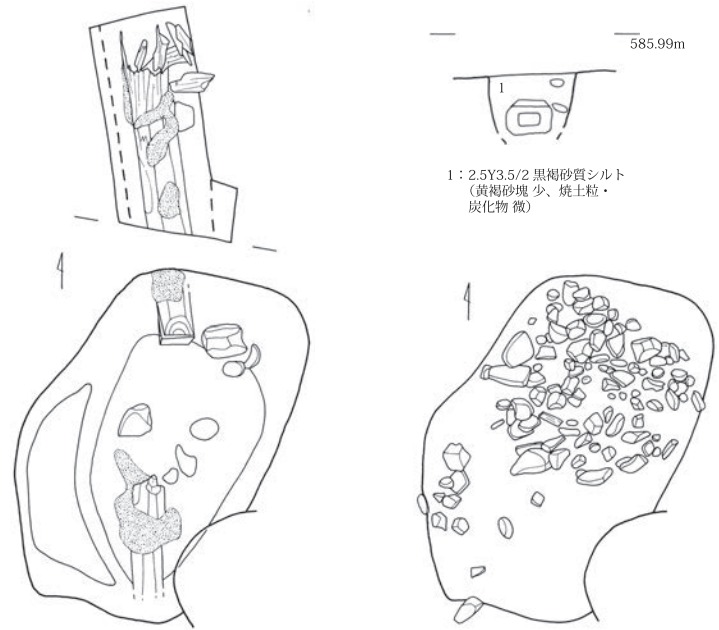
A区I検

土60・土76

土65・水道遺構1

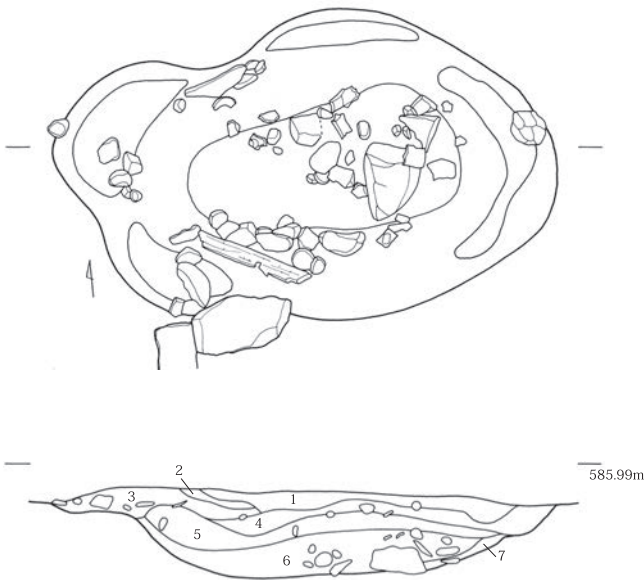


- 1: 10YR3/3 暗褐シルト質 (焼土大、炭化物中)
- 2: 10YR3/3 暗褐シルト質 (焼土・炭化物・~0.1cm 礫少)
- 3: 10YR3/3 暗褐シルト質 (焼土・炭化物多、~3cm 礫中)
- 4: 炭化物層
- 5: 2.5Y4/1 黄灰シルト質 (~5cm 礫少、焼土微)
- 6: 2.5YR3/1 黒褐粗砂 (橙焼土粒・黄土粒・炭粒少、木片微)



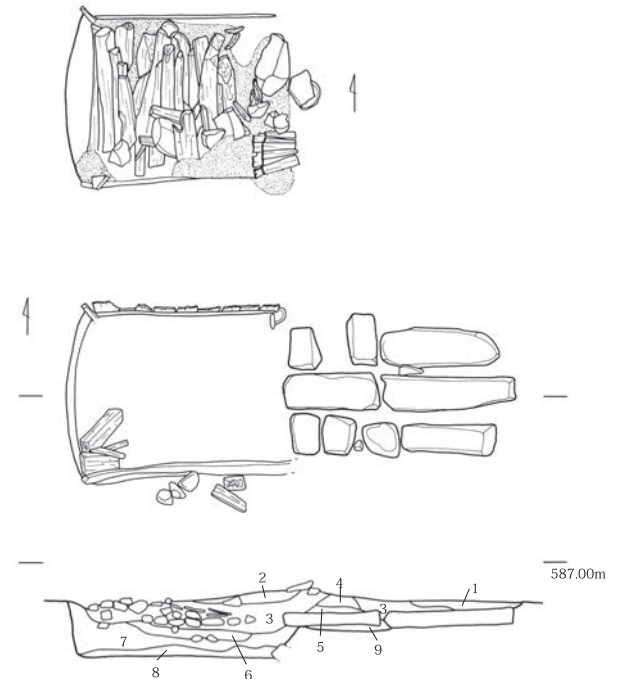
- 1: 2.5Y3.5/2 黒褐砂質シルト (黄褐砂塊少、焼土粒・炭化物微)

土39



- 1: 7.5YR2.5/2 黒褐砂質シルト (木片中、焼土・炭化物・~0.3cm 礫少)
- 2: 10YR5.5/6 黄褐細砂 (焼土・~0.2cm 礫微)
- 3: 10YR3/3 暗褐細砂 (鉄分・~1cm 礫少、炭化物微)
- 4: 10YR3/1 黒褐砂質シルト (木片・~1cm 礫少、焼土・炭化物微)
- 5: 10YR3/2 黒褐シルト質 (木片・~1cm 礫少、焼土・炭化物・鉄分微)
- 6: 10YR3/1.5 黒褐砂質シルト (~1cm 礫中、焼土・炭化物・木片・黄褐土塊微)
- 7: 10Y4.5/1 灰細砂 (炭化物少、木片微)

土72



- 1: 2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルト質 (~1cm 礫・粘土少)
- 2: 2.5Y3/5 暗オリーブ褐シルト質 (焼土塊・炭化物大、粘土多)
- 3: 2.5Y3/5 暗オリーブ褐シルト質 (焼土塊・炭化物大)
- 4: 10YR2/2 黒褐シルト質 (~1cm 礫少、焼土・炭化物微)
- 5: 灰層
- 6: 7.5Y5.5/1 灰シルト質 (青灰粘土塊・炭化物粒少)
- 7: 7.5Y3.5/1 オリーブ黒~灰シルト質 (炭灰塊・青灰粘土塊少)
- 8: 5Y3.5/1 オリーブ黒~灰粗砂 (灰黄土塊・~3.5cm 礫少、木片微)
- 9: 粘土層

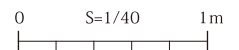
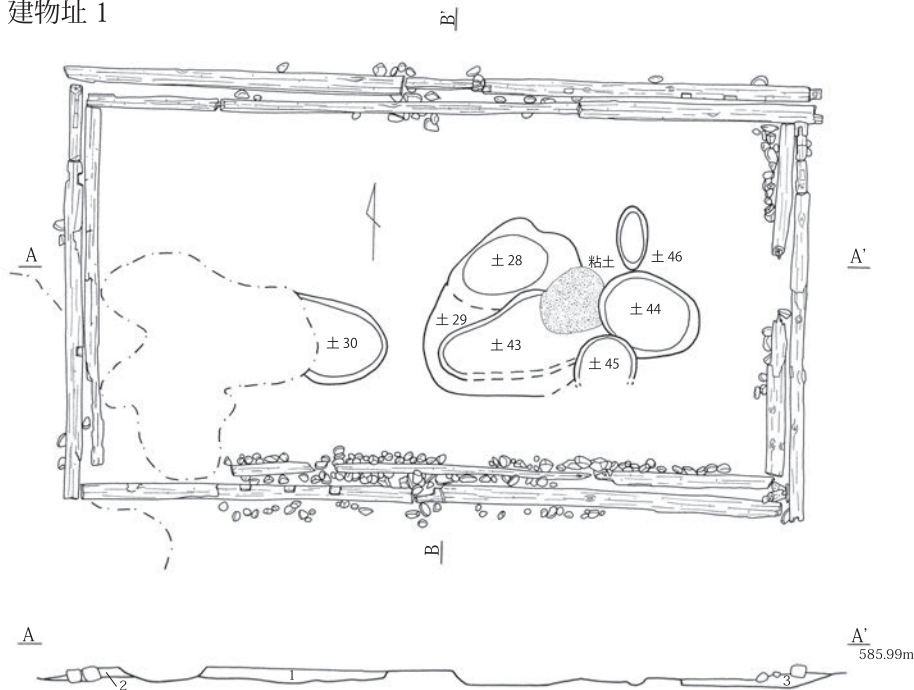


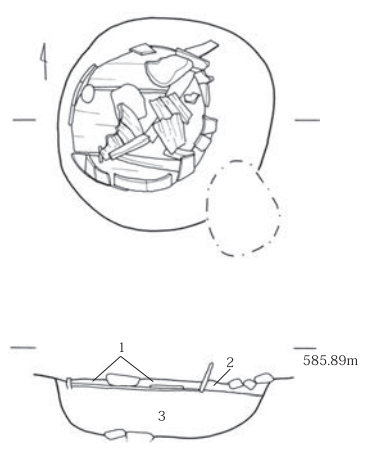
図20 A区I検 遺構図①

A区I検  
建物址1



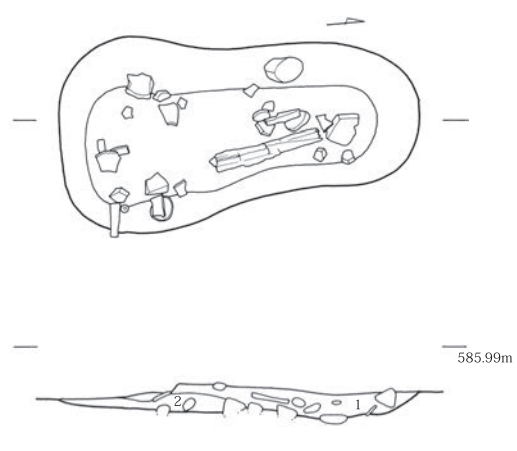
- 1: 2.5Y3.5/2 黒褐細砂 (黄褐砂塊・~1cm 礫少)
- 2: 10YR3/2 黒褐細砂 (~1cm 礫少、炭化物微)
- 3: 7.5YR3/1 黒褐シルト質 (暗灰黄土塊少、炭化物・鉄分・木片・~1cm 礫微)
- 4: 10YR3.5/2 黒褐細砂 (~2cm 礫多、黄褐土塊少)
- 5: 10YR2/2 黒褐砂質シルト (~0.2cm 礫少、木片微)
- 6: 10YR1.5/2 黒褐砂質シルト (~2cm 礫少、炭化物・焼土粒・黄褐砂塊微)

土16



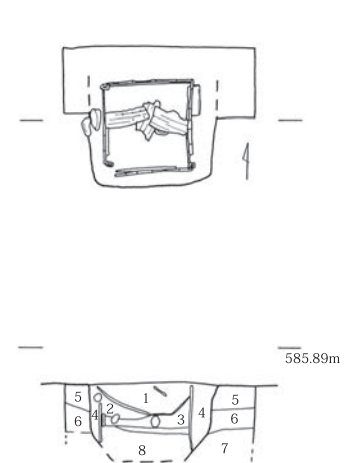
- 1: 10YR2/1 黒砂質シルト (炭化物・木片大、焼土中)
- 2: 2.5Y5/4 黄褐シルト質 (~10cm 礫少)
- 3: 10YR3/2 黒褐シルト質 (粗砂多、青灰粘土塊・~3cm 礫少)

土22



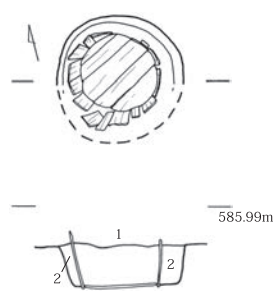
- 1: 10YR3/4 暗褐細砂 (焼土・~0.2cm 礫少)
- 2: 10YR2/3 黒褐砂質シルト (炭化物・~1cm 礫少、焼土微)

土25



- 1: 10YR3/3 暗褐シルト質 (木片中、炭化物・~3cm 礫少)
- 2: 10YR2/2 黒褐粘質シルト (黄褐砂粒少)
- 3: 10YR3/2 黒褐粘質シルト (焼土少)
- 4: 10YR2/1 黒シルト質 (~5cm 礫・白砂粒少)
- 5: 10YR4/1 褐灰砂質シルト (~1cm 礫中、焼土少)
- 6: 10YR3/1 黒褐シルト質 (炭化物・~0.5cm 礫少)
- 7: 10YR3/1 黒褐粘質シルト (炭化物・0.3cm 礫微)
- 8: 10YR2/1 黒粘質シルト (~0.2cm 礫少、焼土微)

土31



- 1: 10YR2/1 黒砂質シルト (炭化物大、焼土多)
- 2: 10YR3/2 黒褐細砂 (炭化物・~1cm 礫微)

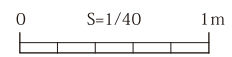
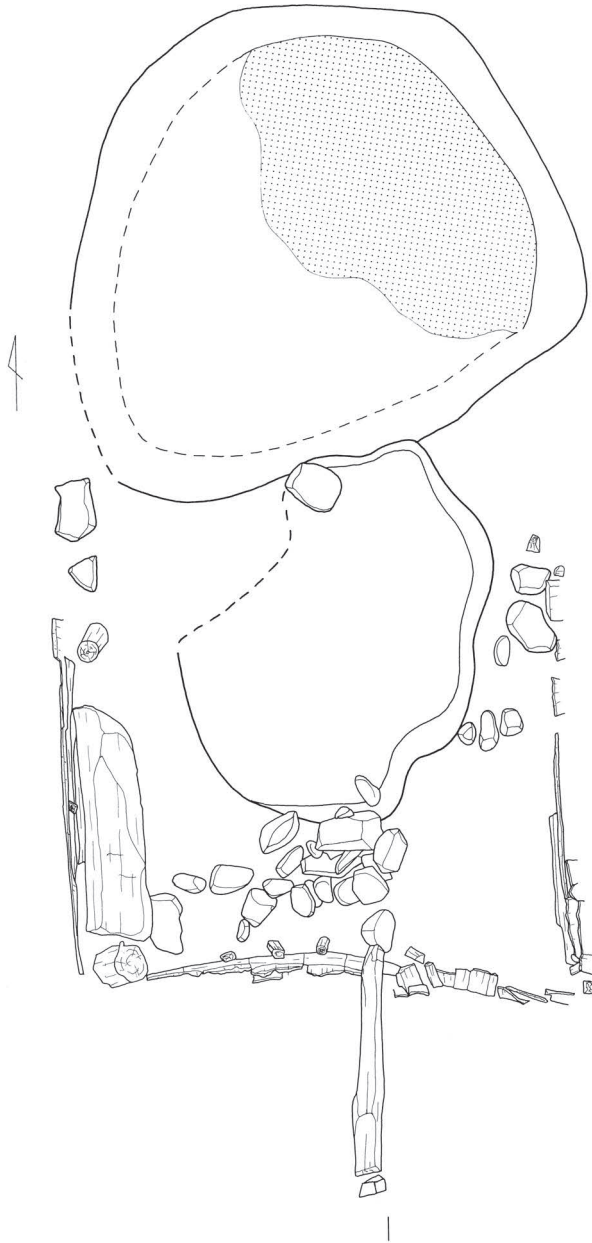
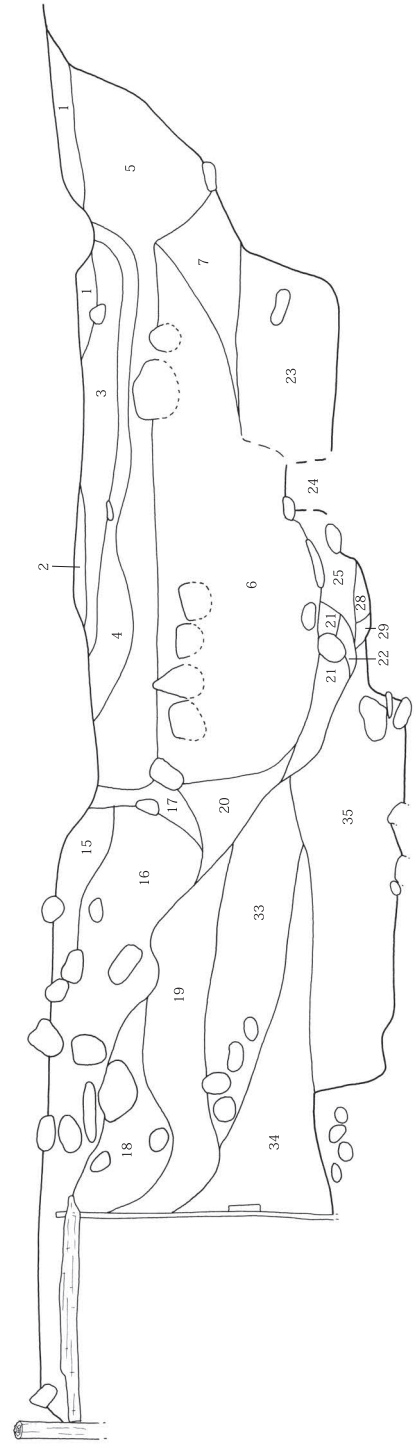


図21 A区I検 遺構図②

A区I検  
土75



586.19m



土73・75 共通

- 1: 2.5Y4/2 暗灰黄シルト質 (細砂中、～1cm 礫少、底部に木屑集中)
- 2: 2.5Y5/6 黄褐細砂 (底部に木屑集中)
- 3: 10YR3/2 黒褐シルト質 (～20cm 礫多、2層砂中)
- 4: 10YR2.5/2 黒褐細砂 (炭化物・木片少)
- 5: 2.5Y3/1.5 黒褐シルト質 (炭化物・焼土塊・灰黄粘土塊・～1cm 礫少)
- 6: 2.5Y4.5/3 黄褐粘土 (焼土粒少、鉄分微)
- 7: 2.5Y4/1 黄灰粗砂 (明黄褐土粒多)
- 8: 10YR3/1.5 黒褐粘質シルト (炭化物・～0.5cm 礫少、焼土塊微)
- 9: 2.5Y4.5/2 暗灰黄粘質シルト (炭化物・灰黄粘土塊・～1cm 礫微)
- 10: 2.5Y3.5/1 黒褐粘質シルト (灰黄粘土塊微)
- 11: 2.5Y3/1 黒褐粘質シルト (灰黄粘土塊微)
- 12: 10YR2/1 黒粘質シルト
- 13: 灰層
- 14: 粘土層
- 15: 2.5Y4.5/4 オリーブ褐 (炭化物・～1cm 礫少、焼土塊微)
- 16: 10YR2.5/1 黒褐粘質シルト (炭化物少、木片・焼土粒微)
- 17: 2.5Y3.5/1 黄粘質シルト (炭化物・灰黄粘土塊微)
- 18: 10YR3/1.5 黒褐粘質シルト (炭化物・～0.5cm 礫少、焼土塊微)
- 19: 2.5Y4.5/2 暗灰黄粘質シルト (炭化物・灰黄粘土塊・～1cm 礫微)
- 20: 2.5Y3.5/2 暗灰黄粘質シルト (炭化物・灰黄粘土塊少)

- 21: 2.5Y4/1 黄灰粗砂 (灰黄粘土・～2cm 礫少)
- 22: 2.5Y4/1 黄灰粗砂
- 23: 2.5Y3.5/1 黒褐～黄灰粗砂 (焼土粒中、～10cm 礫少)
- 24: 2.5Y6/4 にぶい黄灰・灰土粒層 (被熱石)
- 25: 2.5Y3/2 黒褐炭・灰粘土・焼土粒層 (～1cm 礫少)
- 26: 10YR2/1 黒粘質シルト
- 27: 粘土層 (しまり無くボソボソ)
- 28: 粘土層
- 29: 焼土層 (41層より黒ずむ)
- 30: 焼土層
- 31: 2.5Y2.5/1 黒褐シルト質 (炭化物少、～1cm 礫微)
- 32: 10YR2.5/1 黒褐粘質シルト (炭化物少)
- 33: 2.5Y5.5/2 灰黄粘土 (焼土塊多、炭化物少)
- 34: 2.5Y4/1.5 黄灰粘質シルト (炭化物・焼土粒少)
- 35: 2.5Y3.5/1 黒褐～黄灰焼土層 (粘土・灰・炭大、～0.5cm 礫多)
- 36: 2.5Y3.5/1 黒褐～黄灰粘土
- 37: 10YR3/2 黒褐シルト質 (黄土塊中、～0.5cm 礫少、炭微)
- 38: 10YR2/2 黒褐粘質シルト (～3cm 礫中、炭少、木片微)
- 39: 10YR2/2 黒褐粘質シルト
- 40: 2.5Y4/4 オリーブ褐細砂
- 41: 焼土層 (28層より黒ずむ)

0 S=1/40 1m

図22 A区I検 遺構図③

A区I検  
土73

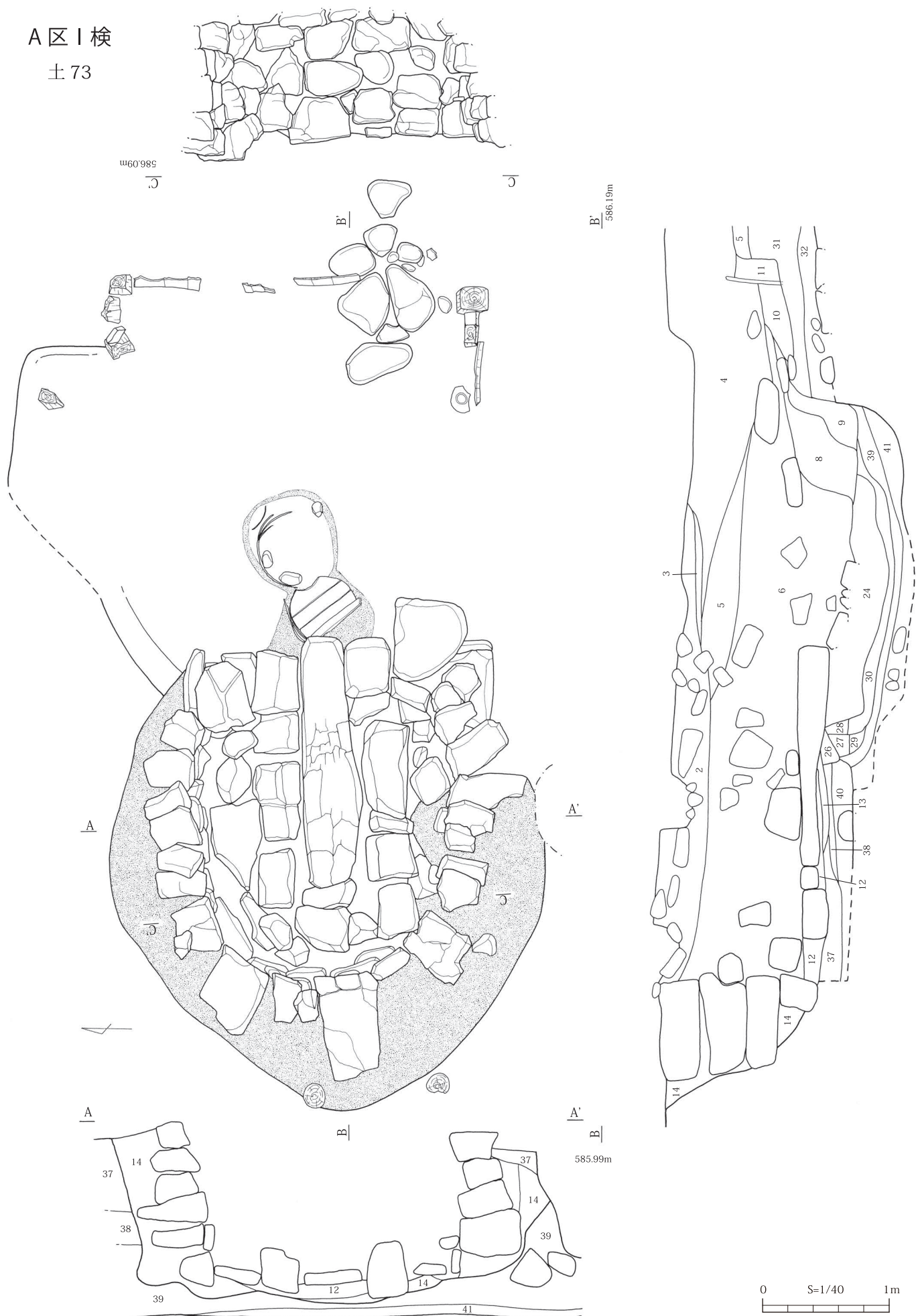


图 23 A区I検 遺構图④



A区I 檢  
建2

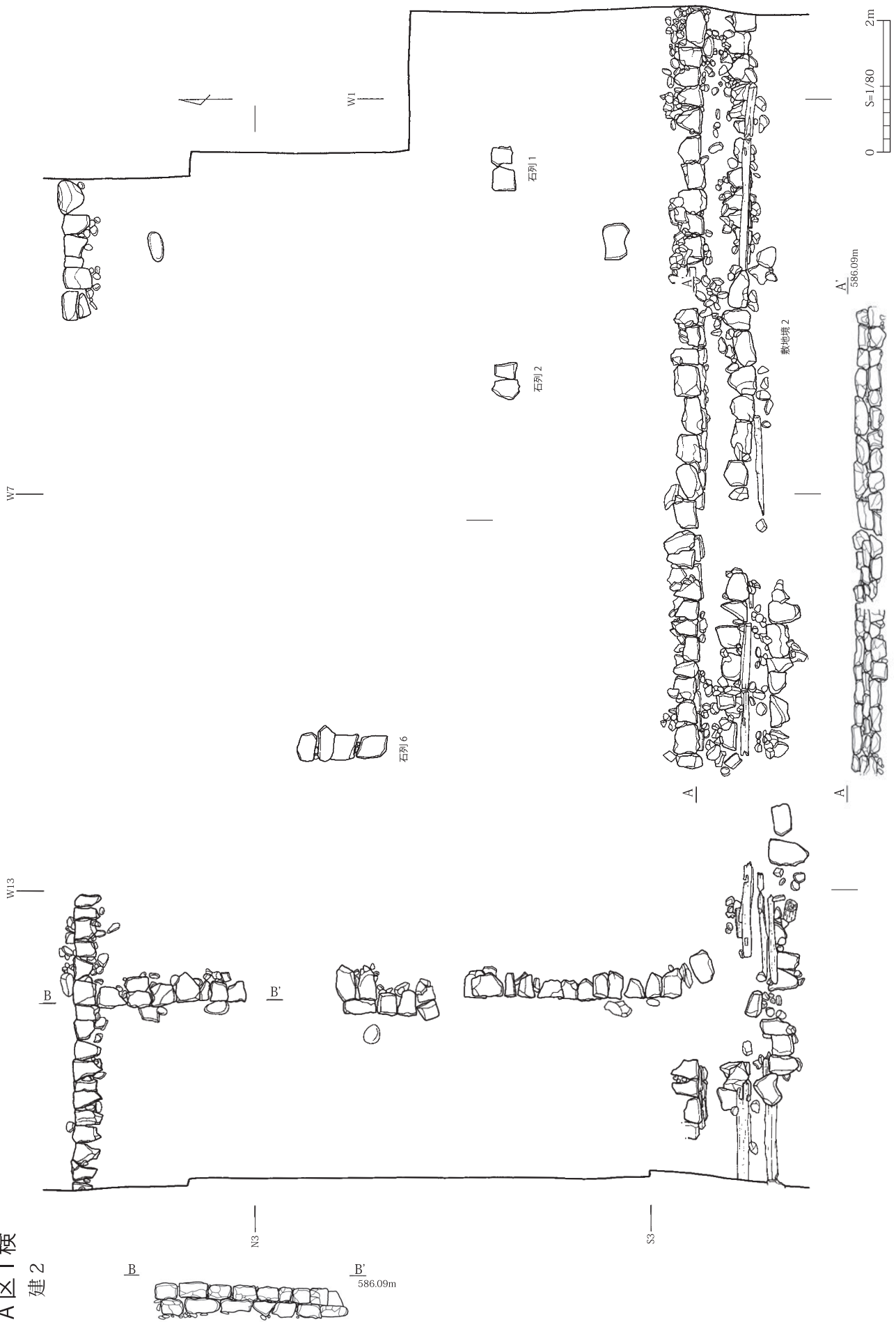


图24 A区I 檢 遺構图⑤

A区II検・B区I検  
水道遺構1・2・3・4

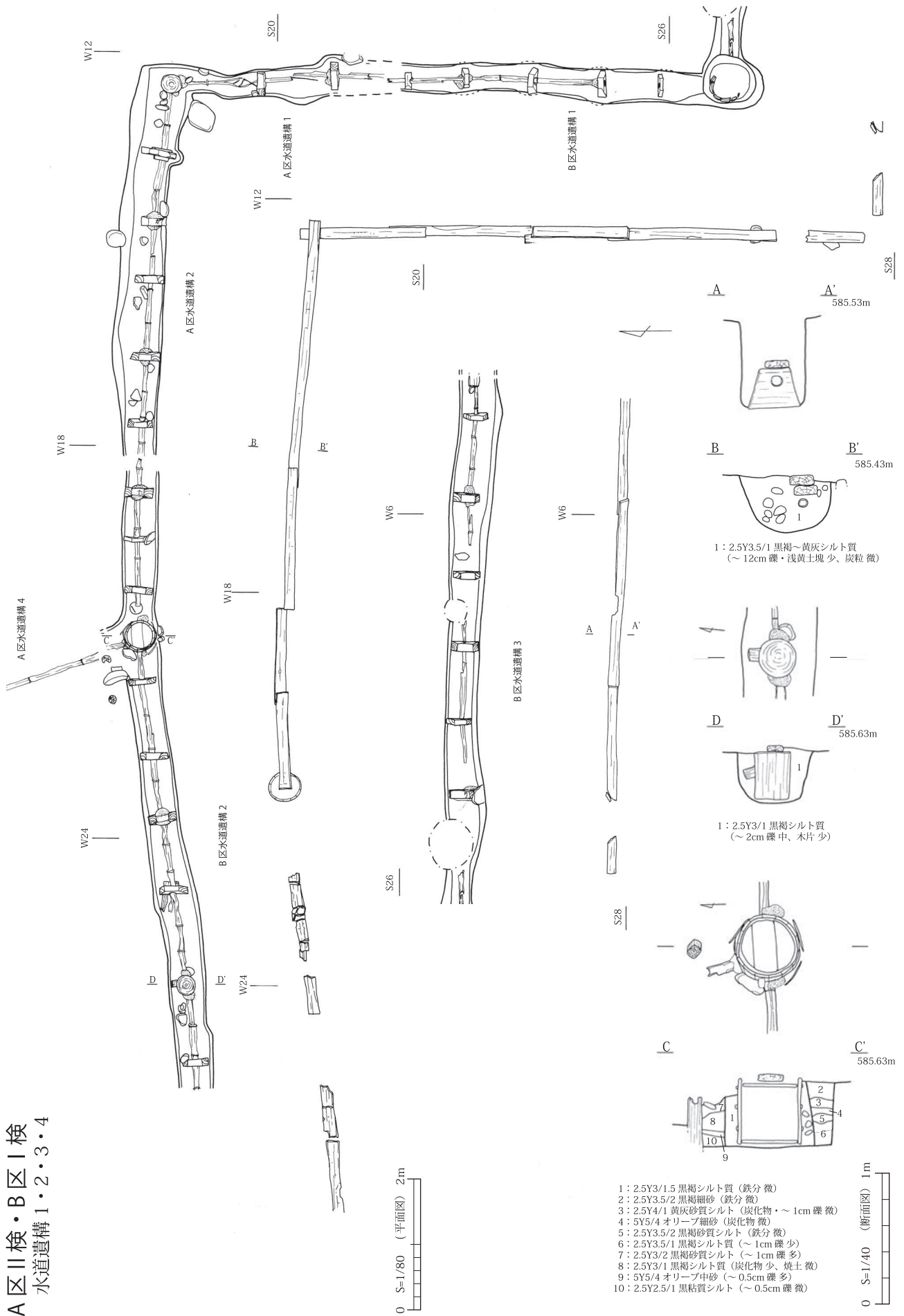


図25 A区II検・B区I検 遺構図①

A区II検  
水道遺構3・8

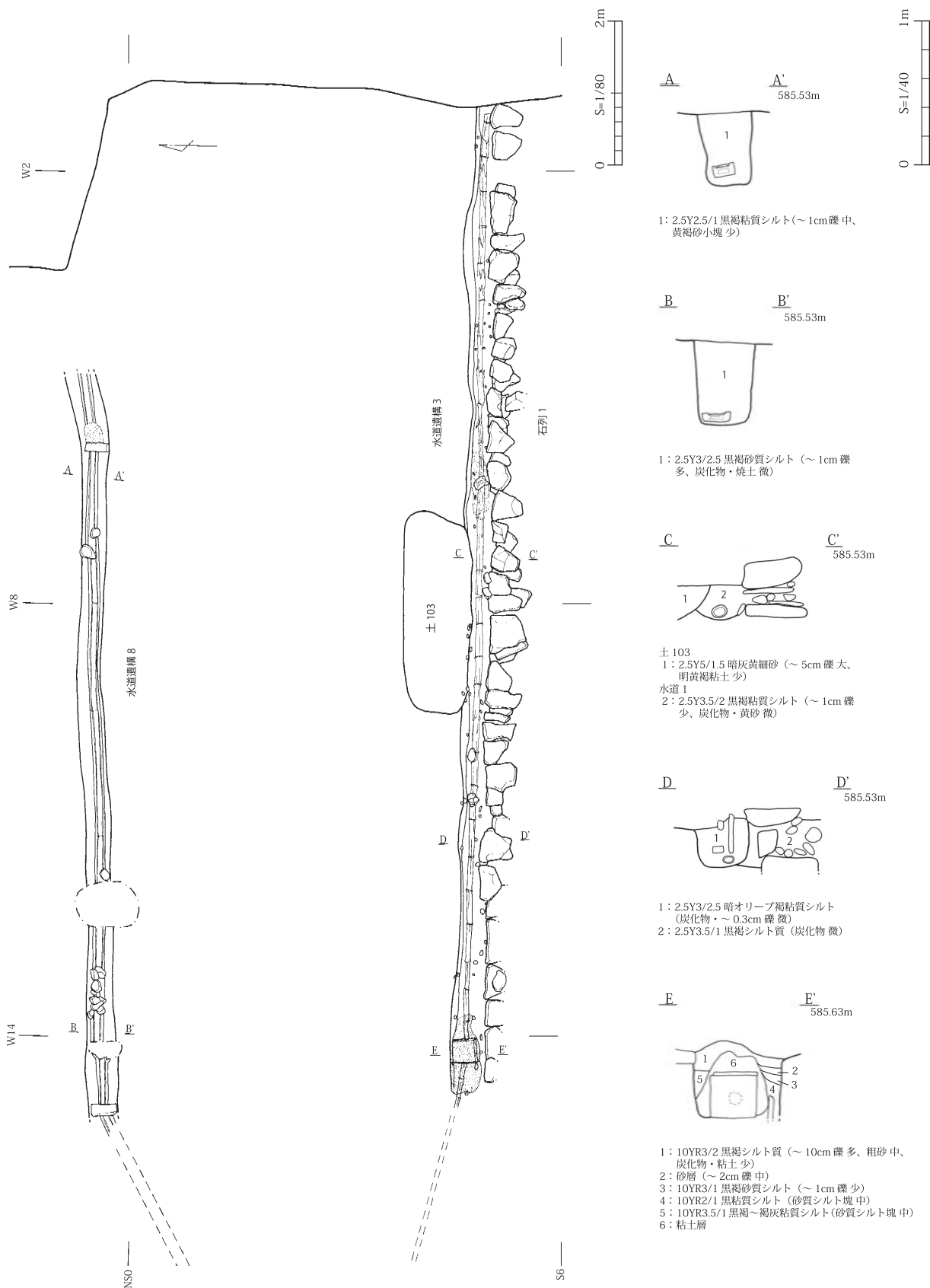
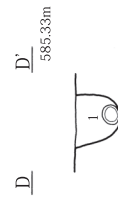
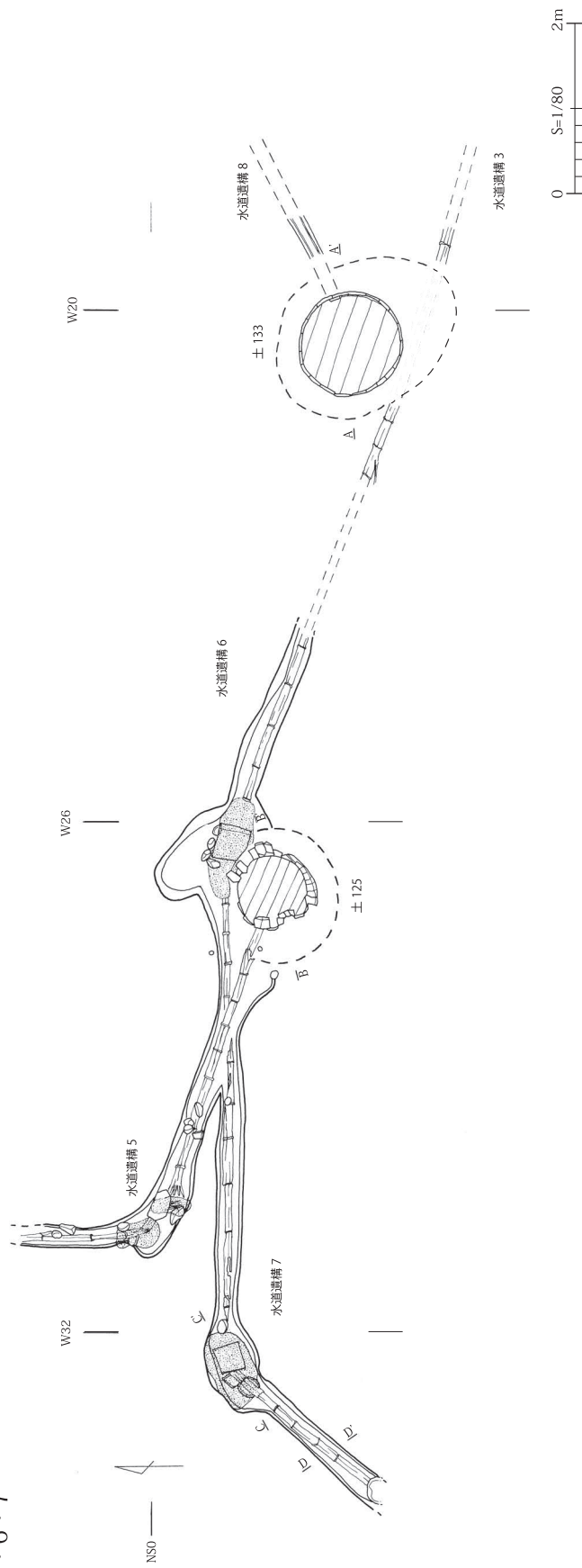


図26 A区II検・B区I検 遺構図②

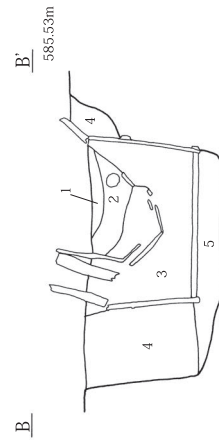
# A区II検 水道遺構 5・6・7



1: 2.5Y4/1 黄灰シルト質  
(~3cm 礫中、炭化物 微)



1: 2.5Y4/1.5 黄灰~暗灰黄粗砂 (炭化物  
塊・~2cm 礫・浅黄土粒 微)  
2: 2.5Y5/1 黄灰細砂 (灰黄土塊 少)  
3: 2.5Y3/2 黒褐粗砂 (灰黄~浅黄粘土中、  
~2cm 礫 微)  
4: 2.5GY6/2 灰黄粘土 (灰粘土塊中、  
浅黄粘土塊 少)



1: 2.5Y3/2 黒褐砂質シルト (粗砂多、~10cm 礫中、  
炭化物 微)  
2: 2.5Y3/1 黒褐シルト質(黒褐粘土塊中、~5cm 礫 少、  
粘土塊 微)  
3: 2.5Y2/1 黒粘質シルト (~10cm 礫・黒褐粘質土塊  
中)  
4: 10YR3/2 黒褐シルト質 (~5cm 礫多、粘土中、  
炭化物 少)  
5: 10YR3/1 黒褐シルト質 (粘土・~1cm 礫 少)



1: 10YR2/2 黒褐シルト質 (木片中、~10cm 礫・炭 少)  
2: 10YR3/1 黒褐シルト質 (~10cm 礫・木片中、炭化物・オリープ粘粘土 少)  
3: 10YR3/2 黒褐シルト質 (~20cm 礫多、オリープ粘細砂中、炭化物 少)  
4: 粘土層  
5: 10YR3/2 黒褐シルト質 (~20cm 礫多、オリープ粘細砂中、炭化物 少)



図 27 A区II検・B区I検 遺構図③



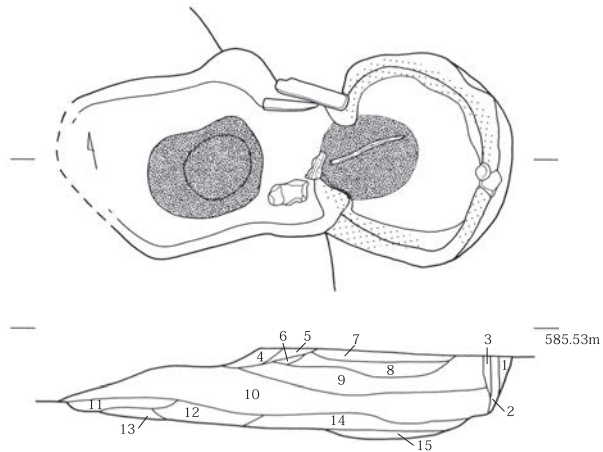
A区II検

土 56



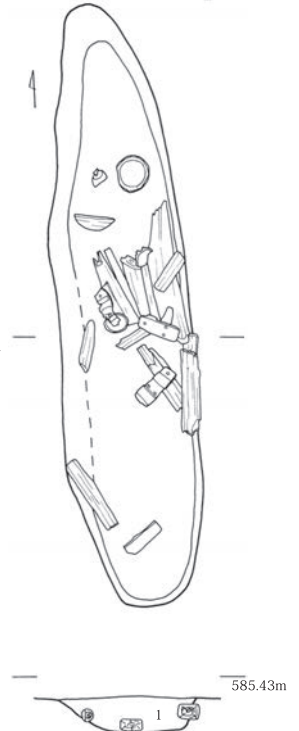
- 1: 5Y3/1 オリーブ黒粗砂 (木片・~4cm 礫少)
- 2: 5Y3/1 オリーブ黒粗砂 (炭化物塊中、浅黄土粒・~4cm 礫・木片少)
- 3: 5Y3.5/1 オリーブ黒粗砂 (おがくず大、木片少、明黄褐土粒微)

土 82



- 1: 5Y5/2 灰オリーブ粗砂 (~1cm 礫・淡黄土粒・炭粒微)
- 2: 10YR3/2 黒褐粗砂 (炭塊微) 焼土
- 3: 10YR5.5/4 にぶい黄褐粗砂 焼土
- 4: 5Y4.5/1 灰粗砂 (炭粒・明黄褐土粒・淡黄土粒微)
- 5: 2.5Y4/2 暗灰黄細砂 (淡黄土塊少、炭化物塊・~1cm 礫微)
- 6: 2.5Y5.5/1 黄灰細砂 (淡黄土塊少、~1cm 礫微)
- 7: 5Y5/2 灰オリーブ粗砂 (淡黄土塊・炭塊少、木片・明黄褐土粒微)
- 8: 2.5Y5/1.5 黄灰細砂 (淡黄土塊・炭粒少、~1cm 礫微)
- 9: 5Y4.5/2 灰オリーブシルト質 (明黄褐土塊中、炭塊少、~1cm 礫微)
- 10: 2.5Y6/2 灰黄シルト質 (黄黄土塊・粘土中、黄褐焼土塊・炭塊少)
- 11: 2.5Y6/2 灰黄粗砂 (炭化物塊少)
- 12: 炭層 (明黄褐焼土粒少)
- 13: 2.5Y6/2 灰黄粘質 (~2cm 礫微)
- 14: 2.5Y6/2 灰黄シルト質 (黄黄土塊・炭少)
- 15: 炭層 上層は火床面

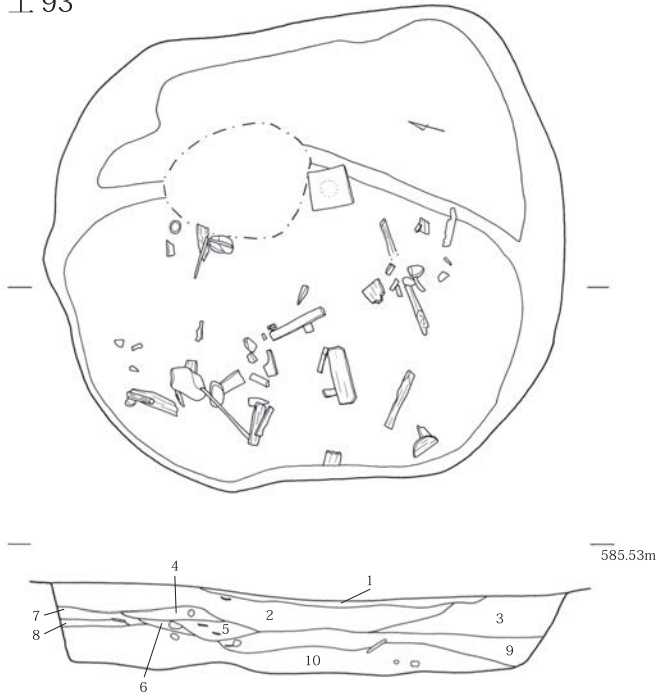
土 99



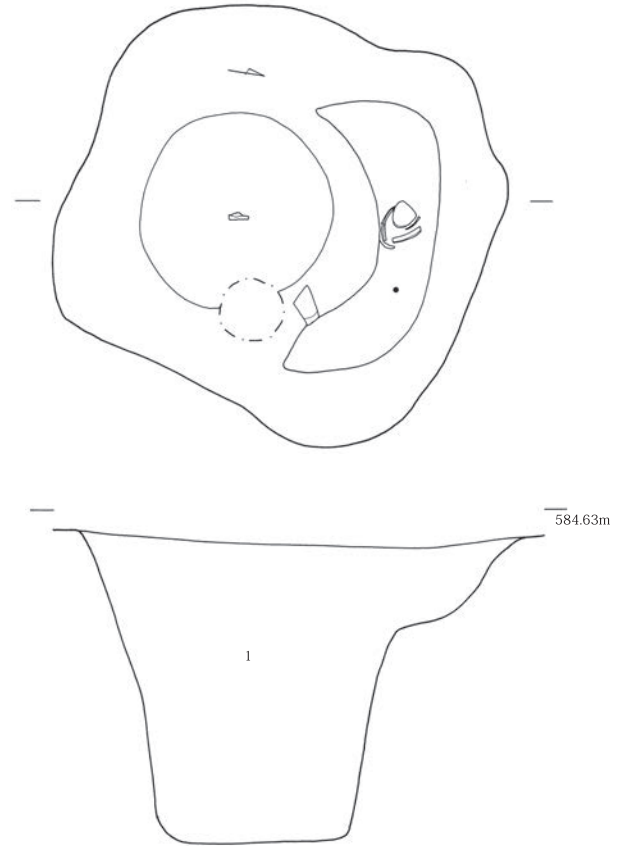
- 1: 10YR3/3 暗褐シルト質 (粗砂中、~2cm 礫少)

土 136

土 93



- 1: 2.5Y3/1.5 黒褐シルト質 (炭化物・木片微)
- 2: 2.5Y3.5/1 黒褐砂質シルト (木片少、炭化物微)
- 3: 2.5Y3.5/2 黒褐シルト質 (炭化物・木片微)
- 4: 2.5Y4.5/1 黄灰シルト質 (浅黄粘土少、灰砂微)
- 5: 10YR3.5/1 褐灰シルト質 (浅黄粘土少)
- 6: 2.5Y4/1.5 暗灰黄シルト質 (炭化物少、~1cm 礫微)
- 7: 2.5Y3.5/1 黒褐シルト質 (炭化物微)
- 8: N2.5/0 暗灰細砂 (炭化物微)
- 9: 2.5Y3/2.5 暗オリーブ褐粘質シルト (木片中、炭化物少)
- 10: 10YR2.5/2 黒褐粘質シルト (木片多、~1cm 礫少、炭化物微)



- 1: 2.5Y3/2 黒褐シルト質 (木片多、~1cm 礫中、鉄分少)

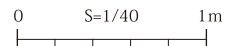
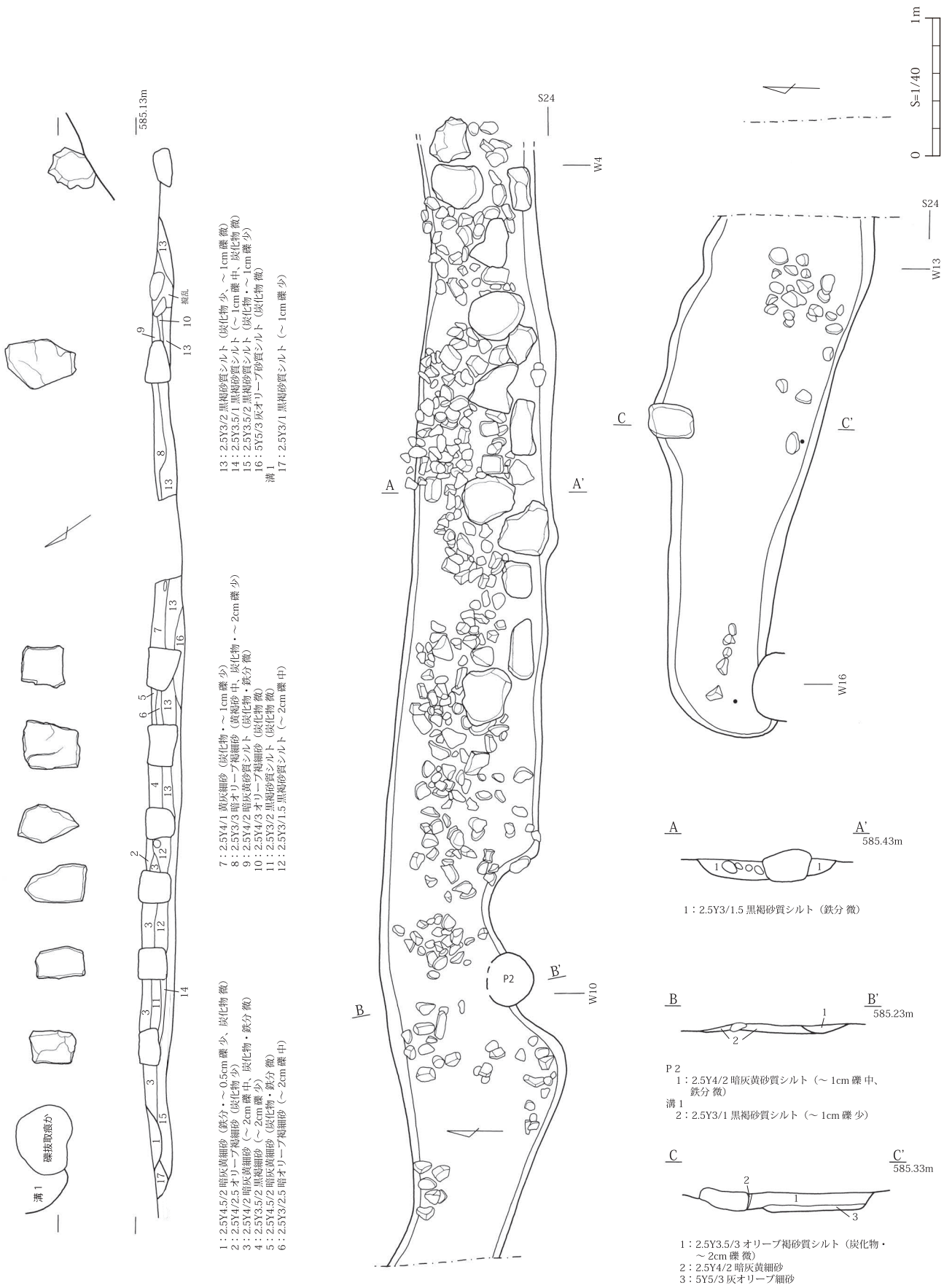


図 28 A区II検・B区I検 遺構図④

B区II検  
石列I

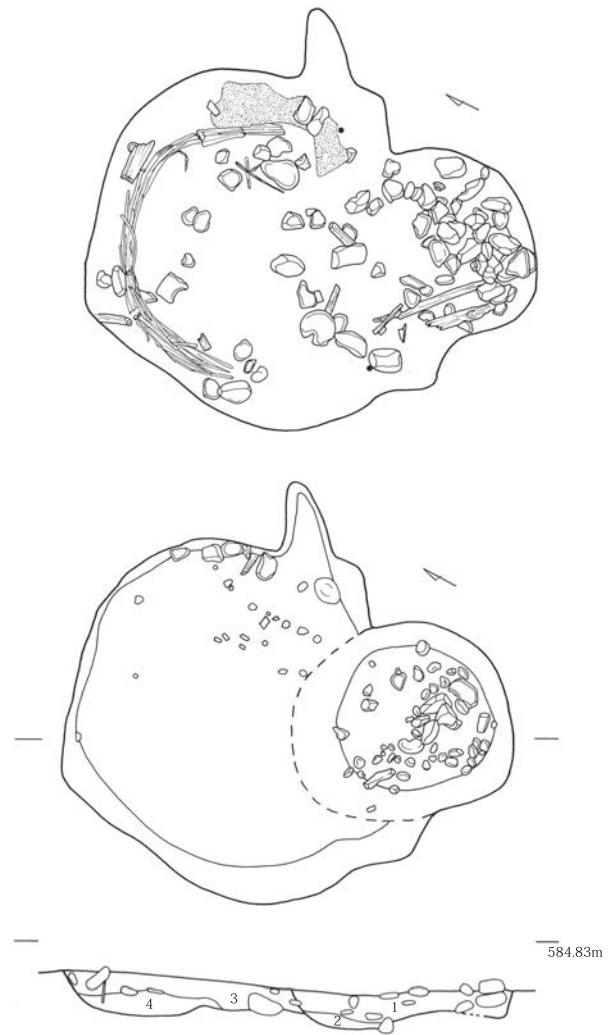


溝1

図29 B区II検 遺構図

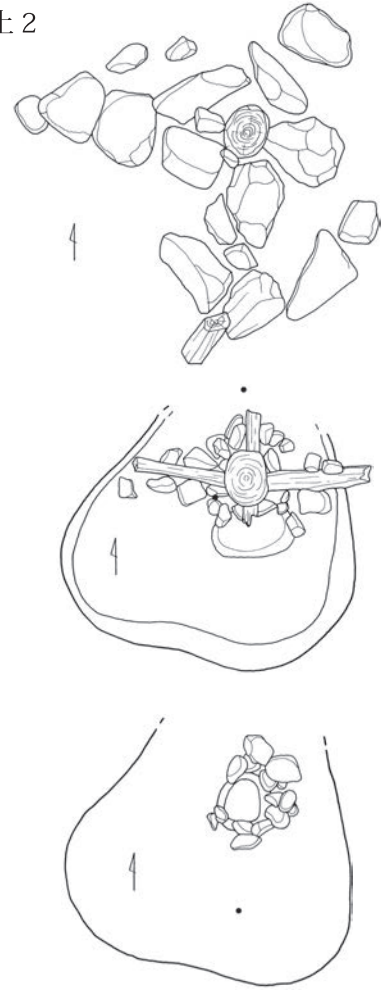
A区IIIb検

土4・土5

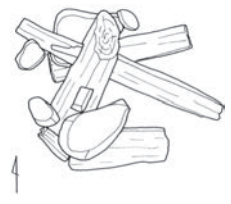


- 土5
- 1: 2.5Y3/1 黒褐粗砂 (~3cm 礫・灰黄土塊中)
- 2: 2.5Y4/1 黄灰細砂 (炭化物塊 微)
- 土4
- 3: 2.5Y3.5/1 黒褐~黄灰粗砂 (~3cm 礫・灰黄土塊中、明黄褐土塊少)
- 4: 2.5Y3/1 黒褐粗砂 (灰黄土塊・~5cm 礫少)

土2

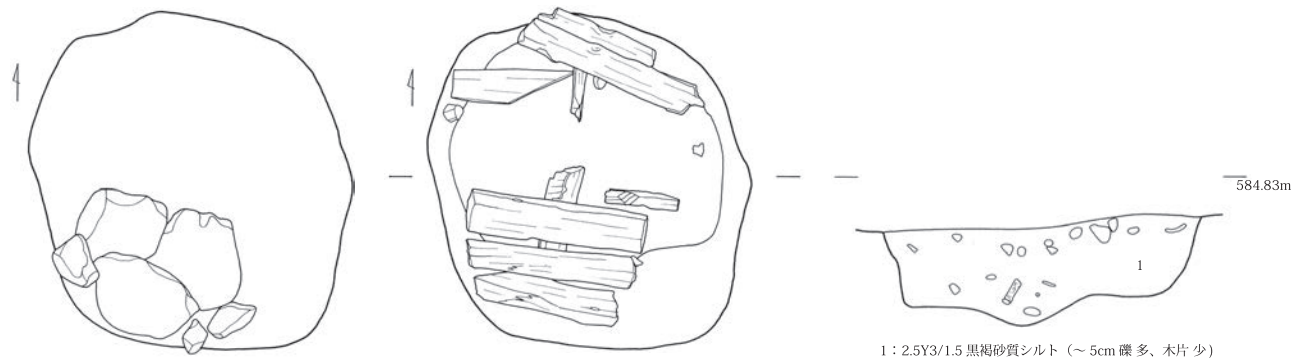


土3



A区IV検

土30



- 1: 2.5Y3/1.5 黒褐砂質シルト (~5cm 礫多、木片少)

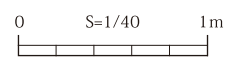


図30 A区IIIb検・A区IV検 遺構図

A区IV検  
区画図①

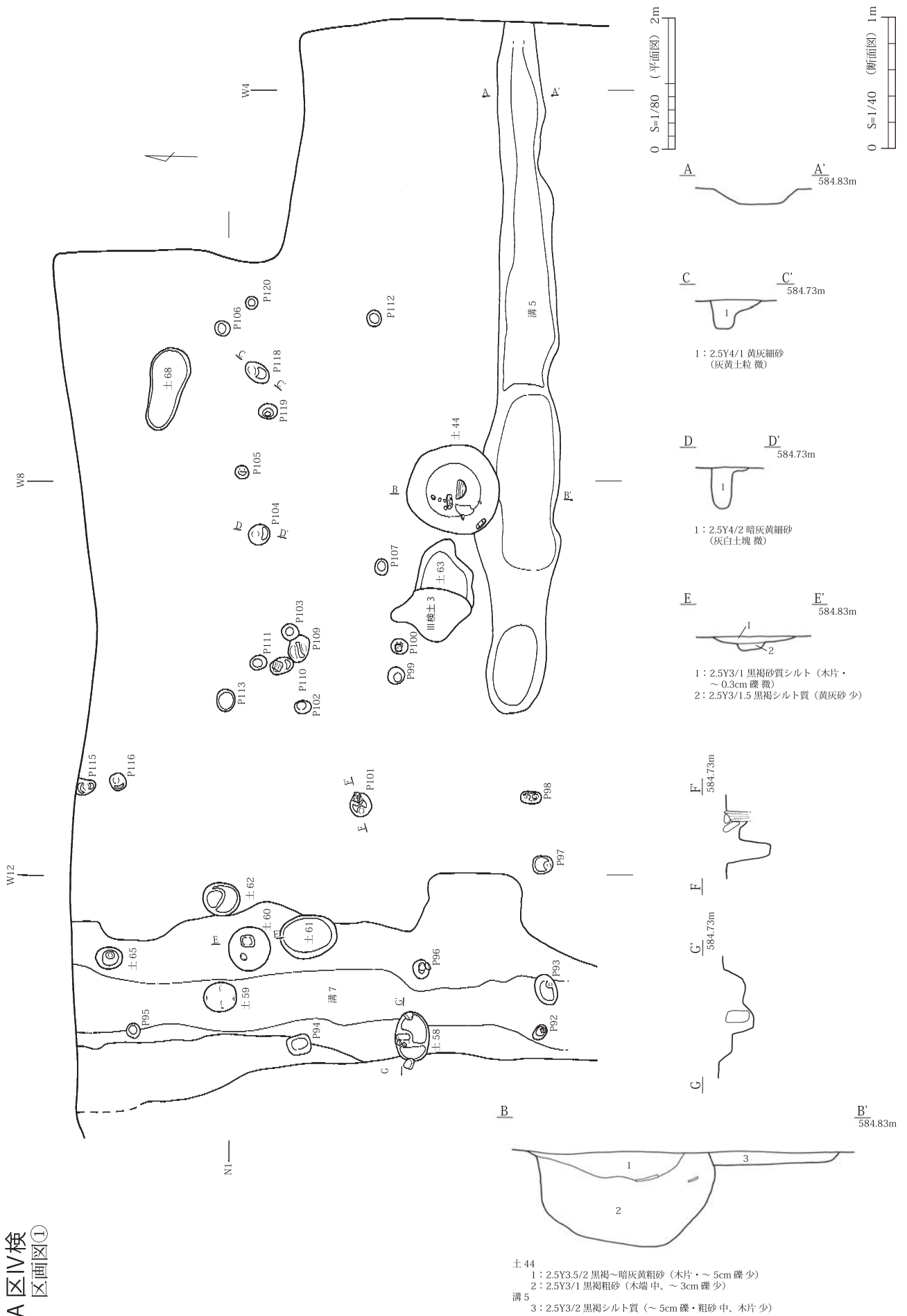


図 31 A区IV検区画1 遺構図



区画図②



図 32 A 区IV検区画 2 遺構図



A区IV検  
区画④

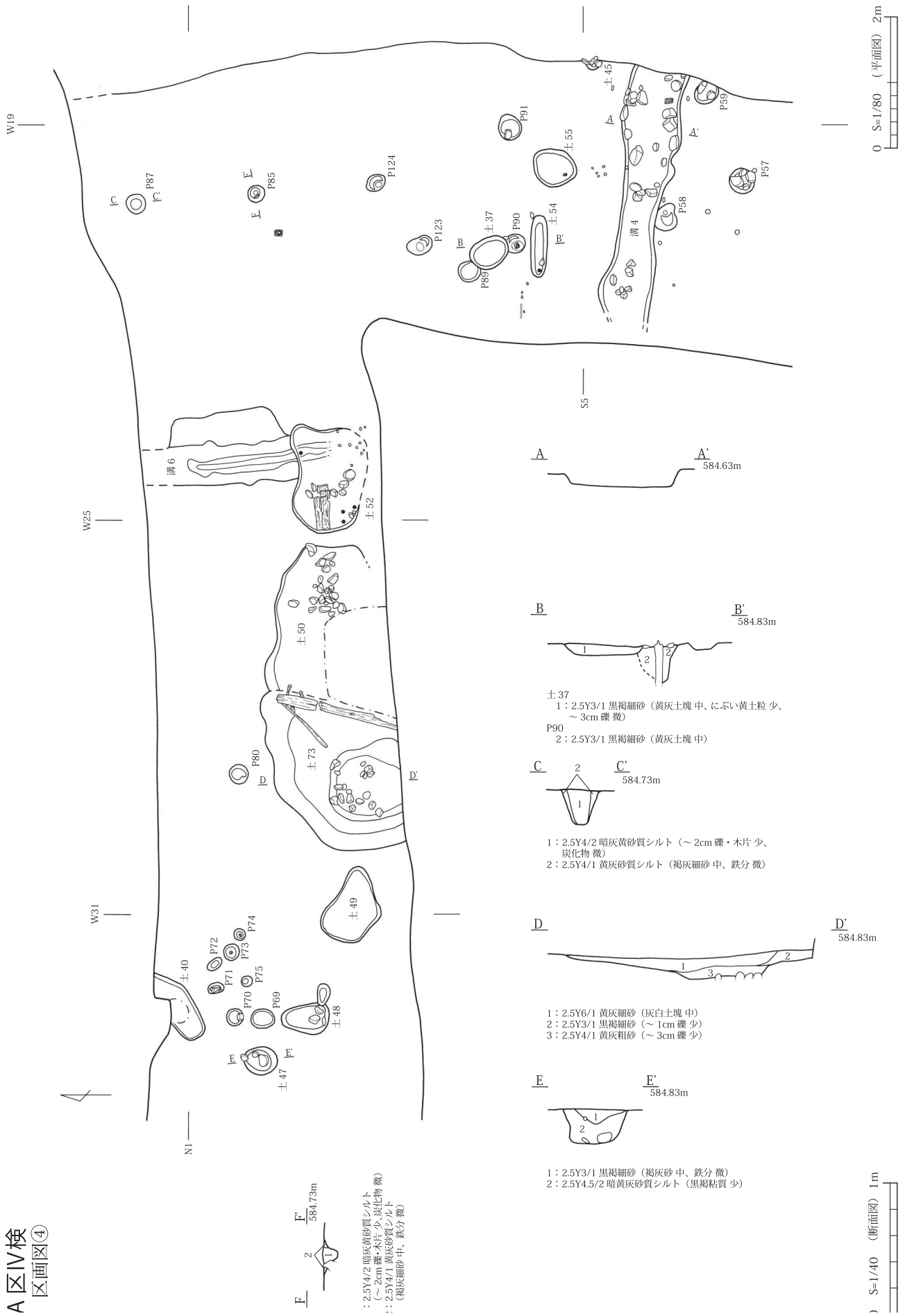


図34 A区IV検区画4 遺構図

A・B区IV検

区画図⑤

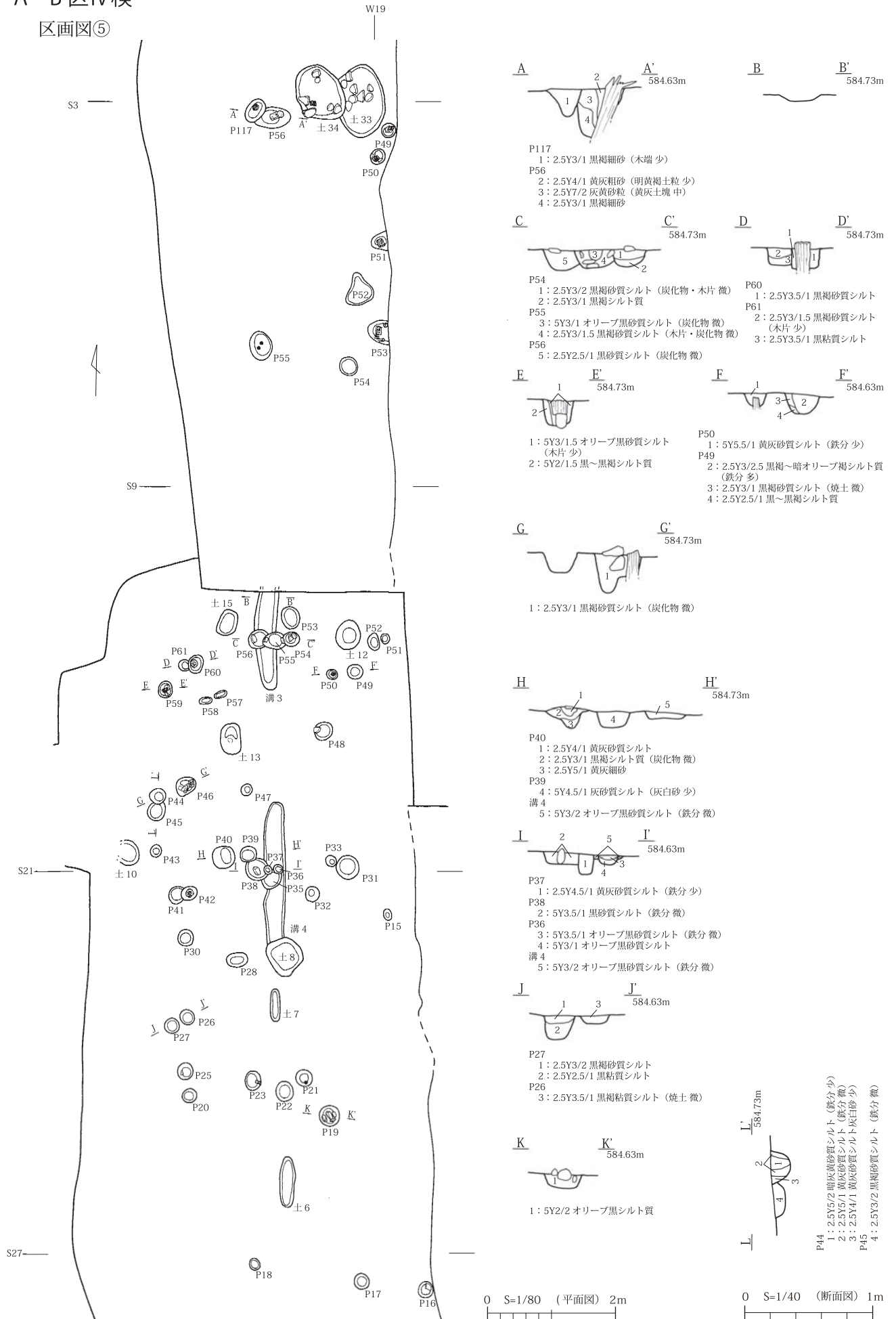
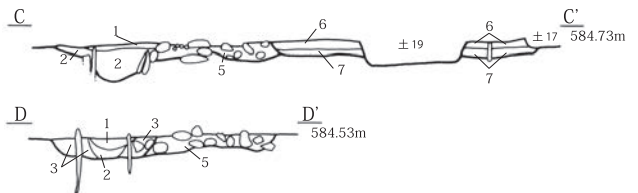
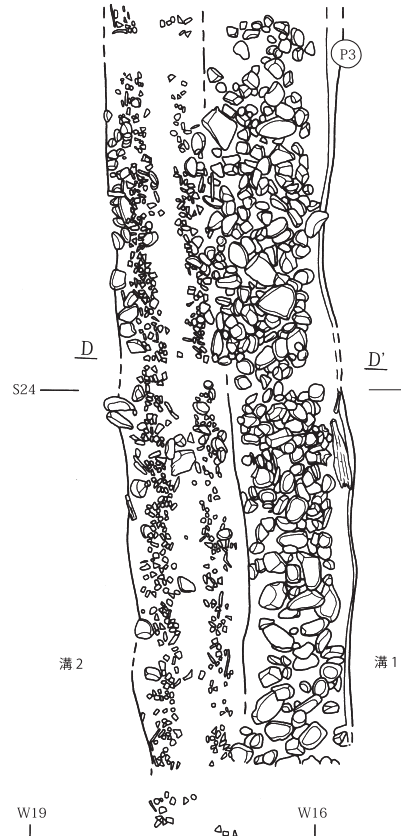
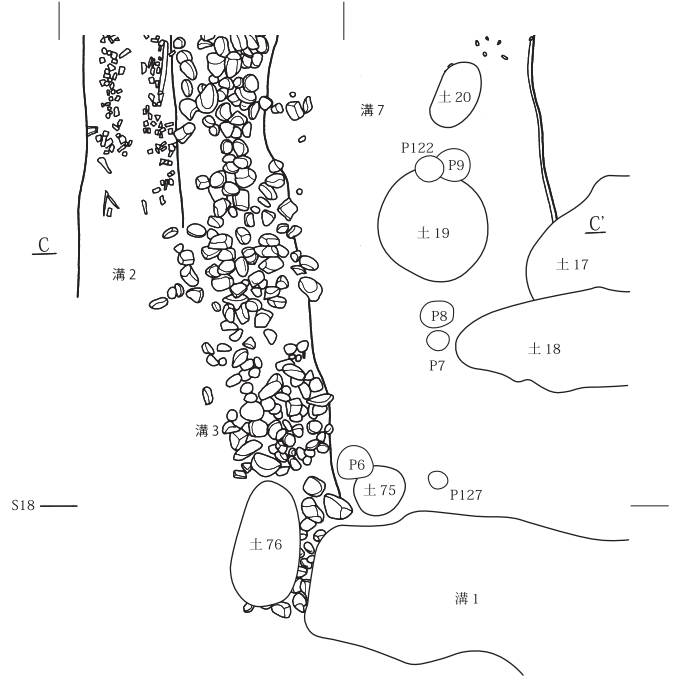
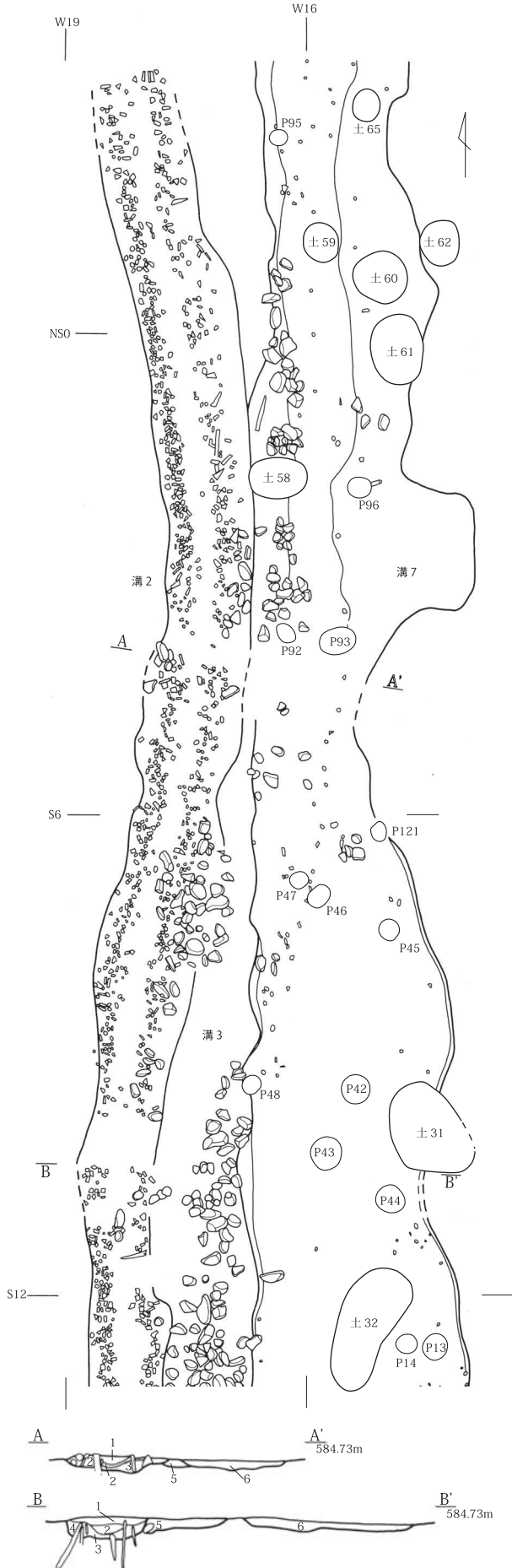


図 35 A区IV検区画5 遺構図



A・B区IV検

溝2・3・7



- 溝2  
 1: 10YR3/2 黒褐シルト質 (粗砂・黄褐土粒中、~1cm 礫・木片微)  
 2: 10YR2/2 黒褐シルト質 (細砂・浅黄土粒少、~1cm 礫・木片微)  
 3: 10YR2/1 黒シルト質 (木片多、細砂中、~0.5cm 礫少)  
 4: 砂礫層  
 溝3  
 5: 2.5Y3/1 黒褐シルト質 (~20cm 礫多、細砂中)  
 溝7  
 6: 10YR3/2 黒褐シルト質 (黄褐土粒中、~10cm 礫少、炭化物微)  
 7: 10YR2/2 黒褐シルト質 (黄灰土塊・木片少、~5cm 礫微)

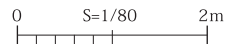


図36 A・B区IV検 遺構図

## 第4節 遺物

### 1 土器・陶磁器（表14、図37～49、写真図版8～13）

今回の調査で出土した土器・陶磁器は、総数コンテナ36箱にのぼる。これらの出土総重量は、205kgを測る。このうち、図示可能な469点の実測図を掲載した。各遺物の細かな観察については、表14で提示したので、本項目では各検出面および各町屋区画から出土した土器・陶磁器群の様相と、推定される年代観を記していく。

なお、本項で用いる陶磁器の製作年代判定と判断基準は、肥前産は大橋康二氏の編年Ⅰ期～Ⅴ期（Ⅱ期は1・2期に細分）、瀬戸・美濃系は藤沢良祐氏の本業焼の4段階Ⅰ1小期に分けた編年観を参照した。瀬戸・美濃本業焼編年は、本項では小期で表現している。

#### （1）A区第Ⅰ検出面の様相

第Ⅰ検出面では、4つの町屋区画（町屋1～4）と御使者宿と推定される区画を捉えた。このうち遺物が出土した町屋2～4及び御使者宿について、区画ごとに出土した土器・陶磁器群を概観する。

##### ア 町屋2出土土器・陶磁器群

この区画から出土した土器・陶磁器の実測個体数は、56点である。種別は、磁器・陶器・瓦質陶器・土器がみられる。これらの推定生産地は、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、在地である。肥前産は24点で、全体の42%を占める。すべて磁器で、碗・湯呑碗・皿がみられる。碗・湯呑碗は、内面見込み部中央に五弁花のコンニャク印判と口縁内面に四方禪文が施されている。皿は、ほとんどがハリ支えであるが、2のように蛇ノ目凹形高台で底裏に角福文のあるものが一部にみられる。52の高台脇には、連続した○×文がみられる。これらのことから肥前編年第Ⅳ期（18世紀中～後半）の様相が認められる。

瀬戸・美濃産は25点で、全体の44.6%にあたる。すべて陶器で、摺絵のある皿(23)、陶胎染付(45・46)、螺旋文碗(43・44)、鎧手碗(29)などがみられることから、登窯第8小期（18世紀中～後半）に該当するものとみられる。

このほか、京・信楽系とみられる碗(18)・壺類(19)と、在地産とみられる火鉢(4)、皿(27)などがある。以上の結果から、町屋2から出土した土器・陶磁器の推定年代観は、18世紀中～後半に比定される。

##### イ 町屋3出土土器・陶磁器群

この区画からは、20点を図化・提示した。種別は、陶器・磁器・土師器がみられる。産地は、肥前、瀬戸・美濃、京・信楽である。肥前産は10点提示したが、磁器と陶器の両方がみられる。磁器は17世紀後半頃とみられる皿(65)・碗(66)や、18世紀中頃とみられる湯呑碗(72)、御神酒徳利(73)がみられる。古い様相のものは、建物址1の基礎部分からの出土であるため、構築時期に係るものと考えられる。肥前産陶器は、17世紀末と考えられる現川焼（長崎）の碗(58・68)と京焼風肥前陶器碗(62)がみられる。70は陶器製の灯籠で、笠部上面には銅緑釉が施されている。京焼系の軟質陶器か。

以上のことから、町屋3出土陶磁器群は、17世紀後半～18世紀中頃に比定される。

##### ウ 町屋4出土土器・陶磁器群

出土量は少なく、図示できたのは8点にとどまった。肥前産は、77の染付碗のみで、肥前編年のⅣ期（18世紀中頃）の所産とみられる。瀬戸・美濃産は、碗(79)、搦鉢(75・82)、甕(78)が出土しており、瀬戸・美濃登窯編年の第8小期（18世紀後半）に比定される。これらのことから、町屋4出土土器・陶磁器群は、18世紀中～後半と推定される。

## エ 推定御使者宿出土土器・陶磁器群

18点図示した。産地は肥前・瀬戸・美濃・京・信楽がある。肥前産は7点で、すべて磁器である。碗は2点(87・88)あるが、87の内面見込み部には、手書きの五弁花文が記されている。皿は3点(89・91・96)あるが、すべてハリ支えで、89の見込み部にはコンニャク印判による五弁花がある。

瀬戸・美濃産は10点あるが、すべて陶器である。92は陶胎染付の鉢、93・100は鉄釉に白色の「うのふ釉」が一部に掛けられているものである。94は京焼の瓢形の瓶類で、鉄絵が描かれているものである。これらの様相から、本土器・陶磁器群は、18世紀前半～後半の特徴がみられる。

### (2) A区第Ⅱ検出面の様相

この面では、2つの町屋区画(町屋5・6)と御使者宿とみられる区画を捉えた。以下、区画ごとの様相を概観していく。

#### ア 町屋5出土土器・陶磁器群

21点を図示した。肥前産磁器・陶器、瀬戸・美濃産陶器、京、伊賀がみられる。肥前産磁器は4点で、このうち2点は青磁である。117は青磁碗、130は底部が蛇ノ目釉剥ぎされた青磁香炉である。116は、寿文の染付碗、126はハリ支えで、内面見込みにコンニャク印判の五弁花が記されているものである。121は銅緑釉が掛けられ、内面見込み部が蛇ノ目釉剥ぎされた肥前産陶器皿である。特徴から、内野山北窯の17世紀末～18世紀に生産された製品と考えられる。

瀬戸・美濃産陶器は、13点図化した。古い様相のものは、17世紀初頭に比定される133の銅緑釉が流し掛けされた黄瀬戸鉢、128の黒織部沓茶碗がある。しかし、それ以外は、鉄釉・灰釉掛け分け碗(119)、天目茶碗(128)、志野丸皿(134)など、17世紀中～18世紀初(第3小期～第6小期)に比定される。したがって、本陶磁器群の時期は、17世紀中頃～18世紀前半と推定される。

#### イ 町屋6出土土器・陶磁器群

28点を図化した。肥前産磁器と陶器、瀬戸・美濃産陶器、京・信楽産陶器、在地産土師器皿、内耳鍋が出土している。肥前産磁器では、型紙摺の小皿(158)、底裏に角福文のある小杯(159)、墨弾きのある皿(144)などから、肥前Ⅳ期(17世紀末～18世紀)に比定される。肥前産陶器は、現川窯産の打ち刷毛目碗が3点(139・145・147)出土している。いずれも17世紀末～18世紀前半のものである。

瀬戸・美濃産陶器は、12点提示した。137は内面見込み部を輪弁にしている陶胎染付皿、153は肩衝茶入、148は長石釉皿である。瀬戸・美濃産の様相は、編年の登窯3～6小期(17世紀中～18世紀初)に比定される。これらのことから、本陶磁器群は、17世紀中～18世紀前半の時期と考えられる。

#### ウ 推定御使者宿出土土器・陶磁器群

40点を図示した。肥前産磁器・陶器、瀬戸・美濃産陶器、土師器で構成される。肥前産磁器は、8点ある。175は、内面見込み部に陰刻文及びスタンプ文様が施され、口縁端部に錆釉(口錆)を塗っている青磁皿である。184の碗は、体部外面にコンニャク印判による文様が施されている。その他の肥前産磁器も含め、Ⅲ～Ⅳ期(17世紀中頃～18世紀中頃)の特徴がみられるもので構成される。

瀬戸・美濃産製品は18点ある。これらの時期は、17世紀中頃～18世紀中頃(登4～登7)の時期幅の中に入る。190は、外面に鉄釉摺絵のある香炉(18世紀初頭)である。191は、御深井型打ち成形の皿(17世紀中頃)である。171は、内面に銅緑釉が流し掛けされている黄瀬戸鉢である。

その他では、168は、精製された白土で作られた手づくね成形のかわらけである。在地産の褐色土系の胎土でロクロ成形されたものとは、明らかに異なる。京都系のかわらけを意識した儀礼用のものか。

194の水指は、粘土紐巻き上げ成形のちロクロ成形されたものである。非常に精良な胎土で、肩部に耳

部が付き、胴部中位と下方にへら状工具による沈線の文様が施されている。16世紀末～17世紀初頭の肥前産のものか。

本区画から出土した土器・陶磁器群の時期は、17世紀中頃～18世紀中頃と考えられる。

### (3) B区Ⅰ検出面の様相

#### ア 推定御使者宿出土土器・陶磁器群

総数47点を図化した。産地別にみると、瀬戸・美濃、肥前、京、丹波がみられる。磁器製品は、すべて肥前産で、肥前編年Ⅳ期（17世紀中頃～18世紀中頃）の特徴をもつものが多くみられる。231は、見込み部に型紙摺された文様のある皿である。222は色絵碗で、緑・赤色が上絵付されている。

瀬戸・美濃産は、登窯製品編年3～6期（17世紀中～18世紀中）と考えられる製品が見られる。213は、見込み部に陰刻により木の葉状の文様が施された灯明受け皿である。文様部分にも釉が入っているので、施釉される前に文様が付けられたものである。236は、鉄釉・灰釉掛け分け碗である。224は、花びら形に成形された湯冷ましである。把手が付けられ、体部側面の1か所に、大根の絵模様が型紙摺で付けられている。

特殊品として、227の焼塩壺がある。外面に「泉州麻生」の刻印が確認できる。松本城および城下町において焼塩壺が出土した地点は限定的で、二の丸御殿跡（59点）、城下町跡本町第1次調査（推定塩問屋跡：1点）と本調査地点（推定御使者宿跡：1点）の3か所のみである。

本土器・陶磁器群は、瀬戸・美濃産・肥前産陶磁器の編年観から、17世紀中頃～18世紀中頃の様相と考えられる。

### (4) B区Ⅱ検出面の様相

#### ア 推定御使者宿出土土器・陶磁器群

この区画からは26点出土した。肥前産は磁器だけでなく陶器もある。磁器は、6点図化した。256の碗は、外面に網目文が描かれ、破断面の一部には漆継痕が残る。269・270は肥前産の皿である。270には、墨弾き文が施されているものである。いずれも肥前編年Ⅲ期（17世紀中頃）に比定されるものである。陶器は、264は絵唐津皿と276の唐津刷毛目皿の2点で、いずれも17世紀の所産である。

瀬戸・美濃産は、登2～6の時期のものがみられる。古い時期のものは、255の鳴海織部、260の小天目、267の織部鉢がある。いずれも瀬戸・美濃登窯編年1～2（17世紀初）とみられるが、この3点だけが特に古い様相である。その他の資料は、登窯3（17世紀中頃）の時期と考えられる資料が多い。

これ以外の特殊品としては、275の中国漳州窯産と考えられる青花皿がある。

以上の様相から、本遺構出土陶磁器群の時期は、17世紀中頃～18世紀初と考えられる。

### (5) A・B区Ⅲa・b検出面の様相

A・B区に跨って広がる厚い複数の整地層であるⅢ層は、調査では大きくa・b2回の地業層を捉えたため、上層をa層、下層をb層として調査を実施した。出土した陶磁器類は、ほとんどがこの整地層中から出土しているが、a・b層の上面で検出された焼土面・炭範囲の遺構から出土しているものも若干ある。以下、Ⅲa層とⅢb層出土遺物群に分けて概観する。

#### ア A・B区Ⅲa層出土土器・陶磁器群

Ⅲa層では、73点を図化した。種別は、瀬戸・美濃産陶器、肥前産陶器、青花、在地産土師器（皿・火鉢）、内耳鍋で構成される。

瀬戸・美濃産陶器で確認される器形は、天目茶碗（白天目・小天目も含む）・小杯・徳利・志野皿・向付（織



部・鳴海織部)・織部鉢・志野鉢・黄瀬戸鉢・茶入で、日常雑器というよりは茶器・酒器などの特殊品が多い。天目茶碗は4点(279・280・289・290)ある。279は白天目茶碗(長石釉)で、鉄絵が描かれている。280は、口径6.9cmの小天目茶碗(鉄釉)である。酒器として、小杯4点(284～287)と徳利4点(317～320)がある。小杯は、灰釉のかかるもの1点(284)と、長石釉がかかるもの3点(285～287)がある。いずれも連房期のものである。

向付は12点出土している。織部向付、志野向付、志野織部向付、唐津向付がある。312は鳴海織部向付で、赤土と白土を繋いで成形している。342は志野織部の平向付である。底裏に半環足が貼り付けられ、内面列点状文様の内側に鉄絵が描かれているものである。304・305は、脚付の織部鉢である。内面に同心円状の文様が描かれている。皿は、丸皿・菊皿がある。丸皿は、長石釉が掛けられた志野皿(295～301・337・338)と灰釉が掛けられた灰釉皿(292～294)と、織部皿(291)がみられる。この他、志野菊皿(281)がある。

鉢では、織部鉢(302・304・305)、黄瀬戸鉢(312)がある。織部鉢は脚部が付き、内面に同心円状の文様が描かれているものである。黄瀬戸鉢は、内面に櫛描き文が入れられ、銅緑釉が流し掛けされているものである。

中国産の青花及び赤絵は6点出土した。282・321は罅状に外反する皿F群、上絵付のある皿(322・323・346)と大皿(324)がある。

土師器は、皿・内耳鍋・火鉢の器種がある。皿は11点(325～333・347・348)出土した。すべてのものに煤が付着しており、灯明皿として使用された痕跡が確認できる。このうち330は、松本城下でみられる一般的な土師器皿と異なり、内面は板状工具ナデ、外面はミガキ調整、腰部は削り調整される特異なものである。他地域からの搬入品である可能性が高い。

349の内耳鍋は、口縁内面に2条のヨコナデが観察でき、外面の煤から使用痕が確認できる。334は火鉢である。底部には推定で3か所に脚部が付き、口縁外面には罅状の凸帯が巡る。体部外面には、印刻が施されている。

Ⅲ a層から出土した土器・陶磁器群は、16世紀末～17世紀初頭の時期に比定される。

#### イ A・B区Ⅲ b層出土土器・陶磁器群

Ⅲ b層出土品で図示したのは69点である。種別は、瀬戸・美濃産陶器、肥前産陶器、中国産磁器、土師器(在地産ほか)で構成される。

瀬戸・美濃産陶器は、天目茶碗・灰釉丸皿・灰釉折縁皿・灰釉稜皿・灰釉小杯・志野小天目碗・志野丸皿・志野菊皿・志野水注・志野半筒茶碗・志野小杯・織部向付・黒織部沓茶碗・織部鉢・搦鉢・黄瀬戸鉢がみられる。Ⅲ a層出土土器・陶磁器群の様相と同様に、日常雑器というよりは茶器などの特殊品が多くみられる。古い様相のものは、内禿皿(368・369)、稜皿(367)、志野菊皿(356)、折縁皿(366・383)、志野半筒茶碗(370)などの一群で、大窯Ⅳ期のものである。下限は、黒織部沓茶碗(375・376)、織部鉢(387)、織部向付(386・408)、志野鉄絵皿(笹文)(381)、黄瀬戸鉢(352)などで、登窯第1段階第1～2小期の時期に比定されるものである。

肥前産陶器は、鉄絵のある唐津鉢(386)がある。時期は、17世紀初頭のものともみられる。

中国産磁器は、青花と赤絵がある。青花は、384・385・412の皿と、377・378の小杯がある。皿は口縁端部が罅状に外反するE群の皿である。小杯は、やや古い様相で16世紀第2四半期～中頃の時期と考えられる。赤絵は、413の合子とみられる破片がある。

土師器は、内耳鍋・皿・火消壺の蓋・焜炉または七輪がある。351の内耳鍋は、外面に煤が付着し、底部もかなり摩滅していることから、明らかな使用痕が認められる。特にⅢ b炭範囲1では、被熱面に内耳鍋

が正位で置かれたような状況で出土した。使用状況を示すような出土であるため興味深い。

土師器皿は、褐色系の胎土でロクロ調整されている一群と、精製された白土を用いて手づくね成形で作られているものがある。褐色系のロクロ皿は、ほとんどの個体の口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用された可能性が高い。白土のかわらけは2点(396・418)出土している。396は、被熱し内外面に煤が付着している。これらは、在地産の褐色系胎土の皿とは異なり、精製された白土が用いられ、調整もロクロ成形ではなく手づくね成形のものである。これまでの三の丸跡や城下町跡の調査では出土事例がないため、一般的ではない特殊品として位置付けられる。

Ⅲ b層から出土した土器・陶磁器群は、Ⅲ a層と同一の16世紀末～17世紀初頭と考えられる。Ⅲ a・Ⅲ bの両層出土土器・陶磁器群を比較しても器種構成や年代観などがほぼ同一で、日常雑器ではなく茶器・酒器・白かわらけなどに代表されるハレの席で用いられるような器種がみられる。

#### (6) A・B区第Ⅳ検出面の様相

37点図化提示した。これらは、新旧2つの時期の様相が確認できる。

古段階のものは、須恵器質播鉢(420)、古瀬戸折縁深皿(426・451・452)、折縁皿(437・450)、土師質播鉢(453)、中国産白磁碗(454)、中国産青磁壺類(455)がある。時期的には、14～15世紀とみられる。

新段階とみられるものは、志野皿(422・429・430・434・435)、志野筒茶碗(431)、黄瀬戸鉢(424)、黒織部沓茶碗(423)、天目茶碗(449)、中国青花(439～444)など美濃大窯Ⅳ期～登窯2期(16世紀末～17世紀初)が核となる土器・陶磁器群である。

#### (7) A・B区第Ⅴ検出面の様相

須恵器杯が2点(456・457)出土した。Ⅳ検で出土した須恵器(447)も含め、いずれも平安時代の9世紀前半代のものとみられる。456の底部には、「本意」と読める墨書が確認できる。

## 2 瓦(表15・16、図50)

今回の調査で出土した瓦は、破片点数が121点、重量では34.5kgに及ぶ。これらは小破片のものが大部分で、整地層からの出土である。このうち、図化可能な9点を提示した。内訳は、軒丸瓦6点、平瓦3点である。以下、種別ごとに記述する。

### (1) 軒丸瓦

瓦当面の文様が、連珠左巻三つ巴文のもの(1・2・4・5)と、連珠右巻三つ巴文(3)がある。このうち、Ⅲ a層から出土した4・5は、長く伸びる巴文や珠文の数などから、古い様相が観察できる。4・5ともに、瓦当面と丸瓦部の接合には、強いヨコナデが観察できる。ただし、5の瓦当部裏面の周縁部には、指ナデ痕が1周確認できる。1は、第1検出面から出土した左巻き三つ巴文の瓦当面であるが、大きさから棧瓦の瓦当面と考えられる。

### (2) 平瓦

3点図化した。7は、Ⅰ検から出土したもので、瓦当面に「勝」の刻印がある。9の平瓦の凹面には刻印が1か所確認できる。8は、軒平瓦の瓦当部で、文様は中心三つ葉文唐草文とみられる。瓦当裏面の平瓦接合部には、強いヨコナデが顕著に観察できる。

表 14 土器・陶磁器一覧表

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
1	A	町2	I	A I 土 39-1	土坑 39	磁器	湯呑碗		3.8		口縁内面四方禪文	白	染付	IV期 (18c 中)	肥前産
2	A	町2	I	A I 土 39-2	土坑 39	磁器	皿	8.8			蛇の目凹形高台、底裏角福文、外面高台脇 2 重圈線	白	染付	IV期 (18c 中)	肥前産
3	A	町2	I	A I 土 39-3	土坑 39	陶器	狛犬				型打ち成形、内面は指ナデ調整	白～淡灰褐	灰釉	不明	美濃
4	A	町2	I	A I 土 47-1	土坑 47	土器	火鉢	29.6	22	13.9	外面：体部手持ちヘラケズリのちミガキ調整、底部：脚部貼り付け（三足）、体部輪積成形	暗褐	—	不明	在地産か
5	A	町2	I	A I 土 60-1	土坑 60	陶器	灯明皿	9.8	4.8	1.9	体部下半～底部回転ヘラケズリ	淡灰	錆釉	18c 後半登 8 期	瀬戸・美濃
6	A	町2	I	A I 土 60-2	土坑 60	陶器	灯明受皿	10.2	4.8		体部下半～底部回転ヘラケズリ	淡灰	錆釉	18c 後半登 8 期	瀬戸・美濃
7	A	町2	I	A I 土 65-1	土坑 65	磁器	湯呑碗	7	3.4	5.4	外面：七宝繋ぎ文・腰部松葉文、内面：口縁部に四方禪文、見込み部：五弁花のコンニャク印判	白	染付	IV期 (18c 中)	肥前
8	A	町2	I	A I 土 65-2	土坑 65	磁器	湯呑碗	6.6	3.6	5.4	外面：七宝繋ぎ文・腰部松葉文、内面：口縁部に四方禪文、見込み部：五弁花のコンニャク印判	白	染付	IV期 (18c 中)	肥前
9	A	町2	I	A I 土 65-3	土坑 65	磁器	小瓶	1.8	5	15.7	外面：山水文・草花文、高台端部露胎、砂目	白	染付	18c 後半	肥前
10	A	町2	I	A I 土 67-1	土坑 67	磁器	皿		9.2			淡褐	染付	不明	不明
11	A	町2	I	A I 土 68-1	土坑 68	陶器	植木鉢	30.8	21.4	23.5	底部見込み部に穿孔、底部側面透かしあり（単位不明）	淡灰	灰釉	18c 後～19c 初登 8～9 期	瀬戸・美濃
12	A	町2	I	A I 土 68-2	土坑 68	磁器	皿	22.4	14	3.4	内面草花文、高台脇外面圈線、被熱資料	白	染付	18c 中	肥前
13	A	町2	I	A I 土 68-3	土坑 68	磁器	皿	22.4	14	3.4	内面草花文、高台脇外面圈線、被熱資料	白	染付	18c 中	肥前
14	A	町2	I	A I 土 69-1	土坑 69	磁器	皿	17.6	10.4	2.4	外面：唐草文、内面：草花文	白	染付	18c 中	肥前
15	A	町2	I	A I 土 72-1	土坑 72	陶器	播鉢	35	-	-	内面播目に使用痕あり	橙褐	—	18c	産地不明
16	A	町2	I	A I 土 72-2	土坑 72	陶器	唾壺または杯洗	5	5.1	6.5	錆釉下塗りで上半部に銅緑釉、内面は全面銅緑釉	淡褐	錆・銅緑	18c 後半登 8 期	瀬戸・美濃
17	A	町2	I	A I 土 72-3	土坑 72	磁器	角皿	—	7.1	—	型打ち成形、角福文、内面に四方禪文、破断面に漆継痕あり	白	染付	18c 中	肥前
18	A	町2	I	A I 土 73-1	土坑 73	陶器	碗	10.8	4.3	6.7	体部中位に鉄絵	灰	灰釉・鉄絵	18c 後半	京・信楽
19	A	町2	I	A I 土 73-2	土坑 73	陶器	壺	6.2	3.6	6	内面は口縁一部が施釉ほとんど露胎、外面に鉄絵、底部墨書	白	灰釉	18c 後半	京焼
20	A	町2	I	A I 土 73-3	土坑 73	陶器	灯明受皿	10.3	4.4	1.8	受け部に穿孔 1 か所、受け部端部に使用痕あり	淡褐	灰釉	18 c 後半	瀬戸・美濃
21	A	町2	I	A I 土 73-4	土坑 73	磁器	皿	9.8	5.7	1.5	内面：山水文、外面：唐草文、高台脇に 3 重の圈線	白	染付	18c 後半	肥前
22	A	町2	I	A I 土 73・75-1	土坑 73・75	陶器	灯明皿	8.8	4.8	2.1	口縁部に煤付着（灯明皿としての使用痕）	淡褐	灰釉	18c 後	瀬戸・美濃
23	A	町2	I	A I 土 73・75-2	土坑 73・75	陶器	皿		6.7		内面見込み部に刷絵、見込み部に目跡 3 か所	淡灰	灰釉	18c 後登 8 期	瀬戸・美濃
24	A	町2	I	A I 土 73・75-3	土坑 73・75	瓦質陶器	播鉢	30.6			外面：手持ちヘラケズリのちナデのち指頭圧痕	灰	—	不明	不明
25	A	町2	I	A I 土 75-1	土坑 75	陶器	碗		4.2		内外灰釉、高台畳付のみ露胎	灰	灰釉	18c 後登 8 期	瀬戸・美濃
26	A	町2	I	A I 土 75-2	土坑 75	陶器	鉢	27			外面回転ヘラケズリ痕	淡褐	銅緑釉	18c 後登 8 期	瀬戸・美濃
27	A	町2	I	A I 土 75-3	土坑 75	土器	皿	9.7	5	3.3	内外面煤付着	褐	—	不明	在地
28	A	町2	I	A I 土 76-1	土坑 76	磁器	蓋	10.4	4.2	2.6	外面：飛雲文・龍文	白	染付	18c 後半	肥前
29	A	町2	I	A I 土 81-1	土坑 81	陶器	碗	8.5	4.2	6.3	鏝手	淡灰	鉄釉	18c 後半	瀬戸・美濃
30	A	町2	I	A I 土 81-2	土坑 81	陶器	碗	11.6			灰釉丸碗	淡灰	灰釉	18c 後半	瀬戸・美濃
31	A	町2	I	A I 建 2-1	建物 2	陶器	播鉢		12.8		外面：回転ヘラケズリ	褐灰	錆釉	不明	瀬戸・美濃
32	A	町2	I	A I 建 2-2	建物 2	磁器	合子	2.4	3	1	型打ち成形か	白	白磁	不明	肥前
33	A	町2	I	A I シキ 1-2	敷地境 1 (T 4)	陶器	陶胎染付		(7.5)		高台端部釉剥ぎ、欠損部に漆継ぎの跡	淡黄褐	灰釉	不明	瀬戸
34	A	町2	I	A I シキ 2-1	敷地境 2	陶器	鉢		8.8		外面～底部：回転ヘラケズリ調整、内面に目跡あり	灰白	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
35	A	町2	I	A I シキ 2-2	敷地境 2	陶器	香炉（三足）	11.3	8.0	6.4	歪み著しい、脚部端部に鉄釉付着（鉄釉製品に重ね焼きか）	灰白	鉄釉	18c 後	瀬戸・美濃
36	A	町2	I	A I シキ 2-3	敷地境 2	陶器	播鉢		11.0		外面回転ヘラケズリ調整	白	錆釉	18c 後	瀬戸・美濃
37	A	町2	I	A I シキ 2-4	敷地境 2	磁器	碗	11.9			外面：体部下半回転ヘラケズリ、一部墨弾きか	白	染付	III～IV期 (18c 前)	肥前
38	A	町2	I	A I シキ 2-5	敷地境 2	磁器	皿	14.2	8	4.4	口縁：輪花成形（型打ちか）、内面見込み部：五弁花に唐草文、外面：唐草文、底部：底裏渦福文、ハリ支え	白	染付	IV期 (18c 前)	肥前
39	A	町2	I	A I シキ 2-6	敷地境 2	磁器	皿		4.2		内面見込み部に蛇の目釉剥ぎ、高台砂目	白	白磁	IV期 (18c 中～後)	肥前
40	A	町2	I	A I シキ 2-7	敷地境 2	磁器	皿		4.4		内面見込み部に蛇の目釉剥ぎ、高台砂目	灰白	白磁	IV期 (18c 中～後)	肥前
41	A	町2	I	A I シキ 2-8	敷地境 2	陶器	播鉢		11		内面播目、外面～底部回転ヘラケズリ	白	錆釉	18c 後登 8 期か	瀬戸・美濃
42	A	町2	I	A I 検 -1	検出面	陶器	碗	12.4	4.4	6.8	高台端部のみ露胎	淡褐	灰釉	18c 後登 8 期	肥前
43	A	町2	I	A I 検 -2	検出面	陶器	螺旋文碗	12.2			体部外面強い沈線 4 条	淡灰	鉄釉	18c 後登 8 期	瀬戸・美濃
44	A	町2	I	A I 検 -3	検出面	陶器	螺旋文碗	9.4			体部外面強い沈線 6 条、鉄釉の上に灰釉 2 度掛け	灰白	鉄釉	18c 後登 8 期	瀬戸・美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地	
								口径	底径	器高						
45	A	町2	I	A I 検-4	検出面	陶器	碗		5.4		陶胎染付、外面腰部に染付圏線、高台端部のみ露胎	淡灰	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃	
46	A	町2	I	A I 検-5	検出面	陶器	皿か		8.8		陶胎染付、内面見込み部に染付、高台端部のみ露胎	白	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃	
47	A	町2	I	A I 検-6	検出面	陶器	乗燭	(5.4)	2.6	(2.5)	灯芯立て欠損、底部回転糸切痕	淡黄灰	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃	
48	A	町2	I	A I 検-7	検出面	陶器	掃鉢		21.2		内面掃目、外面回転ヘラケズリ痕	淡灰	錆釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃	
49	A	町2	I	A I 検-8	検出面	陶器	掃鉢		27.4		内面掃目、外面回転ヘラケズリ痕	淡灰	錆釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃	
50	A	町2	I	A I 検-9	検出面	青磁	皿		6.2		内面見込みに陰刻文あり、高台端部露胎砂目	灰白	青磁	17c 末～18c 前	肥前	
51	A	町2	I	A I 検-10	検出面	磁器	碗		9.8	4.0	5.1	外面染付	淡灰	染付	17c 末～18c 前	肥前
52	A	町2	I	A I 検-11	検出面	磁器	鉢		7.0			内面見込部染付山水、型打成形八角形か、高台脇○×連続文	白	染付	18c 中～後	肥前
53	A	町2	I	A I 検-12	検出面	磁器	皿		13.2	8.4	3.8	内面唐草文、見込み部コンニャク印判五弁花、底裏渦福文、高台外面2重圏線、ハリ支え	白	染付	IV期(18c 中)	肥前
54	A	町2	I	A I 検-13	検出面	磁器	皿		7.4			底裏高台内1重圏線、高台外面2重圏線、ハリ支え	淡灰	染付	IV期(18c 中)	肥前
55	A	町2	I	A I 検-14	検出面	磁器	皿		10.1	6.0	2.0	内面：氷裂文・花文、外面：唐草文、漆継痕あり	白	染付	IV期(18c 後)	肥前
56	A	町2	I	A I 検-15	検出面	磁器	皿		9.8	5.8	1.5	内面見込：五弁花、外面：唐草文	白	染付	IV期(18c 後)	肥前
57	A	町3	I	A I 土 28・29-1	土坑 28・29	陶器	碗	(11.6)	(4.5)	6.6		高台端部のみ露胎	灰白	灰釉	18c 中	瀬戸・美濃
58	A	町3	I	A I 土 28・29-2	土坑 28.29	陶器か	碗		4.2			鉄釉のち打ち刷毛目、高台端部砂目	暗灰	鉄釉	17c 末～18c 前	肥前(現川)
59	A	町3	I	A I 土 31-1	土坑 31	陶器	皿		(8.7)			絵志野(見込み部に鉄絵あり)、被熱	白	長石	16c 末～17c 初	美濃
60	A	町3	I	A I 土 32-1	土坑 32	陶器	碗	(11.5)				半球形、外面回転ヘラケズリ	白	灰釉	18c 中登7期	瀬戸・美濃
61	A	町3	I	A I 土 32-2	土坑 32	陶器	鉢		(8.4)			腰部～底部露胎、内面見込みに目跡	淡黄白	錆釉	18c 中～後登7～8期	瀬戸・美濃
62	A	町3	I	A I 土 43-1	土坑 43	陶器	碗か皿		(5.0)			京焼風肥前陶器、高台脇～底部露胎、内面見込みに鉄絵、底部中央に円刻・窯印刻印あり、胎土緻密	黄白	灰釉	17c 後	肥前
63	A	町3	I	A I 土 43-2	土坑 43	磁器	皿	(13.4)	(8.1)	3.4		体部内面墨筆きの染付、見込み部中央コンニャク印判五弁花、	灰	染付	17c 後	肥前(波佐見)
64	A	町3	I	A I 土 44-1	土坑 44	陶器	茶入		3.1			底部回転糸切痕、腰部～底部に漆付着(意図的に塗布か)	暗灰	鉄釉	不明	瀬戸・美濃か
65	A	町3	I	A I 建 1-1	建物 1	磁器	皿	(9.0)				内面見込みに染付	白	染付	17c 後	肥前
66	A	町3	I	A I 建 1-2	建物 1	磁器	小碗か小杯		(2.0)			内面見込みに染付	白	染付	17c 後	肥前
67	A	町3	I	A I 建 1-3	建物 1	磁器	碗					内面見込みに蛇の目軸剥ぎ、高台砂目	白	白磁	17c 前(II-1期)	肥前
68	A	町3	I	A I 建 1-4	建物 1	陶器	碗		(5.2)			外面：白泥による文様、内面：打ち刷毛目	褐色	鉄釉	17c 末～18c 前	肥前(現川)
69	A	町3	I	A I 建 1-5	建物 1	土師器	火消壺	(27.0)				外面：横または斜め方向のミガキ、内面：ロクロナデ	褐色	—	不明	在地か
70	A	町3	I	A I 建 1-6	建物 1	陶器	灯籠	幅 10.7	幅 10.8	6.1		型打ち成形、内面指頭圧痕・指ナデ調整、隅部内面に笠部と火袋を接合するブリッジ状あり(欠損)。頂部の宝珠は、請花部に穴を開け、差し込んでいる。内面一部に墨書あり	黄褐色	銅緑釉	不明	京焼か
71	A	町3	I	A I 検-1	検出面	陶器	皿		3.1	1.4		口縁端部煤付着(灯明皿)	白	錆釉	不明	瀬戸・美濃
72	A	町3	I	A I 検-2	検出面	磁器	湯呑碗	(7.5)				外面：松竹梅文、内面：口縁部に四方禪文	白	染付	IV期(18c 中)	肥前
73	A	町3	I	A I 検-3	検出面	磁器	御神酒徳利		(4.8)			体部外面に花文、底部～高台まで露胎	白	染付	IV期(18c 中)	肥前
74	A	町3	I	A I 検-4	検出面	磁器	碗		5.2			京焼風肥前陶器、底部中央に刻印あり、内面見込みに鉄絵あり	黄灰	灰釉	17c 中	肥前
75	A	町4	I	A I 土 22-1	土坑 22	陶器か	掃鉢	(31.9)				外面回転ヘラケズリ	褐	錆釉	18c 後登8期か	瀬戸・美濃
76	A	町4	I	A I 土 22-2	土坑 22	陶器	掃鉢	(30.9)				口縁外面沈線2条	暗灰	鉄釉	不明	不明
77	A	町4	I	A I 土 22-3	土坑 22	磁器	碗		(3.8)			内見込部に五弁花コンニャク印判	白	染付	IV期(18c 中)	肥前
78	A	町4	I	A I 溝 2-1	溝状遺構 2	陶器	甕	(21.5)				外面口縁部付近に漆付着	灰	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃
79	A	町4	I	A I 溝 2-2	溝状遺構 2	陶器	碗		(4.6)			高台置付露胎	灰	鉄釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃
80	A	町4	I	A I 検-1	検出面	陶器	灯明皿	(10.8)	(4.9)	2.5		口縁端部に煤付着	暗灰	錆釉	18c 後登8期	肥前
81	A	町4	I	A I 検-2	検出面	磁器	湯呑碗	(8.6)				体部外面に松?梅?文様	淡灰	染付	不明	京焼か?
82	A	町4	I	A I 検-3	検出面	陶器	掃鉢	(36.8)				内面の掃目使用により摩滅	淡灰	錆釉	18c 後登8期か	瀬戸・美濃
83	A	宿	I	A I 土 12-1	土坑 12	陶器	拳骨茶碗	(10.8)	5.2	6.7		内面見込みに目跡1か所、底部削り出し高台	白	鉄釉・うのふ	18c 後登8期	瀬戸・美濃
84	A	宿	I	A I 土 12-2	土坑 12	陶器	拳骨茶碗	(11.6)	4.9	7.1		底部削り出し高台	白	鉄釉・うのふ	18c 後登8期	瀬戸・美濃
85	A	宿	I	A I 土 12-3	土坑 12	陶器	皿	(10.3)	(4.2)	2.1		底部回転糸切痕	黄白	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃
86	A	宿	I	A I 土 12-4	土坑 12	陶器	碗		2.25			陶胎染付	白	灰釉	18c 後登8期	瀬戸・美濃



No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
87	A	宿	I	A I 土 12-5	土坑 12	磁器	碗	(8.55)	3.1	5.6	内面見込みに五弁花(手描き)	白	染付	IV期(18c中)	肥前
88	A	宿	I	A I 土 12-6	土坑 12	磁器	碗		(3.2)		漆継ぎ	白	染付	不明	肥前
89	A	宿	I	A I 土 12-7	土坑 12	磁器	皿				高台端部に砂目、内面見込みに五弁花(コンニャク印判)、ハリ支え	白	染付	18c中(IV期)	肥前
90	A	宿	I	A I 土 20-1	土坑 20	陶器	碗			3.9	底面に墨書あり	白	鉄釉	18c後登8期	瀬戸・美濃
91	A	宿	I	A I シキ 1-1	敷地境 1	磁器	皿		(7.4)		内面見込みに五弁花、唐草文、底裏「大明□□年製」	白	染付	IV期(18c中)	肥前
92	A	宿	I	A I シキ 1-2	敷地境 1	陶器	鉢		(7.5)		陶胎染付、高台端部釉剥ぎ取り	淡黄褐	染付	19c初登9期	瀬戸・美濃
93	A	宿	I	A I 検-1	検出面	陶器	碗	(11.9)	(4.5)	7.7	うのふ上面に鉄釉が垂れている場所多数あり	淡灰	鉄釉	18c後登8期	瀬戸・美濃
94	A	宿	I	A I 検-2	検出面	陶器	瓢型瓶				京焼向付、鉄絵のち灰釉	黄白	灰釉	17c後	京焼
95	A	宿	I	A I 検-3	検出面	磁器	碗		(4.0)			白	染付	IV期(18c中)	肥前
96	A	宿	I	A I 検-4	検出面	磁器	皿	(13.3)	(7.6)		底裏ハリ支え	白	染付	IV期(18c中)	肥前
97	A	宿	I	A I 検-5	検出面	陶器	仏華瓶		8.5		底部見込みに布目あり	白	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
98	A	宿	I	A I 検-6	検出面	陶器	練鉢		(12.3)			白	灰釉	18c末登8期	瀬戸・美濃
99	A	宿	I	A I 検南-1	検出面	陶器	御神酒徳利			2.7	底面二か所に付着物あり	白	灰釉・鉄釉	V期18c末～19c	肥前
100	A	宿	I	A I 検南-2	検出面	陶器	切立碗	(11.75)	8.05	10.4	内面見込みに3か所目跡あり、外面はうのふ	黄白	鉄釉・うのふ	18c末登8期	瀬戸・美濃
101	A	検	I	A I 検北-1	検出面	陶器	碗		3.1		灰釉のち上絵	淡灰	灰釉	18c	京・信楽
102	A	検	I	A I 検(南東・北)-1	検出面	陶器	皿		(10.7)		外面鉄釉、高台一部割高台、	淡灰	灰釉	17c中～後	肥前
103	A	検	I	A I 検(南東・北)-2	検出面	磁器	碗		(3.5)		内面1本圏線	白	染付	18c	肥前
104	A	検	I	A I T-1	検出面	磁器	碗		4.7		外面高台付け根に圏線1本、高台端部に砂目	白	染付	18c	肥前
105	A	検	I	A I T-2	検出面	青花	碗	(19.1)			内面口縁近くに圏線1本、外面龍文	灰	染付	17c初	澁洲
106	A	検	I	検 A I 検-1	検出面	陶器	碗	11.1	4.4	6.9	底部は赤土、体部～口縁部は淡灰色の胎土、外面に鉄絵	淡黄灰	鉄絵	17cか	肥前か
107	A	検	I	検 A I 検-2	検出面	陶器	腰折碗	(9.6)	3.9	5.05	上絵	白	上絵	18c前	瀬戸・美濃
108	A	検	I	検 A I 検-3	検出面	陶器	蓋				内面に、一九[ ]の墨書あり	白	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
109	A	検	I	検 A I 検-4	検出面	陶器	瓶類		(5.0)			白	灰釉	不明	瀬戸・美濃
110	A	検	I	検 A I 検-5	検出面	陶器	壺		(7.6)		被熱痕あり、外面～底面に煤付着	淡灰	灰釉・長石釉?	18c以降	瀬戸・美濃
111	A	検	I	検 A I 検-6	検出面	陶器	壺		(9.6)		腰部回転ヘラケズリ	白	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
112	A	検	I	検 A I 検-7	検出面	磁器	皿		4.7		蛇ノ目凹形高台	白	染付	18c後半	肥前
113	A	検	I	検 A I 検-8	検出面	磁器	皿	(13.7)	(8.9)	3.7	底部見込み釉剥ぎ、蛇ノ目凹形高台	淡灰	染付	V期18c末～19c	肥前
114	A	検	I	検 A I 検-9	検出面	染付	皿	(11.3)	(7.2)	3.7	外面唐草文、内面草花文	淡灰	染付	18c中	肥前
115	A	検	I	検 A I 検-10	検出面	染付	碗				内面見込み手描きの五弁花・付着物あり、外面に鉄漿水	白	染付	V期18c末～19c	肥前
116	A	町5	II	A II 土 93-1	土坑 93	磁器	碗	(9.2)			寿文	白	染付	17c	肥前
117	A	町5	II	A II 土 99-1	土坑 99	青磁	碗	(12.2)	(5.0)	(7.2)	被熱痕あり	白	青磁	17c	肥前
118	A	町5	II	A II 土 126-1	土坑 126	陶器	碗		(5.6)			淡灰	錆釉	不明	瀬戸・美濃
119	A	町5	II	A II 土 127-1	土坑 127	陶器	碗	(9.8)	(6.6)	8.3	高台端部釉剥ぎ、鉄・灰釉掛分け	灰	鉄絵	17c後	瀬戸・美濃
120	A	町5	II	A II 土 131-1	土坑 131	陶器	香炉		6.1		口縁部と脚付近の欠損意図的、三脚	暗灰	灰釉	17c後	瀬戸・美濃
121	A	町5	II	A II 土 133-1	土坑 133	陶器	皿		(4.4)	3.7	内野山北窯製品、内面見込み蛇ノ目釉剥ぎ高台周辺煤多量に付着	淡褐	灰釉・銅緑釉	17c後III期	肥前(嬉野)
122	A	町5	II	A II 土 133-2	土坑 133	陶器	湯呑碗	7.15	2.6	4.1	外面：色絵松の絵	白	長石釉	17c	京焼
123	A	町5	II	A II 土 133-3	土坑 133	陶器	練鉢	22.7				淡褐	透明釉	18c末登8期	瀬戸・美濃
124	A	町5	II	A II 土 133-4	土坑 133	陶器	花入				耳部2か所	暗灰	錆釉・灰釉	不明	伊賀か
125	A	町5	II	A II 土 141-1	土坑 141	陶器	碗(皿に加工)	(7.0)	4.3		碗の底部を皿に転用、端部を平坦に研磨した後に端部を細かく叩いている。	淡褐	長石釉	不明	瀬戸・美濃
126	A	町5	II	A II 土 141-3	土坑 141	磁器	皿		(7.7)		内面見込み中央にコンニャク印判五弁花、高台端部砂目、圏線外面3重、ハリ支え	暗灰	染付	III～IV期17c後～18c初	肥前
127	A	町5	II	A II 土 82・土 141-1	土坑 82・141	磁器	皿				蛇ノ目釉剥ぎ	暗灰	灰釉	18c	瀬戸・美濃
128	A	町5	II	A II 水 6-1	水道遺構 6	陶器	碗(黒織部)				外面ヘラ状工具による面取り、漆継ぎ痕あり	灰	鉄釉	17c前	美濃
129	A	町5	II	A II 水 6-2	水道遺構 6	陶器	天目茶碗				腰部露胎	淡黄灰	鉄釉	17c	美濃
130	A	町5	II	A II 水 6-3	水道遺構 6	磁器	香炉		(6.9)		三足貼付、底部蛇ノ目釉剥ぎ	灰	青磁釉	17c	肥前(波佐見)
131	A	町5	II	溝状遺構 3-4-1	溝状遺構 3-4	陶器	香炉	(12.2)	(8.6)	7.2	三足貼付	淡黄灰	灰釉	17c後半	瀬戸・美濃
132	A	町5	II	A II 水道遺構 8-1	溝状遺構 5	陶器	皿				2重圏線に笹文	淡褐色	長石	17c前	瀬戸・美濃
133	A	町5	II	A II 水道遺構 8-2	溝状遺構 5	陶器	鉢				黄瀬戸釉に銅緑釉の流し掛け	淡黄灰	灰・銅緑	17c	瀬戸・美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地	
								口径	底径	器高						
134	A	町5	II	A II 検-1	検出面	陶器	皿	(11.1)	(6.0)	(2.6)	口縁部付近煤付着、二次被熱あり、内面見込み目跡あり、外面目跡あり、高台端部釉剥ぎ	淡灰	長石釉	17c 後登3~4期	瀬戸・美濃	
135	A	町5	II	A II 検-2	検出面	陶器	搦鉢			(9.6)	内外面鉄釉刷毛塗り	淡黄灰	鉄釉	不明	瀬戸・美濃	
136	A	町6	II	A II 土55-1	土坑55	陶器	搦鉢			(10.1)	内面摺目、使用により摩滅	淡黄灰	錆釉	不明	瀬戸・美濃	
137	A	町6	II	A II 土56-1	土坑56	陶器	輪弁皿	(17.2)		8.7	3.4	底部見込みに墨書あり、内面輪弁、陶胎染付	淡褐	灰釉	18c 中登7	瀬戸・美濃
138	A	町6	II	A II 土56-2	土坑56	陶器	内弁皿	(10.2)		(5.8)	2.3	底部見込み釉剥ぎ	褐灰	灰釉	16c 末大窯IV	瀬戸・美濃
139	A	町6	II	A II 土56-3	土坑56	陶器	碗			(4.9)		高台端部砂目、鉄釉のち白泥による打ち刷毛目	暗褐	鉄釉	17c 末	現川
140	A	町6	II	A II 土56-4	土坑56	陶器	香炉	10.6		5.1	6.7	底裏に窯印の刻印・墨書あり、鉄絵	黄灰	灰釉・鉄絵	17c 後	京焼
141	A	町6	II	A II 土56-5	土坑56	磁器	小杯	4.4		1.7	1.5	内面見込み部に松葉文	白	鉄絵	不明	肥前
142	A	町6	II	A II 土56-6	土坑56	磁器	茶碗	(12.2)		(4.6)	5.9	口縁部2重圏線、高台~腰部3重圏線	白	染付	不明	肥前
143	A	町6	II	A II 土56-7	土坑56	磁器	皿	(9.8)				内面に蛇の目軸剥ぎ	淡灰	白磁	17c 中	肥前
144	A	町6	II	A II 土56-8	土坑56	磁器	皿	(12.4)		(7.6)	3.15	内面口縁部墨弾きあり、外面胴部3重圏線、高台外部1重圏線、底部見込み4本	灰	染付	17c 後	肥前
145	A	町6	II	A II 土56-9	土坑56	陶器	茶碗	10.9		4.0	5.15	高台釉剥ぎ砂目、鉄釉の白泥による打ち刷毛目	暗灰	鉄釉	17c 末~18c 初	肥前
146	A	町6	II	A II 土56-10	土坑56	磁器	小杯	(3.8)		(1.4)	1.5	雑なつくり	白	染付	不明	肥前
147	A	町6	II	A II 土56-11	土坑56	陶器	碗			(4.2)		内外面に打ち刷毛目、高台端部砂目	暗灰	鉄・白泥	17c 末	現川
148	A	町6	II	A II 土136-1	土坑136	陶器	皿	(10.6)		(6.5)	2.1	内面見込みに目跡あり	淡黄灰	長石釉	17c 中	美濃
149	A	町6	II	A II 土136-2	土坑136	陶器	皿か			6.8		内面見込みに目跡あり	灰	灰釉	17c 後	瀬戸
150	A	町6	II	A II 土136-3	土坑136	陶器	天目茶碗	(10.0)		(4.4)	6.0	底部欠損	淡褐	鉄釉	17c 前登2期	瀬戸・美濃
151	A	町6	II	A II 土136-4	土坑136	土師器	皿	10.5		6.0	2.5	回転糸切りのちなデ	暗褐	—	不明	在地
152	A	町6	II	A II 土136-5	土坑136	土師器	皿	(9.4)		5.8	3.7	回転糸切りのちなデ	暗褐	—	不明	在地
153	A	町6	II	A II 土136-6	土坑136	陶器	茶入	3.0				別種の鉄釉の掛分けか？肩衝茶入れ	白	鉄釉	不明	美濃
154	A	町6	II	A II 土136-7	土坑136	陶器	搦鉢	30.0					淡黄白	錆釉	17c 前~中登2~3期	瀬戸・美濃
155	A	町6	II	A II 土136-8	土坑136	陶器	搦鉢	38.2	12.5	13.6			灰白	錆釉	17c 前登2期	瀬戸・美濃
156	A	町6	II	A II 石列-1	石列1	陶器	碗(皿に加工)			(4.2)		天目碗の転用品、碗の破断面を研磨・打ち欠いている。高台に煤付着(タールか?)	淡褐	鉄釉	不明	瀬戸
157	A	町6	II	A II 石列-2	石列1	陶器	碗			(4.6)		内面見込みに目跡あり	灰	長石釉	不明	瀬戸
158	A	町6	II	A II 石列-3	石列1	磁器	皿	7.6		4.2		内面見込みに型紙摺(御使用者宿に類似するものあり)	白	染付	不明	肥前
159	A	町6	II	A II 石列-4	石列1	磁器	小杯			2.7		内面見込みに草花文・1重圏線、高台端部釉剥ぎ・外面2重圏線、底部中央カク福	白	染付	17c 末~18c 初	肥前
160	A	町6	II	A II 検-1	検出面	陶器	天目茶碗	(12.2)		(5.6)	5.6		淡黄灰	鉄釉	大窯IV 16c 末	瀬戸・美濃
161	A	町6	II	A II 検-2	検出面	磁器	皿			(6.6)		高台端部砂目	白	染付	18c 中頃	肥前
162	A	町6	II	A II 検-3	検出面	土師器	内耳鍋	28.3				外面穿孔部の上部擦れた痕跡、何かで吊り下げた痕跡か？内面にも使用痕	暗褐	—	不明	在地産か
163	A	町6	II	A II 排-1	排土	磁器	茶碗	(12.4)					白	染付	不明	肥前
164	A	宿	II	A II 土3-1	土坑3	陶器	灯明皿	8.1		4.8	1.35	口縁と内面に煤付着、口縁の欠損部分を灯明芯の固定に利用したか。	灰	長石釉	17c 後登4	瀬戸・美濃
165	A	宿	II	A II P13-1	P13	土器	皿	10.0		6.4	2.5	口縁端部煤付着	暗褐	—	不明	在地産
166	A	宿	II	A II 水1・2-1	水道遺構1・2	陶器	天目茶碗	11.4		3.05	5.35		白	鉄釉	16c 末~17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
167	A	宿	II	A II 水1・2-2	水道遺構1・2	陶器	螺旋文碗	(11.9)		(5.1)	7.5	内外面鉄釉のち灰釉の二度掛け	黒	鉄釉・灰釉	18c 中登8	瀬戸
168	A	宿	II	A II 水1・2-3	水道遺構1・2	土器	皿(かわらけ)	(5.8)		(3.3)		手づくね成形、内外に指頭瓦痕、在地産ではないもの	褐	—	不明	不明
169	A	宿	II	A II 溝3-1	溝状遺構3	陶器	碗	(10.6)					淡黄白	灰釉	17c 後登4	瀬戸・美濃
170	A	宿	II	A II 溝3-2	溝状遺構3	陶器	碗			4.9			淡黄白	灰釉	17c 後登4	瀬戸・美濃
171	A	宿	II	A II 溝3-3	溝状遺構3	陶器	折縁皿	(20.1)				破断面に漆継ぎあり、黄瀬戸釉に銅緑釉の流し掛け	白	黄瀬戸釉	17c 前登2	瀬戸・美濃
172	A	宿	II	A II 溝3-4	溝状遺構3	陶器	壺			(10.9)		底部に墨書あり、高台~底部露胎	灰	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
173	A	宿	II	A II 溝3-5	溝状遺構3	陶器	搦鉢			(9.6)		内面摺目、底部回転糸切のちケズリ	白	錆釉	不明	瀬戸・美濃
174	A	宿	II	A II 溝3-6	溝状遺構3	磁器	杯か			2.05		内面に付着物あり、底部放射状のケズリ	白	白磁釉	不明	肥前
175	A	宿	II	A II 溝3-7	溝状遺構3	青磁	皿	(15.1)		(8.4)	3.35	高台端部砂目、口縁に錆釉	白	青磁釉	17c 中	肥前
176	A	宿	II	A II 溝3-8	溝状遺構3	土器	灯明皿	(10.5)		(6.6)		口縁端部に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
177	A	宿	II	A II 溝3-9	溝状遺構3	瓦質陶器	火鉢か	(23.4)				内面一部にミガキ痕、内外ナデ調整、体部下端に5条の沈線	灰白	—	不明	不明
178	A	宿	II	A II 溝3・4-1	溝状遺構3・4	陶器	碗			5.35		高台端部は施釉後ふき取り	白	灰釉	17c 前登2	瀬戸・美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
179	A	宿	II	A II溝 3・4-2	溝状遺構 3・4	陶器	碗		4.15			灰白	灰釉	17c 前登 2	瀬戸・美濃
180	A	宿	II	A II溝 3・4-3	溝状遺構 3・4	陶器	皿か				内面見込みに墨書「什」内外面にわずかに長石釉付着	灰	不明	17c 中	不明
181	A	宿	II	A II溝 3・4-4	溝状遺構 3・4	陶器	不明		(10.7)			淡褐	錆釉・灰釉	17c 後登 4	瀬戸・美濃
182	A	宿	II	A II溝 3・4-5	溝状遺構 3・4	陶器	香炉		(8.3)		底面に煤付着、脚部 3 単位、内面体部～見込み部露胎	灰	鉄釉	17c 後登 4	瀬戸・美濃
183	A	宿	II	A II溝 3・4-6	溝状遺構 3・4	陶器	乗燭		4.7			白	鉄釉	18c 前 IV 期	肥前
184	A	宿	II	A II溝 3・4-7	溝状遺構 3・4	磁器	碗	9.7	3.8	5.6	体部外面にコンニャク印判文様	白	染付	17c 末 IV 期	肥前
185	A	宿	II	A II溝 3・4-8	溝状遺構 3・4	磁器	碗	(9.95)	3.9	5.3	高台端部に砂目	白	染付	17c 末 IV 期	肥前
186	A	宿	II	A II溝 3・4-9	溝状遺構 3・4	磁器	碗		(4.2)			白	染付	18c 末 IV 期	肥前
187	A	宿	II	A II溝 3・4-10	溝状遺構 3・4	磁器	皿	24.5	9.3	5.25	破断面に漆継ぎ痕あり、口縁端部砂目、外面くびれ部に 1 重圏線	白	染付	18c 末 IV 期	伊万里
188	A	宿	II	A II溝 3・4-11	溝状遺構 3・4	陶器	茶入		(2.3)		内面に付着物あり	灰	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
189	A	宿	II	A II溝 4-1	溝状遺構 4	陶器	天目茶碗	11.2	4.8	7.1		黄白	鉄釉	17c 前登 2	瀬戸・美濃
190	A	宿	II	A II溝 4-2	溝状遺構 4	陶器	香炉か	(8.1)			鉄絵、底面露胎部分に付着物あり	黄白	灰釉	18c 初登 6	瀬戸・美濃
191	A	宿	II	A II溝 4-3	溝状遺構 4	陶器	皿	(20.0)			型打ち成形、御深井	淡灰	御深井釉	17c 中	美濃
192	A	宿	II	A II溝 4-4	溝状遺構 4	青磁	碗		4.95		漆継ぎ痕あり	白	青磁釉	17c 中	肥前
193	A	宿	II	A II溝 4-5	溝状遺構 4	染付	皿				高台端部砂目	白	染付	17c 後 III 期	肥前
194	A	宿	II	A II溝 4-6	溝状遺構 4	陶器	水指	(20.0)	(20.2)	(19.5)	粘土紐巻き上げ成形のちロクロ調整、口縁部は内側に折込んで蓋の受け部成形、耳部 2 か所貼り付け、体部にヘラ状工具で線刻文様あり	暗褐	灰釉	16c 末～17c 初	肥前か
195	A	宿	II	A II 検 -1	検出面	陶器	碗	(11.65)	5.0			淡灰	鉄釉	17c 後登 4	瀬戸・美濃
196	A	宿	II	A II 検 -2	検出面	磁器	碗		4.0		内面目跡 2 か所あり	白	染付	18c IV 期	肥前
197	A	宿	II	A II 検 -3	検出面	陶器	碗		3.8			卵黄白	透明釉	17c	肥前
198	A	宿	II	A II 南 検 -1	南検出面	陶器	螺旋文碗	10.6			螺旋文、灰釉・鉄釉の掛け分け	灰	鉄釉・灰釉	18c	瀬戸・美濃
199	A	宿	II	A II 南 検 -2	南検出面	陶器	播鉢		11.4			淡褐	錆釉	不明	瀬戸・美濃
200	A	宿	II	A II 南 検 -3	南検出面	土器	皿	10.5	6.6	2.7	口縁部に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
201	A	宿	II	A II セイ (南) -1	整地土	磁器	皿		(8.0)		見込み部中央に五弁花	白	染付	18c IV 期	肥前
202	A	宿	II	A II T1-1	トレンチ	陶器	皿		3.8		内面見込み蛇の目剥ぎ	淡褐	染付	不明	不明
203	A	宿	II	A II T5-1	トレンチ	陶器	皿	11.7	6.4	2.7	鉄絵のち長石釉、内面目跡あり	淡褐	鉄絵	17c 前登 2	瀬戸・美濃
204	B	宿	I	B I 土 2-1	土坑 2	磁器	皿	(11.7)	(7.1)	2.85	底部二重圏線	白	染付	17 c 末 IV 期	肥前
205	B	宿	I	B I 土 2-2	土坑 2	陶器	碗 (肥前産)		(4.8)		外面銅緑釉・内面透明釉の掛け分け	淡褐	銅緑釉・透明釉	17c 末～18c 前	肥前
206	B	宿	I	B I 土 3-1	土坑 3	磁器	碗	(11.0)	(4.8)	6.9	高台露胎部分に錆釉	灰	染付	17c 末～18c 前 5～6 期	肥前
207	B	宿	I	B I 土 5-1	土坑 5	陶器	片口鉢	(15.7)			漆継ぎ痕あり	白	鉄釉	18c 後	瀬戸・美濃
208	B	宿	I	B I 土 8-1	土坑 8	陶器	碗	(8.2)			陶胎染付	白	染付	17 c 末 IV 期	肥前
209	B	宿	I	B I 土 11-1	土坑 11	陶器	鉢		(8.3)		内面見込みに目跡 1 か所	白	灰釉	18c 前	瀬戸・美濃
210	B	宿	I	B I 土 13-1	土坑 13	土器	内耳鍋	25.4	19.9	11.3	底部砂目	暗褐	—	17c	在地産
211	B	宿	I	B I 土 13-2	土坑 13	土器	内耳鍋	34.8	27.8	13.5	底部砂目	暗褐	—	17c	在地産
212	B	宿	I	B I 土 19-1	土坑 19	陶器	播鉢		10.1		摺目 16 本 1 単位	淡灰	錆釉	不明	瀬戸・美濃
213	B	宿	I	B I 土 19-2	土坑 19	陶器	灯明受皿	(8.7)			内面見込みに木葉形の陰刻あり	灰褐	錆釉	18C 中登 7	瀬戸・美濃
214	B	宿	I	B I 土 20-1	土坑 20	陶器	螺旋文碗					暗灰	鉄釉	18C 中登 7	瀬戸・美濃
215	B	宿	I	B I 水 1-1	水道遺構 1	陶器	壺	(5.6)			鉄釉 2 種類	黄白	鉄釉	17c 中	瀬戸・美濃
216	B	宿	I	B I 水 1-2	水道遺構 1	陶器	合子または香炉	(8.9)			口縁内面のみ施釉なし	灰	灰釉	17c 中	瀬戸・美濃
217	B	宿	I	B I 水 1-3	水道遺構 1	陶器	播鉢				使用による内面摩滅激しい	黄白	錆釉	不明	瀬戸・美濃
218	B	宿	I	B I 水 2-1	水道遺構 2	陶器	志野丸皿	(11.5)	(6.0)	2.65	口縁端部に煤付着、灯明皿として使用か	白	長石釉	17c 後登 4 期	瀬戸・美濃
219	B	宿	I	B I 水 2-2	水道遺構 2	陶器	播鉢	(26.7)			外面回転ヘラケズリ	淡灰	鉄釉	17c 中登 3 期	瀬戸・美濃
220	B	宿	I	B I 水 3-1	水道遺構 3	磁器	蓋	(15.3)			段重の蓋	白	透明釉	17c 末～18c	肥前
221	B	宿	I	B I 溝 1-1	溝状遺構 1	陶器	碗	(11.9)			被熱痕あり	淡灰	灰釉	17c	瀬戸・美濃
222	B	宿	I	B I 建 1-1	建物 1	磁器	碗		(4.0)		色絵 (赤・緑)	白	透明釉	17c 中	肥前
223	B	宿	I	B I 焼 -1	焼土範囲	陶器	碗	(10.9)	(5.9)	7.0	腰部～底部ヘラケズリ、ケズリ出し高台	淡灰	鉄釉・灰釉	17c 前登 2	瀬戸・美濃
224	B	宿	I	B I 焼 -2	焼土範囲	陶器	湯冷まし	(8.5)			口縁花びら形に成形、把手貼り付け調整、1 か所大根の擦り絵あり、漆継ぎ痕あり	淡灰	灰釉	17c 前登 2	美濃
225	B	宿	I	B I 焼 -3	焼土範囲	陶器	鉢	(28.9)			内面に銅緑釉を流し掛している声瀬戸鉢	黄白	長石釉	17c 前登 2	美濃
226	B	宿	I	B I 焼 -4	焼土範囲	磁器	皿	7.5	4.3	1.4	内面見込みに播絵	白	染付	17c 末 IV 期	肥前
227	B	宿	I	B I 焼 -5	焼土範囲	陶器	焼塩壺	6.0	5.0	9.0	外面に自然釉付着、外面に「泉州麻生」の印あり	赤褐～褐	—	17c 末	泉州

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
228	B	宿	I	B I 検-1	検出面	陶器	碗	(10.8)			内面：灰釉、外面：鉄絵・白泥のち灰釉、薄作り	黄白	灰釉	17c	京焼
229	B	宿	I	B I 検-2	検出面	陶器	鉢か		(8.8)		底面から外面にかけて煤付着、内面見込みに目跡3か所	白	鉄釉	17c	瀬戸・美濃
230	B	宿	I	B I 検-3	検出面	陶器	不明	(25.4)	(18.4)		鉄絵、底面に煤付着、脚部欠損	白	鉄絵のち長石釉	17c 初登2	美濃
231	B	宿	I	B I 検-4	検出面	磁器	皿	7.1	4.0		口縁7単位、内面に型紙摺	白	染付	17c 末～18c 中IV期	肥前
232	B	宿	I	B I 検-5	検出面	磁器	皿				松葉文、透明釉白っぽい	白	染付	不明	肥前
233	B	宿	I	B I 検-6	検出面	陶器	壺	(4.9)			被熱により内外面の釉不明	灰	不明	不明	不明
234	B	宿	I	B I 検-7	検出面	陶器	茶壺	(14.0)			輪積み成形、漆継ぎ痕あり	灰	灰釉・鉄釉	不明	丹波
235	B	宿	I	B I 検-8	検出面	土器	焙烙	(29.9)	(24.2)	6.1	底部砂目、内面に耳部貼り付け	褐	—	不明	在地
236	B	宿	I	B I 検-9	検出面	陶器	碗		(5.2)		灰釉・鉄釉掛分け（内面灰釉・外面鉄釉）	白	灰釉・鉄釉	17c 後	瀬戸・美濃
237	B	宿	I	B I 検-10	検出面	陶器	碗		4.5		内外面灰釉、外面に煤付着	白	灰釉	17c 後	瀬戸・美濃
238	B	宿	I	B I 検-11	検出面	磁器	小杯	(6.2)	3.3			白	透明釉	17c	肥前
239	B	宿	I	B I 検-12	検出面	磁器	小杯	(5.9)	(2.8)	4.05	白磁	白	透明釉	不明	肥前
240	B	宿	I	B I 検-13	検出面	磁器	中碗		(5.8)		高台端部砂目あり、外面草花文	白	染付	不明	肥前
241	B	宿	I	B I 検-14	検出面	磁器	湯呑碗	(6.8)	(3.4)	5.55	内面圏線と見込みに五弁花、高台内面に墨付着か？混入品か	白	染付	18c 後V期	肥前
242	B	宿	I	B I 検-15	検出面	磁器	碗		(3.7)		高台内面に付着物あり	白	染付	18c 後V期	肥前
243	B	宿	I	B I 検-16	検出面	磁器	皿		(9.8)		蛇の目凹形高台、底部見込み釉剥ぎ	白	透明釉	18c 後IV期	肥前
244	B	宿	I	B I 検-17	検出面	磁器	花瓶		(5.7)		耳部貼付、高台端部砂目付着、胴部に草花文、波佐見産か	灰	透明釉	18c 後IV期	肥前
245	B	宿	I	B I 検-18	検出面	陶器	掃鉢		(9.7)		使用により掃り目摩滅	白	錆釉	不明	瀬戸・美濃
246	B	宿	I	B I 検-19	検出面	陶器	鉢		(17.9)		被熱痕あり	白	長石釉	17c 後	瀬戸・美濃
247	B	宿	I	B I 検-20	検出面	陶器	植木鉢	(13.0)	(8.2)	12.9	底部中央穿孔	白	灰釉	18c 後～19c 初	瀬戸・美濃
248	B	宿	I	B I 検-21	検出面	土製品	不明			3.45	リング状の土製品、手づくね調整	褐	—	不明	不明
249	B	宿	I	B I T-1	トレンチ	陶器	丸碗	(12.2)	(4.7)	7.1	外面上部 1/4 が黒っぽい	白	灰釉	17c 末登5期	瀬戸・美濃
250	B	宿	I	B I 排-1	排土	陶器	台付灯明受皿	(6.85)	5.4	4.6	上面の混入品か	淡褐～灰褐	灰釉	19c 前	信楽
251	B	宿	II	B II 土 4-1	土坑 4	磁器	皿	7.8	4.4		型打ち成形、花の器形	白	白磁	17c 末～18c 前III期	肥前
252	B	宿	II	B II 土 13-1	土坑 13	土器	灯明皿	9.2	4.4	2.8	内外面煤付着	褐	—	不明	在地産
253	B	宿	II	B II 土 20-1	土坑 20	陶器	鼠志野鉢				鋭利な工具による書き落としの文様一部あり	淡灰	鉄釉・長石	16c 末～17c 初	美濃
254	B	宿	II	B II 土 27-1	土坑 27-1	陶器	黒織部沓茶碗					淡黄灰	鉄釉	17c 初	美濃
255	B	宿	II	B II 溝 3-1	溝 3	陶器	鳴海織部向付				型打ち成形、底部に半環足付付、底部と腰部の接合部内面に段あり、底裏に被熱痕あり	白・淡赤褐	銅緑・長石	17c 前登2	美濃
256	B	宿	II	B II 溝 4-1	溝状遺構 4	磁器	碗		3.6		漆継ぎ痕あり	白	染付	不明	肥前
257	B	宿	II	B II P4-1	P4	陶器	碗	10.6	4.6	7.3	精良な胎土	卵黄白	灰釉	17c 末	肥前
258	B	宿	II	B II 検-1	検出面	陶器	碗		6.2		底部高台露胎	黄褐	灰釉	不明	瀬戸・美濃
259	B	宿	II	B II 検-2	検出面	陶器	碗	12.8	5.8	8.8	陶胎染付、外面胴部二本沈線か？	白	染付	18c 初登6	瀬戸・美濃
260	B	宿	II	B II 検-3	検出面	陶器	小天目碗	6.3	2.6	3.5		淡褐	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
261	B	宿	II	B II 検-4	検出面	陶器	天目茶碗	11.9	5.0	6.1		白	鉄釉	17c 中登3	瀬戸・美濃
262	B	宿	II	B II 検-5	検出面	陶器	碗	11.6				白	鉄釉	17c 中登3	瀬戸・美濃
263	B	宿	II	B II 検-6	検出面	陶器	皿	12.6	4.4	4.0	陶胎染付	白	染付	18c 初登6	瀬戸・美濃
264	B	宿	II	B II 検-7	検出面	陶器	皿	13.8	4.2	4.3	内面目跡あり、口縁部指押圧により変形、4単位か？外面タール付着	灰	鉄絵・長石釉	17c 初	唐津
265	B	宿	II	B II 検-8	検出面	陶器	鉢か		9.0		外面タール付着、内面見込みに目跡あり	淡灰褐	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
266	B	宿	II	B II 検-9	検出面	陶器	鉢				内面四角の目跡あり、高台に砂の塊付着	白	灰釉	不明	瀬戸・美濃
267	B	宿	II	B II 検-10	検出面	陶器	鉢		7.6		長石釉に鉄絵、一部鉄釉に鉄絵部分あり、ロクロ成形のち型打ち成形（花弁状）、志野織部	白	長石・鉄絵・鉄釉	17c 前登2	美濃
268	B	宿	II	B II 検-11	検出面	陶器	仏花瓶		8.6		底裏に回転糸切痕（露胎）	白	鉄釉	不明	瀬戸・美濃
269	B	宿	II	B II 検-12	検出面	磁器	皿	14.4	7.8	4.7	内面唐草文、底部「大」文字（その他文字欠損）波佐見産か	灰	染付	17c 中III期	肥前
270	B	宿	II	B II 検-13	検出面	磁器	皿		8.2		内面墨弾き文、外面草花文、高台端部露胎	白	染付	17c 中III期	肥前
271	B	宿	II	B II 検-14	検出面	磁器	碗		3.2		外面に草花染付	白	染付	17c 中III期	肥前
272	B	宿	II	B II 検-16	検出面	土器	灯明皿	11.0	6.8	3.2	内外面煤付着	褐	—	不明	在地産
273	B	宿	II	B II 検-17	検出面	土器	火鉢	38.4	27.4		脚部欠損（単位不明）、体部外面突帯（へら状工具による刻み）	褐	—	不明	在地か
274	B	宿	II	B II 検-18	検出面	陶器	掃鉢		13.6		内面掃目あり	白	錆釉	不明	不明
275	B	宿	II	B II 検-19	検出面	磁器	青花				漳州窯製品	灰	染付	17c 前	中国



No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
276	B	宿	II	B II 検-20	検出面	陶器	皿 (唐津)					褐	鉄釉	17c 前半	唐津
277	A	a	III	A III a 炭 11-1	炭範囲 11	土器	灯明皿	10.45	6.4	3.15	ロクロナデ、内面・外面口縁部に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
278	A	a	III	A III a 炭 11-2	炭範囲 11	土器	灯明皿	10.05	5.2	3.3	ロクロナデ、内外面に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
279	A	a	III	A III a 炭 14-1	炭範囲 14	陶器	白天目茶碗	(10.9)			外面に鉄絵あり	白	長石	17c 前登2	瀬戸・美濃
280	A	a	III	A III a 炭 15-1	炭範囲 15	陶器	小天目碗	(6.9)				白～灰	鉄釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
281	A	a	III	A III a 炭 15-2	炭範囲 15	陶器	菊皿	13.3	6.9	3.1	被熱痕あり	白	長石釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
282	A	a	III	A III a 炭 21-1	炭範囲 21	青花	皿 (漳州窯系)				中国漳州窯系 (F 群)	灰	染付	16c 末～17c 初	中国
283	A	a	III	A III a 炭 21-2	炭範囲 21	土器	灯明皿	6.7	4.5	1.9	内面煤付着	褐	—	不明	在地か
284	A	a	III	A III a-1	検出面	陶器	小杯				外面に漆塗布、内面にも漆付着、破断面漆継ぎ痕あり	暗褐灰	灰釉	16c 末～17c 初	瀬戸・美濃
285	A	a	III	A III a-2	検出面	陶器	小杯	5.0	2.9	2.8	口縁を歪めている。被熱痕あり	淡灰褐	長石釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
286	A	a	III	A III a-3	検出面	陶器	小杯	8.3	3.7	3.15	内外面の一部に煤付着	白	長石釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
287	A	a	III	A III a-4	検出面	陶器	小杯	7.95	5.15	4.15	内面に煤付着	灰	長石釉・灰釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
288	A	a	III	A III a-5	検出面	陶器	碗	(10.8)	(4.9)	7.65		白	灰釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
289	A	a	III	A III a-6	検出面	陶器	天目茶碗	(12.0)				白	鉄釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
290	A	a	III	A III a-7	検出面	陶器	天目茶碗	(11.8)				淡灰	灰釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
291	A	a	III	A III a-9	検出面	陶器	皿	(11.6)			被熱、織部	白	長石釉・銅緑釉	17c 初	美濃
292	A	a	III	A III a-10	検出面	陶器	皿	(10.4)	(5.5)	2.5	内面と口縁部に煤付着、底面に目跡あり、灯明皿	白	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
293	A	a	III	A III a-11	検出面	陶器	皿	(10.0)	(5.8)	2.15	内面見込みに使用痕あり	淡灰～淡黄灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
294	A	a	III	A III a-12	検出面	陶器	皿	(10.1)	(4.8)	2.0	内面見込みに使用痕、付着物、碁笥底	黄白	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	瀬戸・美濃
295	A	a	III	A III a-13	検出面	陶器	皿	(9.6)	(6.6)	2.4	目跡内面見込みに3か所、底部墨書あり	白	長石釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
296	A	a	III	A III a-14	検出面	陶器	皿	10.85	6.25	2.3	内面2か所、底面2か所目跡あり、二次被熱あり、煤付着	灰	長石釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
297	A	a	III	A III a-15	検出面	陶器	皿	10.2	6.0	2.45	煤付着 (口縁欠損部にも) 内面3か所目跡あり、底部歪み	白?	長石釉	17c 初登1～2	瀬戸・美濃
298	A	a	III	A III a-17	検出面	陶器	皿	(12.0)	(7.6)	2.45	鉄絵	白	長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
299	A	a	III	A III a-18	検出面	陶器	皿	(11.9)	(7.8)	2.5	底面に目跡2か所、内面見込みに小さい目跡2か所	白	鉄絵・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
300	A	a	III	A III a-19	検出面	陶器	皿	(11.6)	(6.1)	2.8	内面見込みに小さい目跡1か所、底面に大きい目跡1か所、被熱ありか?、外面に焼成時に他の遺物と接した痕あり	白	鉄絵・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
301	A	a	III	A III a-20	検出面	陶器	皿	11.35	6.5	2.75	内面に煤、口縁と底面にタール状のもの付着	白	鉄絵・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
302	A	a	III	A III a-21	検出面	陶器	青織部鉢	(14.3)	(7.5)	3.55	内面見込みに目跡あり、底面に墨書あり	白	銅緑釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
303	A	a	III	A III a-22	検出面	陶器	向付				被熱あり、鉄絵のち施釉 (長石釉のち銅緑釉)	白～暗灰	長石釉のち銅緑釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
304	A	a	III	A III a-23	検出面	陶器	織部鉢	(14.8)			内面鉄絵による同心円状の圈線のち長石釉、脚部がつくか?	黄白	鉄釉・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
305	A	a	III	A III a-24	検出面	陶器	織部鉢	(13.6)			内面鉄絵による同心円状の圈線のち長石釉、脚部がつくか?	黄白	鉄釉・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
306	A	a	III	A III a-25	検出面	陶器	志野向付	(12.3)	9.9		被熱痕あり、半環足貼り付け、鉄絵	白	長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
307	A	a	III	A III a-26	検出面	陶器	唐津向付				鉄絵のち長石釉	暗褐～灰	長石釉	17c 初	唐津
308	A	a	III	A III a-27	検出面	陶器	唐津向付				鉄絵のち長石釉	暗褐	長石釉	17c 初	唐津
309	A	a	III	A III a-28	検出面	陶器	唐津向付				絵唐津	暗褐	長石釉	17c 初	唐津
310	A	a	III	A III a-29	検出面	陶器	向付				鉄絵のち長石釉	淡灰	長石釉	16c 末～17c 初大窯IV	美濃
311	A	a	III	A III a-30	検出面	陶器	向付				鉄絵のち長石釉	淡灰	長石釉	16c 末～17c 初大窯IV	美濃
312	A	a	III	A III a-31	検出面	陶器	向付				鳴海織部、赤土・白土継ぎ合わせ	白・淡褐	銅緑・灰釉	17c 初登2	美濃
313	A	a	III	A III a-32	検出面	陶器	鉢か (唐津)				被熱により釉が発泡	褐	鉄釉・長石釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
314	A	a	III	A III a-33	検出面	陶器	黄瀬戸鉢	(15.8)			内外面に目跡あり、内面に櫛描き文様	白	灰釉・銅緑釉	17c 初登2	瀬戸・美濃
315	A	a	III	A III a-34	検出面	陶器	茶入	(5.7)			大海茶入	淡灰	鉄釉	不明	不明
316	A	a	III	A III a-35	検出面	陶器	茶入	3.4				淡灰	鉄釉	不明	不明
317	A	a	III	A III a-36	検出面	陶器	德利	4.4				白	鉄釉	17c 初登2	瀬戸・美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
318	A	a	Ⅲ	AⅢ a-37	検出面	陶器	德利		(6.8)		外面鉄釉 2度掛け、底面に目跡 1か所	白	鉄釉	17c 初登 2	瀬戸・美濃
319	A	a	Ⅲ	AⅢ a-38	検出面	陶器	德利		(7.6)			淡灰	灰釉	17c 初登 2	瀬戸・美濃
320	A	a	Ⅲ	AⅢ a-39	検出面	陶器	德利		13.9		底面に付着物 (目跡) あり	淡黄褐	鉄釉	17c 初登 2	瀬戸・美濃
321	A	a	Ⅲ	AⅢ a-40	検出面	青花	碗 (青花)				被熱痕あり、F類	白	染付	16c 末～17c 初	中国
322	A	a	Ⅲ	AⅢ a-41	検出面	青花	皿 (青花)				赤・緑の上絵	灰	透明釉	16c 末～17c 初	中国
323	A	a	Ⅲ	AⅢ a-42	検出面	青花	皿 (青花)				高台端部に砂目、底裏露胎 (調整雑)、漳州窯系か、赤・緑の上絵	淡灰	透明釉	16c 末～17c 初	中国
324	A	a	Ⅲ	AⅢ a-43	検出面	青花	大皿 (青花)		(9.7)		底裏まで丁寧に調整、被熱痕あり	白	染付	16c 末～17c 初	中国
325	A	a	Ⅲ	AⅢ a-45	検出面	土器	灯明皿	9.6	5.0	2.25	内面と口縁部に煤付着	暗灰褐	—	不明	在地産
326	A	a	Ⅲ	AⅢ a-46	検出面	土器	皿	(10.4)	(5.8)	2.9	ロクロナデ、前面・破断面に煤付着	褐	—	不明	在地産
327	A	a	Ⅲ	AⅢ a-47	検出面	土器	灯明皿	(9.8)	(5.9)	2.9	ロクロナデ、口縁部・内面に煤付着	褐	—	不明	在地産
328	A	a	Ⅲ	AⅢ a-48	検出面	土器	灯明皿	10.5	5.75	3.1	ロクロナデ、内外面に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
329	A	a	Ⅲ	AⅢ a-49	検出面	土器	皿	(11.5)			ロクロナデ、内面に煤付着	暗灰褐	—	不明	在地産
330	A	a	Ⅲ	AⅢ a-50	検出面	土器	皿	9.3	9.35		内外面にタール付着、内面板状工具ナデ、体部外面ミガキ調整、腰部ケズリ	灰褐	—	不明	不明
331	A	a	Ⅲ	AⅢ a-51	検出面	土器	灯明皿	(10.0)	(6.0)	2.8	ロクロナデ、内面と口縁部に煤付着	淡灰褐	—	不明	在地産
332	A	a	Ⅲ	AⅢ a-52	検出面	土器	灯明皿	9.85	5.4	2.65	ロクロナデ、内面と口縁部に煤付着	褐	—	不明	在地産
333	A	a	Ⅲ	AⅢ a-53	検出面	土器	皿	9.8	5.95	2.4	ロクロナデ、静止糸切り	褐灰	—	不明	在地産
334	A	a	Ⅲ	AⅢ a-54	検出面	土器	火鉢	(35.8)	(31.2)		体部外面上方に波形の突帯貼付、腰部にも突帯貼付、体部中央に3種類の印花文多数、脚部3単位	暗灰褐	—	不明	在地産
335	A	a	Ⅲ	AⅢ a-55	検出面	陶器	皿	30.0	19.2		内面鉄釉、脚残存 1か所	淡黄	長石釉	17C 初登 1～2	美濃
336	B	a	Ⅲ	BⅢ a-1	検出面	陶器	碗	10.8	4.4	6.0	天目茶碗、被熱痕あり	暗灰	鉄釉	17c 初大窯IV	美濃
337	B	a	Ⅲ	BⅢ a-2	検出面	陶器	皿	(10.5)	(5.8)	2.2	内面見込み菊花印 (16弁か?) 底部見込みに墨書、底部目跡あり、高台端部釉剥ぎ、志野	白	長石釉	16c 末～17c 初大窯IV	美濃
338	B	a	Ⅲ	BⅢ a-3	検出面	陶器	皿	(10.7)	(5.7)	2.2	2次的に被熱し、内面の釉が溶融、高台端部釉剥ぎ	淡黄灰	長石釉・鉄釉	17c 初連房登窯 1	美濃
339	B	a	Ⅲ	BⅢ a-4	検出面	陶器	向付				型打ち成形のちへラケズリ調整、外面に鉄絵、志野織部	灰白	長石釉	連房	美濃
340	B	a	Ⅲ	BⅢ a-5	検出面	陶器	鉢				底部削り出し高台、内面に鉄絵	灰	長石釉	17 c 初	唐津
341	B	a	Ⅲ	BⅢ a-6	検出面	陶器	小壺か	(7.0)			蓋合わせ口部は露胎だが、肩部段の端部と口縁端部には錆釉、体部に鉄絵	灰～黄灰	灰	17c ?	肥前か
342	B	a	Ⅲ	BⅢ a-7	検出面	陶器	平向付	(27.5)	15.5	5.8	底部に半環足貼り付け、体部外面と内面見込み部に鉄絵 (外周に烈点文あり)	白	長石	17c 初 (登 2)	美濃
343	B	a	Ⅲ	BⅢ a-8	検出面	陶器	鳥形掻き立て	幅 2.5		高 3.7	手づくね成形、尾部欠損、下端に炭付着、瓦質陶器	灰	—	不明	不明
344	B	a	Ⅲ	BⅢ a-9	検出面	陶器	双耳水注					褐灰	鉄釉	16c 末大窯IV	瀬戸・美濃
345	B	a	Ⅲ	BⅢ a-10	検出面	磁器	皿	(7.7)	(3.6)	1.6	混入品か、コンニャク印判	淡灰	染付	18c 中IV期	肥前
346	B	a	Ⅲ	BⅢ a-11	検出面	磁器	皿 (青花)				断面に漆継痕、赤絵青海波文、一部緑色絵付	灰褐	赤絵	16c 末～17c 初	中国
347	B	a	Ⅲ	BⅢ a-12	検出面	土師器	灯明皿	9.85	6.4	2.8	ロクロナデ、内外面煤付着	褐	—	不明	在地産
348	B	a	Ⅲ	BⅢ a-13	検出面	土師器	灯明皿	10.0	6.3	2.6	ロクロナデ、内面煤付着	褐	—	不明	在地産
349	B	a	Ⅲ	BⅢ a-14	検出面	土器	内耳鍋		(26.1)	(14.0)	外面炭化物・煤付着、内面と底部に炭化物・煤なし、口縁内面に2条の強いナデ	暗褐	—	不明	在地産
350	A	b	Ⅲ	AⅢ b 土 2-1	土坑 2	陶器	皿	(11.0)			絵唐津 (口縁端部鉄釉、内面鉄絵)	灰褐	灰釉	17c 初	唐津
351	A	b	Ⅲ	AⅢ b 炭 1-1	炭籠囲 1	土師器	内耳鍋		26.0		外面煤付着、底部全体剥離	褐色	—	17c 初	在地産
352	A	b	Ⅲ	AⅢ b 炭 6-1	炭籠囲 6	陶器	鉢か		(15.4)		内面見込みに重ね焼き痕	暗灰	灰釉	17c 前登 2	美濃
353	A	b	Ⅲ	AⅢ b-1	検出面	陶器	志野皿	(11.0)	(6.5)	2.6	被熱痕あり、見込部には2重圏線内に笹文	白	長石釉	17c 前登 2	美濃
354	A	b	Ⅲ	AⅢ b-7	検出面	陶器	志野皿	(11.75)	(7.2)	2.3	削り出し高台、底部見込みにタール付着、高台径大きく器高低いもの	淡黄灰	長石釉	17c 前登 1～2	美濃
355	A	b	Ⅲ	AⅢ b-3	検出面	陶器	志野皿	11.9	6.6	2.5	底部見込み目跡あり (3点)・削り出し高台、口縁部煤付着	淡黄灰	長石釉	17c 前登 1～2	美濃
356	A	b	Ⅲ	AⅢ b-10	検出面	陶器	皿 (志野菊皿)	(11.6)	(6.4)	2.5	口縁端部を切り取り、内面を丸ノミで菊花状にしたもの、削り出し高台	白～灰	長石釉	17c 前登 1～2	美濃
357	A	b	Ⅲ	AⅢ b-5	検出面	陶器	志野皿	(11.6)	6.4	2.4	見込部鉄絵	淡黄灰	長石釉	17c 前登 2	美濃
358	A	b	Ⅲ	AⅢ b-12	検出面	陶器	皿	(9.5)	(5.8)	2.8	底部削り出し高台、全面施釉	淡黄灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	美濃
359	A	b	Ⅲ	AⅢ b-6	検出面	陶器	志野皿	(11.4)	(7.4)	2.35	底部目跡 3か所	灰白	長石釉	17c 前登 2	美濃
360	A	b	Ⅲ	AⅢ b-13	検出面	陶器	皿	(7.9)	(4.5)	1.9	削り出し輪高台	淡黄灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯IV	美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
361	A	b	Ⅲ	AⅢ b-14	検出面	陶器	皿	(9.8)	(6.2)	3.0	高台部強いヨコナデ、削り出し付高台か不明	暗灰	灰釉	16c 後半～大窯Ⅲ～Ⅳ	美濃
362	A	b	Ⅲ	AⅢ b-18	検出面	陶器	皿	10.6	(6.4)	(2.25)	内面釉内ハゲ	白	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
363	A	b	Ⅲ	AⅢ b-15	検出面	陶器	皿	(10.6)			削り出し輪高台	灰	灰釉	16c 後半～大窯Ⅲ～Ⅳ	美濃
364	A	b	Ⅲ	AⅢ b-19	検出面	陶器	ヒダ皿	(9.7)	5.3	2.1	口縁端部ヘラ状工具でヒダをつけている、削り出し輪高台	淡黄灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
365	A	b	Ⅲ	AⅢ b-16	検出面	陶器	皿	(10.2)	(5.75)	2.6	削り出し輪高台	灰	灰釉	16c 後半大窯Ⅲ	美濃
366	A	b	Ⅲ	AⅢ b-25	検出面	陶器	折縁皿	11.1	5.8	2.3	高台釉剥ぎ	白	錆釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
367	A	b	Ⅲ	AⅢ b-26	検出面	陶器	稜皿	10.25	(5.6)		被熱痕あり、口縁部つまみ上げて波状に調整	白	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
368	A	b	Ⅲ	AⅢ b-17	検出面	陶器	皿	(10.0)	5.5	2.3	内面釉内ハゲ、削り込み高台	白	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
369	A	b	Ⅲ	AⅢ b-28	検出面	陶器	皿	(10.1)	(5.8)	2.3	底部輪トチン痕	灰白	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
370	A	b	Ⅲ	AⅢ b-33	検出面	陶器	志野半筒茶碗				口縁部から体部漆継ぎ痕あり	白	長石釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
371	A	b	Ⅲ	AⅢ b-20	検出面	陶器	小杯	(6.75)	3.2	3.4	丸碗形の小杯	白	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
372	A	b	Ⅲ	AⅢ b-21	検出面	陶器	小杯	7.7	3.25	2.9	被熱痕あり、削り込み高台	白	長石釉	17c 前登1～2	美濃
373	A	b	Ⅲ	AⅢ b-22	検出面	陶器	小天目小碗	6.9	3.0	3.7	底裏煤付着	白	長石釉	17c 前登2	美濃
374	A	b	Ⅲ	AⅢ b-23	検出面	陶器	小杯	6.75	3.5		被熱痕あり	暗灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
375	A	b	Ⅲ	AⅢ b-27	検出面	陶器	黒織部沓茶碗				外面に強い沈線	淡灰	鉄釉	17c 前登2	美濃
376	A	b	Ⅲ	AⅢ b-30	検出面	陶器	黒織部沓茶碗				胴部に強いロクロ目が残る	暗黄灰	鉄釉	17c 前登1～2?	美濃
377	A	b	Ⅲ	AⅢ b-37	検出面	磁器	小杯(青花)		(2.6)		花の文様、口縁端部反る、底部に文字、外面圏線2本、内面圏線1本 16c 第2 四半期～中頃	白	染付	16c 中	中国
378	A	b	Ⅲ	AⅢ b-38	検出面	磁器	小杯(青花)		(3.0)		外面圏線2本、内面圏線2本	白	染付	16c 後	中国
379	A	b	Ⅲ	AⅢ b-2	検出面	陶器	志野皿	10.6	6.1	2.2	底部墨書あり、内面見込み印刻(菊文)、削り出し高台	白	長石釉	17c 前登2	美濃
380	A	b	Ⅲ	AⅢ b-4	検出面	陶器	志野皿	(12.2)	7.5	2.5	見込部鉄絵、削り出し高台	淡黄灰と暗灰	長石釉	17c 前登2	美濃
381	A	b	Ⅲ	AⅢ b-8	検出面	陶器	志野皿	(10.4)	(6.0)	2.75	内面圏線、笹文	白	長石釉	17c 前登2	美濃
382	A	b	Ⅲ	AⅢ b-11	検出面	陶器	皿		(7.0)		内面見込み部に蔓状の植物の線刻あり、底裏に×印の線刻あり	淡灰	銅緑	17c 前登1～2?	美濃
383	A	b	Ⅲ	AⅢ b-29	検出面	陶器	折縁皿	(12.0)	6.1	1.75	内面に花文刻印	黄白	灰釉	大窯Ⅳ	美濃
384	A	b	Ⅲ	AⅢ b-36	検出面	磁器	皿(青花)		(7.9)		外面圏線2本、内面圏線2本、高台端部砂目、E群皿	白	染付	16c 末～17c 初	中国
385	A	b	Ⅲ	AⅢ b-40	検出面	磁器	皿(青花)		(7.4)		高台端部砂目、外面圏線1本、内面圏線2本	白	染付	16c 後	中国
386	A	b	Ⅲ	AⅢ b-24	検出面	陶器	向付				内面鉄絵	暗茶	鉄絵、長石釉	16c 末～17c 初	唐津
387	A	b	Ⅲ	AⅢ b-9	検出面	陶器	織部鉢				脚部欠損、見込部同心円文	淡黄灰	長石釉	17c 前登2	美濃
388	A	b	Ⅲ	AⅢ b-34	検出面	陶器	水注				志野水注、注口と把手が付く、底部に円柱状の脚部、外面に鉄絵	白	長石釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
389	A	b	Ⅲ	AⅢ b-31	検出面	陶器	花瓶か徳利	4.6			口縁部のみ、被熱痕あり	褐	鉄釉・灰釉	不明	瀬戸・美濃
390	A	b	Ⅲ	AⅢ b-32	検出面	陶器	合子の蓋				外径：5.9、返り径：14.5	淡黄白	灰釉	17c 前登2	美濃
391	A	b	Ⅲ	AⅢ b-35	検出面	陶器	播鉢	(34.2)			片口あり	淡黄灰	錆釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	美濃
392	A	b	Ⅲ	AⅢ b-41	検出面	土師器	灯明皿	9.0	4.0	3.0	内外面全体に煤付着、対面タール付着	暗褐	—	不明	在地産
393	A	b	Ⅲ	AⅢ b-42	検出面	土師器	灯明皿	10.8	6.95	2.6	内面に煤・タール・付着物多量	暗褐	—	不明	在地産
394	A	b	Ⅲ	AⅢ b-43	検出面	土師器	灯明皿	10.1	5.0	3.0	口縁部付着物多量	暗褐	—	不明	在地産
395	A	b	Ⅲ	AⅢ b-44	検出面	土師器	灯明皿	11.4	5.6	3.35	内面煤多量	暗褐	—	不明	在地産
396	A	b	Ⅲ	AⅢ b-45	検出面	土師器	かわらけ	(9.2)	(5.4)	2.15	内外面口縁に煤付着(被熱)、白色胎土の異質なものを	灰白	—	不明	不明
397	A	b	Ⅲ	AⅢ b-46	検出面	土師器	灯明皿	10.3	7.3	2.95	内外面口縁付近タール付着	暗褐	—	不明	不明
398	A	b	Ⅲ	AⅢ b-47	検出面	土師器	不明	(23.8)			口縁付近被熱痕、胴部に透かし孔あり、内外面煤付着、口縁端部受け口状、器種不明	暗褐	—	不明	不明
399	B	b	Ⅲ	BⅢ b 土 3-1	土坑 3	土器	火鉢	(25.3)	19.8		突帯部先端に等間隔の刻みあり、内外面煤付着、脚一部欠損の痕跡あり	暗褐	—	不明	在地産か
400	B	b	Ⅲ	BⅢ b 土 4-1	土坑 4	陶器	小杯	(5.8)			被熱痕あり	淡黄灰	灰釉	16c 末～17c 初大窯Ⅳ	瀬戸・美濃

No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
401	B	—	Ⅳ	BⅢ b 溝 2-1	溝状遺構 2	陶器	志野菊皿	(12.7)	(6.6)	2.6		白	長石釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
402	B	b	Ⅲ	BⅢ b-1	検出面	陶器	灰釉丸皿	(10.2)	(5.5)	2.3	内面にトチン痕あり	淡黄灰	灰釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
403	B	b	Ⅲ	BⅢ b-2	検出面	陶器	灰釉丸皿	11.1	(6.3)	2.0	内面見込み目跡あり、高台端部釉剥ぎ	白	灰釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
404	B	b	Ⅲ	BⅢ b-3	検出面	陶器	皿	10.2	6.2	2.2	内面見込み部釉剥ぎ、輪トチン痕	白	灰釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
405	B	b	Ⅲ	BⅢ b-4	検出面	陶器	皿	(12.35)	(7.0)	2.2	内面目跡あり、志野	淡黄灰	長石釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
406	B	b	Ⅲ	BⅢ b-5	検出面	陶器	皿	(10.6)	(5.2)	(2.8)	内面鉄絵、高台端部釉剥ぎ、底部の目跡、釉剥ぎ時に削りとられている、志野	白	長石釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	瀬戸・美濃
407	B	b	Ⅲ	BⅢ b-6	検出面	陶器	皿	11.45	6.5	2.2	被熱痕あり、口縁部タール付着	白	長石釉	17c 初 登Ⅰ	美濃
408	B	b	Ⅲ	BⅢ b-7	検出面	陶器	織部向付				被熱痕あり、鉄絵	淡黄灰	銅緑釉	17c 初 登Ⅰ	美濃
409	B	b	Ⅲ	BⅢ b-8	検出面	陶器	天目茶碗	11.8	4.3	5.9	錆釉のち鉄釉	白	錆釉・鉄釉	17c 初 登Ⅰ	美濃
410	B	b	Ⅲ	BⅢ b-9	検出面	陶器	皿		(6.2)		内外面煤付着	白	灰釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	美濃
411	B	b	Ⅲ	BⅢ b-10	検出面	陶器	皿	12.6	6.75	2.7	被熱痕	白	長石釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	美濃
412	B	b	Ⅲ	BⅢ b-11	検出面	磁器	皿	(12.95)	(7.0)	2.8	青花か、高台端部釉剥ぎ、漆継痕あり	白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
413	B	b	Ⅲ	BⅢ b-12	検出面	磁器	合子	(9.0)			赤絵、蓋が付くもの	白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
414	B	b	Ⅲ	BⅢ b-13	検出面	土師器	皿	(10.3)	(4.9)	3.2	口縁端部の一部にタール付着、灯明皿として使用か	褐	—	不明	在地産か
415	B	0	Ⅲ	BⅢ b-14	検出面	陶器	小杯	(8.7)	3.4	3.3	見込み部に渦巻(鉄絵)あり	淡黄灰	長石釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	美濃
416	B	b	Ⅲ	BⅢ b-15	検出面	土器	火消壺の蓋	(14.0)		1.3	上面以外煤付着	暗褐	—	不明	不明
417	B	b	Ⅲ	BⅢ b-16	検出面	土器	火消壺の蓋	(12.0)			上面以外煤付着	暗褐	—	不明	不明
418	B	b	Ⅲ	BⅢ b-17	検出面	土器	白かわらけ				手づくね成形、腰部ケズリ	乳白	—	不明	不明
419	A	—	Ⅳ	AⅣ土 7-2	土坑 7	陶器	播鉢	(27.2)	(10.8)	12.25	摺目 16 本 1 単位	淡黄白	錆釉	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	不明
420	A	—	Ⅳ	AⅣ土 7-3	土坑 7	須恵質陶器	播鉢				摺目、6 本で 1 単位	灰	—	14c	不明
421	A	—	Ⅳ	AⅣ土 9-1	土坑 9	土器	皿	(9.6)	(6.0)		内面に煤付着	黒褐	—	不明	在地産
422	A	—	Ⅳ	AⅣ土 18-1	土坑 18	陶器	志野皿	(10.9)	(5.8)	2.2	底面に目跡・重ね焼き痕あり、鉄絵	白	長石釉	17c 前 登 2	美濃
423	A	—	Ⅳ	AⅣ土 18-2	土坑 18	陶器	黒織部沓茶碗				外面にヘラ状工具による強い沈線	白	鉄釉	17c 前 登 2	美濃
424	A	—	Ⅳ	AⅣ土 44-1	土坑 44	陶器	鉢	20.2	11.7	3.9	内面銅緑釉のち黄瀬戸釉	白	黄瀬戸釉	17c 前 登 1～2	美濃
425	A	—	Ⅳ	AⅣビット 158-1	P158	陶器	皿か		(3.7)		底部見込みに円刻・印路、京焼風、鉄絵	白	灰釉	17c 後	肥前
426	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-1	溝状遺構 1	陶器	折縁深皿		(13.8)		内面に目跡あり	淡灰	錆釉か?	15c	瀬戸・美濃
427	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-2	溝状遺構 1	青花	碗	13.5			内外面 2 重圏線、外面草花文	白	染付	不明	中国
428	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-3	溝状遺構 1	土器	灯明皿	9.8	5.9	2.95	内外面に煤付着(灯明具)	黒褐	—	不明	在地産
429	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-4	溝状遺構 1	陶器	皿	(10.4)	(5.5)	2.0	志野皿、内面見込み及び底部に目跡あり	白	長石釉	17c 前 登 2	美濃
430	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-5	溝状遺構 1	陶器	菊皿	(12.9)	(7.2)	2.6	志野菊皿	白	長石釉	17c 前 登 2	美濃
431	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 1-6	溝状遺構 1	陶器	筒茶碗	(11.5)			絵志野筒茶碗、鉄絵あり	白	長石	16c 末～ 17c 初 大窯Ⅳ	美濃
432	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 2-1	溝状遺構 2	土器	皿	(11.9)	(7.4)	3.2	内面にタール付着	暗褐	—	不明	在地産
433	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 3-1	溝状遺構 3	陶器	鉢か	(25.8)			瓦質陶器	淡灰	—	不明	不明
434	A	—	Ⅳ	AⅣ溝 5-1	溝状遺構 5	陶器	皿	(12.2)			底面に目跡あり、被熱痕あり	白	長石釉	17c 前 登 2	美濃
435	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -1	検出面	陶器	皿	(10.9)	(6.2)	3.2	内面見込み部に目跡、鉄絵あり	白	長石釉	17c 前 登 2	美濃
436	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -4	検出面	陶器	天目茶碗	(11.0)				白	鉄釉	17c 前 登 1～2	美濃
437	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -6	検出面	陶器	折縁皿					褐～淡黄灰	灰釉	15c	古瀬戸
438	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -7	検出面	陶器	茶入		3.1		底部回転糸痕	灰	鉄釉	不明	不明
439	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -8	検出面	青花	皿		(5.9)		外面高台際に圏線、見込み部に鳥文	白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
440	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -9	検出面	青花	皿	(10.1)	(5.8)		内外面に圏線	白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
441	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -10	検出面	青花	皿	(11.4)	(6.9)	2.55		白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
442	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -11	検出面	青花	皿		(7.2)			白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
443	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -12	検出面	青花	皿					白	染付	16c 末～ 17c 初	中国
444	A	—	Ⅳ	AⅣ検 -13	検出面	青花	碗		(4.3)		漆継痕あり	白	染付	16c 末～ 17c 初	中国



No	地区	区画	検出面	実測番号	遺構	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土	釉調	推定製作年代	推定産地
								口径	底径	器高					
445	A	—	IV	A IV 検 -14	検出面	陶器	播鉢		(10.3)		摺目 15 本 1 単位で 9 方向	淡灰	錆釉	16c 末～17c 初 大窯IV	瀬戸・美濃
446	A	—	IV	A IV 検 -15	検出面	土器	皿	(10.3)	(6.8)	2.85	内面に煤付着	暗褐	—	不明	在地産
447	A	—	IV	A IV 検 -16	検出面	須恵器	杯		(7.0)		焼成不良、底部回転糸切痕	淡灰	—	9 c 前半	在地産
448	A	—	IV	A IV T-1	トレンチ	土器	皿	10.8	6.9	3.3	内面と外面の口縁部に煤付着	褐	—	不明	在地産
449	B	—	IV	B IV 検 -1	検出面	陶器	天目茶碗	(11.6)				淡灰	鉄釉	16c 末 大窯IV	瀬戸・美濃
450	B	—	IV	B IV 検 -2	検出面	陶器	折縁皿	(10.85)	(5.6)	2.45	被熱痕あり、内面見込みに釉剥ぎ・錆釉・線刻(蓮の花)	淡褐	灰釉・錆釉	16c 末 大窯IV	瀬戸・美濃
451	B	—	IV	B IV 検 -3	検出面	陶器	折縁深皿				古瀬戸	暗灰	灰釉	15c	瀬戸・美濃
452	B	—	IV	B IV 検 -4	検出面	陶器	折縁深皿				古瀬戸	暗灰	灰釉	15c	瀬戸・美濃
453	B	—	IV	B IV 検 -5	検出面	土器	播鉢	(27.2)			土師質播鉢、内面に摺目あり	暗褐	—	15c	在地産
454	B	—	IV	B IV 検 -6	検出面	白磁	皿		3.3		中国産か	白～灰	白磁	15c	中国産?
455	B	—	IV	B IV 検 -7	検出面	青磁	壺類	(21.4)			漆継痕、輸入青磁	淡灰	青磁釉	15c	中国産?
456	A	—	V	A V トレンチ -1	トレンチ	須恵器	杯		5.9		底部見込みに墨書「本意」	暗灰	—	9 c	在地か
457	A	—	V	A V 検 -1	検出面	須恵器	杯	13.2	6.8	3.7	内面火だすき	灰	—	9 c	在地か
458	A	—	—	A 排 -6	排土	青花	皿		(5.7)		漆継ぎあり、高台端部砂目、外面高台付け根 1 重圏線	白	染付	16c 末～17c 初	中国
459	A	—	—	A 排 -7	排土	青花	皿		(6.3)		高台端部砂目、内面 1 重圏線	白	染付	16c 末～17c 初	中国
460	A	—	—	A 排 -8	排土	青花	皿		(7.05)		高台端部砂目、外面 2 重圏線、底部見込みに刷毛状ナデ、漆継ぎあり	白	染付	16c 末～17c 初	中国
461	A	—	—	A 排 -9	排土	青花	皿か		(6.7)		外面一重圏線	白	染付	16c 末～17c 初	中国
462	A	—	—	A 排 -2	排土	陶器	向付(唐津)		(4.3)		見込部に鉄絵	暗褐	鉄絵	16c 末～17c 初	唐津
463	A	—	—	A 排 -3	排土	陶器	鉢(黄瀬戸)		(8.3)		底部目跡あり	淡黄灰	灰釉・銅緑釉	16c 末 大窯IV	黄瀬戸
464	A	—	—	A 排 -4	排土	陶器	水指か(美濃伊賀)				漆継ぎか? 穿孔あり	暗灰	灰釉	不明	美濃伊賀?
465	A	—	—	A 排 -10	排土	土製品	双六駒か泥面子か	2.2		0.6	全面指ナデ調整	暗褐	—	不明	不明
466	A	—	—	A 排 -1	排土	土師器	葉味入か		2.1		ナデ調整(ロクロナデかは不明)	淡褐	—	不明	不明
467	A	—	—	A 排 -5	排土	陶器	茶入または合子	4.9			内外面全面鉄釉	白	錆釉	不明	瀬戸・美濃
468	B	—	—	B 排 -1	排土	陶器	壺		6.1		底部見込みに墨書あり	白	灰釉	不明	瀬戸・美濃
469	A	—	—	A 攪乱 -1	攪乱	陶器	植木鉢		(20.45)		底裏に墨書あり「大門村 倉 □ 金治郎」	白	灰釉	19c か	瀬戸・美濃

表 15 軒丸瓦一覧表

No	注記番号	検出面	地区	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	径 (cm)	家紋	珠文の数	内面調整	備考
1	2371	I	A	検出面		(9.4)		9.4	連珠左巻三つ巴	12	不明	棧瓦
2	2372	I	A	検出面	4.2			13.5	連珠左巻三つ巴	不明	不明	
3	2345	I	A	検出面	4.3			13.0	連珠右巻き三つ巴	10	不明	
4	2444	III a	A	整地層中			2.1	18.0	連珠左巻三つ巴	24	瓦当面と丸瓦部接合部に強いヨコナデ	瓦当面に被熱痕顕著
5	2455	III b	A	整地層中			2.3	(17.7)	連珠左巻三つ巴	24	瓦当面と丸瓦部接合部に強いヨコナデ、瓦当面裏面はナデ調整、瓦当裏面周縁部ナデ 1 周	瓦当部表・裏面に被熱痕顕著
6	2460	III b	A	整地層中	(16.1)		2.9		不明	—	瓦当部と丸瓦部の接合部に強いヨコナデ、広端部両側に挟りあり	瓦当部欠損、被熱痕あり

表 16 平瓦一覧表

No	注記番号	検出面	地区	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	顎厚さ (cm)	文様	特徴・調整等
7	2373	I	A	検出面			1.8		不明	「勝」の刻印あり
8	2412	II	A	土 136			2.2	5.5	中心三つ葉文唐草文	軒平瓦、瓦当裏面の平瓦接合部のヨコナデ顕著、平瓦部ナデ調整
9	2461	III b	A	検出面	(19.7)	(13.1)	1.8		—	凹面：ヨコナデ、周縁部は縁に沿ったナデ調整、刻印 1 か所あり、凸面：縦方向のナデ調整

A区I検 町屋2

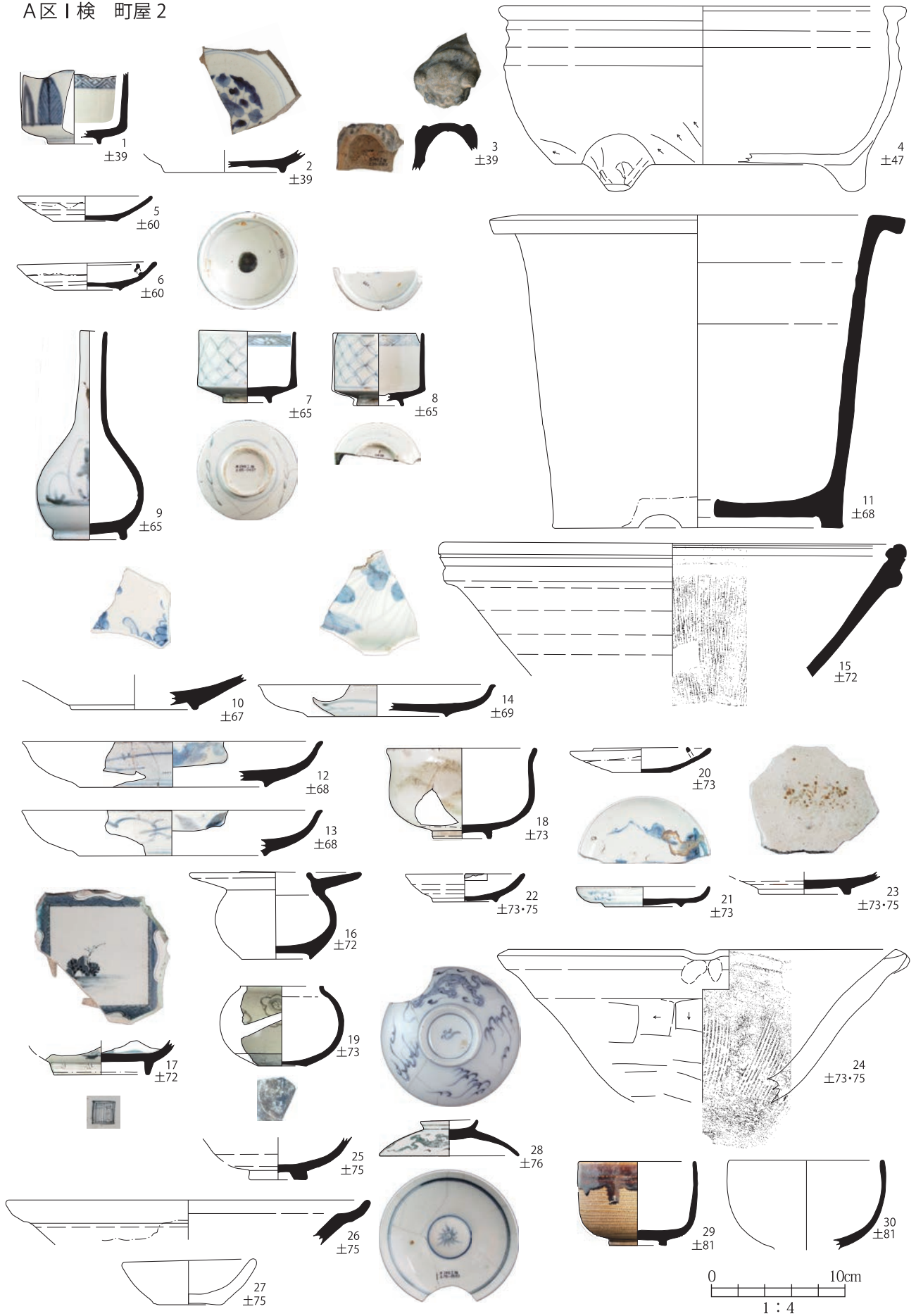
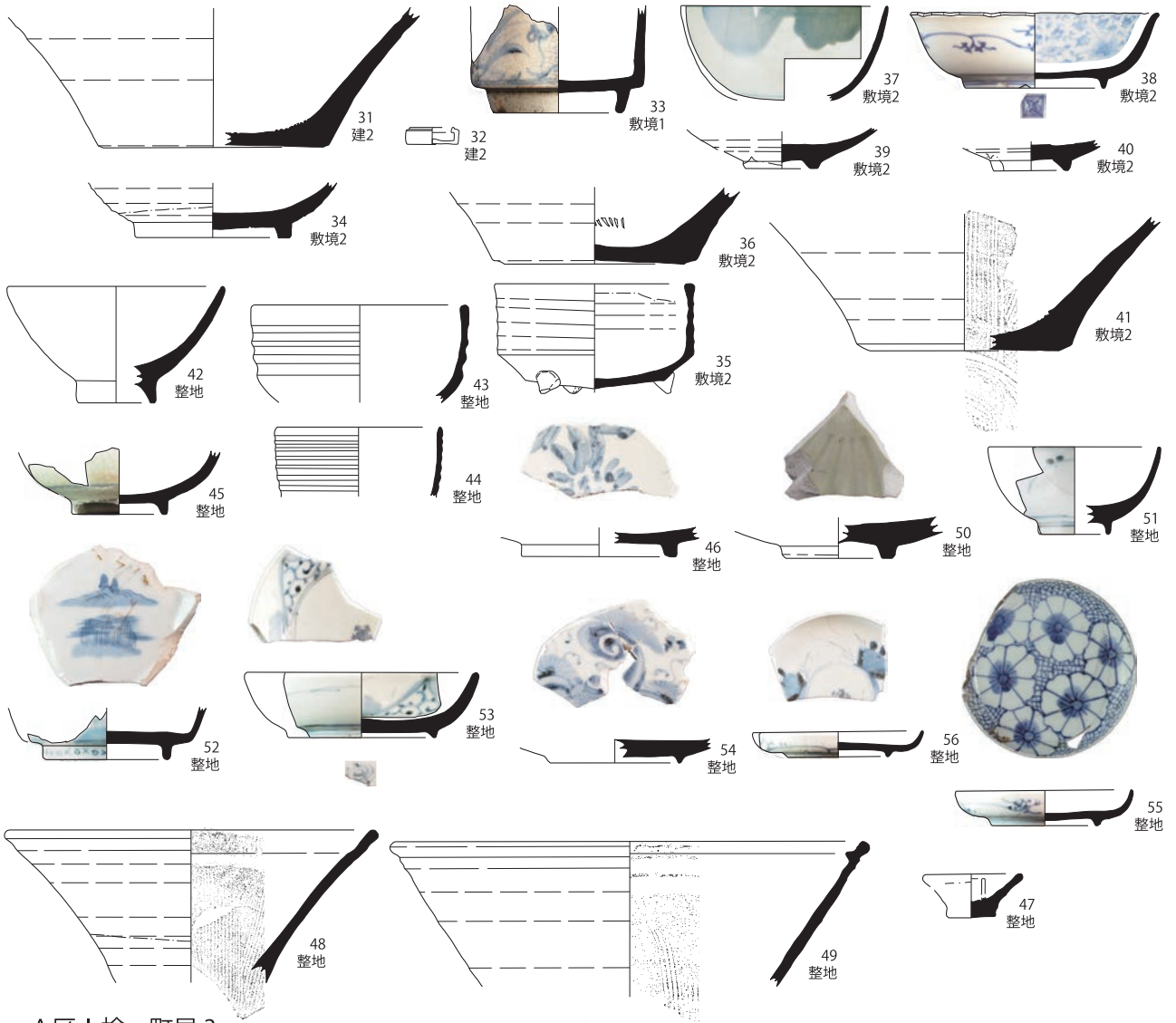


図 37 土器・陶磁器 (1)

A区I検 町屋2



A区I検 町屋3

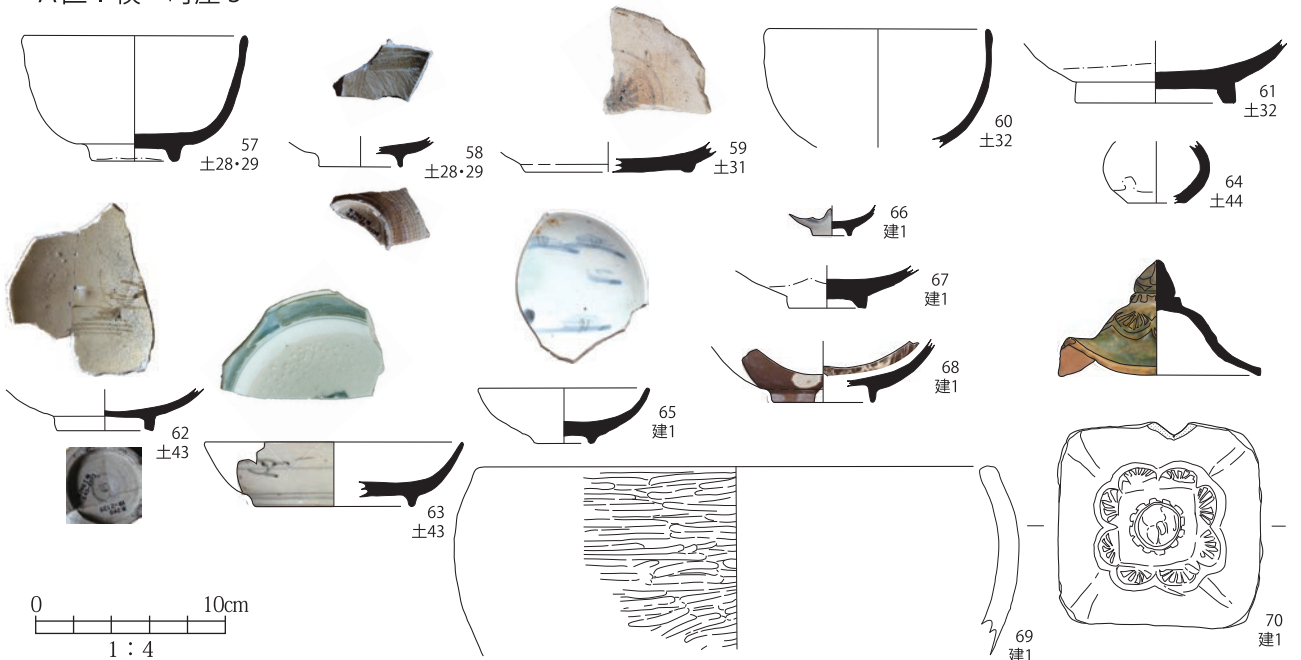
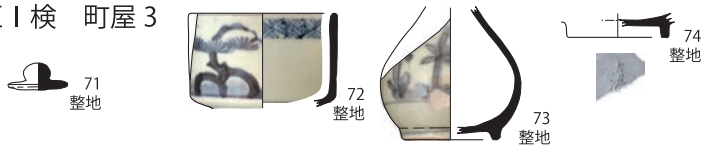
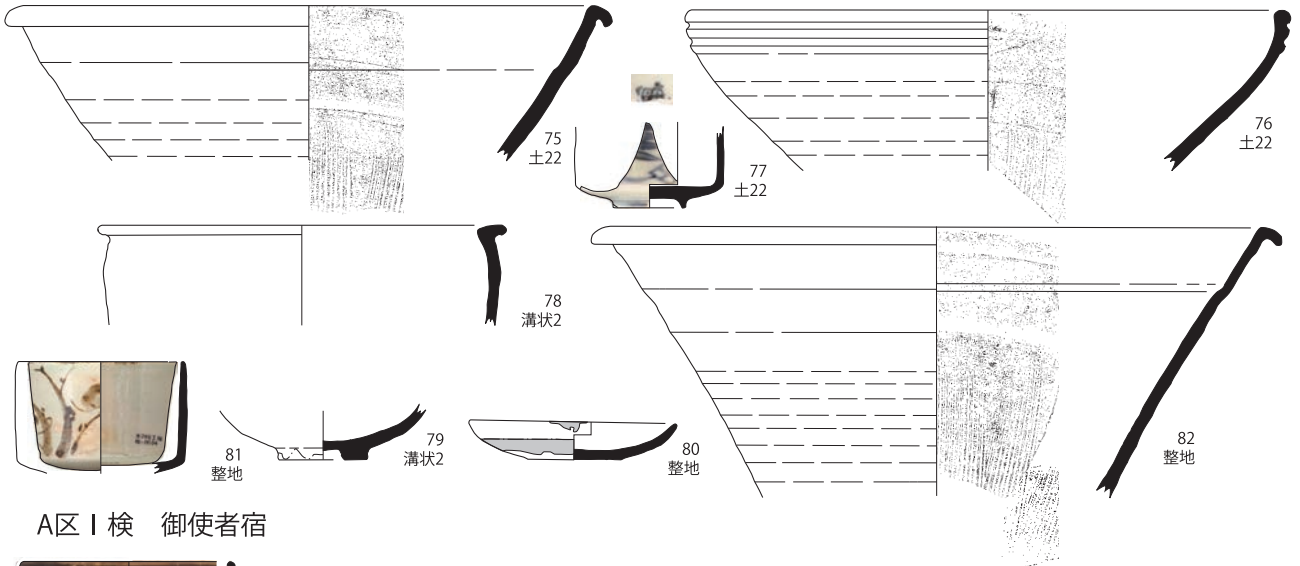


図 38 土器・陶磁器 (2)

A区I 検 町屋3



A区I 検 町屋4



A区I 検 御使者宿



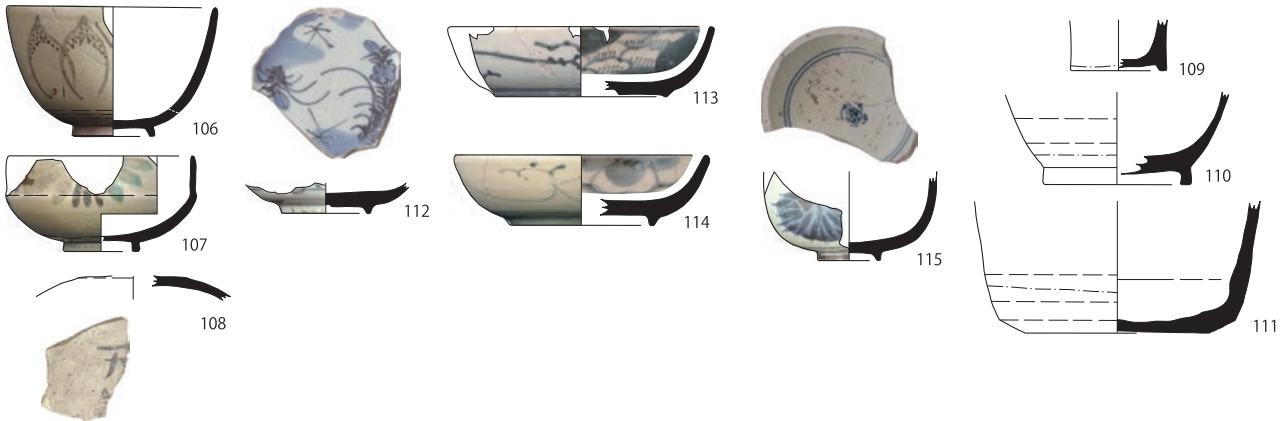
A区I 検 検出面(整地層)



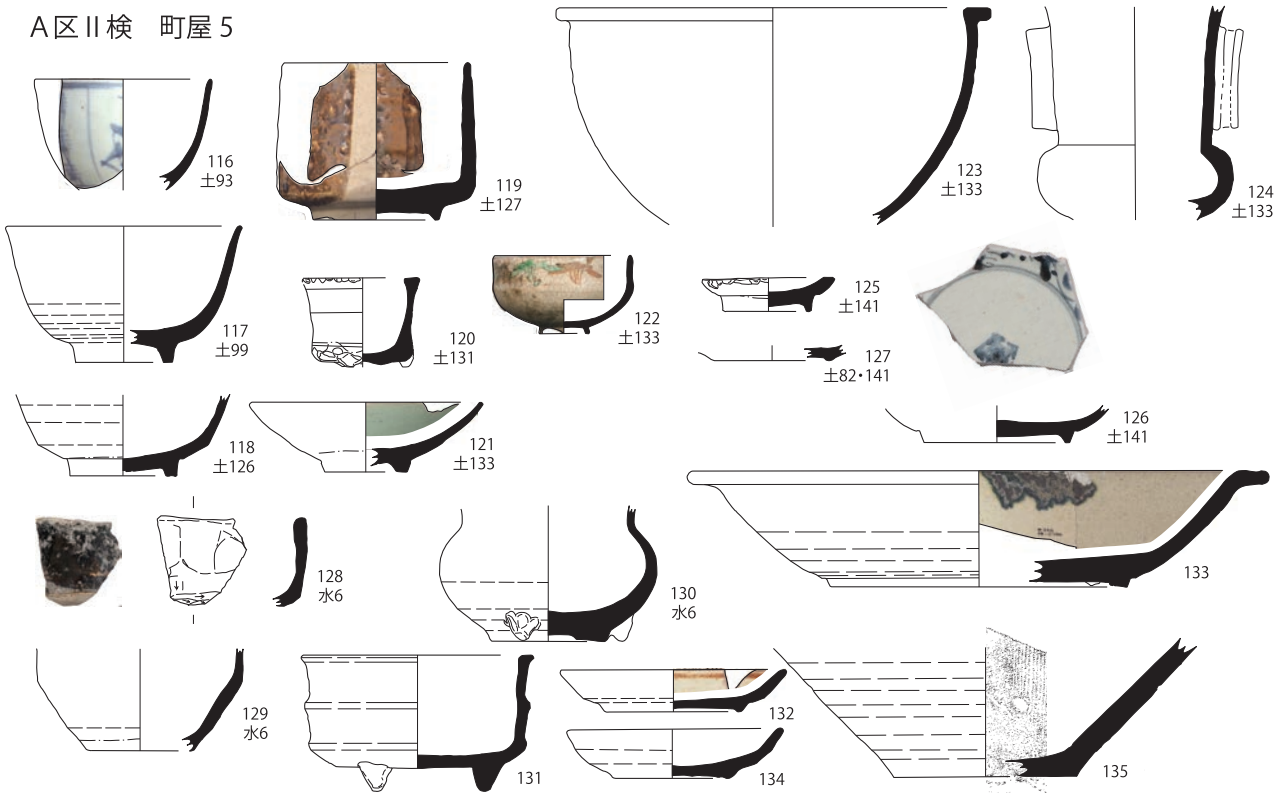
図39 土器・陶磁器(3)



A区I検 検出面 (整地層)



A区II検 町屋5



A区II検 町屋6

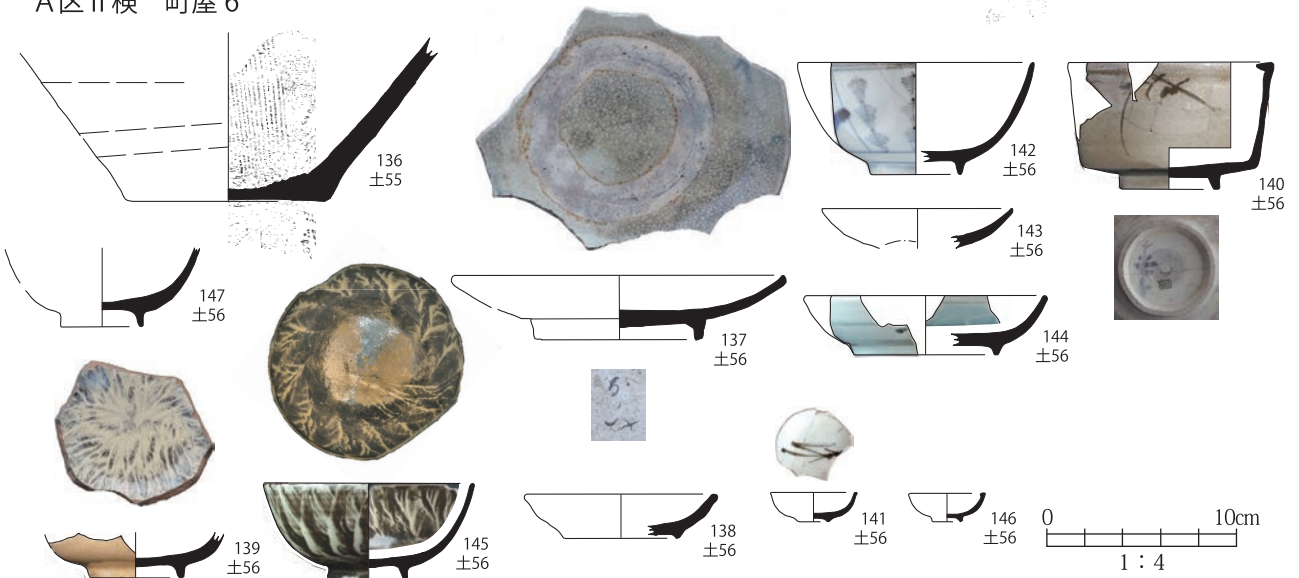
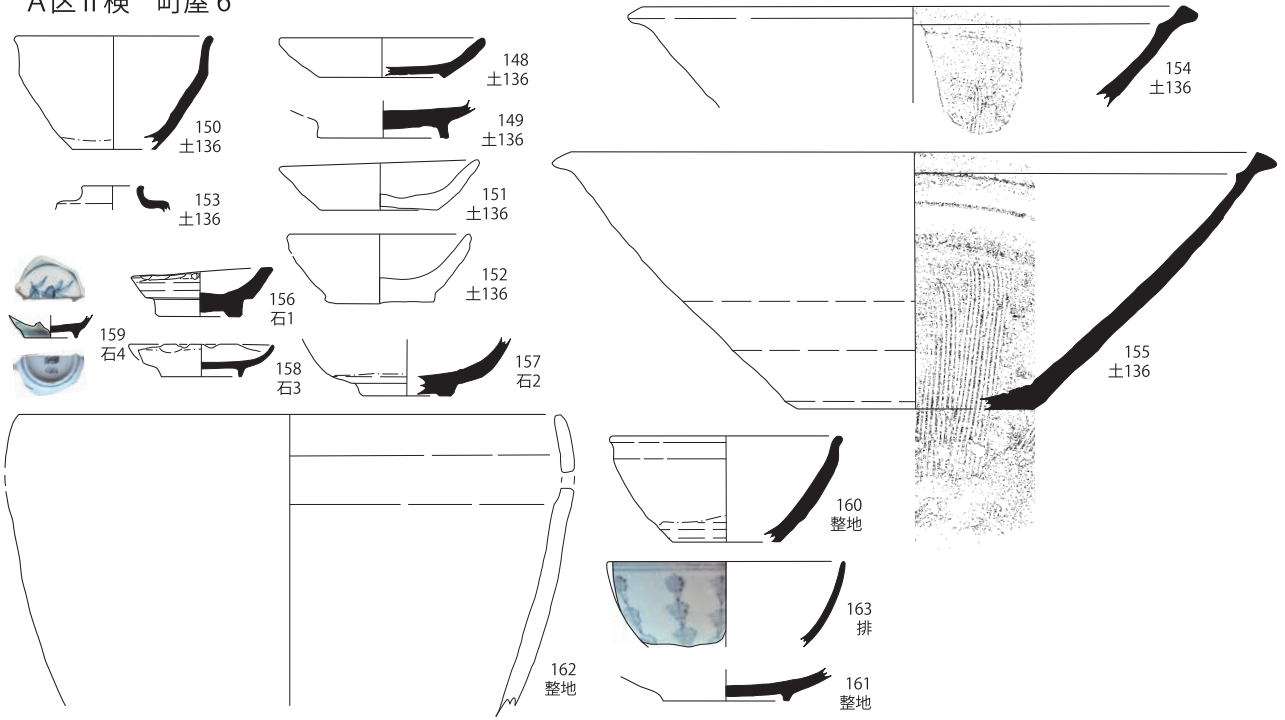


図40 土器・陶磁器(4)

A区II検 町屋6



A区II検・B区I検 御使者宿

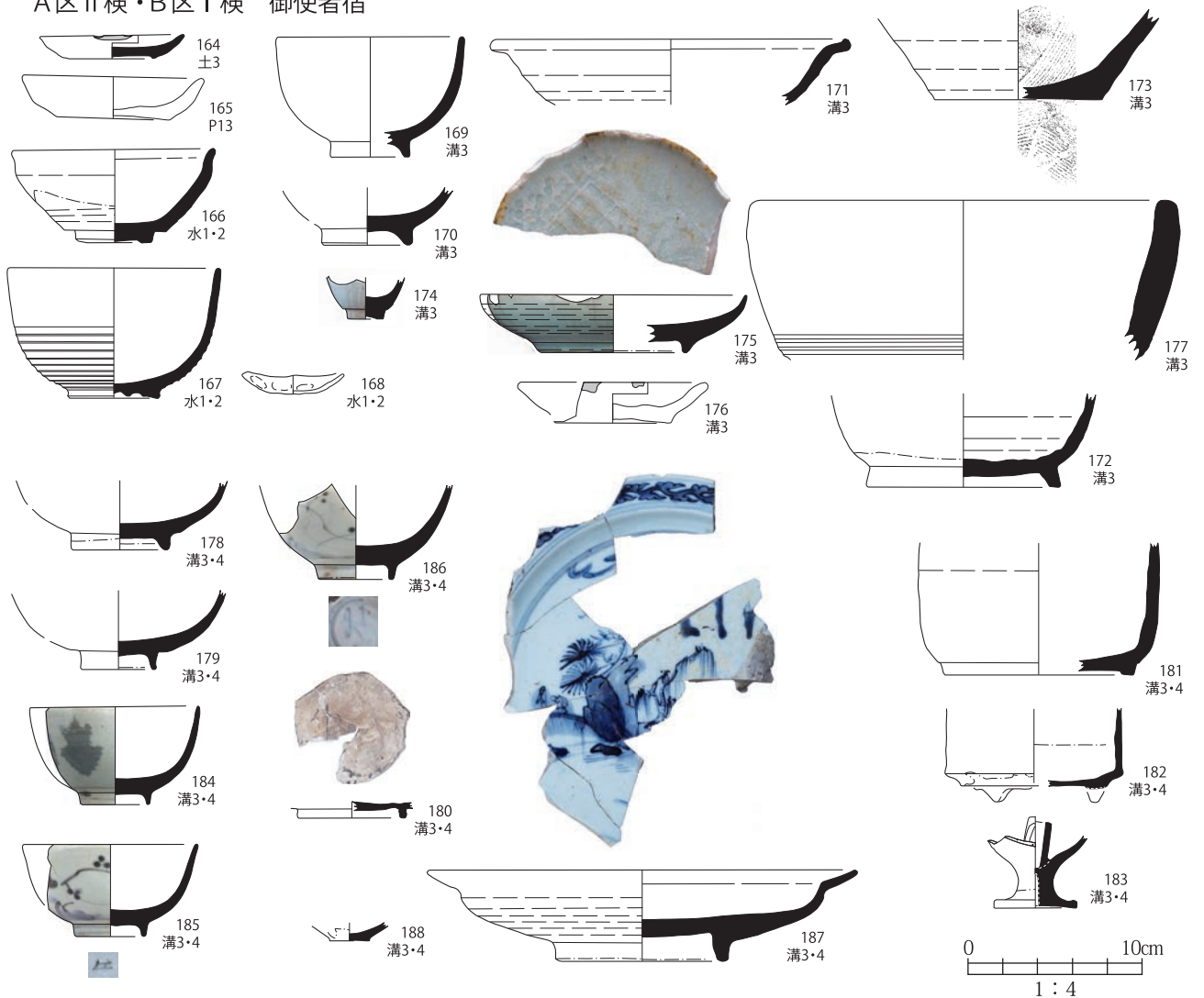


図41 土器・陶磁器(5)

A区II検・B区I検 御使者宿

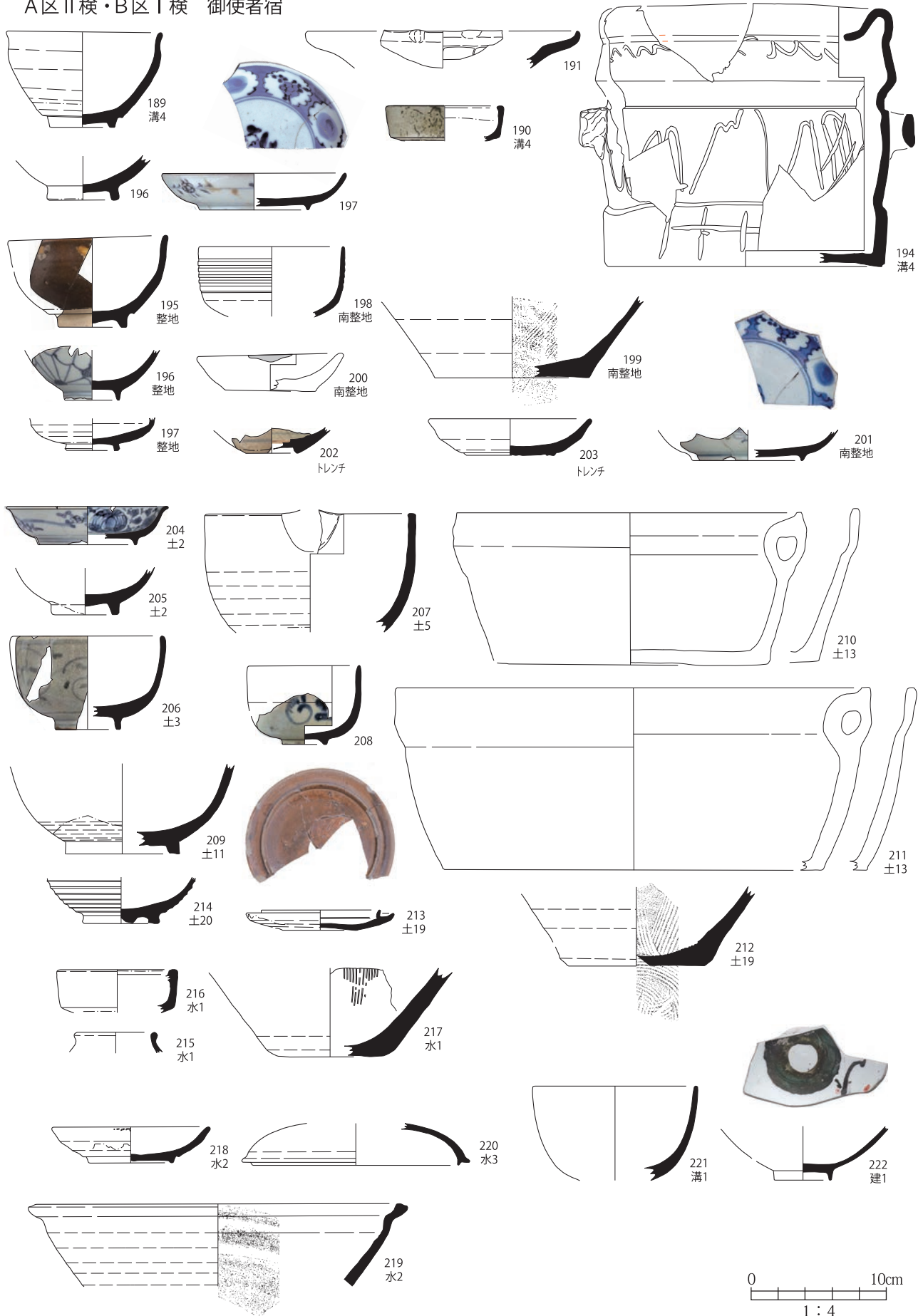
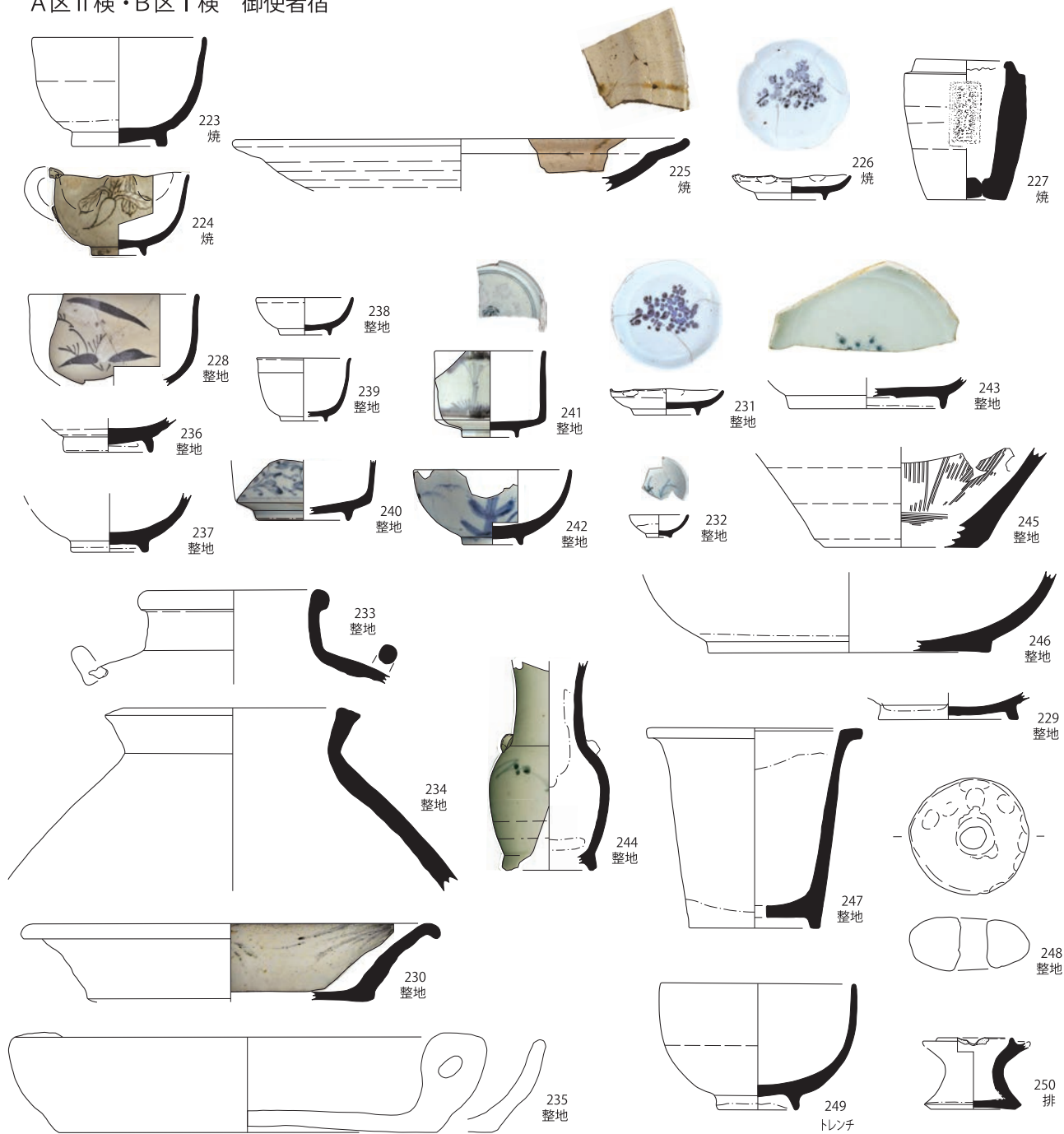


図 42 土器・陶磁器 (6)

A区II検・B区I検 御使者宿



B区II検 御使者宿

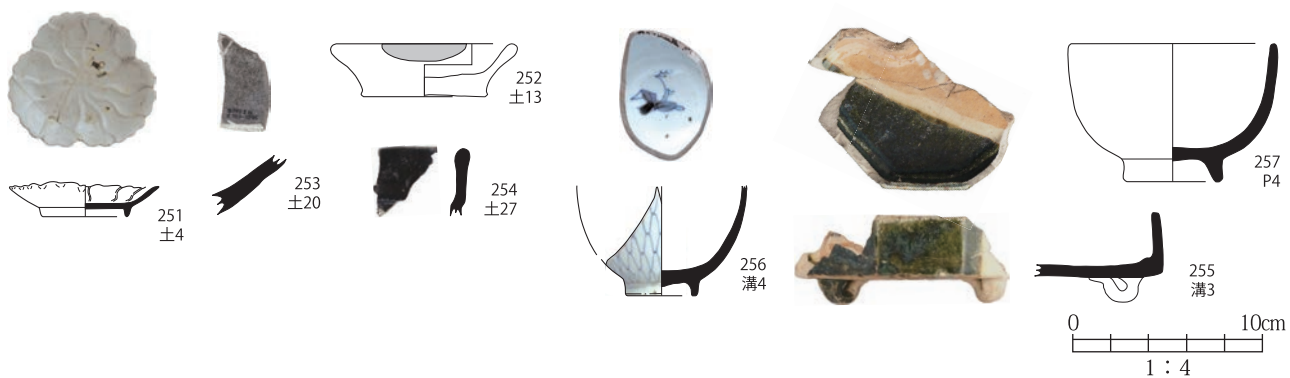
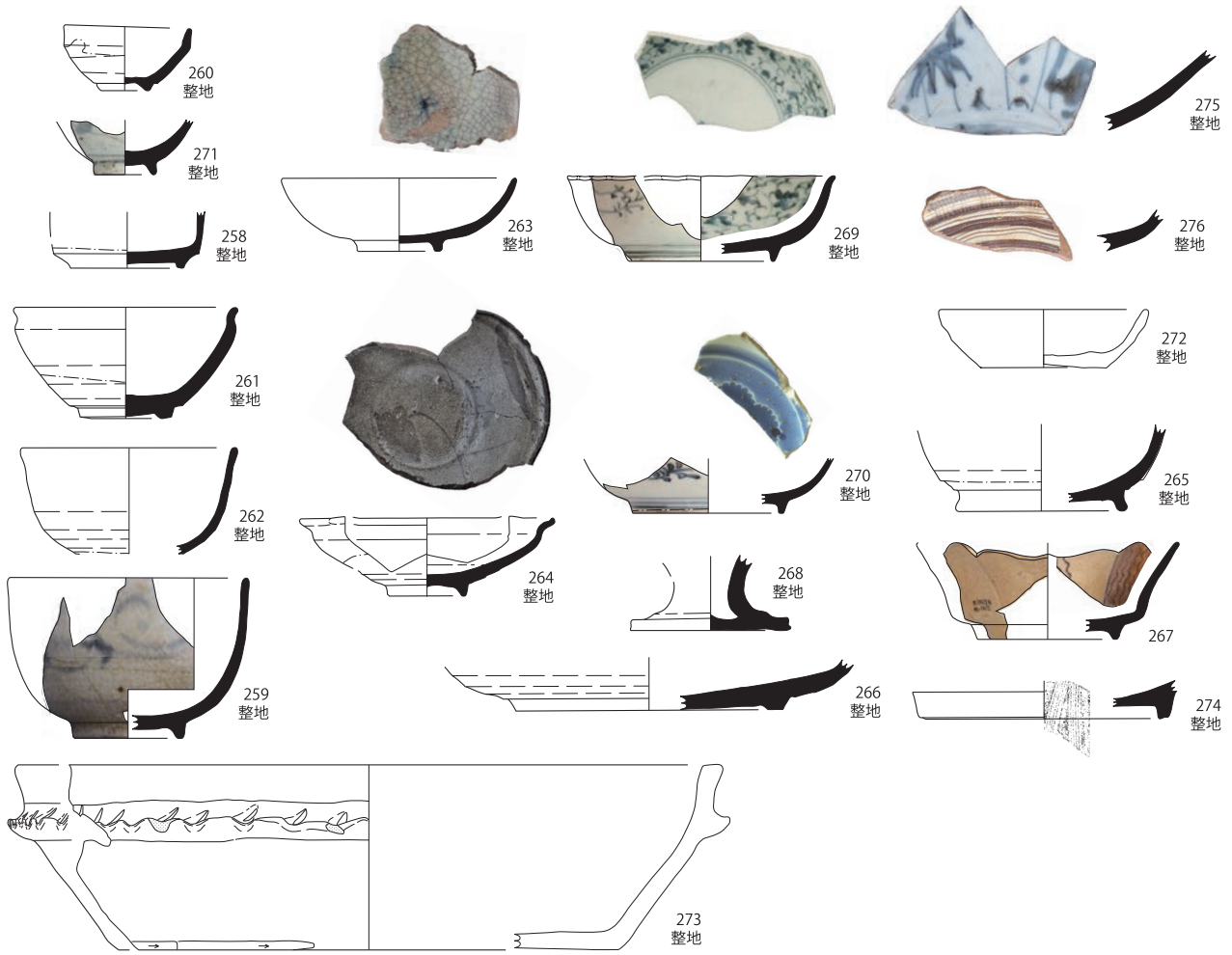


図43 土器・陶磁器(7)



A区II検・B区I検 御使者宿（整地層）



A区III a

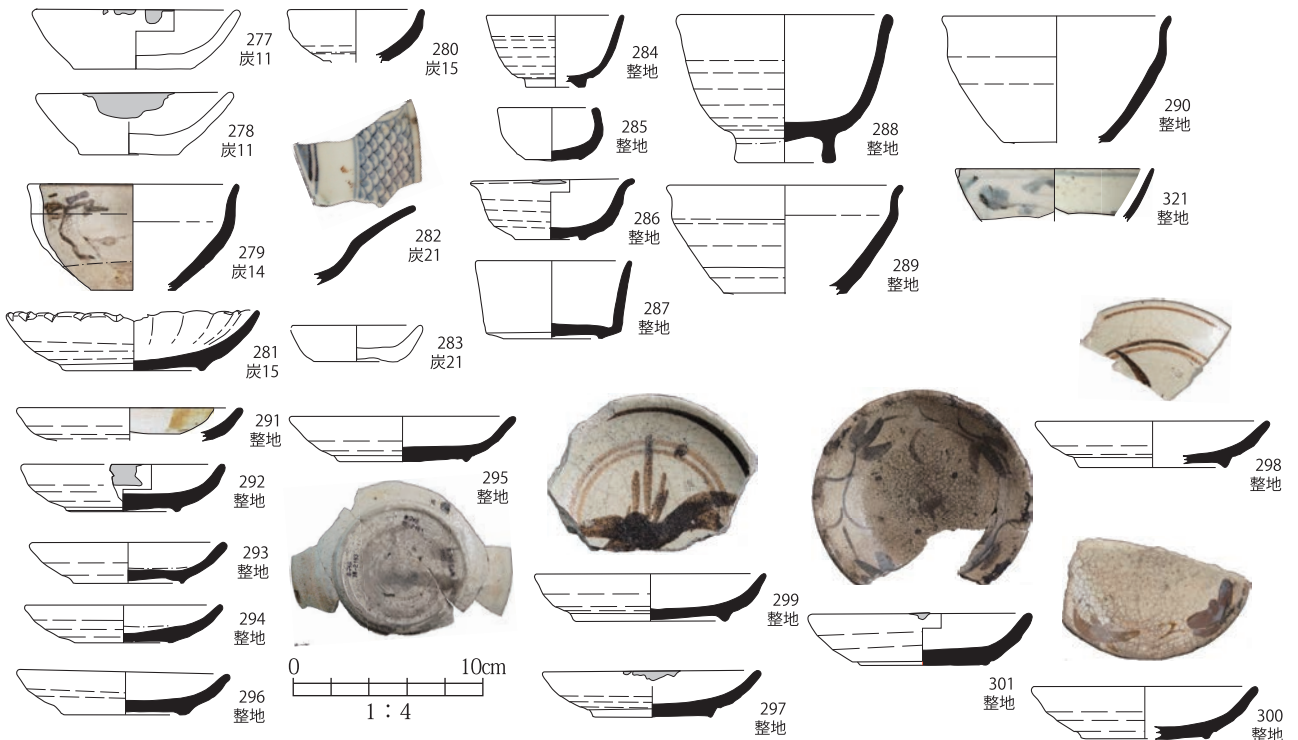


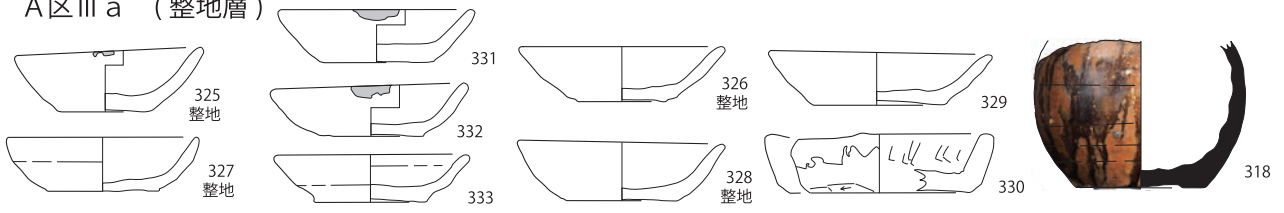
図44 土器・陶磁器(8)

A区III a (整地層)

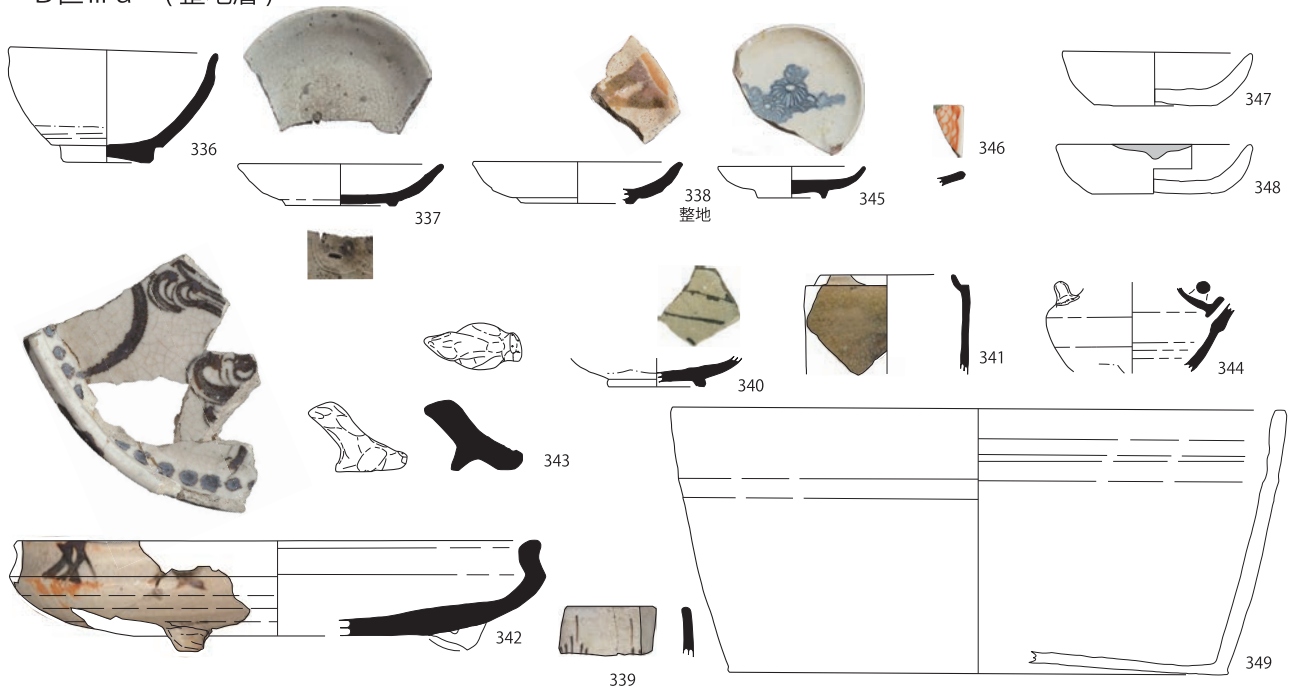


图 45 土器・陶磁器 (9)

A区III a (整地層)



B区III a (整地層)



A区III b (整地層)

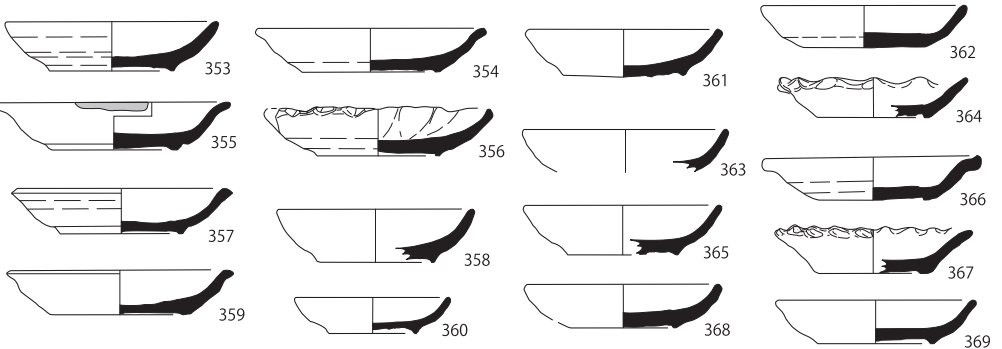
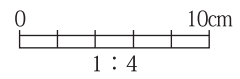
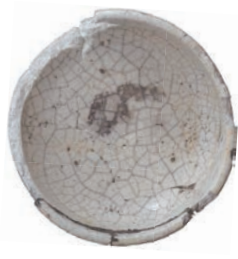
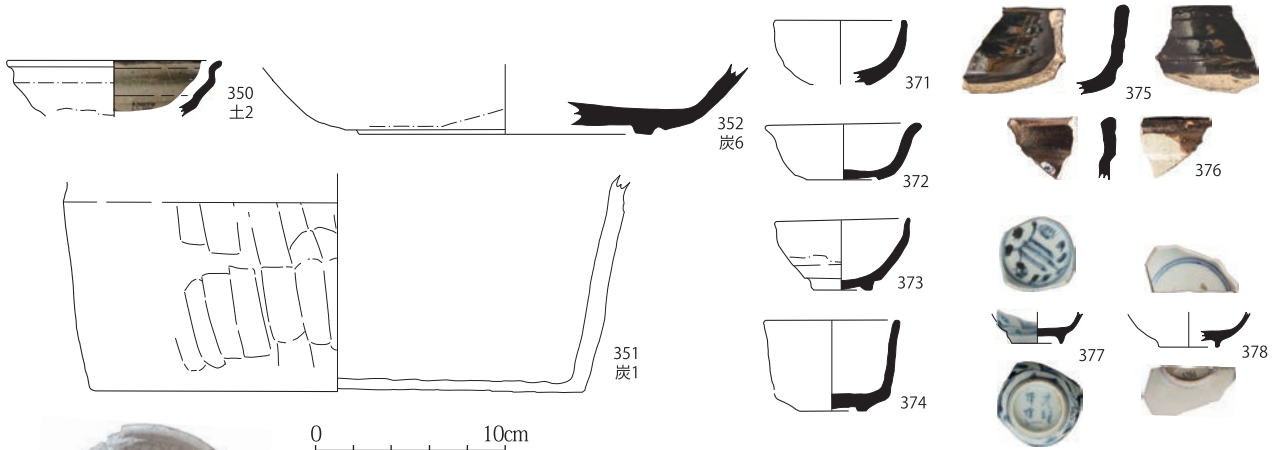
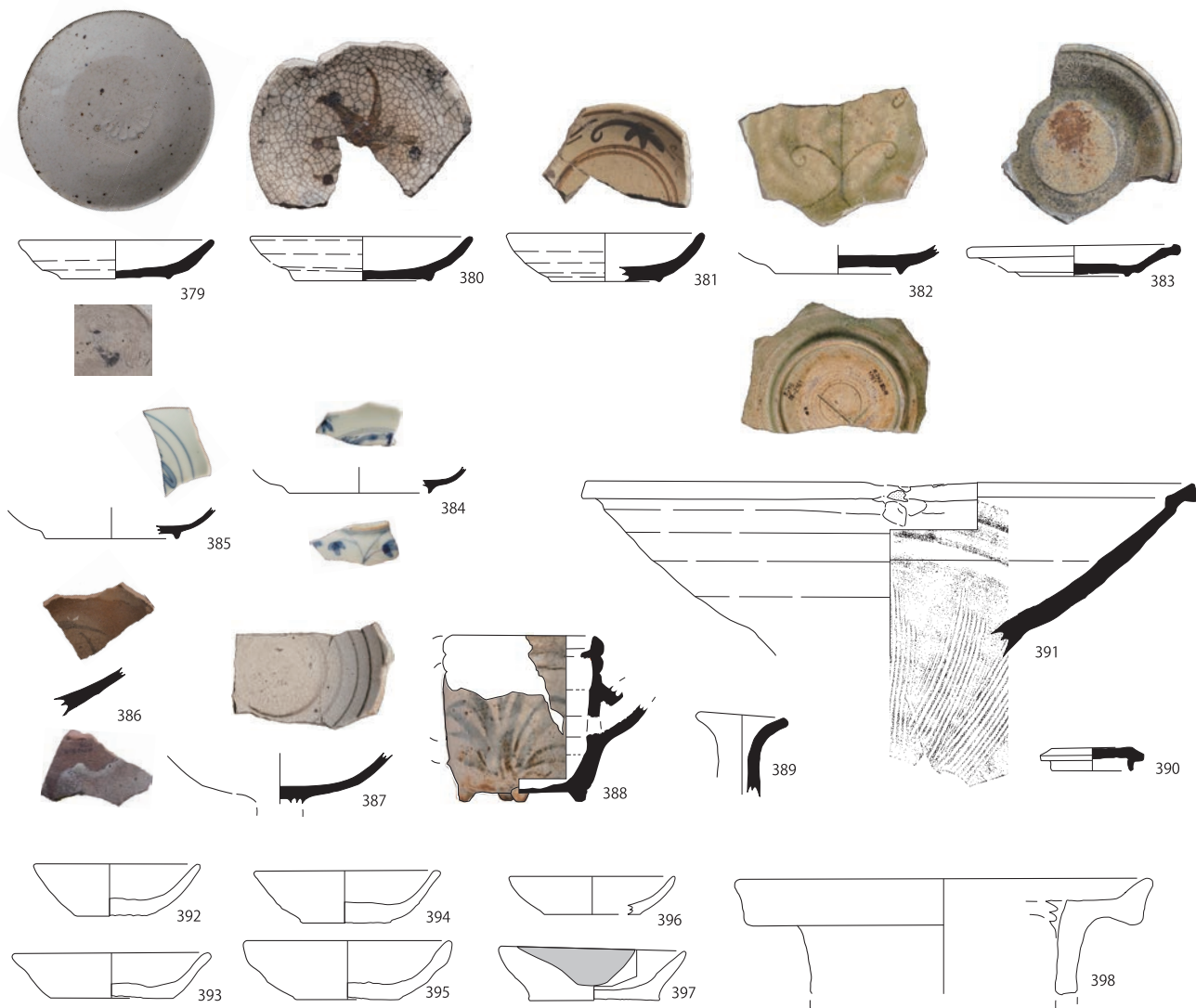


图 46 土器・陶磁器 (10)

A区III b (整地層)



B区III b (整地層)

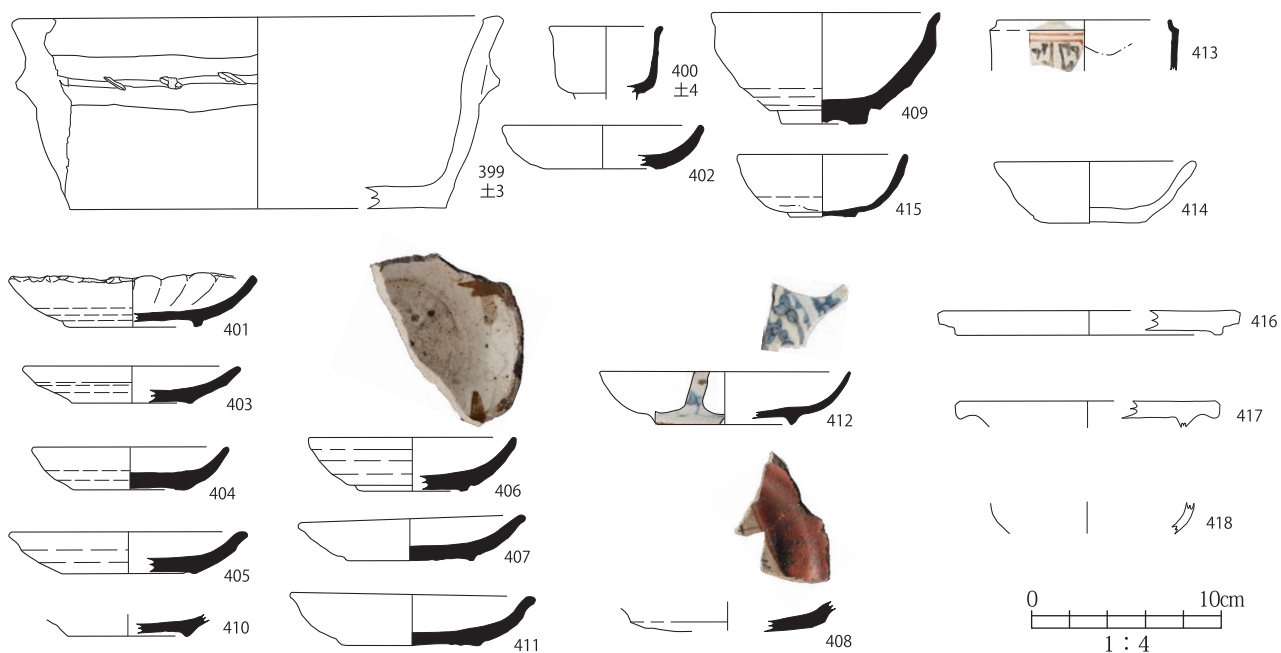
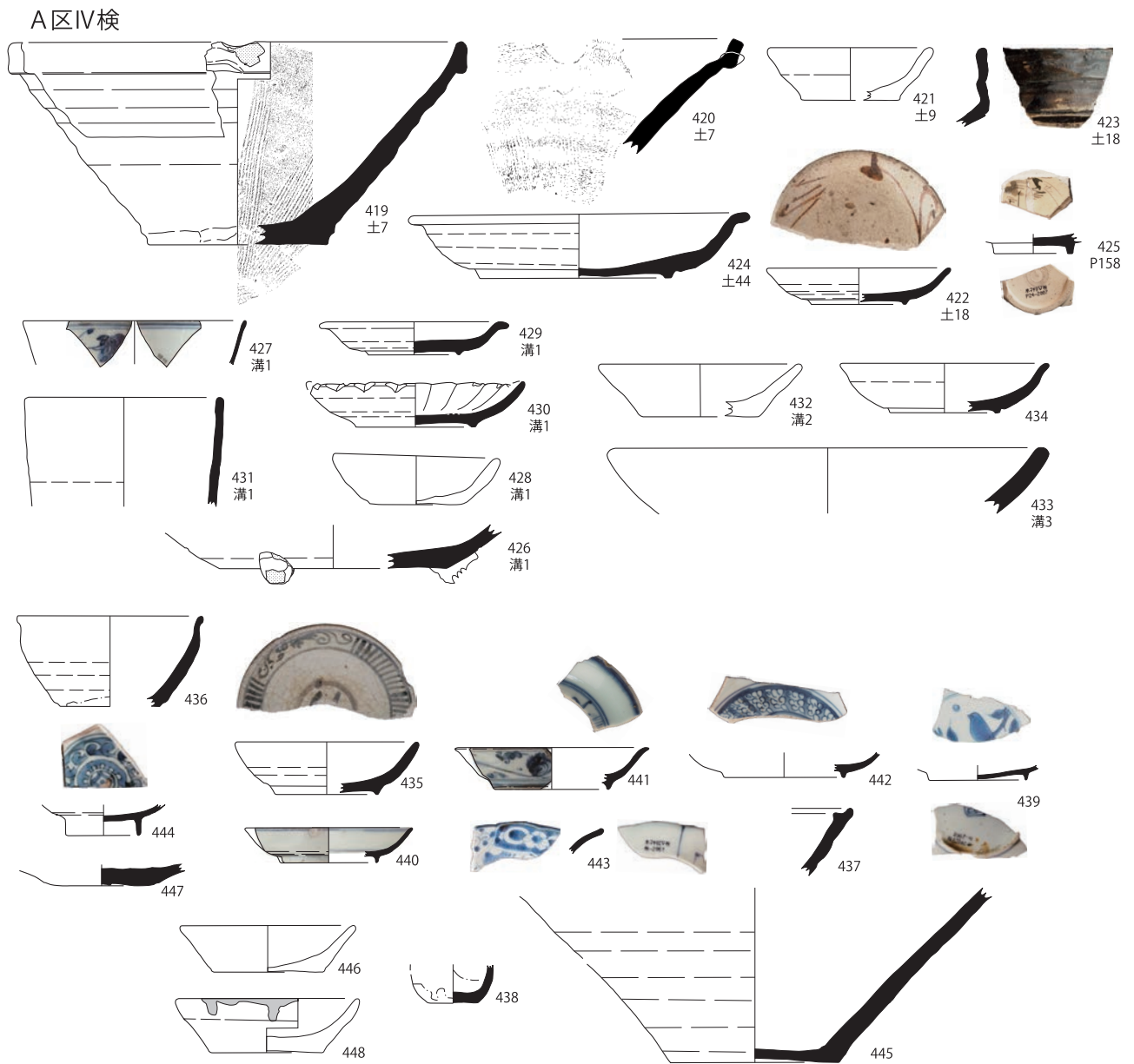
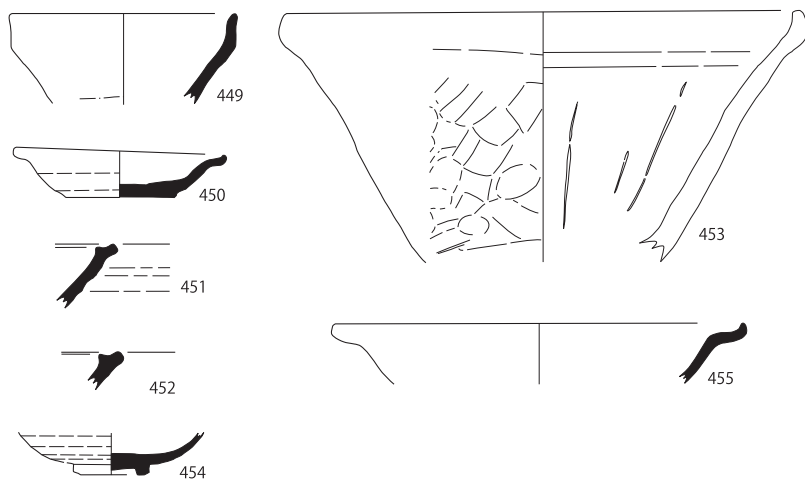


图 47 土器·陶磁器 (11)





B区IV検



A区V検

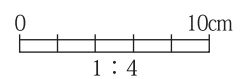


图 48 土器・陶磁器 (12)

排土 (A·B区)

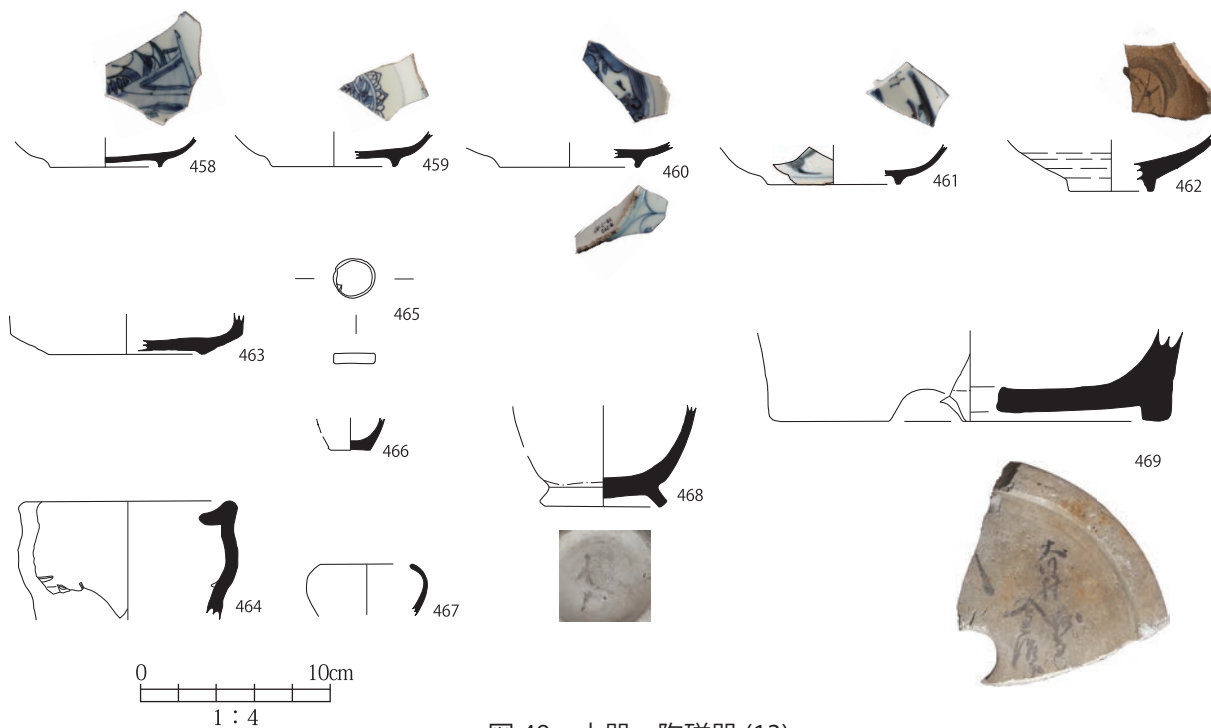


图 49 土器·陶磁器 (13)

瓦

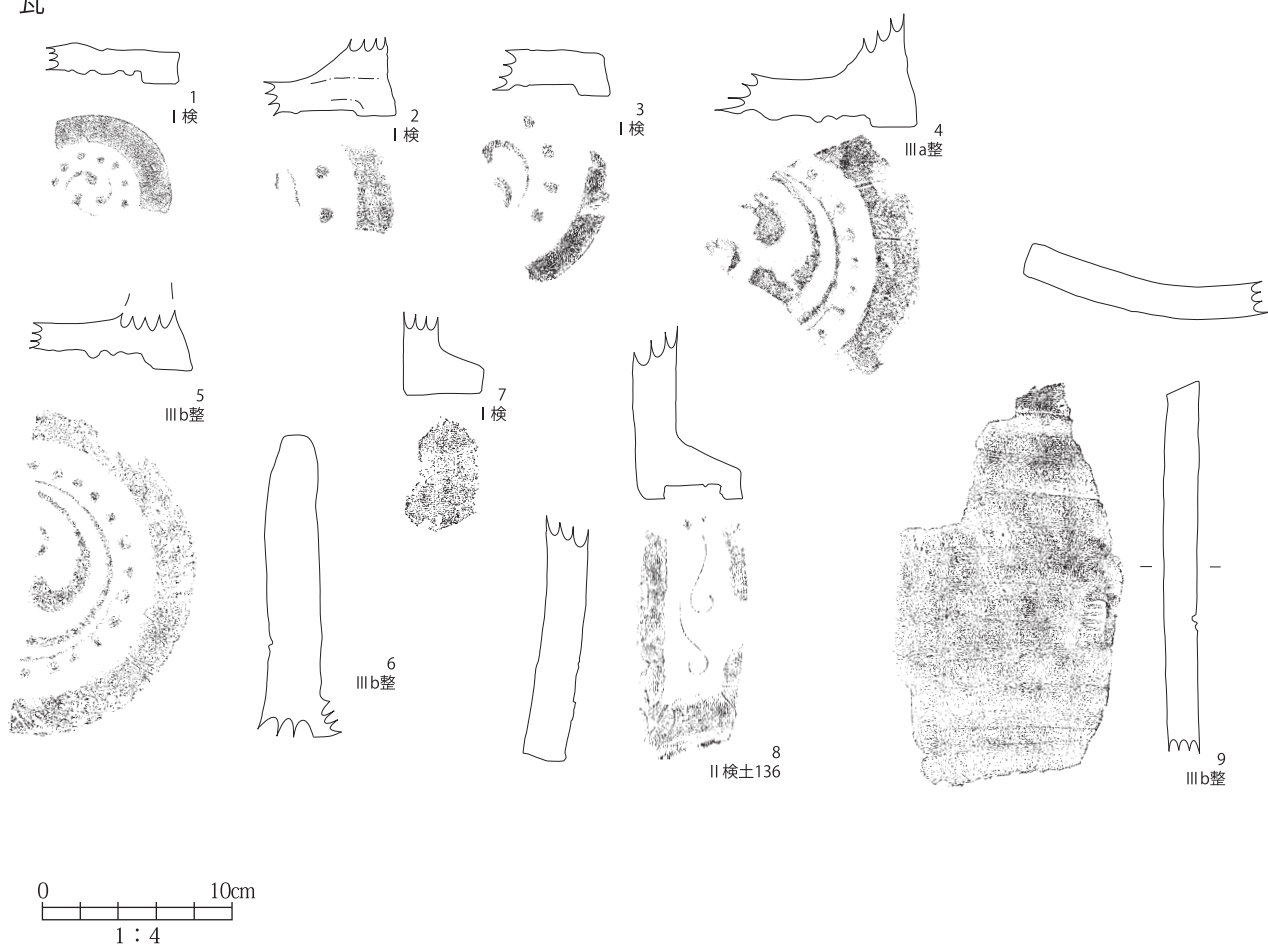


图 50 瓦

### 3 木製品（表 17、図 51～57、写真図版 14～17）

今回の調査では、調査区全体から 603 点の木製品が出土した。このうち本報告書では、遺存状態の良い 59 点を提示し、概要を述べる。出土資料の所属時期は、戦国期から江戸期にかけてのものと比定される。以下、器種別に記述する。

#### 下駄（1～18）

18 点を図化した。1 は A 区 I 検、3～5 は A 区 II 検、2 は B 区 II 検、6～11・13 は A・B 区 III 検、12・14～18 は A・B 区 IV 検から出土している。いずれもほぼ完形に近い連歯下駄である。隅丸長方形が多いが、6・7・16 は長円形を呈する。指頭圧痕ないし指腹圧痕は 16 以外ほぼ全てに残り、ノミによる整形加工痕も多数認められる。17 には表面に漢数字の一八に似た形の刻みがある。

#### 大型木製品（19～25）

概ね 25cm 以上のものとし、7 点を図化した。23・25 は A 区 I 検、19・21 は A 区 II 検、20・24 は A 区 IV 検から出土しており、22 は出土地点不明。19 は鋏の刃で、先端部には使用痕と思われる摩滅や欠損が認められる。20・23 は篋で、20 は先端部がやや潰れている。全体に漆の痕跡とみられる朱色の付着物が残る。23 は先端部に欠損があり、全体に平らに加工されている。21 は鋏の柄と思われる棒状木製品で、側面には加工痕が認められる。22 は櫛と考えられるが正確な用途は不明。板目板材で、幅の広い部分は片側の側面が尖り、柄の断面は中央が四角く、先端付近は円柱状に加工されている。24 は杓子で、表裏面に黒漆が塗られている。先端部は漆が剥げ、摩滅している。25 は柄杓の柄の可能性のある角柱状木製品。板目角材で、全体に加工痕が認められる。

#### 漆製品（26～34）

9 点を図化した。26～28・32・33 は A 区 I 検、30・31・34 は A 区 II 検から出土している。29 は I 検出土だが正確な地点は不明である。26 は黒漆塗りの皿で、口縁の一部を欠損。全体にやや歪んでいる。27～29 は椀。27 は内外下地に朱漆、その上に黒漆を施す。28 は内面朱漆、外面黒漆を施し、外面には金で松紋様の蒔絵が描かれている。ゆがみは少ない。29 は内外両面の下地に黒漆、その上に朱漆を塗り、歪みが多い。底部中央に黒漆で「上」の文字が書かれている。30・31 は膳の脚で、30 の表面はほとんど剥がれているが黒漆の痕跡が残る。全体に加工痕が認められる。31 も漆の大部分が剥がれている。膳との接続用と思われる出っ張りが認められる。32 は折敷と考えられる。全体が朱漆塗りで、縁には下地の黒漆が認められる。表面には金および黒漆で菊紋様が描かれている。欠損が激しい。33 は札で、側面まで全て黒漆が塗られる。中央部には径 1mm の穴が 2 か所開き、針金状の金属が穴に通されて輪の形に付着する。34 は台形上の柾目板材で、全体に黒漆が塗られた用途不明品。

#### 文字資料（35～45）<sup>文献 9</sup>

11 点を図化した。35～38・40・41 は A 区 I 検、39・44・45 は A 区 II 検、42・43 は A 区 IV 検から出土している。全て板材で、柾目（35・36・39・40・42・44）、板目（37・38・41・45）、追柾目（43）がある。ここでは 37～39・43 について記述する。37・38 は表裏両面に墨書が見られ、中央付近に径 2 mm 程度の穴が穿たれている。37 は「□□松本 山久 大坂屋久次郎 名古屋堀部孫右衛門殿」「信の夜」、38 は「□□□ 松本 山久 大坂屋久次郎（郎カ）名古屋堀部孫右衛門殿」「信のや」と判読でき、ほぼ同内容である。「山久」の字は、山のような記号の下に久の文字を組み合わせて一文字で表現される。店屋の表号で「大坂屋久次郎」の「久」をとったものと思われる。裏面に書かれた「信の夜」「信のや」は、商

店名と推定される。「名古屋堀部孫右衛門」宛の荷札であり、広範囲での取引が行われている様子が窺える。39・43は表裏両面に墨書があり、いずれも上部両側面に切込みが入れられている。39は「上 寺廿百之三 幸重郎」「徳□□寄」、43は「上 地百訖 半十」「徳□カ寄」と判読できる。「上」の字は、くにかまえの中に上の字、上部に漢数字の一を組み合わせ一文字で表現される。形状から荷札と考えられるが、内容が十分に釈読できていない。

#### その他木製品（46～59）

14点を図化した。46・50・53・56・59はA区Ⅰ検、48・49・54・55はA区Ⅱ検、52・58はB区Ⅲ検、47・51・57はA区Ⅳ検から出土している。46・47は篋で、ほぼ完形。46は柁目板材、表面には加工痕・刃物痕が多数あり、両端部には使用痕とみられる摩滅・欠損が認められる。47は板目板材で、側面には摩滅およびささくれ立った箇所が認められる。48は用途不明の棒状木製品。柁目板材で、断面は逆三角形を呈し、両先端が細く尖る。49はしゃもじで、小口が切り落とされ、側面には加工痕が認められる。柄の先端が欠損している。50は削り出しの丸木材で、用途不明。中心部には角釘が刺さる。側面及び縁には加工痕があり、釘が飛び出た部分の反対の面は摩滅している。51は人形代と考えられる。表面全体に加工痕が認められる。52は完形の男根状木製品である。柱状で全面に加工痕が見られる。53は匙と考えられ、全体に加工痕が残る。54は柁目角材を加工した用途不明品。全体に工具での加工痕が残る。55・56は柁目角材の用途不明品。55の形状は三角形に近く、中央は四角形の穴が開いている。釘穴と考えられる穴が2か所あり、片方には釘が貫通している。56は障子のレールの一部とも考えられる形状で、全面に加工が施されるが、摩滅や圧痕が残る。57は篋で、先端部は薄く尖らせているが、それ以外の側面部は角を面取りしている。58・59は用途不明品。58は棒状で削り出しの板目角材で、先端部に鉄分が付着しており、全体に加工痕が見られる。59は芯もち丸太材で、表面中央がすり鉢状に掘り込まれ、無数の工具痕が認められる。裏面にはのこぎり痕と思われる工具痕が残る。両面に深さ1～4cm程度の小穴があり、一部に黒く焦げたような跡が見られる。

#### 参考文献（文献番号第Ⅱ章の続き）

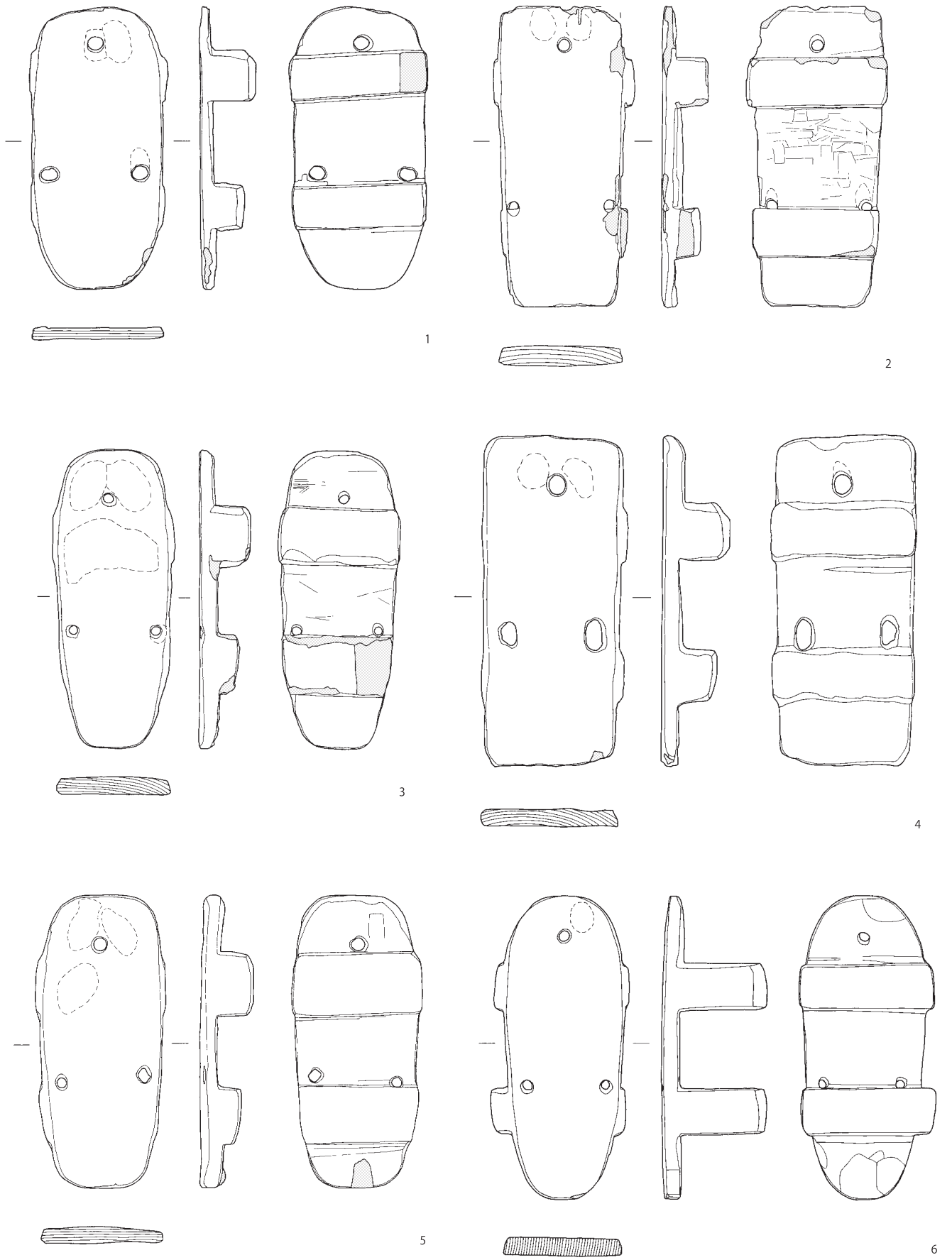
文献9 宮島義和 2018 「長野・松本城下町跡本町」『木簡研究』第40号 pp.65～67 木簡学会



表 17 木製品一覧表

ID	図 No.	区	検	遺構	出土地点	器種	手法	長・口径 (cm)	幅/底径 (cm)	厚・高 (cm)	破損状況	備考
10	26	A	I	検出面		漆皿		11.9	6.5	3.0	ほぼ完形	一部口縁欠損
11	32	A	I	検出面		折敷か?	板材	20.6	(12.7)	1.2	不明	朱漆に黒・金絵あり
12	33	A	I	検出面		漆札	板材	6.5	4.2	0.4	完形	黒漆塗り
13	35	A	I	検出面		木札	板材	6.0	4.7	0.6	完形	墨書あり
14	36	A	I	検出面		木札	板材	7.2	5.2	1.0	ほぼ完形	墨書あり
28	29		I	検出面		漆椀		13.5			ほぼ完形	ゆがみ有 高台つけ根径 6.0cm
35	40	A	I	土 22	No.9	木札	板材	15.8	3.8	0.6	完形	表裏面墨書あり φ 3mmの穿孔あり
38	56	A	I	土 36		不明	角材	8.5	3.5	5.1	不明	建築部材か
56	59	A	I	土 74	No.1	不明	角材	10.7		5.3	完形	正面が削り抜かれている
58	25	A	I	土 81		不明	板材	26.8	1.9	1.2	不明	
73	21	A	II	土 133		鎌の棒	角材	109.4	5.2	3.0	ほぼ完形	
75	1	A	I	検出面	No.11	下駄	角材	21.1	10.3	4.1	ほぼ完形	
78	46	A	I	検出面		篋	板材	15.9	3.3	0.8	ほぼ完形	
79	53	A	I	検出面		匙?	板材	(8.6)	0.7	0.4	完形	
80	23	A	I	検出面		篋	板材	28.8	5.5	1.0	ほぼ完形	
130	2	B	II	土 1	No.1	下駄	角材	22.4	10.5	3.4	ほぼ完形	角下駄
136	44	A	II	土 50		木札	板材	19.5	2.3	0.5	完形	墨書あり
137	55	A	II	土 50		不明	角材	5.9	9.2	2.2	ほぼ完形	
161	30	A	II	土 92	No.9	漆膳の脚	角材	5.2	14.0	2.1	完形	
172	31	A	II	土 92	No.25	膳の脚	角材	5.5	14.0	1.9	完形	
175	3	A	II	土 96	No.2	下駄	角材	22.3	9.1	3.8	ほぼ完形	片歯がかなり磨り減ってる
181	54	A	II	土 103		不明	角材	5.0	1.5	1.0	完形	
227	4	A	II	土 136		下駄	角材	22.5	10.1	4.6	ほぼ完形	角下駄
231	49	A	II	土 136		しゃもじ	板材	(11.3)	5.1	0.5	ほぼ完形	祭事用か
234	39	A	II	土 136		木札	板材	17.7	2.2	0.5	完形	表裏面墨書あり
246	34	A	II	土 136		不明	板材	11.9	4.1	1.3	完形?	
247	48	A	II	土 136		不明	板材	16.7	0.6	1.6	完形	
248	5	A	II	土 136		下駄	角材	21.8	9.7	3.9	完形	
249	19	A	II	土 136		鎌	板材	32.1	11.9	3.0	完形?	鎌の刃の部分
301	6	A	III a	検出面	No.136	下駄	角材	22.6	10.0	7.8	完形	高歯下駄
302	7	A	III a	検出面	No.137	下駄	角材	21.4	8.3	3.3	ほぼ完形	歯の摩耗強い
304	8	A	III a	検出面	No.140	下駄	角材	20.9	11.8	4.7	完形	
306	9	A	III a	検出面	No.149	下駄	角材	20.4	11.5	4.6	ほぼ完形	
376	10	B	III b	溝 2	No.10	下駄	角材	20.5	10.0	5.7	完形	
378	58	B	III b	土 2	No.2	不明	棒材	18.3	1.5	1.6	完形	
380	11	B	III b	土 3	No.4	下駄	角材	22.8	10.4	5.0	ほぼ完形	丸下駄
399	12	B	IV	検出面	No.413	下駄	角材	17.3	10.3	5.0	完形	
419	52	B	III b	検出面	北側	男根状木製品	角材	5.9	1.3	1.0	完形	
434	13	A	III a	検出面	No.117	下駄	角材	17.7	10.1	3.5	完形	
455	14	A	IV	溝 1	No.17	下駄	角材	21.2	11.4	4.9	完形	
458	24	A	IV	土 18	No.2	木匙	角材	28.9	8.1	1.5	完形	
459	15	A	IV	土 18	No.5	下駄	角材	22.0	10.0	4.6	完形	
467	20	A	IV	土 44		篋	板材	29.4	2.3	0.7	ほぼ完形	
468	57	A	IV	土 44		篋	板材	24.2	1.8	0.7	完形	
482	16	A	IV	土 76		下駄	角材	21.4	9.4	3.5	ほぼ完形	
483	17	A	IV	土 76		下駄	角材	22.5	10.1	3.2	ほぼ完形	中央部やや下に「へ」の字の刻印あり
484	42	A	IV	土 136	No.8	木札	板材	(15.2)	5.6	0.8	不明	表裏面墨書あり 穿孔 1箇所あり
485	43	A	IV	土 136	No.9	木札	板材	17.9	3.2	0.6	完形	表裏面墨書あり 側面に 2箇所切り込みあり
486	51	A	IV	土 136	No.10	人形	角材	10.3	3.5	1.3	完形	
488	47	A	IV	P 22	No.1	篋	板材	16.2	3.3	0.5	完形	
493	18	A	IV	溝 1	No.4	下駄	角材	20.4	11.0	6.3	完形	
549	22			出土地不明		櫛		107.0	12.8	3.0	不明	
552	50	A	I	検出面		栓?	丸木材 (削だし)	3.1		7.9	ほぼ完形	上面に鉄釘が刺さる
568	28	A	I	検出面		漆椀		12.0		9.2	ほぼ完形?	内面朱漆、外面黒漆。金の模様。ゆがみ多 局台つけ根 5.8cm
569	41	A	I	土 8	南側	荷札 (墨書)	板材	(14.3)	3.1	0.5	下部欠損	墨書あり 上部に φ 2mmの穿孔あり
571	37	A	I	土 81		木札	板材	22.6	5.9	0.8	完形	両面墨書 φ 2mmの穿孔あり
572	38	A	I	土 81		木札	板材	23.1	6.1	0.9	完形	両面墨書 φ 2mmの穿孔あり
573	27	A	I	検出面		漆椀		12.4	5.8	5.0	完形?	内・外下地に朱漆で黒漆
583	45	A	II	土 56	No.28	荷札 (墨書)	板材	13.5	3.3	1.0	完形	墨書あり φ 2mmの穿孔あり

※ ( ) 内数値は残存値を表す。



欠損

0 S=1/4 10cm

図51 木製品(1)

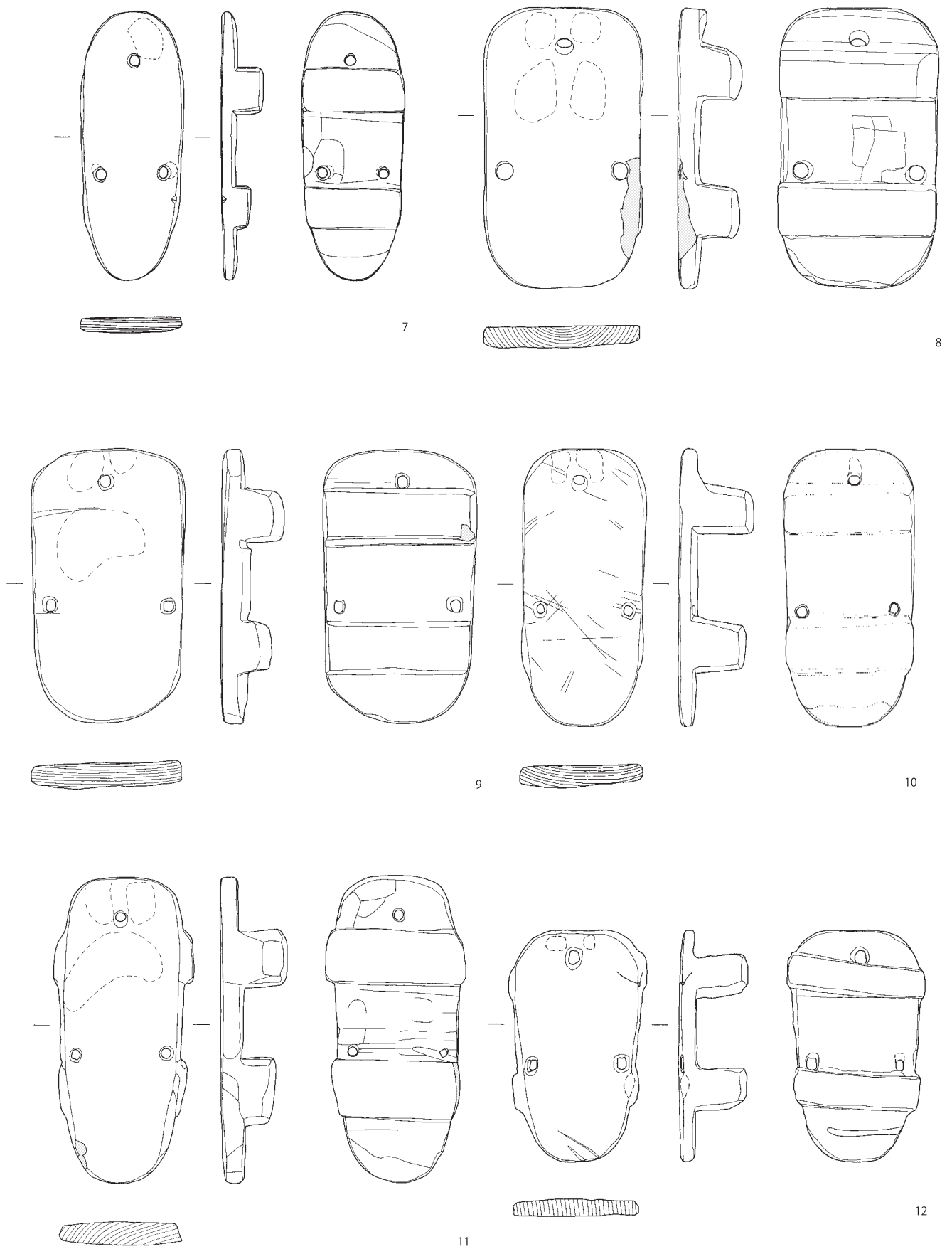
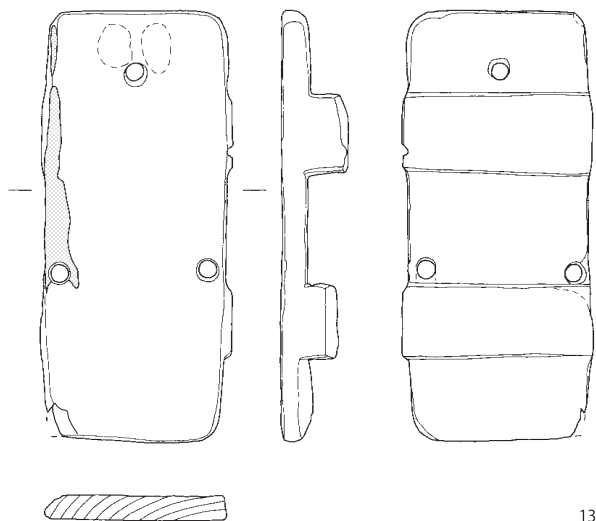
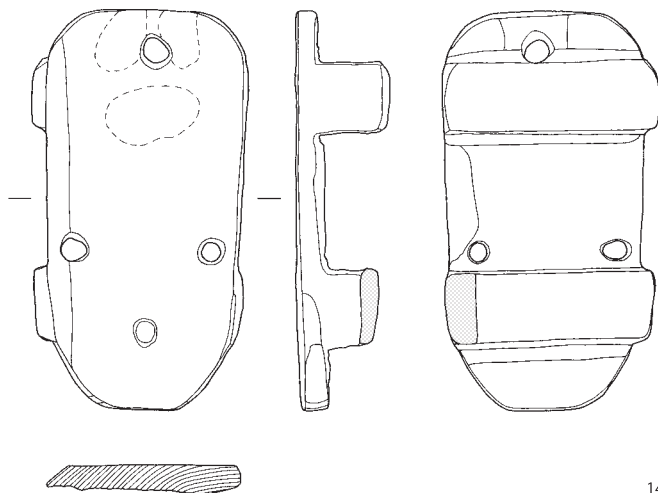


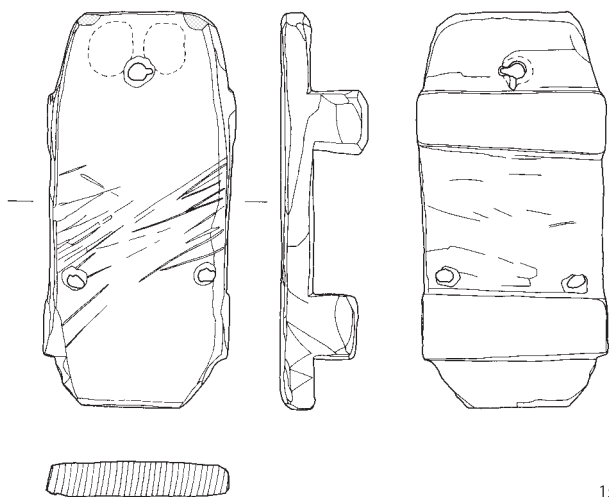
图 52 木製品 (2)



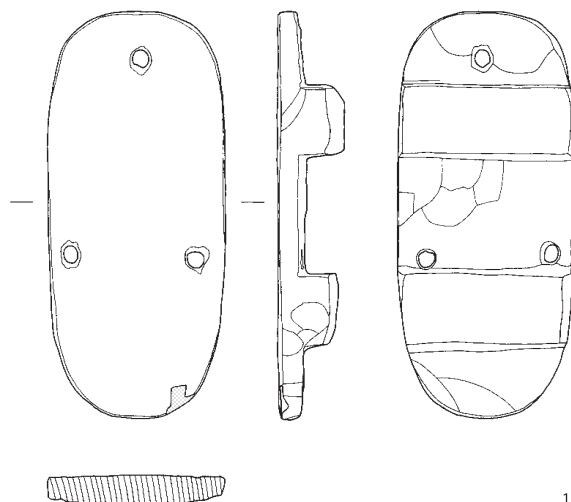
13



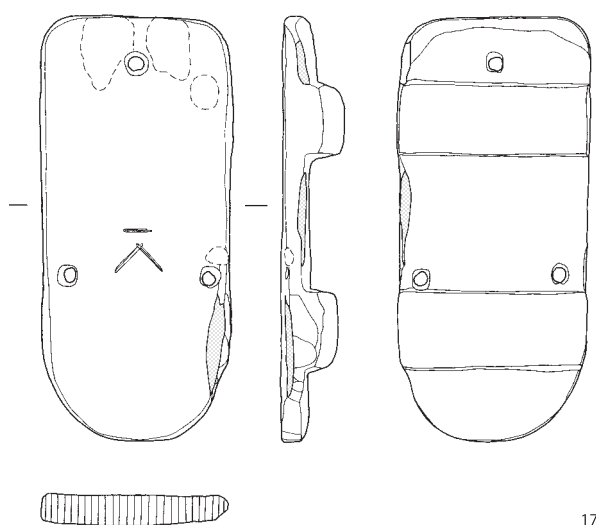
14



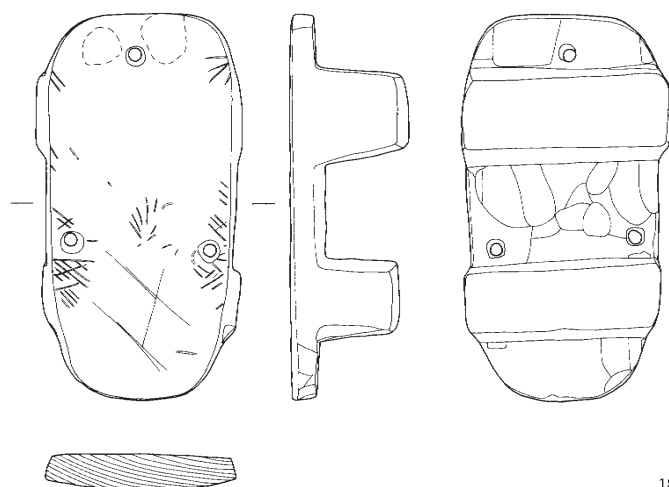
15



16



17



18



图 53 木製品 (3)



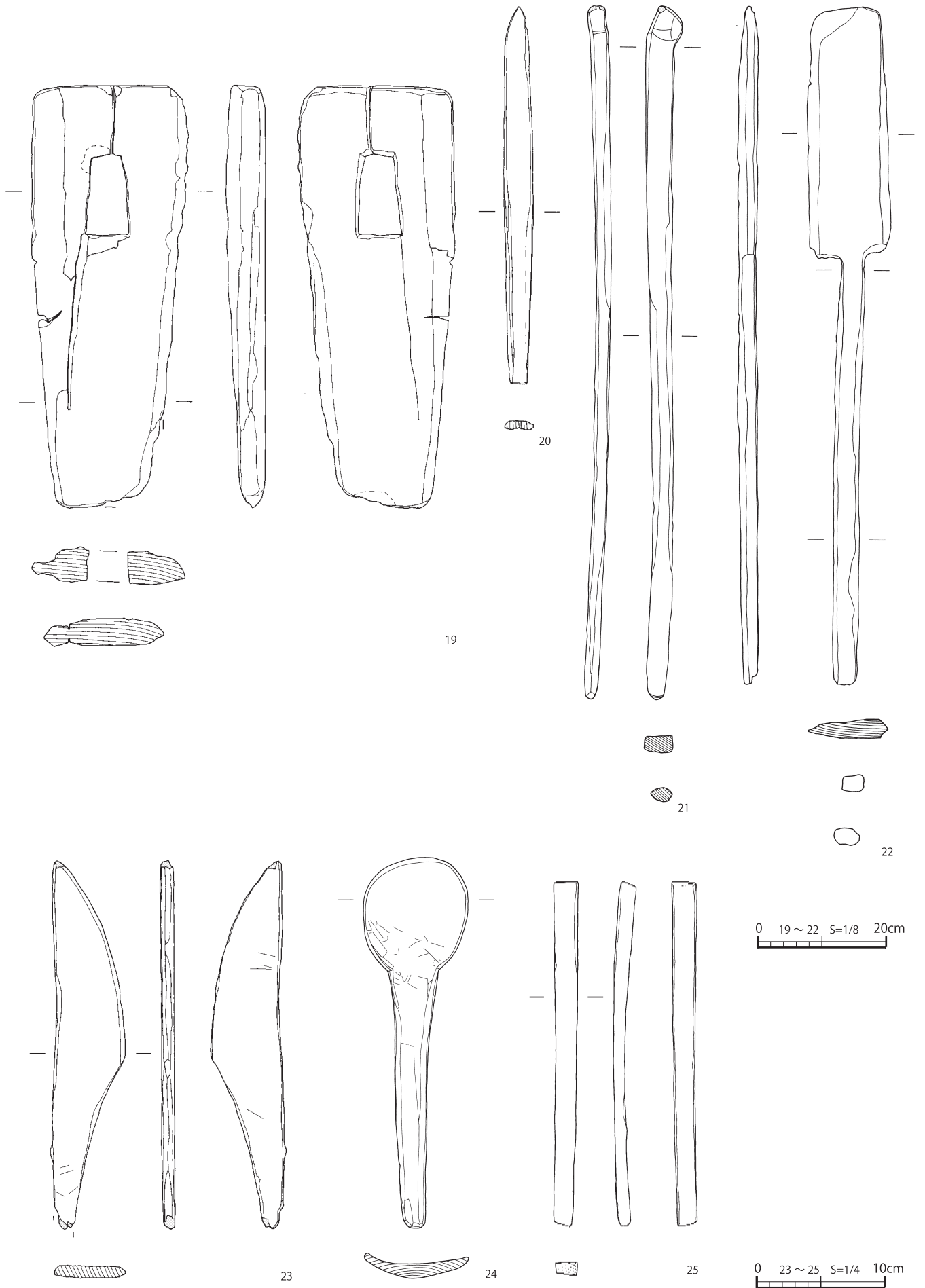
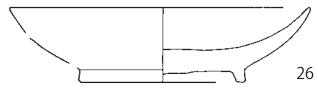
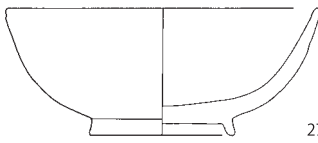


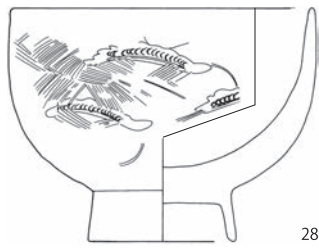
图 54 木製品 (4)



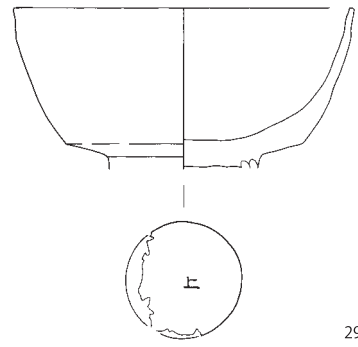
26



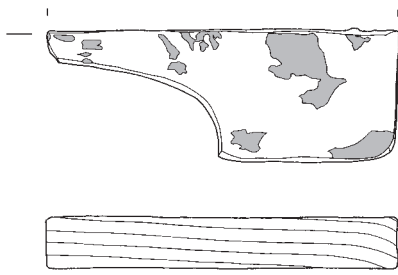
27



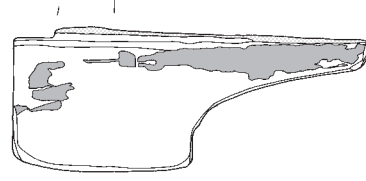
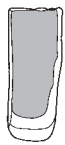
28



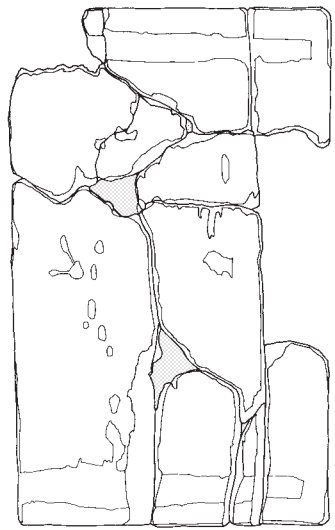
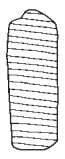
29



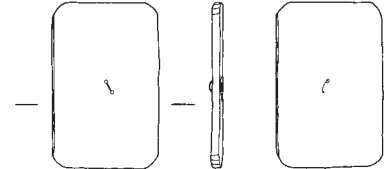
30



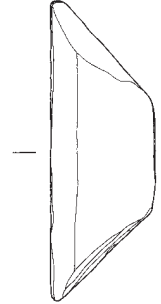
31



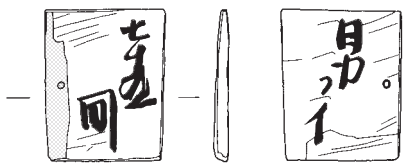
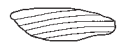
32



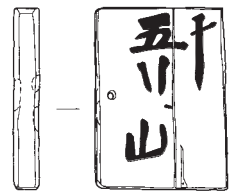
33



34



35



36

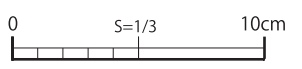
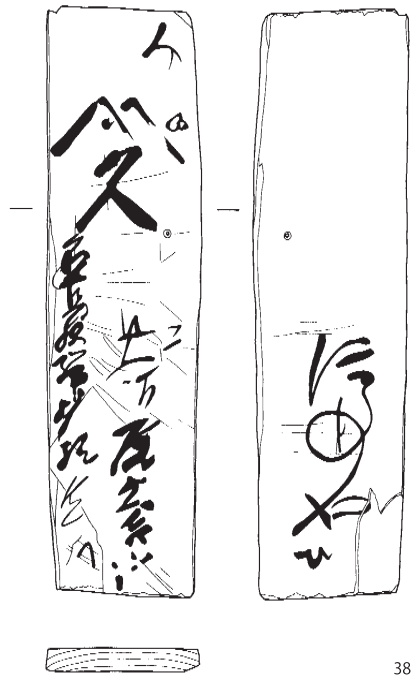


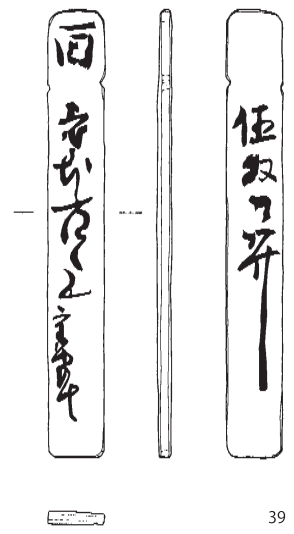
図55 木製品(5)



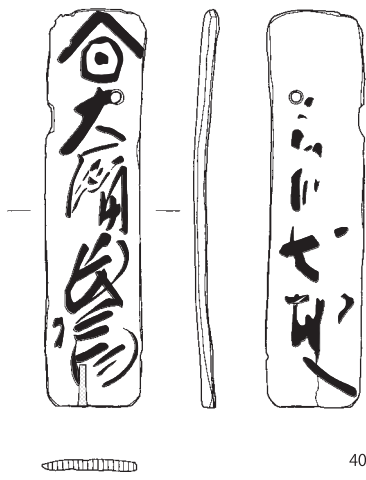
37



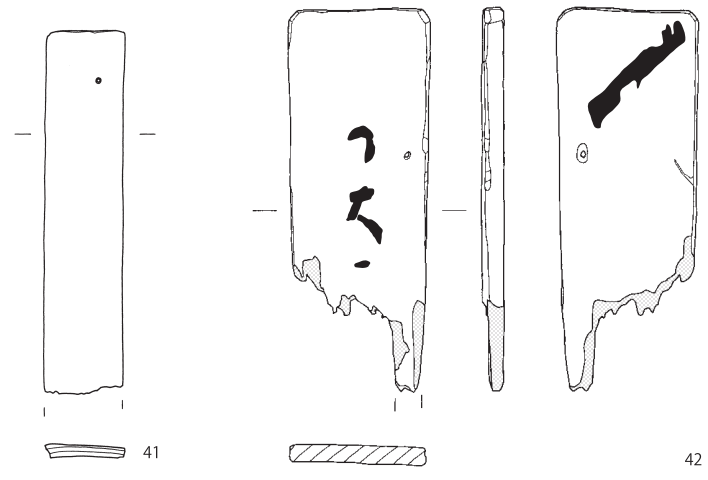
38



39

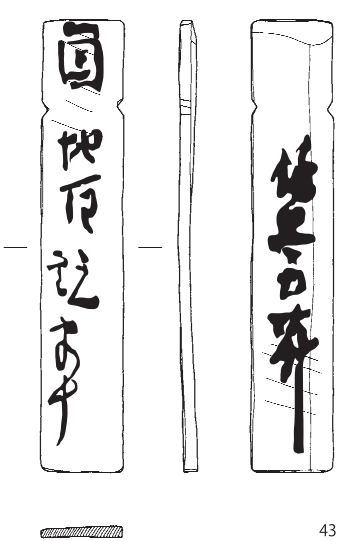


40

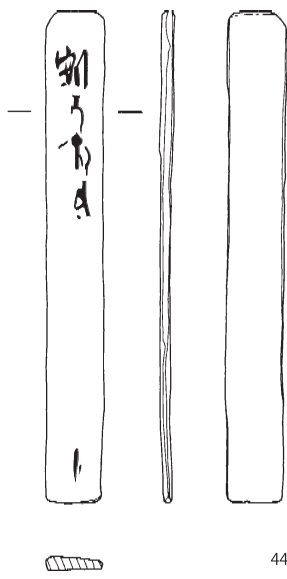


41

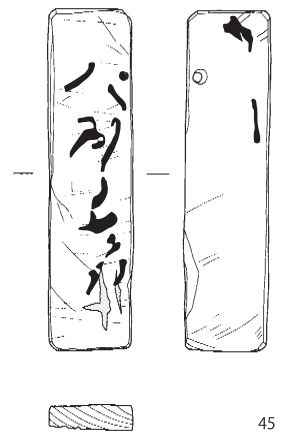
42



43



44



45

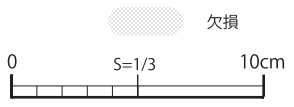
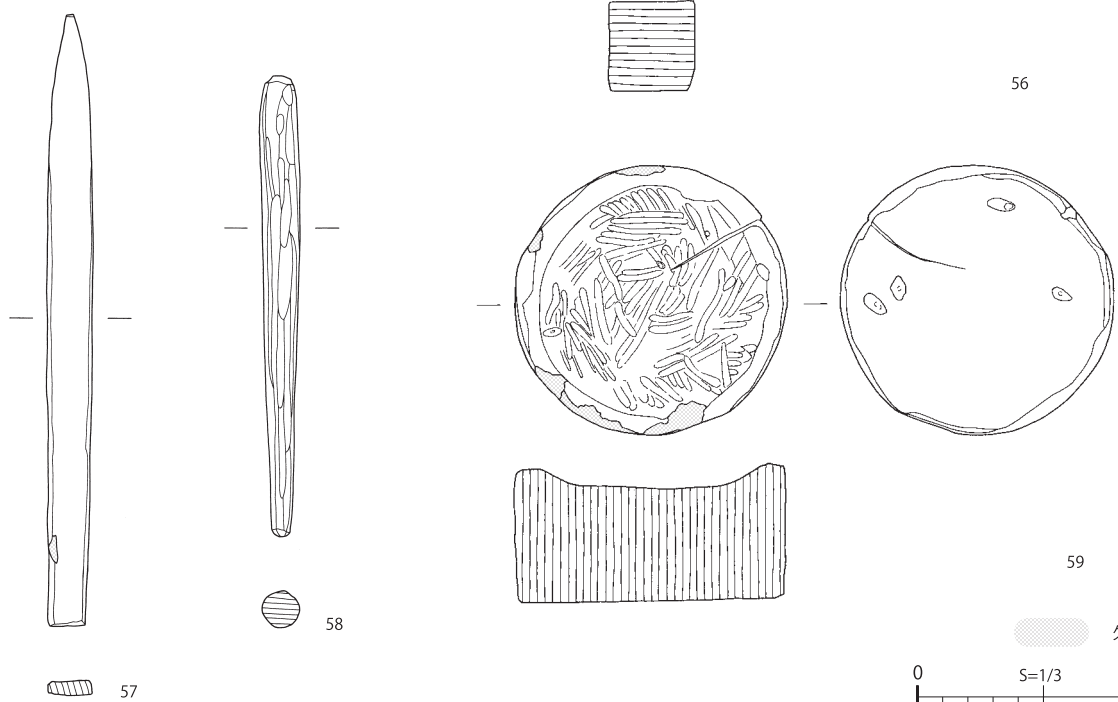
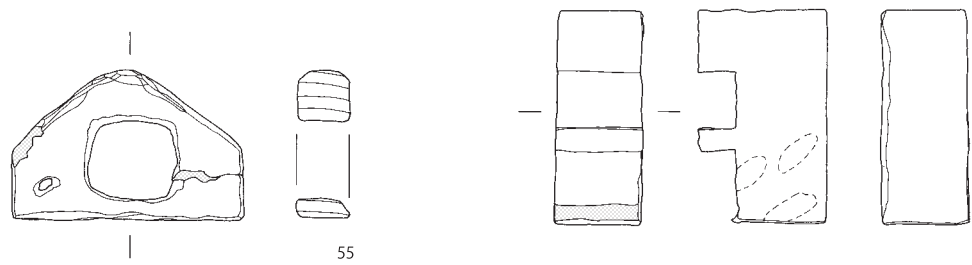
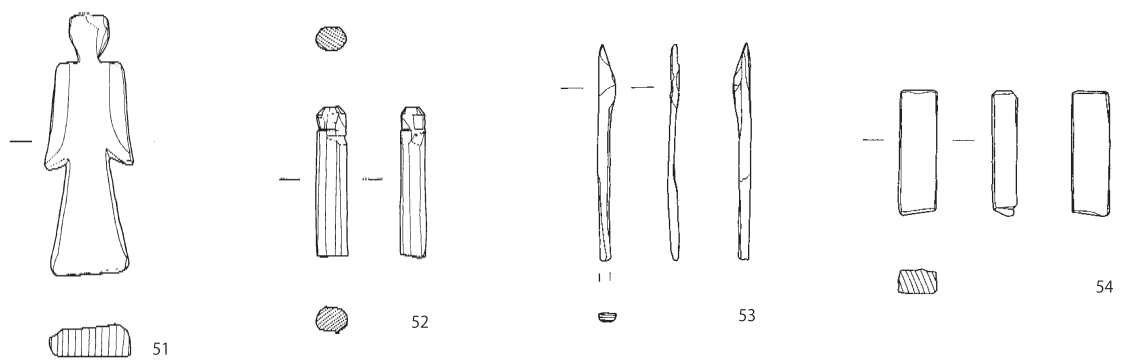
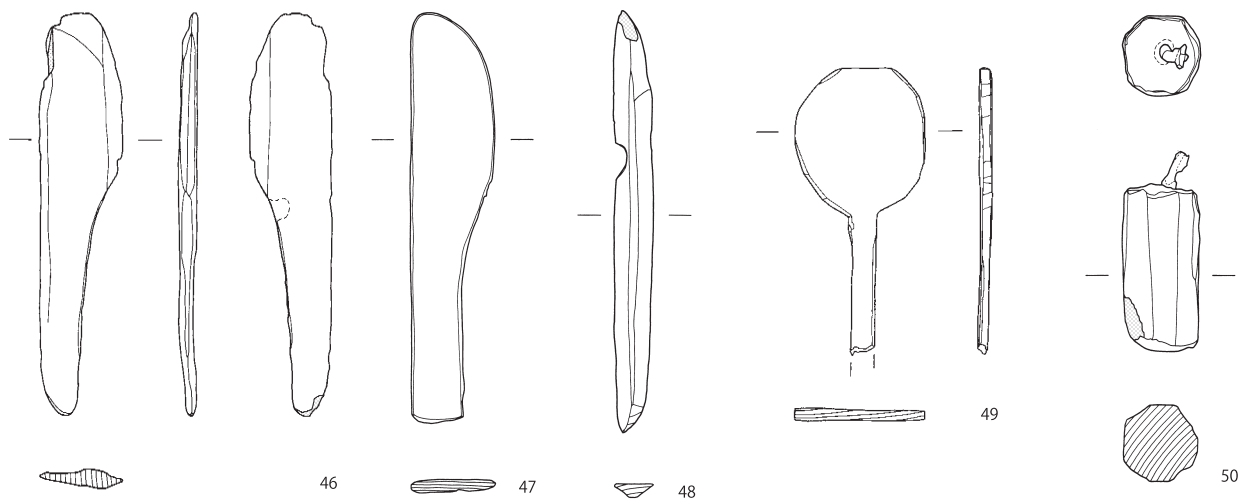


図 56 木製品 (6)



0 S=1/3 10cm

图 57 木製品 (7)



#### 4 石製品（表 18、図 58、写真図版 18）

今回の調査では計 93 点の中～近世に帰属すると考えられる石製品が出土した。その内訳は、砥石 45 点、硯 16 点、石臼 13 点、基石 9 点、火打石 3 点、温石 1 点、数珠 1 点、不明 5 点がある。またこのほかに、古代の石製品 9 点と縄文石器が 17 点出土し、その内訳は、搗き臼 7 点、帯金具 1 点、紡錘車 (?) 1 点、スクレーパー 5 点、石錐 1 点、研磨礫 (?) 1 点、剥片 6 点、原石 4 点がある。このうち中～近世に帰属すると考えられるものを中心に 19 点と古代の帯金具について図示し、概要を述べる。縄文石器については、紙面の都合上割愛した。

基石（1～9） 9 点出土し、すべて図示した。使用石材は、粘板岩ないし砂岩である。2 以外は、あまり加工がされず、平面形が楕円形もしくは歪んだ楕円形を呈し、断面形が長楕円形を呈す。2 は、丁寧に研磨加工されており、断面形は柳葉形を呈している。9 は、白みを帯びている砂岩製の基石である。

温石（10） 10 は、粘板岩性の温石である。長軸に半割れ、半分程度欠損している。最大径 7.2mm の孔が上部に認められる。孔の断面形状から、片側からの穿孔と考えられる。正面中央やや上部に刻書が認められ、3 文字あることが確認できる。1 文字目は「厘」もしくは「厄」と読み、2 文字目は「木」と読める。3 文字目は傷があり判読不可である。

砥石（11～13） 11 は、石質とその特徴的な仕上げ方法から砥沢産の砥石と考えられる。表面は、砥沢砥石の特徴である「ゴザ目」と呼ばれる櫛目状のタガネ痕が認められる。本調査地から南西に 50m 離れた本町第 4 次調査地から砥沢砥石 4,859 点が出土しており、絵図・文献から砥石問屋があったとされる。12 は、縦断面が三角形を呈し、砥石の上部と下部を別々に砥面として使用している。図示していないが、同様の使用痕が残る砥石が複数点出土している。13 は、緑色片岩製の砥石である。右側面と裏面にはタガネでの整形加工痕が認められる。

硯（14～16） 3 点を図示した。14 は、内外面平面形は長方形を呈し、被熱が認められる。15 は、表裏面に硯面を持ち、正面の内面は楕円形で、裏面の内面は長方形を呈している。16 は、縁部が意図的に割られていることが確認できる。別の使用に転用しようとしていたものだろうか。

石臼（17） 17 は、茶臼の下臼受け皿に縁部である。受け皿部の外径は推定 35.8cm である。茶臼は 17 以外にも 2 点出土しており、出土地点は、B 区Ⅱ検の推定御使者宿地から 1 点と B 区Ⅲ検から 1 点である。

不明石製品（18・19） 18 は、砂岩製の楕円礫を素材にしたもので、正面に幅 2～8mm、深さ 1.5mm 程の溝状研磨痕が認められる。また、中央から右側面にかけて凹みが見られ、上下方向の研磨痕が確認できる。特殊な工具専用の砥石であろうか。19 は、粘板岩製で、上端に突出部が見られる細長い形態をし、正面を中心に研磨されている。用途は不明である。

帯金具（20） 蛇紋岩製の丸鞆である。扁平楕円の一端を直に切り落とした形状を呈する。裏面は、内部で貫通する径約 2mm の一対の孔が 2 箇所認められる。

表 18 石器・石製品一覧表

注記	図 No.	種類	地区	検	遺構	出土地点	石材	長/口径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
2	19	不明	A	I	建物 1	tr 北	粘板岩	5.70	1.51	0.68	8.3	完	平面形鉤状、全面研磨
3		砥石	A	I	建物 2	tr 西	砂岩	(11.60)	(9.32)	(2.29)	(314.0)	1/3 欠	2 個体に割れ、砥面 1 面、荒砥
5		硯か	A	I	敷地境 2	西側	凝灰岩	(3.63)	(2.25)	(0.58)	(2.8)	側面の一部残	
6		砥石	A	I	石列 5		頁岩	(7.52)	(3.73)	(2.75)	(122.3)	短軸に 1/2 欠損	砥面 1 面、仕上げ～中砥、直方体
8		砥石	A	I	土 15	西側	千枚岩	(7.25)	1.38	(0.95)	(11.7)	1/2 欠	砥面 3 面、中～荒砥、手持ち砥石、直方体
9		硯	A	I	土 28・29		頁岩	(3.53)	(3.57)	(1.04)	(12.0)	海部一部残	内外長方形か
10		砥石	A	I	土 28・29		頁岩	(4.90)	(3.79)	(1.79)	(1.7)	1/4 欠	砥面 4 面、中～荒砥、直方体
12		砥石	A	I	土 68	No 15	頁岩	(8.83)	(5.49)	(1.70)	(82.2)	1/2 欠	砥面 2 面、中～荒砥
14		不明	A	I	土 73・75	No 9	泥岩	2.82	2.64	6.40	4.4	完	中心に穿孔あり、孔径 4.1mm
15		不明	A	I	土 75	No 4	頁岩	(6.51)	(6.15)	(9.50)	(41.6)	1/4 欠	研磨面 1 面
16		砥石	A	I	P6	北側	頁岩	5.24	3.13	1.24	37.5	完	砥面 1 面、仕上げ～中砥、手持ち砥石、直方体
17		搗き臼	A	I	検出面	No 12	安山岩	13.40	11.70	7.70	1530.0	完	凹み 1 面 (φ 4.58cm、深さ 1.42cm)
18	10	温石	A	I	検出面		粘板岩	10.48	4.33	1.72	158.1	長軸に半割れ	刻書あり、孔径 7.2mm (片側穿孔か)
19	1	基石	A	I	検出面		粘板岩	2.62	2.20	0.77	6.5	完	
20		砥石	A	I	検出面		流紋岩	(6.85)	(3.89)	(3.97)	(195.5)	短軸に 1/2 欠損	砥面 2 面、仕上げ～中砥、直方体

注記	図No	種類	地区	検	遺構	出土地点	石材	長/口径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考	
	21	砥石	A	I	検出面		流紋岩	(4.48)	(3.97)	(3.40)	(93.9)	3/4欠	砥面2面、荒砥、直方体	
	22	砥石	A	I	検出面		頁岩	(7.26)	(2.97)	(3.56)	(101.2)	3/4欠損	砥面1面、荒砥、直方体、側面3面に刷毛目状の溝あり	
	23	搦白	A	I	整地土中		安山岩	16.30	11.50	7.55	1650.0	完	凹み2面(φ8.62cm)、深さ3.72cm/φ5.43cm、深さ0.94cm)	
	24	砥石	A	II	水道遺構6	東側	流紋岩	(5.51)	(1.98)	(2.14)	(29.8)	3/4欠	砥面1面、荒砥	
	25	石臼	A	II	溝3	No.3	安山岩	26.80		11.50	12500.0	完	上臼、溝5分画	
	26	搦白	A	II	溝3	No.4	安山岩	20.75	20.20	13.80	7500.0	完	凹み2面(φ9.23cm、深さ2.93cm/φ5.31cm、0.99cm)	
	27	砥石	A	II	溝4		凝灰岩	10.21	(6.80)	(3.82)	(322.0)	1/4欠	砥面1面、仕上げ～中砥、直方体、溝状線条痕あり	
	28	硯か	A	II	土4		頁岩	(3.80)	(4.31)	(1.51)	(28.6)	3/4欠	底面ノミ加工	
	29	硯	A	II	土34	No.4	頁岩	(5.87)	6.97	1.94	(99.7)	陸・海部欠損	内外平面長方形、被熱	
	30	砥石	A	II	土38		砂岩	(4.95)	(6.70)	(4.65)	(208.0)	3/4欠	砥面2面、荒砥、直方体	
	31	砥石	A	II	土55・56		頁岩	(12.50)	(7.48)	(4.12)	(472.0)	1/4欠	砥面3面、仕上げ～中砥、小口に墨書あり、2個体に割れ	
	32	砥石	A	II	土56	No.14	流紋岩	(6.46)	(3.38)	(2.48)	(84.7)	短軸に1/2欠損	砥面2面、中砥、直方体、側面・小口に刷毛目状の溝あり	
	33	硯か	A	II	土56		頁岩	(5.77)	(3.17)	(1.25)	(18.0)	3/4欠		
	34	砥石	A	II	土56		頁岩	(3.05)	(2.25)	(1.03)	(8.0)	3/4欠	砥面2面、中～荒砥	
	35	砥石	A	II	土92	No.30	流紋岩	(8.61)	(3.94)	(4.89)	(242.8)	短軸に1/2欠損	砥面4面、中～荒砥、直方体	
	37	碁石	A	II	土119		粘板岩	(2.19)	(2.15)	(0.51)	(3.0)	1/4欠	丁寧に整形	
	38	石臼	A	II	土127	No.1	安山岩	(29.30)		(10.05)	2910.0	1/2欠	上臼	
	39	砥石	A	II	土127	No.2	頁岩	15.05	3.45	2.55	143.0	完	砥面1面、中～荒砥、直方体、側面ノミ加工	
	40	石臼	A	II	土131	No.1	安山岩	(32.40)		(8.85)	(1440.0)	3/4欠	上臼、被熱	
	41	搦白	A	II	土132	No.1	安山岩	14.40	12.20	7.50	1640.0	完	凹み1面(φ6.01cm、深さ1.05cm)	
	42	搦白	A	II	土132	No.2	安山岩	12.90	9.90	5.55	880.0	完	凹み1面(φ6.24cm、深さ1.04cm)	
	43	砥石	A	II	土133	樋内北側	頁岩	-	-	-	26.3	3/4欠	砥面1面、中～荒砥、板状、破片複数、同一個体か?	
	44	砥石	A	II	土133		頁岩	(5.04)	(3.44)	(1.03)	(19.4)	1/4欠	砥面2面、仕上げ～中砥、板状	
	45	砥石	A	II	土136	東側	砂岩	7.01	2.10	1.30	18.8	完	砥面3面、手持ち砥石、荒砥	
	46	搦白	A	II	検出面	No.53	安山岩	22.30	16.50	14.60	6500.0	完	凹み1面(φ5.20cm、深さ1.56cm)	
	47	砥石	A	II	検出面	水道8	砂岩	(13.09)	(4.62)	(3.14)	(178.9)	1/4欠損	砥面2面、荒砥	
	48	砥石か	A	II	検出面	西側	頁岩	(3.94)	(3.95)	(0.80)	(18.3)	側面の一部のみ残	中～荒砥	
	49	砥石	A	II	検出面	西側	頁岩	(3.52)	(4.13)	(0.74)	(8.7)	側面の一部のみ残	中～荒砥	
	51	砥石	A	II	検出面		砂岩	(15.80)	(6.40)	(5.97)	(744.0)	1/2欠	砥面1面、仕上げ～中砥	
	52	砥石	A	II	検出面		頁岩	(4.55)	(2.18)	(1.33)	(22.8)	1/4欠	砥面2面、中～荒砥、直方体、2面に刷毛目状の溝あり	
	53	砥石か	A	II	検出面		緑色片岩	(7.05)	(6.00)	(1.38)	(86.1)	1/4欠		
	55	火打石	A	II	トレンチ5		チャート	5.80	3.75	4.38	108.6	完	1縁辺使用	
	56	11	砥石	A	II	トレンチ6	No.1	デイサイト質 変成岩	12.91	5.31	2.74	370.0	完	砥沢産砥石、被熱あり、未使用
	57	3	碁石	A	III	炭範囲11		砂岩	2.68	2.23	0.53	4.6	完	
	58	14	硯	A	III	検出面	No.138	粘板岩	(7.94)	4.47	1.33	(82.2)	海部一部欠損	内外平面長方形、被熱
	59		砥石	A	III	検出面	東側	頁岩	5.87	3.09	0.88	21.1	完	砥面3面、仕上げ砥、板状
	60		硯	A	III	検出面	南側	頁岩	(6.94)	(3.12)	(0.69)	(24.9)	側面のみ残	
	61		硯	A	III	検出面		緑色岩	(5.10)	(4.45)	(0.99)	(23.4)	3/4欠	複数破片に割れ
	62		砥石	A	III	整地土中		流紋岩	8.93	3.27	1.53	81.3	完形	砥面2面、仕上げ～中砥、直方体、赤褐色顔料付着
	63		砥石	A	III	整地土中		頁岩	(18.35)	(5.86)	(0.89)	(126.0)	側面のみ残	仕上げ～中砥
	64		砥石	A	III	整地土中		頁岩	6.12	3.23	1.18	37.8	完	砥面2面、仕上げ～中砥、板状
	65		砥石	A	III	整地土中		頁岩	22.30	2.85	2.45	221.2	完	砥面4面、中～荒砥、直方体(棒状に近い)
	66		不明	A	III	整地土中		安山岩	(3.53)	(2.63)	(0.39)	(2.9)	3/4欠	研磨面1面
	67		火打石	A	III	整地土中		チャート	3.74	4.35	2.71	70.9	完	1縁辺使用
	68		原石	A	III	整地土中		鉄石英	2.82	3.83	2.43	29.6	完	
	69	18	不明	A	III	整地土中		砂岩	13.80	8.70	2.82	520.0	完	未製品または特殊な工具の砥石か
	70		搦白	A	III	整地土中		安山岩	8.10	8.10	7.05	590.0	完	凹み1面(φ4.27cm、深さ0.8cm)、被熱あり
	71		石臼	A	III	整地土中		安山岩	(32.60)		(8.65)	(5500.0)	1/2欠	上臼(溝6分画か)
	72		石臼	A	III	検出面	No.210	安山岩	(19.00)		(12.65)	(6500.0)	1/4欠	茶臼の上臼、白面被熱
	73		砥石	A	I-III	整地土中		安山岩	(8.14)	(0.30)	(2.51)	(98.4)	短軸に1/2欠損	砥面4面、中～荒砥、直方体
	75		火打石	A	IV	溝4		チャート	4.25	4.85	4.55	104.2	完	3縁辺使用
	76		砥石	A	IV	土19	No.1	頁岩	(20.60)	(8.90)	(9.25)	(1580.0)	1/4欠	砥面1面、仕上げ～中砥、置き砥石
	77		紡錘車?	A	IV	土44	西側	砂岩	(3.86)	(1.95)	(1.10)	(10.7)	1/2欠	
	78		硯	A	IV	検出面		粘板岩	(10.89)	(2.84)	(0.59)	(19.9)	底部一部残	外長方形
	79		硯	A		壁		頁岩	(3.33)	5.23	(1.07)	(13.8)	海側縁部一部残	
	80		石臼	A		表土中		安山岩	(27.60)		(9.35)	(3860.0)	1/2欠	上臼、目荒い
	81		砥石	A		排土		頁岩	(4.50)	(2.69)	(1.39)	(29.1)	1/4欠	砥面2面、中～荒砥、直方体
	82		砥石	A		排土		頁岩	(5.65)	(2.14)	(0.63)	(7.6)	3/4欠	砥面1面、仕上げ砥
	83		石臼	A		排土		安山岩	(32.80)		(12.35)	(7000.0)	3/4欠	上臼、ふくみ浅い
	84	17	石臼	A		排土		火成岩	(35.80)		(3.50)	(173.4)	下臼受け皿部	茶臼
	85	4	碁石	A		排土		砂岩	2.65	2.44	0.54	4.9	完	
	86		石臼	A		排土		安山岩	(16.40)		(12.50)	(4740.0)	1/2欠	下臼(茶臼か)
	87	15	硯	A		排土		凝灰岩	(10.51)	(4.35)	2.03	(120.8)	長軸に1/2欠損	両面使用、内外平面長方形
	88		硯	B	I	水道遺構1		頁岩	(4.78)	(2.75)	(0.50)	(5.4)	海部表面のみ残	
	89		硯	B	I	水道遺構3		頁岩	(8.74)	(4.81)	(1.16)	(62.7)	陸・海部欠損	2個体に割れ、両面使用か
	92		珠	B	I	焼土範囲1	No.10	花崗岩質 ペグマタイト	1.37	(1.45)	(1.40)	(3.4)	1/4欠	孔径3.8mm
	93	5	碁石	B	I	検出面	No.258	粘板岩	(2.12)	(2.10)	(0.29)	(1.8)	1/2欠	
	94		原石	B	I	検出面	No.276	石英(水晶)	4.84	7.00	2.46	95.2	完形	
	96		原石	B	I	検出面	No.292	石英(水晶)	4.55	5.72	1.50	41.6	完形	
	97		原石	B	I	検出面	No.299	石英(水晶)	11.07	5.85	3.52	256.8	完形	
	98	6	碁石	B	I	検出面	東側	砂岩	2.56	2.41	0.68	6.5	完	
	99	7	碁石	B	I	検出面	東側	砂岩	2.27	1.65	0.31	1.8	完	
	100		砥石	B	I	検出面	南側	頁岩	3.63	3.44	0.66	9.5	完	砥面1面、仕上げ～中砥、多角形板状
	101		硯	B	I	検出面		粘板岩	(6.84)	(4.03)	(0.75)	(32.9)	1/4欠損	複数破片に割れ
	102		砥石	B	I	検出面		凝灰岩	(131.10)	(4.20)	(4.95)	(266.4)	1/4欠	砥面2面、仕上げ～中砥、直方体
	103	12	砥石	B	I	検出面		緑色片岩	13.63	3.17	2.20	117.9	完	砥面1面、仕上げ～中砥、直方体
	104		砥石	B	I	排土		頁岩	5.85	6.87	1.39	80.5	完	砥面1面、仕上げ～中砥、手持ち砥石?
	105		石臼	B	II	土119	No.2	安山岩	(22.80)		(14.20)	(3800.0)	3/4欠	茶臼の上臼、白面摩耗強い
	106		砥石	B	II	検出面	No.330	砂岩	(22.20)	(25.10)	(11.45)	(7500.0)	1/2欠	砥面2面、荒砥、置き砥石
	107		砥石	B	II	検出面	No.339	頁岩	18.10	3.70	3.73	354.0	完	砥面2面、仕上げ～中砥、直方体、側面ノミ加工
	108		硯	B	II	検出面		凝灰岩	(2.86)	3.41	(0.85)	(8.6)	陸・海部欠損	
	109		石臼	B	II	排土		安山岩	35.20		12.70	29000.0	完	下臼、溝6分画、被熱
	110	8	碁石	B	III	溝1	No.2	砂岩	2.21	2.02	0.77	5.4	完	
	111		砥石	B	III	溝2	No.14	砂岩	(22.70)	(12.20)	(6.90)	(2500.0)	1/4欠	砥面2面、荒砥、置き砥石
	112	13	砥石	B	III	検出面	No.366	緑色片岩	10.33	2.65	1.46	64.7	完	砥面1面、仕上げ～中砥、直方体
	113	20	帯金具	B	III	検出面	No.390	蛇紋岩	(2.80)	(1.98)	(0.70)	(6.0)	1/2欠	丸靱
	114		石臼?	B	III	検出面	No.391	安山岩	(32.40)		(2.61)	(157.9)	上臼縁部の一部のみ残	石鉢の縁部の可能性あり
	115		砥石	B	III	整地土中		頁岩	3.09	2.20	0.45	6.1	完形	砥面2面、仕上げ～中砥、手持ち砥石、板状
	116	9	碁石	B	IV	検出面	東側	砂岩	2.82	2.64	6.40	4.4	完	白碁石か
	118	16	硯	B		表土中		粘板岩	12.33	7.73	(1.98)	(354.0)	縁部全周欠損	内外平面長方形
	119		石臼			排土		安山岩	(34.40)		(14.60)	(15000.0)	1/3欠	下臼、溝6分画

※ ( ) 内の数値は残存値を表す。



图 58 石製品

## 5 金属製品（表 19・20、図 59、写真図版 19）

### （1）概要

金属製品は 409 点出土し、その内訳は鉄製品 200 点、銅製品 120 点、金属種別不明 7 点、銭貨 82 点である。その他、滓が 200 袋、58261.0g 出土している。

器種は、鉄製品が刀子・鍬・鋤・小型スコップ・鋏・燧鉄・釘・火箸・包丁・匙・その他不明品、銅製品が小柄・切羽・刀装具・煙管・分銅・釘・毛抜き・吊金具・取っ手・匙・鏡・鈴・銅線・針金・その他不明品、銭貨である。銭貨・滓は第IV章に詳細を記載し、本項ではその他の製品について記述する。製品は比較的残存状態の良好なもの、特徴的なものを中心に 25 点を図示している。実測遺物の出土地点・器種・寸法等については表 19、全出土金属製品の出土地点・器種の一覧については表 20 を参照されたい。遺物の記載にあたっては図番号を使用している。遺物の形状等については、X 線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

### （2）鉄製品

刀子（1） 2 点が出土し、1 点を図示している。1 は両関であり、小柄の小刀の可能性が考えられる。

鋏（2） 1 点が出土し、図示している。2 は和鋏であり、刃部の断面は三角形、頸部の断面は方形である。

燧鉄（3） 1 点が出土し、図示している。3 は頂部及び裾部の両面に木質が付着している。

釘（4・5） 141 点が出土し、2 点を図示している。図示していないものも含めて全て断面が方形もしくは長方形の和釘である。4・5 とともに、頭部は基部上端を叩き伸ばし、折り返した形状をしている。

不明（6・7） 49 点が出土し、2 点を図示している。6 は断面円形の棒状製品で、片端を折り返して輪状にした形状をしている。輪の断面は方形を呈している。7 は板を折り曲げ、折り曲げ部を膨らまして輪状にした形状をしている。

### （3）銅製品

小柄（8～12） 7 点が出土し、5 点を図示している。いずれも柄である。8・11 は刃部が一部残存している。9・10・12 は片面に文様が見られ、9・12 は草花の装飾が施されている。10 は棟側に鉄が打ち込まれる。

煙管（13～16） 50 点が出土し、4 点を図示している。いずれも羅字煙管である。また、14・16 には金鍍金が施される。13 は小口の断面が八角形を呈し、「保知」の刻書がされる。近江日野の「保知煙管」とみられる。15 は小口の断面が十角形を呈する。

分銅（17・18） 2 点が出土し、図示している。17 は四角柱の一面が窪む凹型で、上部に孔を開けた取っ手、下部に四角錐台が 2 つ重なった形状のものが付く。18 は丸みを帯びた角の四角柱で、上部に孔を開けた取っ手が付く形状をしている。側面には何らかの刻印が施されているが、錆化などにより、「天下一」と読み取れるのみである。

釘（19） 2 点が出土し、1 点を図示している。19 の頭部は丸型の皿が基部に覆いかぶさる形状をしている。鋇と推定される。

毛抜き（20） 1 点が出土し、図示している。20 は断面が扁平な長方形で、逆 U 字形の先端を内側へ曲げた形状をしている。

吊金具（21・22） 5 点が出土し、2 点を図示している。21 は片面の上端部に八弁花 3 輪が施される。22 は金鍍金が施され、片面の上端部には装飾が見られる。

鏡（23） 1 点が出土し、図示している。23 は柄が欠損した方形の柄鏡と推定される。裏面には、菱形に「布」、「天下一上村大和守」と陽刻される。



鈴 (24) 1 点が出土し、図示している。24 の鈕は棒状の先端を輪状にした形状で、頂部を穿孔し差し込み留めている。中央部には上下のつなぎ目が見られる。変形しており、下部のスカシ孔の形状は不明である。

不明 (25) 45 点が出土し、1 点を図示している。25 は板を筒状に丸めた形状で、金鍍金が施される。

表 19 金属製品一覧表

実測 No.	ID	地区	検出面	遺構	出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属種別	備考
1	296	A	II	水道遺構 8		刀子	144.2	12.5	2.6	11.6	Fe	茎尻欠
2	196	A	III b	炭範囲 6	No. 1	鋏	120.3	25.9	4.0	17.6	Fe	端部欠
3	135	A	II	水道遺構 4		燧鉄	76.7	25.1	3.1	7.7	Fe	裾部欠/木質付着
4	120	A	II	土 93		釘	80.5	10.2	3.8	3.9	Fe	脚部先端欠/断面方形
5	121	A	II	土 93		釘	76.5	13.3	3.7	6.2	Fe	脚部先端欠/断面方形
6	12	A	I	土 3	東半	不明	67.1	12.0	4.7	6.7	Fe	断面円形の棒状製品
7	297	A	II	水道遺構 1		不明	40.9	8.8	6.5	2.1	Fe	板を折り曲げた形状
8	173	A	III a	検出面	No. 184	小柄	106.7	12.8	5.4	22.4	Cu + Fe	柄/刃部の一部が残る
9	182	A	III a	炭範囲 11	No. 4	小柄	50.3	12.9	4.5	6.2	Cu	柄/片面に草花の装飾あり
10	208	A		排土		小柄	93.7	12.0	3.3	10.9	Cu + Fe	柄/片面に線状の文様あり
11	306	A	II	土 141	No. 8	小柄	100.7	118.0	5.7	13.0	Cu + Fe	柄/刃部の一部が残る
12	307	A	II	土 133	No. 5	小柄	50.9	12.0	3.8	6.7	Cu	柄/片面に草花の装飾あり
13	15	A	I	土 27		煙管	84.5	10.8	10.5	9.5	Cu	吸口/小口断面八角形/「保知」の刻書あり
14	57	A	I	土 81	No. 6	煙管	50.8	14.3	8.2	5.5	Cu	雁首/金鍍金
15	106	A	II	土 28	No. 1	煙管	71.6	15.2	9.4	11.7	Cu	雁首/小口断面十角形
16	319	A	IV	土 10	No. 3	煙管	47.1	14.6	14.5	4.1	Cu	雁首/金鍍金
17	195	A	III b	検出面	No. 231	分銅	22.6	12.2	12.2	20.7	Cu	完形
18	202	A		東壁		分銅	32.8	14.3	14.3	48.4	Cu	完形
19	214	A	I	建物 1	十字トレンチ西	釘	35.3	10.3	5.7	1.3	Cu	完形/断面円形
20	403	B	III b	整地土		毛抜き	30.0	28.8	2.6	2.8	Cu	完形/断面扁平な長方形
21	340	B	I	溝 1	No. 3	吊金具	38.3	6.0	1.0	1.8	Cu	完形/片面の上端部に装飾あり
22	401	B	III b	土 3	No. 9	吊金具	32.5	6.3	1.2	1.2	Cu	完形/片面の上端部に装飾あり/金鍍金
23	138	A	II	溝 3・4		鏡か	77.0	60.8	1.5	53.6	Cu	裏面に陽刻あり
24	172	A	III a	検出面	No. 183	鈴	19.0	18.9	18.6	2.7	Cu	完形
25	336	B	I	水道遺構 2	No. 6	不明	132.0	5.7	5.7	6.0	Cu	筒状製品/金鍍金

表 20 金属製品分布表

金属種別	器種	調査区 - 検出面														計
		A- I	A- II	A- III a	A- III b	A- IV	A	B- I	B- II	B- III a	B- III b	B- IV	B	立会	排土	
鉄製品	刀子		2													2
	鎌	1														1
	鍬	1														1
	小型スコップ	1														1
	鋏				1											1
	燧鉄		1													1
	釘	81	36				1	16	6	1						141
	火箸		1													1
	包丁		1													1
	匙								1							1
不明	20	16	1		2	2	5	2	1						49	
銅製品	小柄		2	3			1	1							7	
	切羽	1													1	
	刀装具		1												1	
	煙管	13	14	10		1	1	5	1	3					50	
	分銅				1		1								2	
	釘	1	1												2	
	毛抜き											1			1	
	吊金具			1				2	1		1				5	
	取っ手	1													1	
	匙		1												1	
	鏡		1												1	
	鈴			1											1	
	銅線	1													1	
	針金	1													1	
銭貨	23	20	7	6	3	2	11	4		3	1	1	1	82		
不明	17	11	3	1			10	2		1				45		
不明	3	1							2	1				7		
計		165	109	26	9	6	8	51	18	6	6	1	1	1	2	409



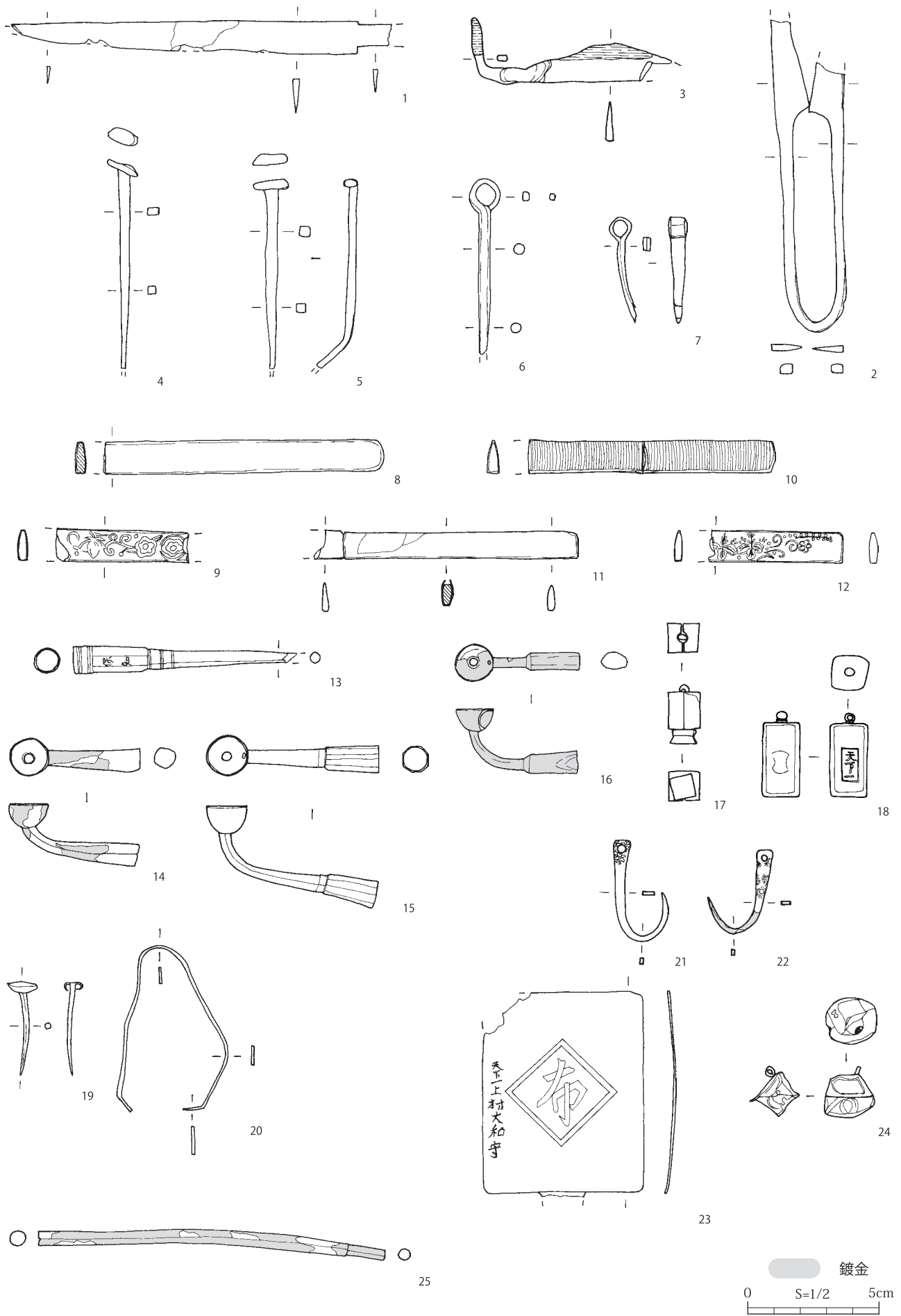


图 59 金属製品

## 6 自然遺物（表 21～26、写真図版 13）

今回の調査で、動物遺存体 379 点と植物遺存体 394 点で、自然遺物として合計 773 点が出土した。遺存状態が良く、本市でも出土事例の多いものの同定は文献 11・12 を参考に肉眼観察で行った。同定が困難なものについては、一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。

### （1）動物遺存体

#### ア 哺乳類

本次調査において、哺乳類の出土骨の同定数（NISP）は 234 個体を数える。検出面別各部位の出土点数は表 21 のとおりである。出土試料は主に獣骨であり、10 種と不明 1 種があると同定された。

A 区 I 検からはほとんど骨の出土はみられず、鹿角が 1 点確認できただけである。A 区 II 検・B 区 I 検では、イヌやシカ等 6 種の骨が出土し、その点数は 22 点である。A・B 区 III 検は、最も骨が多く含まれていた検出面で、全体の 7 割程を占める。特に B 区 III b 検の溝 2 からイヌの骨が 125 点と集中して見つかり、指骨から頭蓋骨まで様々な部位が認められた。また、イヌの最小個体数は 4 匹であることがわかった。A・B 区 IV 検でも多種の骨が見つかり、シカ骨の出土点数は最も多いことがわかった。

#### イ 鳥類

鳥類の骨は 4 点出土した。いずれもニワトリの骨で、A・B 区 III 検で脛足根骨が 1 点、A・B 区 IV 検で脛足根骨 1 点と大腿骨 2 点が土坑から出土している。

#### ウ 爬虫類

イシガメの腹甲骨板 8 点が、A 区 II 検の土 56 からまとまって出土した。甲羅などの他部位が見つからないことから、なんらかの目的で解体され、土坑に廃棄されたものと推定される。

#### エ 魚類

A・B 区 III 検からタイ科の椎骨が 1 点と、A 区 I 検の土 60 から硬骨魚類と考えられる部位不明の骨が 6 点出土している。

#### オ 貝類

貝類は、大きく二枚貝と巻き貝に分けて表に検出面別の出土点数を提示した。出土した貝殻の総数は 128 点で、このうち 95% 程度を海生種が占める。サザエの出土量が最も多く 38 点を数え、次いでハマグリとシジミも多く、それぞれ 23 点と 24 点が出土している。A・B 区の I～III 検は、貝殻の種類も点数も多くみられるが、A・B 区 IV 検では、アサリ 4 点と不明種 1 点が出土したのみである。

推定御使者宿の範囲内での主な貝類の出土は、サザエ 15 点、ハマグリ 9 点、アワビ 4 点、ホタテ 4 点など、高級な魚介料理に使用される種類が目立つ。客人をもてなすために高級な食膳が振る舞われたことが想像でき、御使者宿の当時の様子をうかがうことのできる資料が得られた。

A・B 区 III 検においても、御使者宿が本調査地に設けられる前の時期にも関わらず、整地層中から同じような高級魚介類が多く出土している。これが何を意味しているのか不明な点が多いが、おそらく松本城内や裕福な商家があった場所から土を運び入れたのであろう。



表 22 鳥類・爬虫類・魚類骨出土地別一覧表

調査区 / 検出面	鳥類		爬虫類		魚類			
	ニワトリ		イシガメ		タイ科		不明	
	個数	部位	個数	部位	個数	部位	個数	部位
A区I検							1	不明
A区II検・B区I検			8	腹甲骨板				
B区II検								
A・B区III検	1	脛足根骨			3	椎骨		
A・B区IV検	1	大腿骨						
計	2		8		3		1	

表 23 二枚貝出土地別一覧表

	ハマグリ		アサリ		シジミ		ホタテ		クロアワビ	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
A区I検	2	8.8	-	-	16	19.6	5	31.2	1	13.8
A区II検・B区I検	11	89.3	-	-	3	5.5	5	8.8	3	316.8
B区II検	-	-	-	-	-	-	2	5.3	1	13.1
A・B区III検	10	57.5	2	3.9	4	3.3	3	6	5	35.3以上
A・B区IV検	-	-	4	94.7	-	-	-	-	2	22
排土	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
計	23	155.6	6	98.6	24	30.4	15	51.3	12	365.7

表 24 巻き貝出土地別一覧表

	サザエ		ダンバイキサゴ		タニシ科		カワニナ		不明	
	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
A区I検	15	108.8	-	-	-	-	1	0.6		
A区II検・B区I検	12	447.7	1	3.1	-	-	-	-	3	3.6
B区II検	5	123.6	-	-	-	-	-	-	-	-
A・B区III検	6	96.6	-	-	1	2.3	-	-	-	-
A・B区IV検	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4.2
計	38	776.7	1	3.1	1	2.3	1	0.6	4	7.8

(2) 植物遺存体

植物遺存体の出土数は394点がある。その内訳は、モモ182点、オニクルミ137点、アンズ4点、ウメ2点、ニホンカボチャ69点がある。検出面の時期ごとの出土量については表25を参照されたい。

特に目立った遺構としては、A区II検の溝5でモモ10点、土56でモモ22点、土93でオニクルミ9点・モモ4点が出土した。土56・93は遺物の出土状況からゴミ穴と考えられる。溝5は木樋を設置する際に入り込んだものである。また、B区I検の土8からニホンカボチャの種が69点まとめて出土した。

表 25 種子類出土地別一覧表

	モモ		オニクルミ		アンズ		ウメ		二ホンカボチャ	
	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
A区第Ⅰ検出面	24	36.7	32	62.8	-	-	2	0.6	-	-
A区第Ⅱ検出面・ B区第Ⅰ検出面	88	126.2	59	96.8	1	0.5	-	-	69	1.5
B区第Ⅱ検出面	4	4.6	7	10.5	-	-	-	-	-	-
A・B区第Ⅲ検出面	41	69.9	26	54.5	2	1.2	-	-	-	-
A・B区第Ⅳ検出面	25	43.7	13	28.2	1	0.3	-	-	-	-
計	182	281.1	137	252.8	4	2	2	0.6	69	1.5

表 26 種名表

軟体動物門 Mollusca

腹足綱 Gastropoda

古腹足目 Vetigastropoda

リュウテン科 Turbinidae

サザエ Turbo sazae

ミミガイ科 Haliotidae

ミミガイ科の一種(アワビ類) Haliotidae gen. et sp. indet.

ニシキウズガイ科 Trochidae

ダンベイキサゴ Umbonium giganteum

盤足目 Discopoda

タニシ科 Viviparidae

タニシ科の一種 Viviparidae gen. et sp. indet.

吸腔目 Sorbeoconcha

カワニナ科 Pleuroceridae

カワニナ Semisulcospira libertina

斧足綱 Bivalvia

マルスダレガイ目 Veneroida

マルスダレガイ科 Veneridae

ハマグリ Meretrix lusoria

アサリ Ruditapes philippinarum

シジミ科 Cyrenoidae

シジミ Cyrenoidae

イタヤガイ目 Pectinoida

イタヤガイ科 Pectinidae

ホタテガイ Mizuhopecten yessoensis

脊椎動物門 Vertebrata

骨魚綱 Osteichthyes

スズキ目 Perciformes

タイ科 Sparidae

爬虫綱 Reptilia

カメ目 Testudines

イシガメ科 Bataguridae

イシガメ科の一種 Bataguridae gen. et sp. indet.

鳥綱 Aves

キジ目 Galliformes

キジ科 Phasianidae

ニワトリ Gullus domesticus

哺乳綱 Mammalia

食肉目 Carnivora

イヌ科 Canidae

イヌ Canis familiaris

キツネ属 Vulpes

ネコ科 Felidae

ネコ Felis catus

イタチ科 Mustelinae

テン Martes melampus

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ Equus caballus

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ科 Bovidae

ウシ Bos Taurus

イノシシ科 Suidae

イノシシ Sus scrofa

シカ科 Cervidae

ニホンジカ Cervus nippon

霊長目 Primate

オナガザル科 Cercopithecidae

ニホンザル Macaca fuscata

ヒト科 Hominidae

ヒト Homo sapiens

オニグルミ Juglans ailanthifolia Carr.

モモ Amygdalus persica

ウメ Prunus mume

アンズ Prunus armeniaca L.

ニホンカボチャ Cucurbita moschata Duch.

参考文献 (文献番号は第Ⅲ章 3 節 3 の続き)

文献 10 金原美奈子 2018 『松本城跡出土遺物自然科学分析業務委託報告書』(一社)文化財科学研究センター  
(松本市教育委員会蔵)

文献 11 松井 章 2006 『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター

文献 12 長野県埋蔵文化財センター 2000 「松原遺跡 弥生・総論 8 総論・自然科学分析」  
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5』埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36



## 第Ⅳ章 鑄造関連資料について

吉野ヶ里歴史公園マネジメント共同企業体・吉野ヶ里公園管理センター

歴史専門員 梅崎 恵司

平成 30 年 (2018)11 月 6・7 日に、松本城下町跡本町（松本市中央 2 丁目所在）第 8 次発掘調査出土の鑄造関連資料を、埋蔵文化財整理作業所で拝見させて頂いた。考古学的な非鉄系関連資料は、福岡県北九州市小倉南区の尾崎遺跡（平安時代の銅製錬炉 文献 14）、同八幡西区の黒崎城跡第 17 区 [寛永通寶鑄造以前の福岡藩黒崎鑄銭場（いせんば）文献 15] などがある。報告作成にあたり先学の御指導をいただき、成果は 2008 年にまとめた。よって、これまでの所見と比較しながら進める。述べるに当たり「松本銭座（江戸幕府公認寛永通寶銭座）、松本銭（松本銭座で鑄銭された寛永通寶）」の意である通称を使用する。又、銭座一覧表（表 27）と略年表を作成したので参照していただきたい。

### 1 調査地

第 8 次発掘調査地は長野県松本市中央 2 丁目に所在。そこは江戸時代の本町で、国宝松本城天守から南に約 700m（女鳥羽川の南 150m）に位置する。又、西からの野麦街道と北からの善光寺街道との交差点の南東に御使者宿があったとされる。以下に市史などから関連記事を列挙する。

天正 17 年 (1589) 小笠原貞政領す。倉科七朗左衛門、松本町問屋職に任命される。

文禄元年 (1592)3 月 29 日『信濃資料』巻 17(今井文書・桐原進逸保管)に「石川三長、康長、今井勘右衛門等に命じて、近在奉公人等の国役人足役を免除す」とある。

慶長 11 年 (1606) 今井勘右衛門、肝煎職（町役人）に任命される。

寛文 7 年 (1667) 常設の御使者宿が本町 2 丁目に設けられる。

延宝 2 年 (1674) 御使者宿の運営が今井家に任命。以後、幕末まで続く。

享保 13 年 (1728) 享保十三年秋改松本城下絵図では、「使者宿 六右衛門」とある。

天明 3 年 (1783) 中町裏小路～本町正安小路まで焼失。御使者宿が本町 4 丁目に移る。

上記の内容から、寛文年から享保年までのおよそ 100 年余りは、今橋家あるいは今井家屋敷兼御使者宿があり、後、江戸後期の地震と火災に見舞われたのである。『古実伝連記』（河辺久雄文書）、「寛永銭なども庄内分、堀米村分二ヶ所にて御免、鑄之候由」とある。庄内は飯田町鍋屋小路三輪忠兵衛工場のことで、堀米は（島立）のことである。現島立は松本城から西に約 2km である。

### 2 整地層出土遺物

銭、坩堝、鋳滓などの銭座関連資料は A 区 I 検・A 区 II 検 /B 区 I 検・B 区 II 検の整地層の内、A 区 II 検 /B 区 I 検から主に出土。層位の年代は、A 区 I 検が 18 世紀後半～19 世紀初頭、A 区 II 検 /B 区 I 検が 17 世紀後半～18 世紀前半、B 区 II 検が 17 世紀中頃である。従って、発掘された内容は、銭座解散後の状態である。つまり、寛永 17 年 (1640) 銭座解散、慶安元年 (1648) 乾瑞寺創建、寛文 7 年 (1667) 御使者宿常設、本町 2 丁目に設置。宝永 4 年 (1707)、宝永大地震。天明 3 年 (1783)、中町裏小路～本町正安小路まで焼失。御使者宿本町 4 丁目に移設。嘉永 7 年 (1854)、大地震。慶応元年 (1865) 博労町山城屋出火、中町まで被

害及ぶ。この経緯の中で、用地は時の事情により改変された。調査地は町屋と御使者宿を主体として事あるたびに、撤去と新設を行ってきた。整地はその都度、行われていたのであるから、混入も同時に起こり、埋め土となっていたと予測される。調査では、大きく 18 世紀中頃の前後で層が二分されていた。この上下層の中で、特に下層のⅡ層から以下の遺物が出土している。

#### (1) 古銭（表 28～30、図 60・61、写真図版 20）

古銭 82 枚出土の内、北宋銭他中国銭等は 25 枚（A 区Ⅰ検 1 枚、A 区Ⅱ検/B 区Ⅰ検 6 枚、A/B 区Ⅲ検 12 枚、A/B 区Ⅳ検 3 枚、出土層不明 3 枚出土）出土で、Ⅲ検に多い。銭種は以下のとおりである。

開元通寶・初鑄 621 年 2 枚、乾元重寶・初鑄 758 年 1 枚、宋通元寶・初鑄 968 年 1 枚、至道元寶・初鑄 995 年 1 枚、祥符通寶・初鑄 1008 年 1 枚、天禧通寶・初鑄 1017 年 1 枚、景祐元寶・初鑄 1034 年 1 枚、皇宋通寶・初鑄 1039 年 1 枚、至和元寶・初鑄 1054～55 年 1 枚、嘉祐元寶・初鑄 1056 年 1 枚、治平通寶・初鑄 1064 年 1 枚、熙寧元寶・初鑄 1068 年 4 枚、元豊通寶・初鑄 1078 年 3 枚、元祐通寶・初鑄 1086 年 2 枚、景定元寶・初鑄 1260 年 1 枚、洪武通寶・初鑄 1368 年 1 枚、永楽通寶・初鑄 1408 年 2 枚、寛永通寶・初鑄 1636 年 51 枚（Ⅰ～Ⅲ面）、鏝銭 1 枚。

寛永通寶は全体で 51 枚出土。完成品の古寛永 26 枚（A 区Ⅰ検 12 枚、A 区Ⅱ検/B 区Ⅰ検 12 枚、B 区Ⅱ検 1 枚、A/B 区Ⅲ検 1 枚）。バリ付 9 枚（A 区Ⅰ検 1 枚、A 区Ⅱ検/B 区Ⅰ検 6 枚、B 区Ⅱ検 2 枚出土）。新寛永 11 枚（A 区Ⅰ検 6 枚、A 区Ⅱ検/B 区Ⅰ検 4 枚、出土層不明 1 枚）。背文銭 4 枚、背十一波銭 1 枚。不明 3 枚。明治時代の一銭 2 枚。

#### (2) 鑄放（バリ付寛永通寶）（表 29・30、図 62・63、写真図版 21）

前述のなかで、寛永通寶資料は 51 枚の内、バリ（鑄造後に鑄造品の表面に残る突起・英 burr）付が 9 枚である。これらは仕上がりが不具合な銭、破損品などで、研磨されたものではない。鑄造後に枝から離された銭の内、研磨仕上げ（成品化）をしない銭で、次回の材料として使用される銭や銭片である。表の文字が残る資料から字体が読みとれる。文字からして、いわゆる鑄放で市場に出回ることはない。従って調査地点は古寛永通寶銭座内、もしくは周辺にあたる。残りの成品 26 枚はやはり字体からして古寛永である。他に新寛永 11 枚、背文銭 4 枚、背十一波銭 1 枚あり。他の宋銭は、改鑄の素材となる銭であった可能性がある。中国銭はⅢ検出土が 12 枚でまとまっている。Ⅲ検の年代は、出土遺物から下限が 1620 年代と考えられる。

#### (3) 枝銭（棹付銭）他（図 63、写真図版 21）

当地の発掘資料ではないが、今井家（当時、大名主で御使者宿兼務の今井勘右衛門が藩に寛永通寶鑄造役を出願した家柄）に伝わっている枝銭（1995. 市指定文化財・長野県松本市立博物館常設展示）1 点がある。他二の丸御殿跡出土棹片（模鑄銭、寛永通寶の棹は断面三角形が特徴）1 点（松本市教育委員会 1985）がある。尚、棹とは銭を鑄造する時に溶銅が流れる溝のことで、ここに流れた溶銅が固まって残った棒状の小片である。通常、回収され再利用される。

#### (4) 出土銭の法量と字体

寛永通寶の法量はおおよそ、外径 22.3～28.3mm、内径 18.4～21.2mm、方孔巾 5.2～8.4mm、厚み 0.8～2.0mm、外輪巾 1.4～3.3mm、郭巾 0.1～1.0mm、背郭巾 0.7～2.8mm、重量 1.1～5.0 g である。色調は黒銀が大半を占めるが、緑青や赤褐のものも見られる。

バリ付寛永通寶（松本銭の基本資料）の部位詳細は次のようである。外輪巾は中広、背外輪巾は広い。方

孔郭巾は巾狭く、背方孔郭巾は広い。字体は、「寛」のウカンムリがつぶれ、「永」は平で最後の画は長足。「通」は方孔内に納まるチヂミ。「寶」は方孔内に納まらず、タカラ部は長めで、左上に仰ぎ斜めにひずむ。概観したが、詳細の比較研究は課題である。

(5) 金属片 (写真図版 24)

外面灰色、粉吹き状で、長さ 39.3mm、幅 19.0mm、厚み 5.6mm、重さ 14.6g の金属片が 1 点ある。一見、鉛のように見えるが、分析を要する。

(6) 坩堝 (表 31、図 64・65、写真図版 22・23)

坩堝片 200 点余り、推定坩堝個体数約 30 点。形状は砲弾型でおよそ、高さ(復元値)15.5cm、口径(復元値)10.0cm、厚み(胴部)0.8～1.1cm である。胎土は陶質で、須恵質や磁器質はない。肉眼観察の外面色調は、黒、白、茶、黄、灰、緑、赤紫などの酸化色である。これらは比熱を受け、使用時にタレたり、アワ状になって付着したものである。内面は胎土色で、やはり外面同様に酸化色である。中でも内側に緑青が残る例がある。断面は表裏からの受熱のため色調が 2～3 層に分かれる例がある。

(7) 坩堝片利用の砥石

数cm大の坩堝片の内面を使用した砥石で、凹状にくぼむ例が多い。福岡藩黒崎城跡の鑄銭場や備前岡山藩二日市遺跡の銭座で出土しているが、ここでは見られない。

(8) トリベ (取鍋) (表 31、図 64・65、写真図版 24)

加熱され黒灰色を呈し、表面が剥がれた様になっている。胴部径 7.6cm、口径 3.0cm、体部厚み 1.1cm、高さ 7.7 cm の小形湾型のトリベ 1 点 (59) および胴部の破片が 1 点 (60) が出土。59 は、つまみ部分が欠けている。これは黒崎城跡で出土している例に類似する。これまでの例は、赤紫に変色していることや分析から亜鉛の割合が高いことから、真鍮精錬時の色見に使用されたのではないかとされている。蓋と組み合わせで使用される。

(9) 砥石 (表 18、図 58、写真図版 18)

全長 10cm 大の角柱上の細長い砥石 6 点の他、長形状砥石が 21 点、板状のものや欠損品が 15 点ある。いずれも堆積岩で砂岩や泥岩系である。岡山藩出土の銭幅で砥石面がくぼみ、溝になった銭の表裏を研ぐ平研砥石は出土していない。これらが銭の研磨に使用されたかは不明である。

(10) サヤ (匣) (写真図版 24)

10cm 前後の土師質の円板状破片が数点出土している。これらは小吹き用炉 (鑄込みを行う時に坩堝内容物の温度が下がらないようにするための可動式炉) の小片とみられる。

(11) 鋳滓 (写真図版 24)

整理用コンテナ 23 箱が出土している。数cm大の平面円盤状で、厚さ 1cm ほどの板状の破片が多数出土している。上面は黒く変色した粘土、木片、炭などが付着している。下面は比較的平で粗砂が付着している。これは製錬の初期段階で、カラミ (空身) のようである。

他、黒色でアワをふいたような形状の鋳滓、ガラス質の鋳滓などがある。これらは銅を主とした非鉄系金

属の製錬の各工程から排出されたものの可能性が高い。具体的内容については理化学的な分析を要する。

## (12) まとめ

前述の出土遺物を概観した。鑄放の寛永通寶、中国錢、砲弾型坩堝、トリベ、砥石、サヤ、鉍滓などについて概略を述べた。これらは鑄錢の工程の前半（熔土・ほど）に関わる資料である。後半の仕上げ工程の研場（とぎば）に伴う大量の砥石は見られない。成果の中で、砲弾型坩堝やサヤは寛永通寶鑄錢のみに使用される鑄錢専用道具である。ここでは古寛永通寶鑄錢に使用されたものと考えられる。鑄放は松本錢座に関連した確証であり、松本錢の基準資料である。これらは信濃松本藩の寛永通寶錢座に関わる好資料である。

砲弾型坩堝は量的に、黒崎城跡<sup>文献15</sup>や加治木錢工房<sup>文献13</sup>の整理用コンテナ100～200箱出土と比較して少ない。よって調査地は錢座工房建物部分ではなく、その周辺部にあたと予測される。従って、炉跡などの工房施設は周辺（鍋屋小路）に埋蔵されている可能性がよりいっそう具体的になった。又、松本錢の字体の特徴については概略したものの詳細は、これまでの出土品、もしくは所蔵品の要検証、他の錢との比較検討が進められ、錢貨研究の貴重な成果が希望される。さらに、寛永通寶鑄錢の契機になった、銅材料が足尾銅山から求められたかなどは、要理化学的な分析検証である。尚、市史<sup>文献2</sup>などでは、松本錢座設置と解散の理由は、以下のように言われている。

ア 経済の要衝として、本州内陸部の錢貨流通を促すため。

イ 足尾銅山等の生産量増加により操業、松平直政、松江転封により錢座解散。

ウ 徳川将軍家光の従兄弟関係を気遣い、親藩直政に対して月見櫓築造など増築した優遇措置の一つとして錢座操業を許した。

以下に松本錢の略歴を作成した。

永正年間(1504～) 深志城築城か。

天正10年(1582) 小笠原貞慶、松本を領し、深志城を松本城と改称。城下町整備。

天正17年(1589) 小笠原貞政領す。倉科七朗左衛門、松本町問屋職に任命される。

文禄元年(1592)3月29日『信濃資料』巻17(今井文書・桐原進逸保管)

「石川三長、康長、今井勘右衛門等に命じて、近在奉公人等の国役人足役を免除す」

文禄2年(1593) 石川康長領す。松本城天守完成。

慶長5・6年(1600・1601) 江戸幕府、金座・銀座設置。

慶長11年(1606) 今井勘右衛門、肝煎職(町役人)に任命される。

慶長13年(1608) 永楽錢廃止。

寛永10年(1633)4月7日 松平直政藩主33才入封7万石。5月下旬入城。

寛永13年(1636) 足尾銅山等の生産量増加。

寛永13年(1636)6月 徳川幕府特命により江戸の芝と、近江坂本の2か所で寛永通寶鑄造。

寛永13年(1636)6月10日触書 金一両4貫目、金一分一貫目の公定歩合を破るもの、大かけ、われ錢、かたなし、ころ錢、なまり錢、新悪錢を使用するものは連帯責任とする。

寛永13年(1636)12月27日 松本錢座、藩奉行人7名連署により許可書が出される。

請元は大名主(酒庄屋、穀物商、貸家業)・肝煎職(町役人)で御使者宿兼務の今井勘右衛門(子の六右衛門が後に御使者宿を運営)である。鑄錢方三輪忠兵衛、錢座は鍋屋小路(庄内分)と堀米分・島立である。



「寛永通寶」の書体は伝僧天海書。特長は「寶が仰ぐ斜寶」「斜寶縮寶」。銅 10 貫匁、錫 6 貫匁の割合で鑄錢。錢座は鍋屋小路「田中、濱、三輪、戸田の 4 軒の鑄物師屋」。

濱石見、田中弦右衛門は河内の国丹南郡の鑄物師。元和 8 年 (1622) 飯田町に住む。寺の鐘鑄造。

濱氏、天正 12 年 (1584) 小笠原貞慶招きで、飯田町に住み梵鐘製作。

寛永 14 年 (1637) 水戸、仙台、三河吉田、信濃松本、越後高田、長門萩、備前岡山、豊後竹田の 8 か所に錢座を設ける。松本錢座操業開始。

寛永 14 年 (1637)～正保 3 年 (1646) 銅輸出禁止措置(銅錢不足の原因・寛永通寶の鑄造材料確保のため)

寛永 15 年 (1638)2 月 出雲松江藩 26.4 万石京極若狭守忠高亡。松平直政転封出雲松江 18.6 万石。

松平因幡守勝義松本城城番。直政 6 年在城。

寛永 16 年 (1639) 駿河井之宮にも錢座を設ける。

寛永 16 年 (1639) 錢貨相場の下落、1 貫文は銀 16~12 匁の交換。

寛永 17 年 (1640) 萩藩江戸留守居役福間彦右衛門の『福間牒』に

[「近年諸国にて寛永の新錢仰せ付られ候ところに、いずれも沢山に鑄出し、もはや御用無しに候条、国々鑄錢きつと差し留め、鑄させ申す間敷き」旨仰せ渡たされた。そして、他の錢座とも同様であった]とある。松本錢座操業開始から 4 年間操業した後、錢座解散。

寛永 17 年 (1640) 松本錢座、鍋屋小路で鑄造鑄錢の解散。

寛永 18 年 (1641) 地方鑄錢禁止。

寛永 21 年 (1645) 中町周辺で火災。

慶安元年 (1648) 乾瑞寺(禪寺)創建。水野忠職(ただもと)の弟(京都妙心寺養賢院、後性宣の龍天和和尚)を招き、水野家由緒寺とす。現郵便局の裏に墓地有。

『信府統記』に「境内飯田町南北 31 間 3 尺、東西 22 間 3 尺、本町南北 18 間 3 尺、22 間」とあり、本町矢島茂左衛門の持ち地間口 1 間、奥行 10 間 5 尺を買い、本町に通ずる裏門を造る。この小路を乾瑞寺小路と呼んだ。

万治 2 年 (1659) 万治 2 年までの鑄造寛永通寶を古寛永通寶という。

寛文 7 年 (1667) 常設の御使者宿が本町 2 丁目に設けられる。

寛文 8 年 (1668) 寛文 8 年以降鑄造された寛永通寶を新寛永通寶と言う。

延宝 2 年 (1674) 御使者宿の運営が今井家に任命。以後、幕末まで続く。

元禄 9 年 (1696) 本町越後屋出火、本町・中町に被害がでる。

宝永 4 年 (1707) 宝永大地震発生。

享保 13 年 (1728) 享保 13 年秋改松本城下絵図では、「使者宿 六右衛門」とある。

元文 4 年 (1739) 鉄 1 文錢出現。

明和 2 年 (1765) 金座・銀座が錢貨鑄造兼任。

安永 5 年 (1776) 中町の綿屋出火、広域焼失。

天明 3 年 (1783) 中町裏小路～本町正安小路まで焼失。御使者宿が本町 4 丁目に移る。

文化 11 年 (1814) 十返舎一九松本来訪。

天保 14 年 (1843) 『善光寺道名所図会』で、松本城下町紹介。

嘉永 7 年 (1854) 松本地方大地震。



万延元年(1860) 鉄4文銭出現。

慶応元年(1865) 博労町山城屋出火。中町まで被害及ぶ。

昭和43年(1968) 旧市民会館の北側に松本銭座記念碑建立。

昭和60年(1985) 松本市教育委員会社会教育課(松本市 1985)に、松本城二の丸御殿跡から古寛永13枚、新寛永92枚、鑄棹1枚が出土し報告された。

平成3年(1991) 今井敬三氏より、今井家に代々伝えられてきた枝銭と許状が松本市に寄贈される。

平成7年(1995)4月28日 市重要文化財指定・今井家文書と枝銭。長野県松本市立博物館常設展示。

平成27年(2015)8月3日～28年(2016)9月13日。松本城下町跡本町第8次発掘調査。

平成30年(2018) 松本城下町跡本町第8次発掘調査報告書作成。

平成30年(2018)『月刊「収集」』7月号によると、昭和63年(1988)8月21日付『松本市民タイムス』の記事に「松本藩でも鑄造 寛永通寶 枝銭 文書など保存」とあり、桐原健の母桐原すみが保管。後、平成2年(1990)7月号『月刊「収集」』に静岡いづみの会「穴銭入門」にも掲載。

## 参考文献 (文献番号は第III章の続き)

- 文献13 岩元康成 2018『加治木銭鑄銭所跡の調査』「始良市埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集」始良市教育委員会
- 文献14 梅崎恵司・柴尾俊介 1992『尾崎遺跡』「北九州市埋蔵文化財調査室報告書 第118集」  
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 文献15 梅崎恵司 2008『黒崎城跡8』「北九州市埋蔵文化財調査室報告書 第392集」  
(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 文献16 梅崎恵司 2008『福岡藩黒崎鑄銭場』「九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集」
- 文献17 小川 浩 1967「寛永通寶銭譜」日本小銭研究会
- 文献18 嵯峨祐之 2018『古寛永通寶松本銭について』「月刊 収集」7月号 Vol.43 No.7
- 文献19 佐藤浩司 2005『黒崎城跡1』「北九州市埋蔵文化財調査室報告書 第336集」  
(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
- 文献20 松本市教育委員会 1968「寛永通寶 松本銭座」
- 文献21 松本市教育委員会 1985「松本城二の丸御殿跡 発掘調査・史跡公園整備」
- 文献22 1993『お城がすき まつもとが好き』「文化財の知識シリーズ第3集」
- 文献23 松本市教育委員会 1998「松本のたから～受け継ぎ伝える郷土の文化財～」
- 文献24 松本城管理事務所 2009『銭座が松本にあった』「城下町探訪32」「国宝松本城を世界遺産に」推進実行委員会

1匁3.75g 1貫3.75kg 1000匁1000文

- 1 砲弾型坩堝と鋳滓が共伴 = 銭専用=熔土・ほど工程を示す
- 2 鑄放9枚 = 松本銭の基準資料は極めて重要
- 3 銭座は鍋屋小路という証左になる成果=鍋屋小路の銭座が具体的になった

\*これまで、豊後竹田、長州、岡山などが知られる。今回は「松本銭」で知られる松本銭座の具体的な証拠は、今後の寛永通寶研究において重要な資料となる。

表 27 錢座一覧表 (中世・近世・近代)

錢 座		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
内 容		堺	加治木	黒崎	岡	長州	岡山	大阪	近江	吉田	松本	高田	江戸	水戸	仙台	南部(1)	南部(2)
文献	文献	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	絵図	—	—	—	—	○	—	○	—	—	○	—	○	○	○	—	○
建物	全面積	—	—	150 × 30	—	140 × 100	—	2700 坪	—	—	—	—	—	207 × 126	209 × 152	—	100 × 60
	長屋工房	—	○	1	—	2	○	—	—	—	—	—	○	○	○	—	—
	炉通り	—	—	1	—	1	○	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—
	岡小屋	—	—	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—
炉	焙焼炉	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	コシキ炉 (大吹)	—	—	1	—	31	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	吹床 (小吹)	—	3	~12	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	匣 (可動小吹炉)	—	—	6~	—	—	○	—	—	—	7	—	—	—	—	—	—
	羽口 石製・土製	—	—	石 4 土 6	—	± 4	±	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
道具	砲弾型ルツボ	—	1738 個	200 箱	10 個	32 個	2000 個	—	—	—	203 個	—	—	—	—	—	—
	スタンプ付ルツボ	—	—	錢 1 他 3	—	—	錢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	椀型ルツボ	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	蓋付トリベ	—	—	6	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
	鑄型	○	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	砥石	—	—	1	124	43	~ 3000	—	—	—	15	—	—	—	○	—	—
	ルツボ片砥石	—	—	○	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
製品	中国錢	○	○	(60)	1	33	—	—	—	—	24	—	—	—	—	—	—
	模鑄錢	○	7	9~	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	枝錢	○	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
	鑄棹	○	—	5	1	—	16	—	—	—	1	—	—	—	—	—	144
	寛永通寶	—	2	(300) ○	41	20	881	—	—	—	56	—	—	—	○	○	—
	鉄製寛永通寶	—	—	(20) ○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	86
分析	メタル Cu	—	—	○	—	○	○	—	—	—	1	—	—	—	—	○	—
	合金	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	他	7	—	○	—	—	—	—	—	—	鉛	—	—	—	—	—	—

※○は有，—は無し。全面積は上が東西長，下が南北長で単位はm。他数字は点数。黒崎は箱数。

各都道府県は1大阪，2鹿児島，3福岡，4大分，5山口，6岡山，7大阪，8滋賀，9愛知，10長野，11新潟，12東京。

13茨城，14宮城，15・16岩手。1~3は中国錢の模鑄錢座。4~16は寛永通寶錢座。

13石巻鑄錢場，14岩手県駒板遺跡，15釜石市栗林錢座。

表 28 古銭（中国銭）一覧表

拓本	ID	地区	検出面	遺構	出土地点	器種	最大外径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属種別	備考
○	84	A	I	表土		熙寧元寶	23.8	1.3	3.2	Cu	初鑄 1068 年 (宋)
	87	A	I	攪乱		一銭	22.9	1.3	3.6	Cu	昭和 10 年鑄造
	101	A	I	表採		一銭	23.8	1.7	3.9	Cu	大正 8 年鑄造
○	103	立会				天禧通寶	24.5	0.9	2.4	Cu	初鑄 1017 年 (宋)
○	137	A	II	水道遺構 6	東側	元豊通寶	23.5	0.8	1.7	Cu	初鑄 1078 年 (宋)
○	147	A	II	検出面	No. 104 (溝状遺構 3・4 の間)	嘉祐元寶	23.6	1.0	2.5	Cu	初鑄 1056 年 (宋)
○	148	A	II	検出面	No. 112	元豊通寶	23.5	0.7	2.0	Cu	初鑄 1078 年 (宋)
○	149	A	II	検出面	No. 113	景定元寶	24.2	1.0	2.5	Cu	初鑄 1260 年 (南宋)
○	150	A	II	検出面	No. 115	元豊通寶	23.8	1.1	2.2	Cu	初鑄 1078 年 (宋)
	170	A	III a	炭範囲 11	No. 9	銭貨	22.4	1.1	2.2	Cu	
○	171	A	III a	炭範囲 15	No. 20	祥符通寶	24.2	1.1	3.0	Cu	初鑄 1008 年 (宋)
○	183	A	III a	炭範囲 11	No. 5	元祐通寶	24.6	1.1	3.1	Cu	初鑄 1086 年 (宋)
○	184	A	III a	西壁		元□□寶	23.0	1.1	2.1	Cu	
○	187	A	III a	整地土		熙寧元寶	24.2	1.2	3.5	Cu	初鑄 1068 年 (宋)
○	191	A	III a	整地土	北側	至道元寶	24.5	1.2	2.5	Cu	初鑄 995 年 (宋)
○	192	A	III b	検出面	No. 213	乾元重寶	23.2	0.9	2.1	Cu	初鑄 758 年 (唐)
○	193	A	III b	検出面	No. 226	元祐通寶	24.3	1.3		Cu	
	194	A	III b	検出面	No. 227	洪武通寶	21.6	1.4	1.2	Cu	初鑄 1368 年 (明)
○	197	A	III b	整地土		景祐元寶	24.2	0.8	1.2	Cu	初鑄 1034 年 (宋)
○	199	A	IV	溝 1	No. 1	熙寧元寶	24.0	1.0	2.6	Cu	初鑄 1068 年 (宋)
	206	A	I	整地土		雁首銭	22.5	1.2	2.6	Cu	
○	209	A		排土		開元通寶	24.5	1.1	2.5	Cu	初鑄 621 年 (唐)
○	320	A	IV	土 31	No. 1	永樂通寶	24.7	1.0	3.1	Cu	初鑄 1408 年 (明)
○	321	A	III b	土 4	No. 1	宋通元寶	24.6	1.0	3.1	Cu	初鑄 968 年 (宋)
○	322	A	IV	溝 7	No. 4	□□□寶	24.9	1.0	2.9	Cu	
○	325	B		排土		治平通寶	23.9	1.5	3.6	Cu	初鑄 1064 年 (宋)
○	334	B	I	水道遺構 1		開元通寶	24.6	1.2	2.7	Cu	初鑄 621 年 (唐)
○	399	B	III b	水道遺構	No. 387	至和元寶	23.0	1.1	3.0	Cu	初鑄 1054 ~ 1055 年 (宋)
○	400	B	III b	検出面	No. 394	熙寧元寶	23.3	1.3	3.0	Cu	初鑄 1068 年 (宋)
○	402	B	III b	整地土		永樂通寶	21.9	0.7	1.3	Cu	初鑄 1408 年 (明)
○	409	B	IV	検出面	No. 414	皇宋通寶	24.0	0.9	2.2	Cu	初鑄 1039 年 (宋)

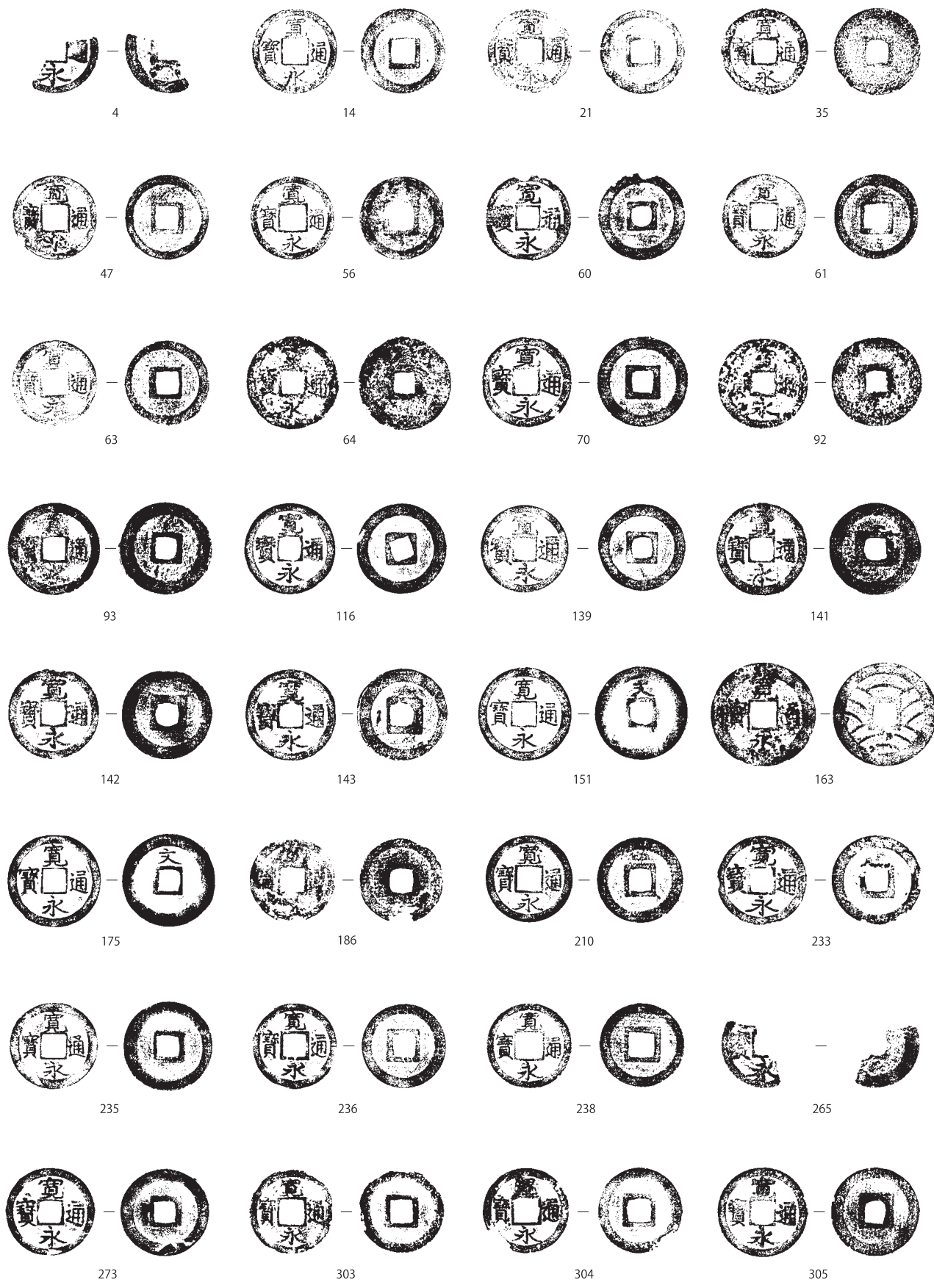
表 29 古銭（寛永通寶）一覧表

ID	地区	検出面	遺構	出土地点	器種	最大外径 (mm)	最大内径 (mm)	最大外輪巾 (mm)	最大方孔巾 (mm)	最大郭巾 (mm)	最大背郭巾 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属種別	備考
4	A	I	建 2	北西隅トレンチ	□永通□	17.3	-	2.0	-	0.1	1.8	1.2	1.1	Cu	寛永通寶か
14	A	I	土 22	No. 11	寛永通寶	23.2	19.0	1.6	7.1	0.2	1.0	0.9	2.2	Cu	新寛永
21	A	I	土 48		寛永通寶	22.9	20.0	1.4	6.4	1.0	1.1	1.0	2.0	Cu	
35	A	I	土 68		寛永通寶	23.6	19.2	2.2	6.1	0.4	0.8	1.0	2.5	Cu	
47	A	I	土 72		寛永通寶	23.0	18.9	1.7	6.5	0.5	1.0	1.1	2.9	Cu	
56	A	I	土 81	No. 2	寛永通寶	22.7	19.5	1.7	6.8	0.3	1.8	0.8	2.0	Cu	新寛永
60	A	I	建 2	検出面 No. 32	寛永通寶	23.7	20.8	1.8	5.4	0.4	0.9	1.4	3.2	Cu	
61	A	I	検出面	No. 40	寛永通寶	23.1	18.7	2.1	6.6	0.7	1.0	0.9	2.1	Cu	新寛永
63	A	I	石列 7・土 69	検出面 No. 108	寛永通寶	23.2	19.8	1.7	6.1	0.7	1.2	0.9	2.2	Cu	新寛永
64	A	I	検出面	No. 109	寛永通寶	25.2	20.5	2.3	5.6	1.0	2.2	1.4	2.8	Cu	
70	A	I	検出面	西側	寛永通寶	24.7	19.9	2.1	5.9	0.5	1.1	1.2	3.0	Cu	
92	A	I	排土		寛永通寶	24.3	20.2	1.9	5.4	0.6	2.8	2.0	3.4	Cu	
93	A	I	排土		寛永通寶	25.0	20.7	2.5	6.0	0.6	1.0	1.2	2.9	Cu	
100	A	I	北壁		寛永通寶	25.0	20.1	1.9	6.5	0.6	1.7	1.2	2.7	Cu	未成品
116	A	II	土 93	No. 26	寛永通寶	24.6	20.1	2.0	5.8	0.4	1.2	1.1	2.7	Cu	
123	A	II	土 127		寛永通寶	24.3	19.8	1.9	6.1	0.6	1.5	1.2	2.4	Cu	未成品
139	A	II	溝 3・4		寛永通寶	23.6	19.7	1.7	5.6	0.4	1.3	1.2	3.4	Cu	
141	A	II	土 29	No. 1	寛永通寶	24.9	20.1	2.7	5.8	0.6	2.0	1.4	4.0	Cu	
142	A	II	土 29	No. 1	寛永通寶	24.3	20.0	1.9	6.3	0.7	2.0	1.0	2.8	Cu	
143	A	II	土 29	No. 1	寛永通寶	24.7	20.3	2.0	5.9	0.8	2.4	1.3	3.0	Cu	
144	A	II	検出面	No. 54	寛□通□	24.2	-	2.0	-	0.6	1.8	1.0	1.3	Cu	寛永通寶か / 未成品

ID	地区	検出面	遺構	出土地点	器種	最大外径(mm)	最大内径(mm)	最大外輪巾(mm)	最大方孔巾(mm)	最大郭巾(mm)	最大背郭巾(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	金属種別	備考
151	A	II	土 119	検出面 No. 209	寛永通寶	25.2	20.2	2.1	6.0	0.7	1.4	1.1	3.0	Cu	背文
163	A	II	排土		寛永通寶	28.3	21.1	3.3	6.4	0.9	1.3	1.3	5.0	Cu	背十一波
175	A	III b	検出面	No. 189	寛永通寶	25.1	20.4	2.2	5.9	0.3	1.2	1.2	3.8	Cu	背文
186	A	III a	排土		寛永通寶	22.9	18.5	2.1	8.4	0.8	1.5	1.0	1.7	Cu	
210	A		排土		寛永通寶	23.4	19.5	1.9	6.2	0.5	1.7	1.1	3.2	Cu	新寛永
233	A	I	検出面	No. 1	寛永通寶	24.2	21.2	2.1	6.2	0.7	1.9	1.1	2.6	Cu	
235	A	I	検出面	No. 3	寛永通寶	24.1	18.4	2.2	6.4	0.5	0.9	0.9	2.7	Cu	
236	A	I	検出面	No. 4	寛永通寶	23.0	19.5	1.9	6.2	0.7	1.1	1.0	2.6	Cu	新寛永
238	A	I	検出面	No. 47	寛永通寶	22.9	18.7	1.7	6.6	0.8	1.8	1.0	2.7	Cu	新寛永
265	A	I	検出面	南側	□永□寶	17.6	-	1.5	-	0.9	1.7	1.2	1.3	Cu	寛永通寶か
273	A	II	土 34	No. 2	寛永通寶	23.9	19.7	2.0	5.8	0.4	1.1	1.1	3.0	Cu	
295	A	II	溝 4	No. 24	□永通□	20.2	-	2.0	-	0.5	1.8	1.4	1.9	Cu	寛永通寶か／未成品
303	A	II	検出面	No. 65	寛永通寶	22.8	18.7	1.9	6.3	0.9	1.0	0.9	2.0	Cu	
304	A	II	検出面	No. 66	寛永通寶	23.1	19.0	2.0	6.5	0.7	1.7	1.1	2.0	Cu	新寛永
305	A	II	溝 3・4	検出面 No. 79	寛永通寶	24.1	19.5	2.0	6.3	0.5	2.2	1.5	3.4	Cu	
308	A	II	検出面	No. 97	寛永通寶	27.0	19.6	2.8	5.2	0.9	1.5	1.5	4.2	Cu	未成品
339	B	I	水道 3		寛永通寶	25.1	19.8	2.8	6.1	0.9	1.5	1.0	3.3	Cu	
352	B	I	検出面	東側	寛永通寶	24.5	20.0	1.9	6.1	0.9	1.1	1.3	3.1	Cu	
353	B	I	検出面	東側	寛永通寶	22.9	19.0	1.6	6.1	0.6	1.3	1.2	2.7	Cu	新寛永か
354	B	I	検出面	東側	寛永通寶	22.3	18.4	1.7	6.9	0.7	0.9	0.8	2.0	Cu	新寛永
355	B	I	検出面	東側	寛永通寶	23.5	18.8	1.7	5.8	0.8	1.6	14.0	2.9	Cu	未成品
364	B	I	検出面	西側	寛永通寶	23.9	19.4	1.9	6.0	0.4	0.7	1.4	3.2	Cu	
365	B	I	焼土範囲 1		寛永通寶	25.4	20.1	2.5	5.9	0.5	1.7	1.1	3.0	Cu	背文
367	B	I	検出面		寛永通寶	26.3	19.7	2.4	5.5	0.4	2.0	1.5	4.0	Cu	未成品
368	B	I	排土		寛永通寶	24.0	18.7	2.2	5.9	0.2	1.0	1.2	3.0	Cu	
369	B	I	排土		寛永通寶	23.5	18.7	2.1	6.3	0.9	1.6	0.9	2.6	Cu	新寛永
383	B	II	検出面		寛永通寶	25.4	20.1	2.6	5.7	1.0	1.6	1.2	3.0	Cu	背文
384	B	II	検出面	中央南	寛永□寶	24.2	19.7	2.0	6.0	1.1	1.7	1.3	1.6	Cu	寛永通寶か／未成品
385	B	II	検出面	東側	寛永通寶	25.8	19.9	2.1	-	0.8	2.5	1.1	2.7	Cu	未成品
392	B	II	整地土		寛永通寶	24.4	20.2	2.2	5.3	0.4	1.5	1.0	2.9	Cu	

表 30 古銭分布表

銭貨名	王朝名	初鋳年	調査区 - 検出面													計	
			A- I	A- II	A- III a	A- III b	A- IV	A	B- I	B- II	B- III a	B- III b	B- IV	B	立会		
開元通寶	唐	621						1	1								2
乾元重寶	唐	758				1											1
宋通元寶	宋	968				1											1
至道元寶	宋	995			1												1
祥符通寶	宋	1008			1												1
天禧通寶	宋	1017				1										1	1
景祐元寶	宋	1034				1											1
皇宋通寶	宋	1039												1			1
至和元寶	宋	1054～ 1055										1					1
嘉祐元寶	宋	1056		1													1
治平通寶	宋	1064													1		1
熈寧元寶	宋	1068	1		1		1					1					4
元豐通寶	宋	1078		3													3
元祐通寶	宋	1086			1	1											2
景定元寶	南宋	1260		1													1
洪武通寶	明	1368				1											1
永樂通寶	明	1408					1					1					2
寛永通寶	日本 (明正)	1636	19	15	1	1		1	10	4							51
一銭			2														2
雁首銭			1														1
不明					2		1										3
		計	23	20	7	6	3	2	11	4	0	3	1	1	1		82



0 S=2/3 5cm

图 60 寬永通寶 (1)



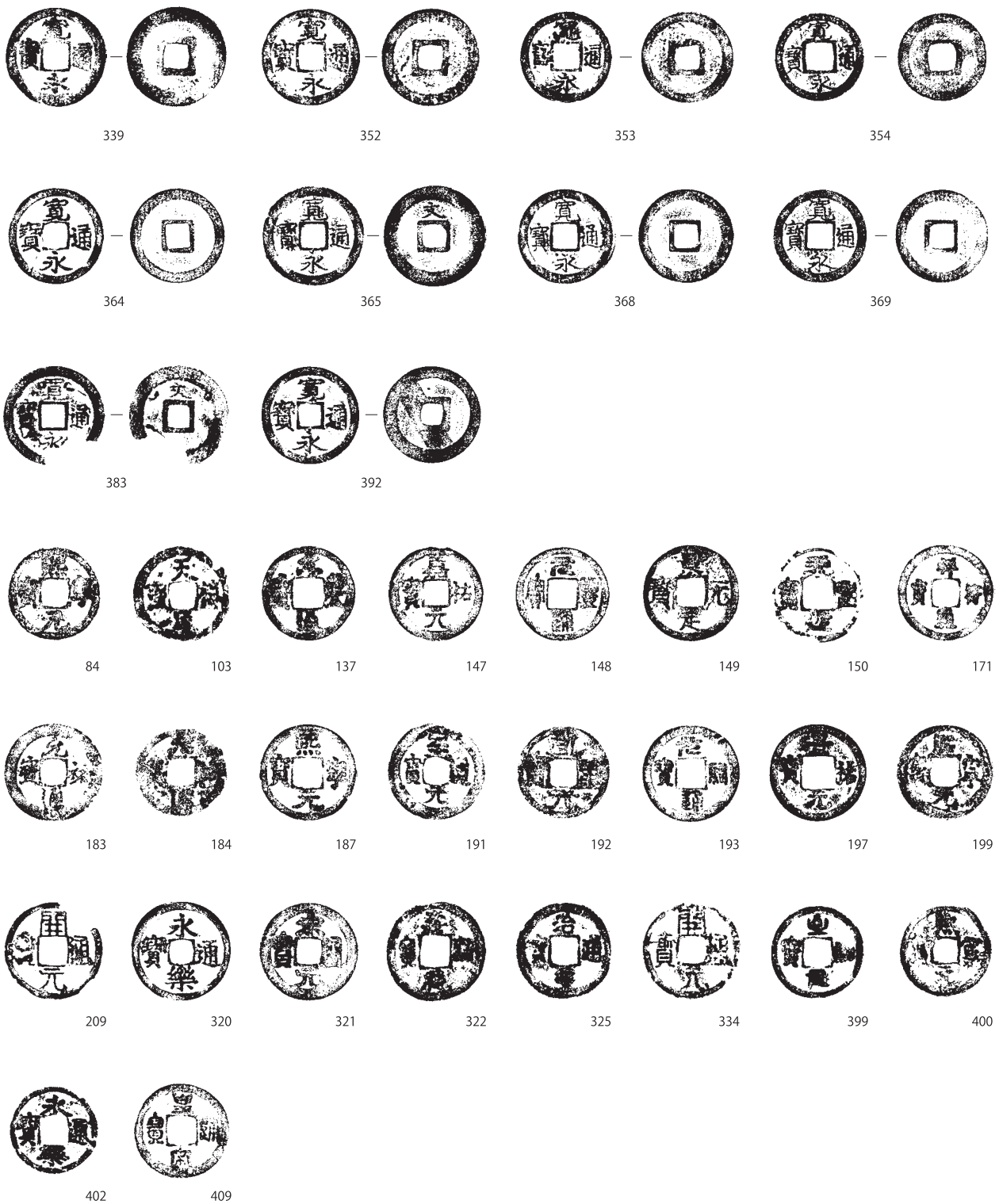


图 61 寬永通寶 (2) · 中国錢

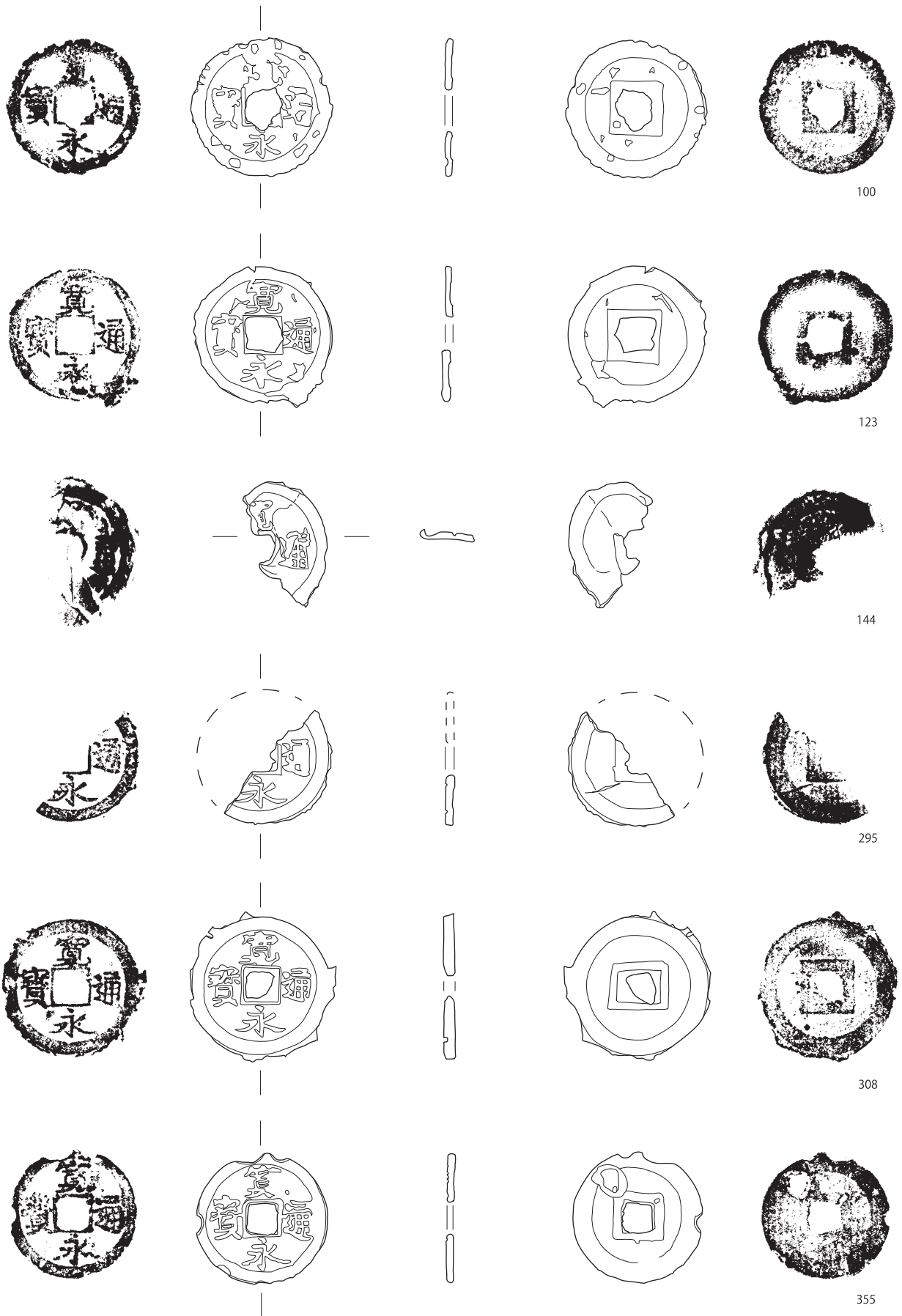
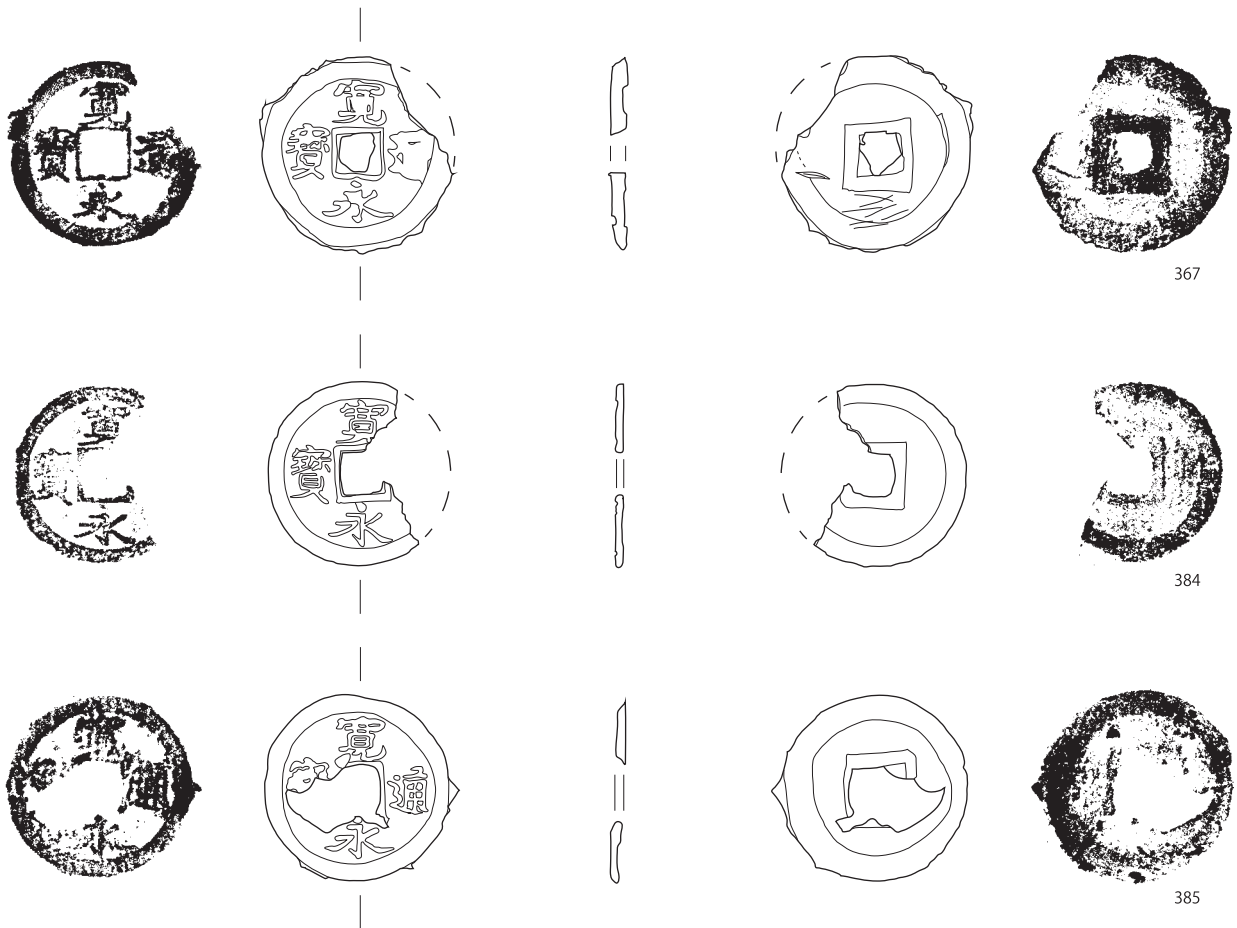
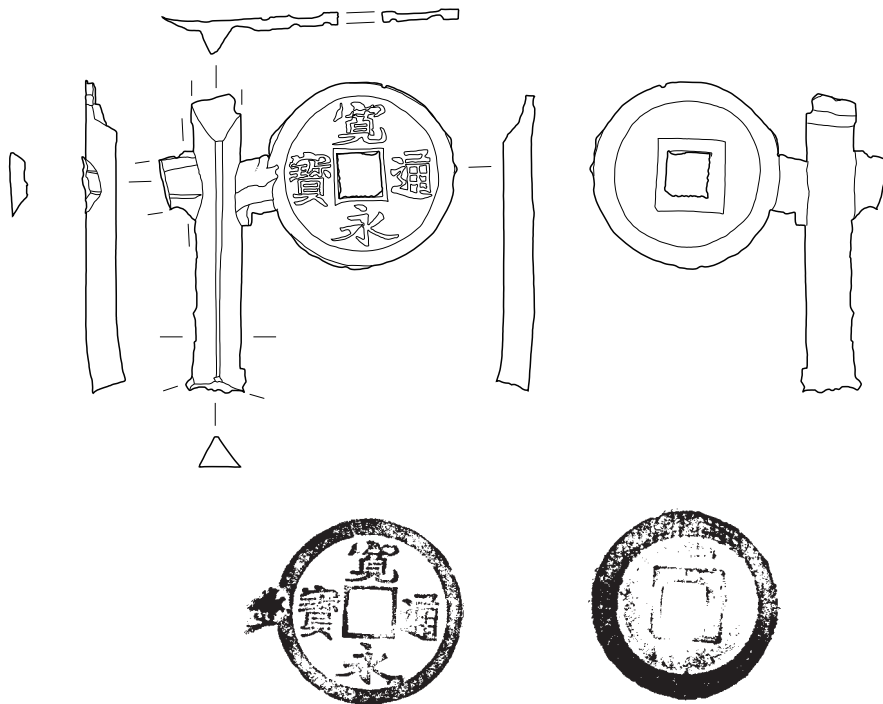


図 62 鑄放（バリ付寛永通寶）(1)



0 S=1/1 5cm



参考資料 枝銭 (松本市立博物館所蔵)

0 S=1/1 5cm

図 63 鑄放 (バリ付寛永通寶) (2)

表 31 埧塙一覽表

掲載順	地区	区画	検出面	遺構	実測番号	注記	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土
									口径	底径	器高		
1	A	町屋 2	I	土 43	るつぼ-54	本マチ 8 I 検土 43-2636	土師質	埧塙	—	—	—	内面：ナデ調整、外面：指頭圧痕あり、腰部から底部にかけて赤色の溶融金属附着、胎土は在地産内耳鍋に似る	褐色 (やや粗)
2	B	宿	I	整地土 (火災層)	るつぼ-1	本マチ 8 I 検セイ-2601	瓦質	埧塙	—	7.0	—	砲弾形、内面：ナデ調整、一部に溶融金属附着、外面：赤褐色～黒褐色の溶融金属附着、底部：炭・小石・溶融金属附着	暗灰 (緻密)
3	B	宿	I	水道 2	るつぼ-50	本マチ 8 I 検 B 水 2-2619	瓦質	埧塙	—	6.0	—	砲弾形、内外面ナデ調整、内面：黒褐色・白色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部平坦	暗灰 (緻密)
4	A	宿	I	検出面	るつぼ-59	本マチ 8 I 検 検-2657	土師質	不明	—	—	—	器形他の砲弾形とは異なるもの、胴部最大径 12.6cm、内面：ナデ調整、外面：褐色・黒褐色の溶融金属厚く附着	黄褐色・橙褐色 (密)
5	B	宿	I	トレンチ	るつぼ-2	本マチ 8 I 検 B トレンチ排水溝掘削セイ-2601	瓦質	埧塙	9.6	5.2	—	砲弾形、口縁端部は平坦、内面：ナデ調整、緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色～黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
6	A	宿	I	溝 3	るつぼ-3	本マチ 8 I 検 A 溝 3-2677	瓦質	埧塙	10.0	—	—	砲弾形、口縁端部は平坦、内面：板状工具ナデ調整、口縁内面に溶融金属附着、外面：溶融金属附着	暗灰 (緻密)
7	A	宿	I	検出面南側 (整地層)	るつぼ-28	本マチ 8 I 検 A 検出面南側-2655	瓦質	埧塙	9.6	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、黒褐色・淡灰色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
8	A	宿	II	溝 3	るつぼ-24	本マチ 8 II 検 A 溝 3-2674	瓦質	埧塙	7.4	—	—	成形：砲弾形、内面：黒褐色・暗赤褐色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
9	A	宿	II	溝 3	るつぼ-35	本マチ 8 II 検 A 溝状遺構 3-2678	瓦質	埧塙	—	4.0	—	砲弾形、内面：白色・暗褐色の溶融金属附着、外面：赤褐色・暗灰色の溶融金属附着、底部平坦	暗灰 (緻密)
10	A	宿	II	溝 3	るつぼ-40	本マチ 8 II 検 A 溝 3-2678	瓦質	埧塙	—	5.0	—	砲弾形、内面：暗赤褐色・褐色の溶融金属附着、外面：淡灰色・黒褐色・赤褐色の溶融金属附着、底部は平底	暗灰 (緻密)
11	A	宿	II	溝 3	るつぼ-42	本マチ 8 II 検 A 土 4-2704	瓦質	埧塙	—	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整か、黒褐色・緑色の溶融金属附着、外面：茶褐色・黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
12	A	宿	II	溝 4	るつぼ-4	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2679・2680、III 検 A 壁-2782	瓦質	埧塙	9.0	—	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整、外面：溶融金属附着、内面：溶融金属一部附着、底部：炭・小石・溶融金属附着	暗灰 (緻密)
13	A	宿	II	溝 4	るつぼ-5	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2686・2687・2688	瓦質	埧塙	—	8.8	—	砲弾形、内面：ナデ調整、外面：黒褐色・緑色の溶融金属附着、内面：溶融金属一部附着、底部：平底	暗灰 (緻密)
14	A	宿	II	溝 4	るつぼ-6	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2685	瓦質	埧塙	—	9.2	—	砲弾形、内面：ナデ調整、外面：赤褐色・緑色の溶融金属附着、底部：平底	暗灰 (緻密)
15	A	宿	II	溝 4	るつぼ-7	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2681	瓦質	埧塙	—	—	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整、黒褐色の溶融金属僅かに附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部：炭・小石・灰色の溶融金属附着、底部は平底	暗灰 (緻密)
16	A	宿	II	溝 4	るつぼ-22	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2690	瓦質	埧塙	(10.4)	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、一部に緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色・緑色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
17	A	宿	II	溝 4	るつぼ-48	本マチ 8 II 検 A 溝状遺構 4 No18-2683、II 検 A 溝状遺構 4 No19-2684	瓦質	埧塙	—	5.6	—	砲弾形、内面：暗褐色・淡灰色、淡緑色の溶融金属附着、外面：黒褐色・暗赤褐色の溶融金属附着、底部平坦	暗灰 (緻密)
18	A	宿	II	溝 4	るつぼ-49	本マチ 8 II 検溝 4-2689	瓦質	埧塙	—	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、一部黒褐色の溶融金属附着、外面：淡灰色・赤褐色・緑色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
19	A	宿	II	溝 4-26	るつぼ-41	本マチ 8 II 検 A 溝 4-2692	瓦質	埧塙	9.6	—	—	砲弾形、内・外面：淡灰緑色・緑色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
20	A	宿	II	溝 2	るつぼ-8	本マチ 8 II 検 A 水道遺構 2-2665	瓦質	埧塙	9.9	—	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整、口縁端部から 5cm 程の部分に黒褐色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)

掲載順	地区	区画	検出面	遺構	実測番号	注記	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土
									口径	底径	器高		
21	A	宿	II	土 29	るつぼ-33	本マチ 8 II 検 A 検出面 No51 - 2734、土坑 29 No 2	瓦質	罎塼	(9.4)	—	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整、暗褐色の溶融金属附着、外面：淡灰・暗緑色・一部赤褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
22	B	宿	II	土 141	るつぼ-25	本マチ 8 II 検 B 土坑 141 - 2730	土師質	罎塼か	9.2	—	—	他の罎塼と異なり土師質、内面：残存片下端に被熱痕、板状工具ナデ痕、外面：指頭圧痕、ナデ調整、残存下端部に黒褐色の溶融金属附着、口縁端部ヨコナデ調整	褐色 (やや粗)
23	A	町屋 6	II	土 136	るつぼ-9	本マチ 8 II 検 A 土坑 136 - 2725	瓦質	罎塼	—	3.8	—	砲弾形、内面：ナデ調整、一部に赤褐色の溶融金属附着、縮緬じわ状痕有、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部：平底、炭・溶融金属附着	暗灰 (緻密)
24	B	宿	II	土 166	るつぼ-29	本マチ 8 II 検 B 土坑 166 - 2729	瓦質	罎塼	9.6	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部：成形時に押圧して端部を平坦としている。押圧が強い為、口縁端部が内側へ飛び出している	暗灰 (緻密)
25	A	町屋 6	II	土 33	るつぼ-30	本マチ 8 II 検 A 土坑 33 南側 - 2709	瓦質	罎塼	—	—	—	砲弾形、内面：暗灰色の溶融金属附着、外面：赤褐色・灰色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
26	A	町屋 6	II	土 40	るつぼ-31	本マチ 8 II 検 A 土坑 40 東側 - 2716	瓦質	罎塼	8.3	—	—	砲弾形、内面：口縁端部内面に沈線あり…口縁端部を平坦成形時の痕跡か、端部に緑色溶融金属附着、外面：黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
27	A	町屋 6	II	土 47	るつぼ-32	本マチ 8 II 検 A 土坑 47 - 2717	瓦質	罎塼	8.9	—	—	砲弾形、内面：灰緑色・黒褐色の溶融金属附着、外面：黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
28	A	町屋 6	II	土 136	るつぼ-47	本マチ 8 II A 検 土 136-2727	瓦質	罎塼	—	4.0	—	砲弾形、内面：淡灰色の溶融金属附着、ナデ調整、外面：黒褐色・淡灰色・緑色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
29	A	町屋 6	II	土 136	るつぼ-57	本マチ 8 II 検 土 136 - 2728	瓦質	罎塼	—	—	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整、一部に縮緬ジワ状痕跡、外面：黒褐色・灰色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
30	A	宿	II	溝 3・4 (西拡張区)	るつぼ-0	本マチ 8 II 検 A 溝状遺構 3・4 - 2751	瓦質	罎塼	9.2	—	—	砲弾形、内面：淡緑色の溶融金属附着、外面：淡緑色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
31	A	宿	II	溝 3・4 (西拡張区)	るつぼ-1	本マチ 8 II 検 A 溝状遺構 3・4 - 2751、II 検 A 検出面-2738	瓦質	罎塼	9.2	—	—	砲弾形、内面：緑・褐色・黒褐色の溶融金属附着、外面：淡褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
32	A	宿	II	溝 2	るつぼ-51	本マチ 8 II 検 AT 2 - 2770	瓦質	罎塼	—	—	—	砲弾形か、内面：黒褐色・暗赤褐色の溶融金属附着、外面：黒褐色・赤褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
33	A	宿	II	検出面 (整地層)	るつぼ-2	本マチ 8 II 検 A 検出面-2741	瓦質	罎塼	—	8.9	—	砲弾形、内面：ナデ調整、褐色・淡緑色・黒褐色の溶融金属附着、外面：赤褐色・緑色の溶融金属附着、底部は平坦	暗灰 (緻密)
34	A	宿	II	検出面 (整地層)	るつぼ-3	本マチ 8 II 検 A 検出面-2744	瓦質	罎塼	—	6.4	—	砲弾形、内面：工具ナデ調整、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部：炭・黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
35	A	宿	II	検出面 (整地層)	るつぼ-4	本マチ 8 II 検 A 検出面-2736	瓦質	罎塼	—	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、黒褐色の溶融金属附着、外面：黒褐色の溶融金属附着、底部：平坦、炭附着	暗灰 (緻密)
36	A	宿	II	検出面 (整地層)	るつぼ-36	本マチ 8 II 検 A 検出面 No86 - 2742	瓦質	罎塼	8.6	—	—	砲弾形、内面：暗褐色・緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・淡灰色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
37	A	検	II	検出面-2 (整地層)	るつぼ-43	本マチ 8 II 検 A 検出面-2759	瓦質	罎塼	9.6	—	—	砲弾形、内面：暗灰色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色、一部緑色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
38	A	宿	II	検出面 (整地層)	るつぼ-52	本マチ 8 II 検 A 検出面 No49 - 2733	瓦質	罎塼	—	—	—	砲弾形、内面：暗赤褐色の溶融金属附着、外面：暗赤褐色、黒色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
39	A	検	II	検出面南側 (整地層)	るつぼ-44	本マチ 8 II 検 A 検出面南側 - 2756	瓦質	罎塼	9.6	—	—	砲弾形、内面：口縁端部内面に縮緬じわ状痕あり、外面：茶褐色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
40	A	宿	II	トレンチ	るつぼ-38	本マチ 8 II 検 A トレンチ排水溝掘削中-2774	瓦質	罎塼	—	(4.4)	—	砲弾形、内面：板状工具ナデ調整か、白色・一部緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部平坦	暗灰 (緻密)



掲載順	地区	区画	検出面	遺構	実測番号	注記	種別	器形	法量 (cm)			技法・文様・形態の特徴	胎土
									口径	底径	器高		
41	A	宿	II	南整地土	るつぼ-21	本マチ8Ⅱ検A 調査区南整地土 中-2761	瓦質	埴塼	9.8	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整か、口縁端部に淡灰色の溶融金属附着、外面：淡灰色・赤褐色溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
42	B	宿	II	トレンチ	るつぼ-39	本マチ8Ⅱ検B トレンチ排水溝 掘削中-2774	瓦質	埴塼	8.7	—	—	砲弾形、内・外面：黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
43	A	宿	II	トレンチ5	るつぼ-53	本マチ8Ⅱ検 A トレンチ5- 2771	瓦質	埴塼	—	5.4	—	砲弾形、内面：ナデ調整、淡灰色の溶融金属附着、一部に縮緬ジワ状痕あり、外面：黒褐色・赤褐色・淡緑色の溶融金属、底部平坦	暗灰 (緻密)
44	B	Ⅲb	Ⅲb	土2	るつぼ-26	本マチ8ⅢB検 土坑2-2822	瓦質	埴塼	(10.5)	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、灰色の溶融金属附着、外面：灰色・淡緑色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
45	B	Ⅲb	Ⅲb	土2	るつぼ-27	本マチ8ⅢB検 土坑2-2822	瓦質	埴塼	8.8	—	—	砲弾形、内面：黒褐色・暗緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・淡灰緑色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
46	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-5	本マチ8Ⅲ検 A 整地層中- 2787	瓦質	埴塼	—	—	—	内面：ナデ調整、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部：炭・淡褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
47	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-6	本マチ8Ⅲ検 A 整地層中- 2792	瓦質	埴塼	—	8.2	—	砲弾形、内面：ナデ調整、緑色の溶融金属附着、外面：灰色・赤褐色の溶融金属附着、底部：淡緑色の溶融金属厚く附着	暗灰 (緻密)
48	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-7	本マチ8Ⅲ検 A 整地層中- 2791	瓦質	埴塼	—	9.4	—	砲弾形、内面：ナデ調整、縮緬じわ状痕あり、外面：茶褐色・黒褐色の溶融金属附着、底部：炭・暗灰色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
49	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-55	本マチ8Ⅲa検 A 重機掘削中北 部-2804	瓦質	埴塼	—	—	—	砲弾形、内面：淡灰緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・淡緑色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
50	B	Ⅲa	Ⅲa	廃土-2	るつぼ-37	本マチ8Ⅲa検 B 廃土-2817	瓦質	埴塼	9.2	—	—	砲弾形、内面：黒褐色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
51	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-20	本マチ8Ⅲa検 A 整地土中- 2786	瓦質	埴塼	9.4	—	—	砲弾形、内面：灰色・緑色の溶融金属附着、外面：赤褐色・黒褐色の溶融金属附着、口縁端部平坦	灰 (緻密)
52	A	Ⅲa	Ⅲa	検出面 (整地層)	るつぼ-23	本マチ8Ⅲa検 B-2805	瓦質	埴塼	8.4	—	—	砲弾形、内面：褐色・淡灰色の溶融金属附着、縮緬ジワ状痕あり、外面：黒褐色・淡灰色・赤褐色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	暗灰 (緻密)
53	B	Ⅲa	Ⅲa	検出面 (整地層)	るつぼ-45	本マチ8Ⅲa検 B 検出面No357 -2795	瓦質	埴塼	—	—	—	砲弾形、内面：灰緑色・暗褐色の溶融金属附着、外面：淡灰色・赤褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
54	A	Ⅲa	Ⅲa	検出面東側 (整地層)	るつぼ-58	3a 検A 検出面 東側-2799	瓦質	埴塼	—	—	—	砲弾形、内面：黒褐色の溶融金属附着、外面：黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
55	A	Ⅲa	Ⅲa	攪乱中	るつぼ-56	本マチ8Ⅲa検 A 攪乱中-2813	瓦質	埴塼	—	—	—	砲弾形、内面：淡緑色の溶融金属附着、外面：淡緑色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
56	A	Ⅲb	Ⅲb	整地層	るつぼ-9	本マチ8BⅢB 検整地層中-2 821	瓦質	埴塼	9.0	—	—	砲弾形、内面：暗褐色、緑色溶融金属附着、外面：暗灰色、一部緑色の溶融金属附着、口縁端部は平坦	灰～灰褐 (緻密)
57	A	IV	IV	検出面西壁 (整地層)	るつぼ-34	本マチ8Ⅳ検 A 検出面西壁付 近-2836	瓦質	埴塼	10.1	—	—	砲弾形、内面：ナデ調整、口縁端部内面に縮緬じわ状の痕跡あり、外面：褐色・黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)
58	A	IV	IV	検出面西壁 (整地層)	るつぼ-46	本マチ8Ⅳ検 A 検出面西壁付 近-2836	瓦質	埴塼	(9.5)	—	—	砲弾形、内面：緑色・灰色の溶融金属附着、外面：黒褐色・緑色の溶融金属附着、口縁端部平坦	暗灰 (緻密)
59	A	Ⅲa	Ⅲa	整地層	るつぼ-8	本マチ8Ⅲ検 A 整地層中- 2793	瓦質	取鍋	—	—	8.0	卵形、内面：ナデ調整か、外面：側面に把手が付いていた痕跡あり、上面に径3cmの孔があり蓋が付くもの、外面：赤褐色溶融金属附着、底部：赤褐色・一部黄褐色溶融金属附着	灰～灰褐 (緻密)
60	A	Ⅲa	Ⅲa	検出面東 (整地層)	るつぼ-60	本マチ8Ⅲa検 A 検出面東側- 2799	瓦質	取鍋か	—	—	—	卵形、内面：ナデ調整、外面：ナデ調整、赤褐色・黒褐色の溶融金属附着	暗灰 (緻密)

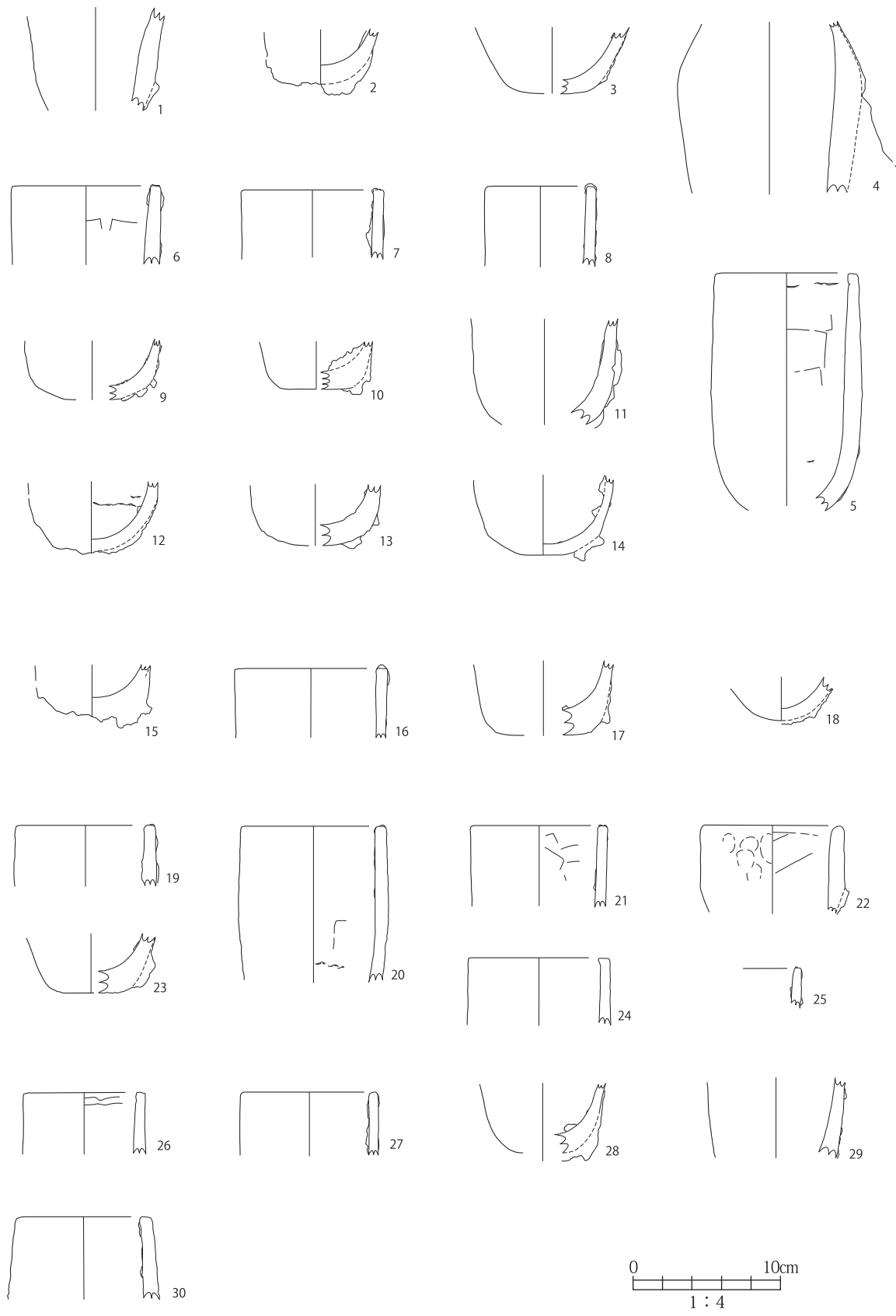


图 64 埴塙 (1)

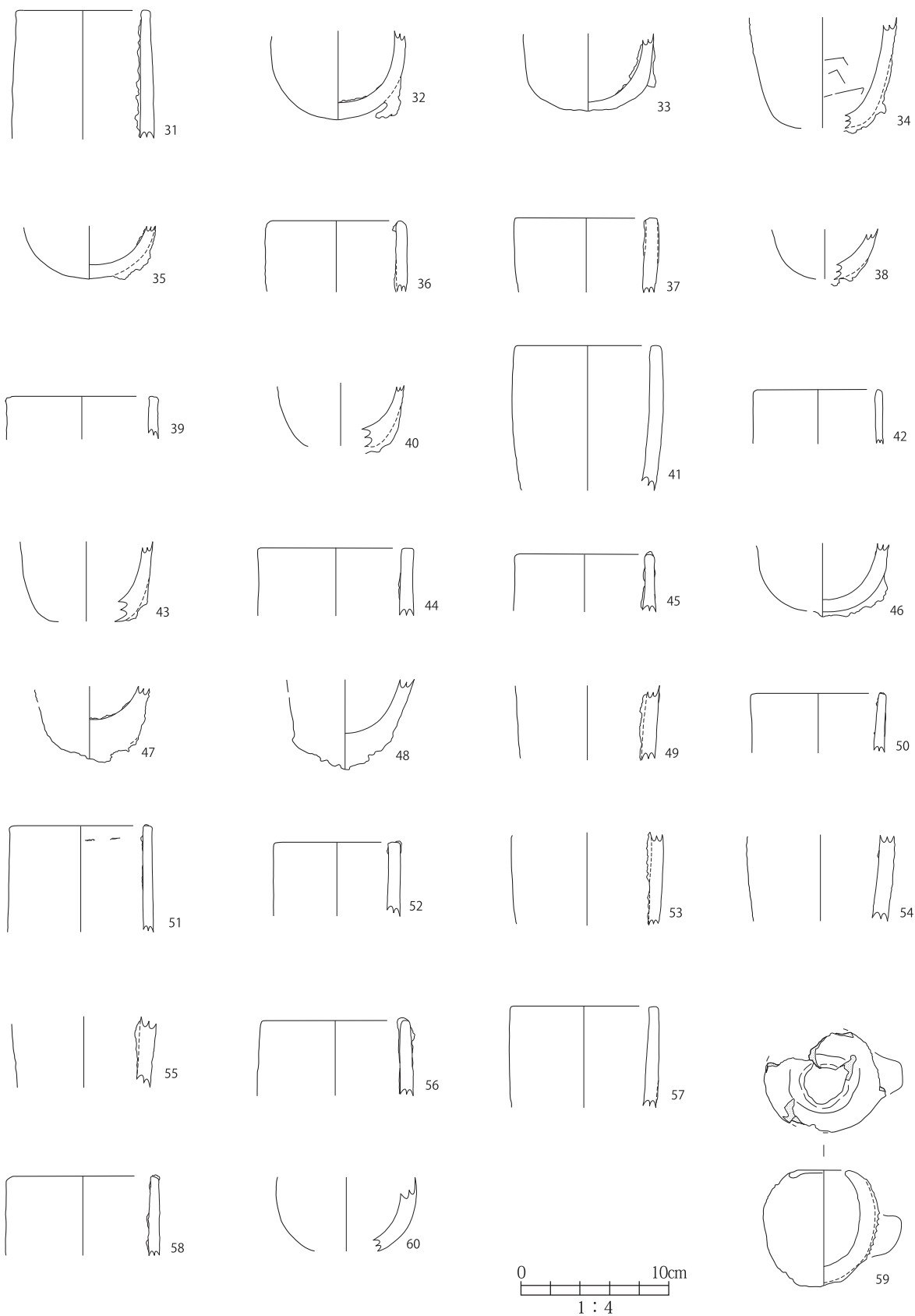


图 65 埴埴 (2)

# 第V章 自然科学分析

一般社団法人 文化財科学研究センター

## 第1節 樹種同定

### 1 はじめに

本報告では、松本城下町跡（本町第8次調査）より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

### 2 試料

試料は、本町第8次調査のA区第IV検出面溝2より出土した杭No.14、16、19から23、28、38、40、44、60、88、89、91の15点である。時代は戦国時代後半から末である。

### 3 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### 4 結果

表35に結果を示し、同定された分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

(1) サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 杭No.14、19、20、21、28、38、89、91

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型またはスギ型であり、1分野に2個存在する。分野壁孔の孔口はやや大きく、開口部の長軸が水平に近い。樹脂細胞は晩材部に散在し、水平末端壁は数珠状を呈する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直かつ肌目が緻密であり、広く用いられる。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 杭No.16、22、23、40、44、60、88

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し、晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20m、径0.4mぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性・保存性が高く、水湿によく耐える材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

### 5 所見

同定の結果、本町第8次調査の第IV検出面溝2より出土した杭はサワラ8点、クリ7点であった。

サワラの材は木理通直で割裂加工が容易なうえ、水湿によく耐える材である。湿気の多い肥沃地や溪流沿いを好む常緑針葉樹で、中部地方の山地には多い。長野県では古墳時代以降、サワラは容器、器具類、土木材などとしてよく用いられるが、強度を必要とする柱や梁などの建築材にはあまり利用されない。クリの材は重硬で耐朽性・保存性が極めて高く、建築材や土木材などに適している。また、乾燥した台地や丘陵地を好む落葉広葉樹で、二次林要素でもある。出土例から見て、中部地方ではサワラやクリは古くから土木材、施設材などとしてよく用いられ、長野県の箕輪遺跡（戦国時代から江戸時代）から出土した土木材においてもサワラやクリが多用されている。

以上から、本遺跡から出土した杭には、耐朽性・保存性が高く木理通直で割裂加工が容易なサワラや重硬で土木材に適したクリが使われている。いずれも温帯に広く分布する樹種であるが、当時の遺跡周辺地域には多く生育していたと考えられる。

## 第 2 節 放射性炭素年代測定

---

### 1 はじめに

放射性炭素年代測定は物質に含まれる炭素同位体のひとつである  $^{14}\text{C}$  を利用して年代を測定する方法である。動植物は生きていく上で  $^{14}\text{C}$  を取り込み続けており、生命が終えると  $^{14}\text{C}$  の取り込みが終了し、その時点から  $^{14}\text{C}$  は放出されてゆくようになる。そのため遺跡から出土した遺存体に残存する  $^{14}\text{C}$  を測定することによって、その生物の死後の経過時間が判明する。放射性炭素年代測定は木材、炭化材、種実、骨、土壌堆積物中の炭化物などの炭素を含むあらゆる遺存体に適応される。

### 2 試料

分析試料は、松本城下町跡より出土したNo. 4（杭No. 20）、No. 9（杭No. 38）、No. 12（杭No. 60）の3点で、いずれも戦国時代後半から末（16世紀）とされる第IV検出面溝2から出土である。なお、これらは樹種同定試料と同一である。

### 3 方法

#### (1) 化学処理工程

ア メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

イ 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常  $1\text{ mol/l}$ （1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

ウ 試料を燃焼させ、二酸化炭素（ $\text{CO}_2$ ）を発生させる。

エ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

オ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

カ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。



## (2) 測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## (3) 算出方法

ア 13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 19)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

イ 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は  $\delta$  13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 32 に、補正していない値を参考値として表 33、34 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ( $\pm 1 \sigma$ ) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

ウ pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta$  13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 32 に、補正していない値を参考値として表 33、34 に示した。

エ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1 \sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2 \sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta$  13C 補正を行い、下 1 桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 32、33 に示し、グラフを図 66、図 67 に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 4 測定結果

松本城下町跡における放射性炭素年代測定の結果、No. 4 (杭 No.20) では  $790 \pm 20$ yrBP、No. 9 (杭 No.38) では  $570 \pm 20$ yrBP、No. 12 (杭 No.60) では  $760 \pm 20$ yrBP である。No. 4 では暦年較正年代 ( $1 \sigma = 68.2\%$ ) は 726 ~ 687calBP、暦年較正年代 ( $2 \sigma = 95.4\%$ ) は 734 ~ 677calBP である。No. 9 では暦年較正年代 ( $1 \sigma = 68.2\%$ ) は 630 ~ 601calBP (41.9%)・559 ~ 541calBP (26.3%) で、暦年較正年代 ( $2 \sigma = 95.4\%$ ) は 640 ~ 590calBP (59.0%)・564 ~ 534calBP (36.4%) である。No. 12 では暦年較正年代 ( $1 \sigma = 68.2\%$ ) は 696 ~ 671calBP で、暦年較正年代 ( $2 \sigma = 95.4\%$ ) は 727 ~ 667calBP である。化学処理および測定内容に問題は無いが、想定されていた戦国時代後半から末 (16 世紀) より古い主に 13 世紀から 14 世紀の年代が測定された。

これには試料である杭が丸太から四分割し芯を避けて製作された角材状の杭である点、樹皮が観察されな

い点から、試料の年輪の最外層から測定用試料を採取したが木材の辺材部や年輪の最外層などの伐採時期を反映しやすい部位が残存していない可能性があるため、より古い年代が測定されたと考えられる。また、一括で古い木材が転用された可能性もある。

表 32 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

試料 No.	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり			
				Libby Age (yrBP)		pMC (%)	
4	木片	AAA	-21.05 ± 0.32	790 ± 20	90.65 ± 0.26		
9	木片	AAA	-21.11 ± 0.31	570 ± 20	93.12 ± 0.28		
12	木片	AAA	-28.14 ± 0.23	760 ± 20	91.01 ± 0.27		

表 33 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代 cal BP)

試料 No.	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
4	720 ± 20	91.38 ± 0.25	788 ± 22	726calBP - 687calBP (68.2%)	734calBP - 677calBP (95.4%)
9	510 ± 20	93.86 ± 0.27	572 ± 23	630calBP - 601calBP (41.9%) 559calBP - 541calBP (26.3%)	640calBP - 590calBP (59.0%) 564calBP - 534calBP (36.4%)
12	810 ± 20	90.42 ± 0.27	756 ± 23	696calBP - 671calBP (68.2%)	727calBP - 667calBP (95.4%)

[ 参考値 ]

表 34 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代 cal BC/AD)

試料 No.	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
4	720 ± 20	91.38 ± 0.25	788 ± 22	1224calAD - 1264calAD (68.2%)	1217calAD - 1273calAD (95.4%)
9	510 ± 20	93.86 ± 0.27	572 ± 23	1320calAD - 1350calAD (41.9%) 1391calAD - 1410calAD (26.3%)	1310calAD - 1361calAD (59.0%) 1386calAD - 1417calAD (36.4%)
12	810 ± 20	90.42 ± 0.27	756 ± 23	1254calAD - 1280calAD (68.2%)	1224calAD - 1283calAD (95.4%)

[ 参考値 ]

参考文献（文献番号は第IV章の続き）

- 文献 25 伊東隆夫・山田昌久 2012 「木の考古学」『出土木製品用材データベース』海青社 p.449
- 文献 26 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48
- 文献 27 佐伯浩・原田浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100
- 文献 28 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 296p
- 文献 29 三村昌史・植田弥生 2005 「箕輪遺跡における木材利用と木材資源」『国道 153 号 伊那・松島バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 箕輪町内 箕輪遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71 長野県伊那建設事務所・長野県埋蔵文化財センター p.368-387
- 文献 30 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究特別第 1 号』植生史研究会 242p
- 文献 31 Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian analysis of radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) p.337-360.
- 文献 32 Reimer, P.J. et al. 2013 「IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP」『Radiocarbon』55(4) p.1869-1887
- 文献 33 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 「Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data」『Radiocarbon』19(3) p.355-363

表 35 松本城下町跡（本町第 8 次調査）における樹種同定結果

試料名	時代	結果（学名／和名）	
A 区IV検溝 2 杭No. 14	戦国時代後半から末	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 16		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 19		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 20		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 21		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 22		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 23		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 28		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 38		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 40		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 44		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 60		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 88		<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
A 区IV検溝 2 杭No. 89		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ
A 区IV検溝 2 杭No. 91		<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.	サワラ

図66 暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)

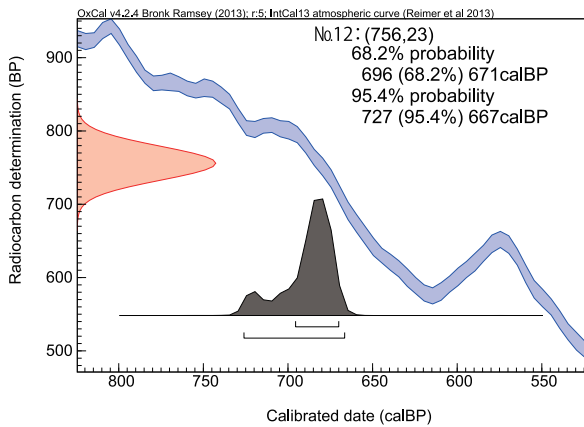
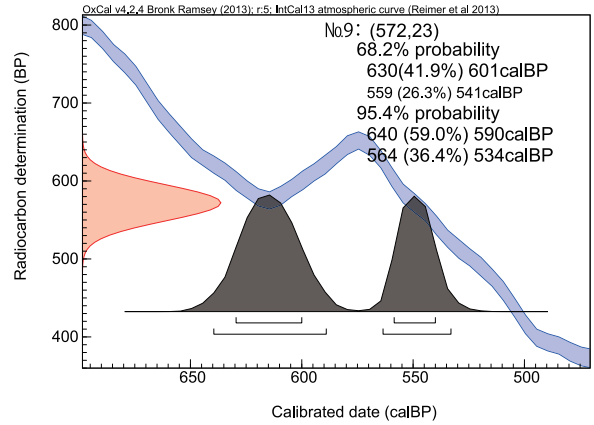
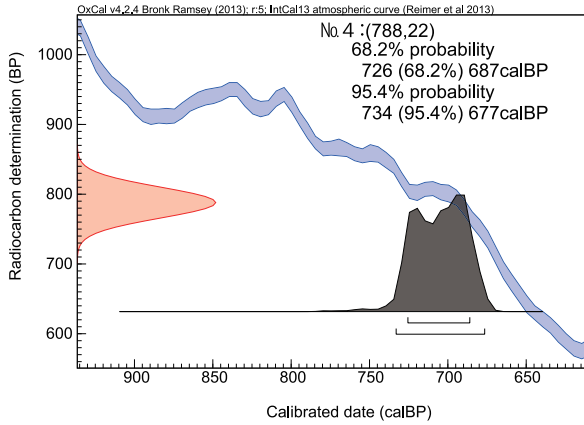
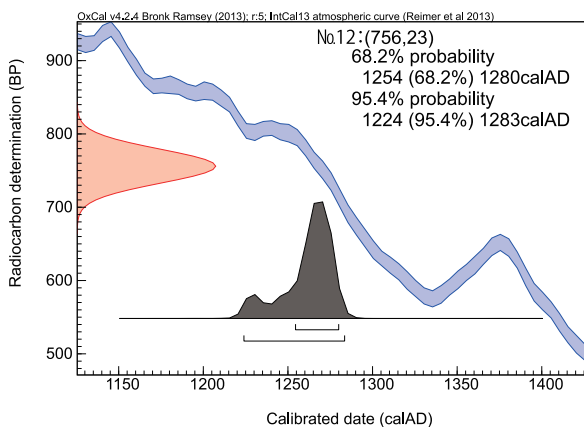
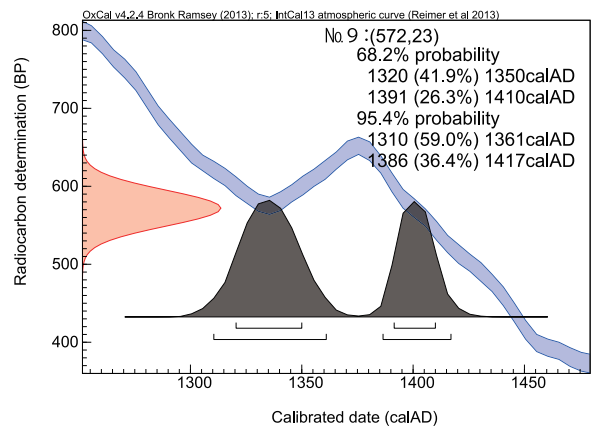
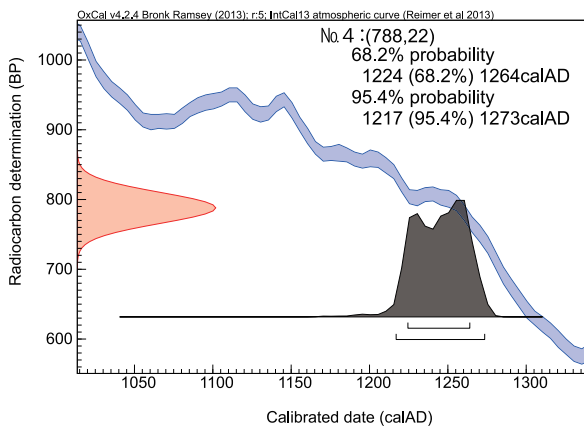


図67 暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)

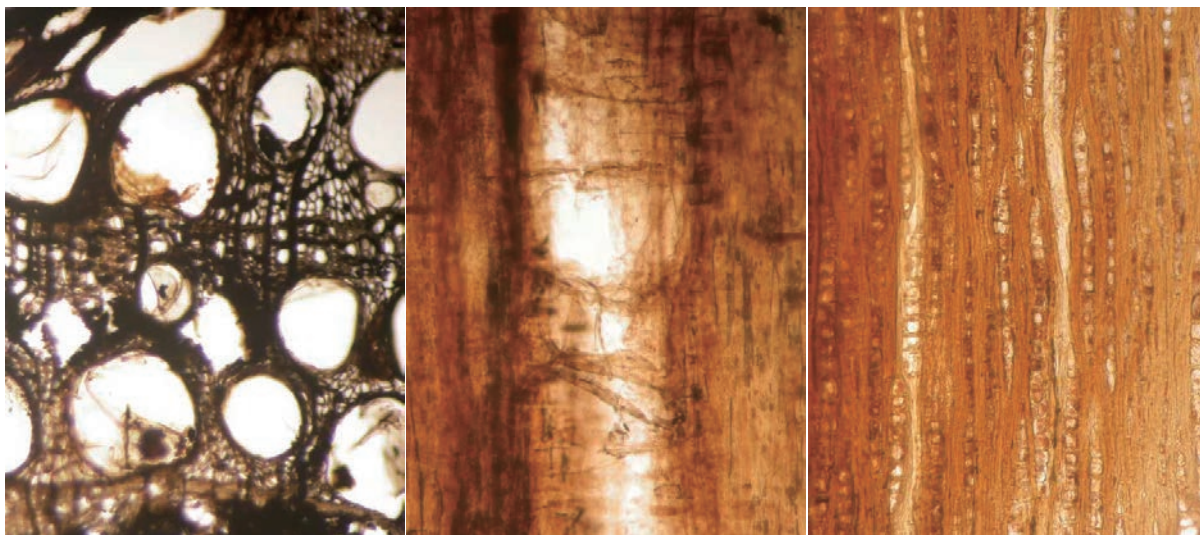




松本城下町跡（本町第8次調査）の木材 I



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 1. サワラ 第4検出面溝2 杭No.14



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 2. クリ 第4検出面溝2 杭No.16



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 3. サワラ 第4検出面溝2 杭No.19



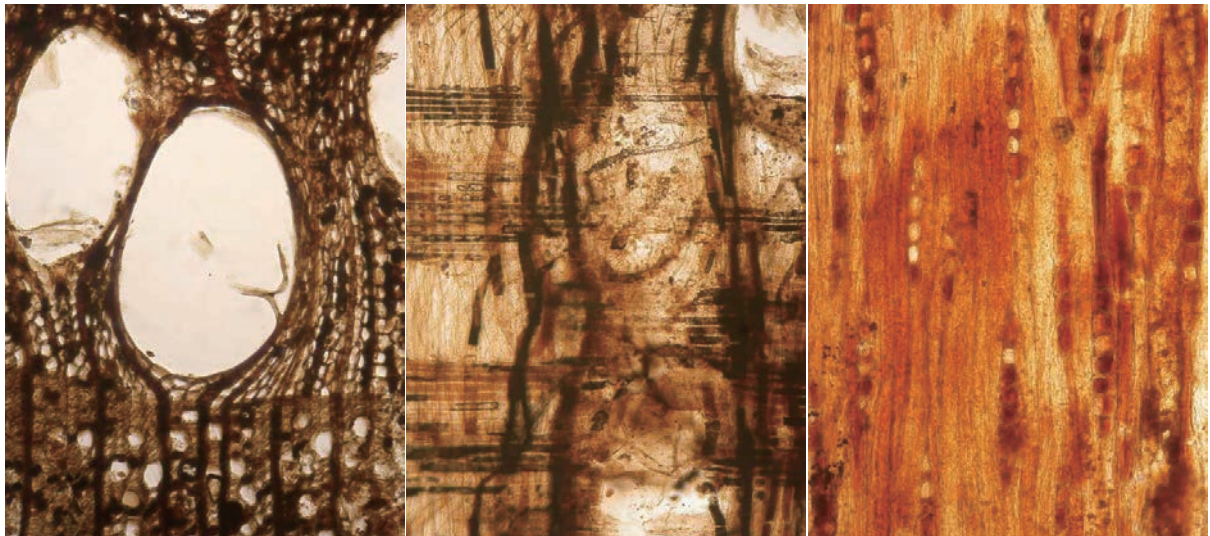
松本城下町跡（本町第8次調査）の木材 II



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 4. サワラ 第4検出面溝2 杭No.20



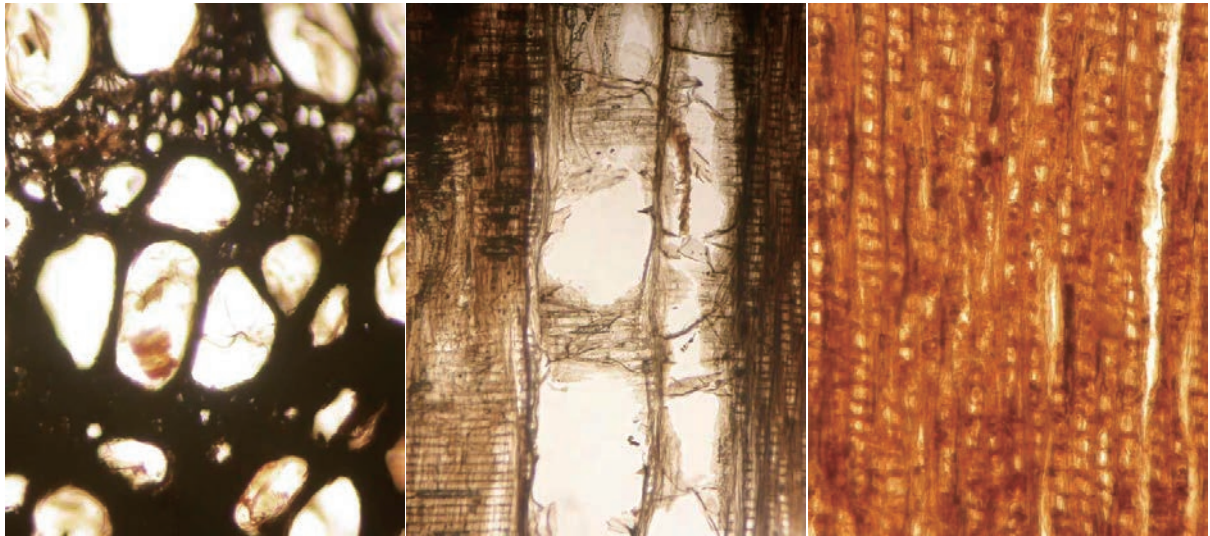
横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 5. サワラ 第4検出面溝2 杭No.21



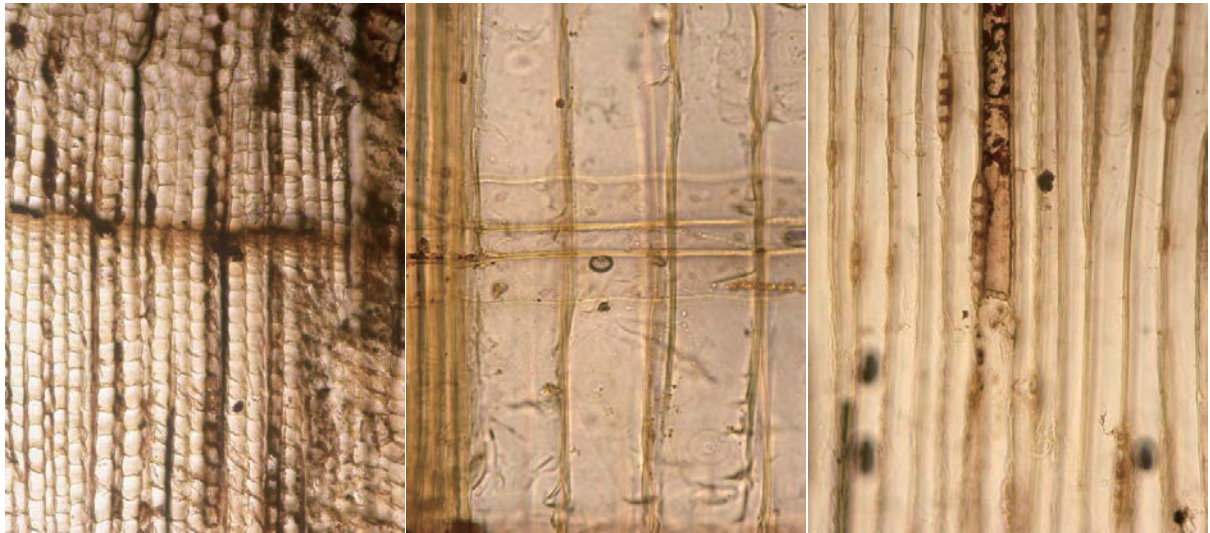
横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 6. クリ 第4検出面溝2 杭No.22



松本城下町跡（本町第8次調査）の木材 III



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 7. クリ 第4検出面溝2 杭No.23



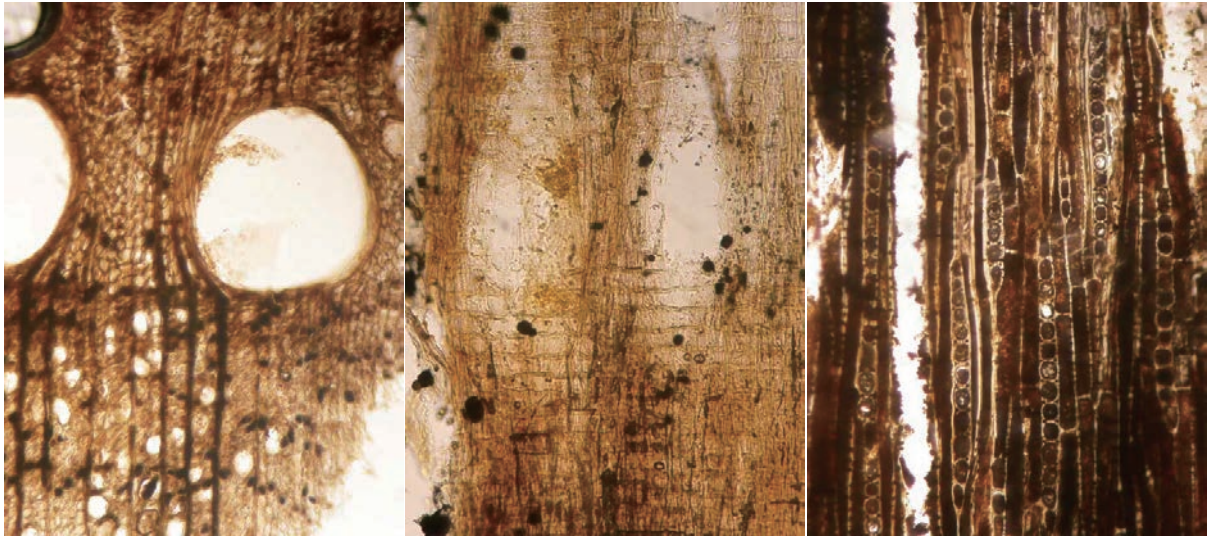
横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 8. サワラ 第4検出面溝2 杭No.28



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 9. サワラ 第4検出面溝2 杭No.38



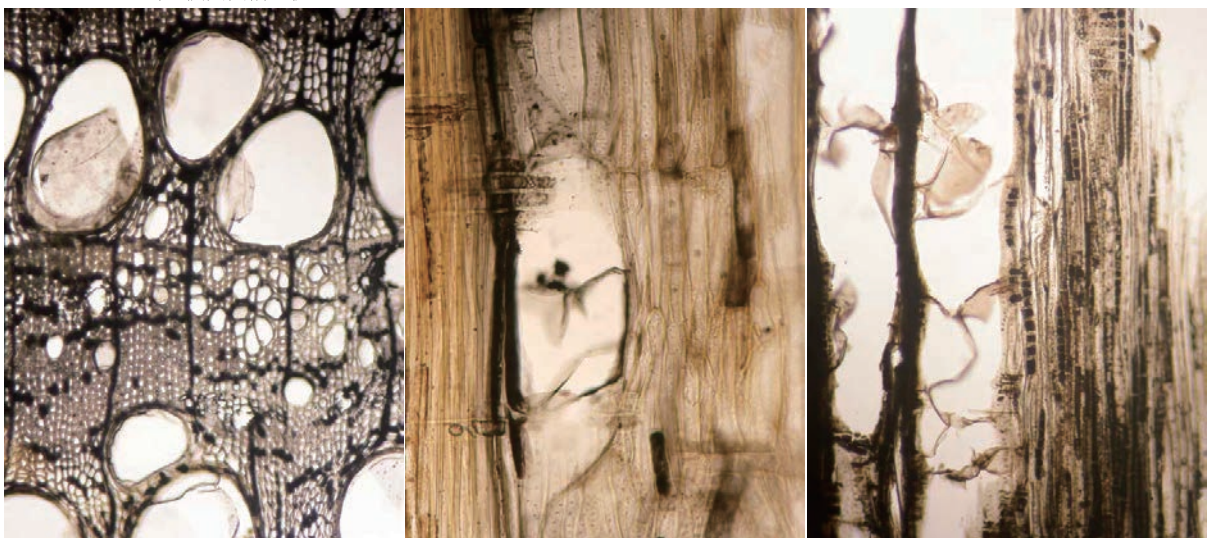
松本城下町跡（本町第8次調査）の木材Ⅳ



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 10. クリ 第4検出面溝2 杭No.40



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 11. サワラ 第4検出面溝2 杭No.44



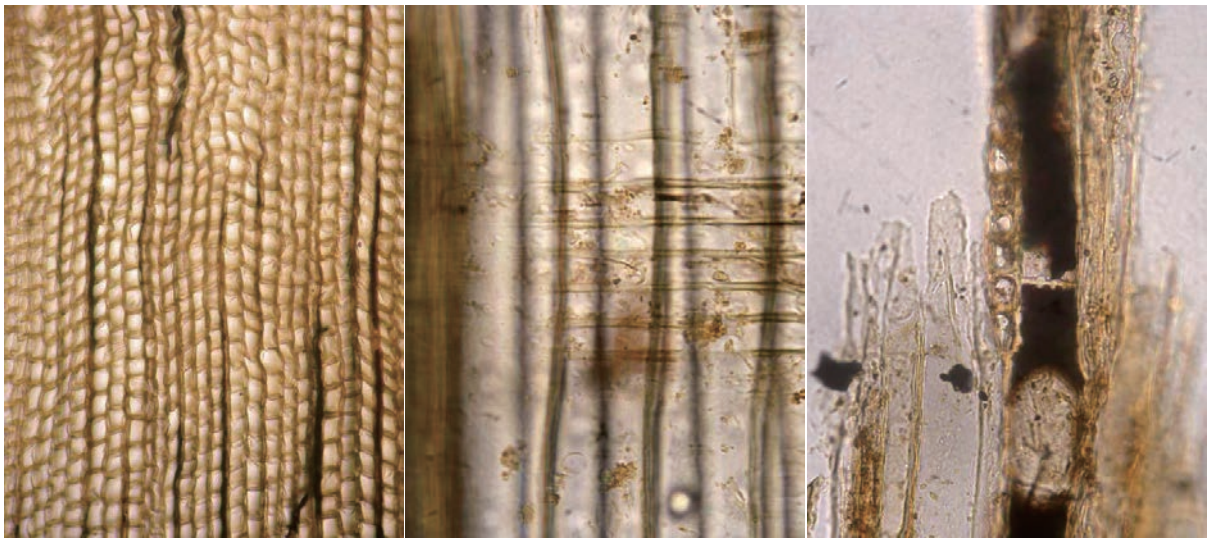
横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 12. クリ 第4検出面溝2 杭No.60



松本城下町跡（本町第8次調査）の木材 V



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 13. クリ 第4検出面溝2 杭No88



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 14. サワラ 第4検出面溝2 杭No89



横断面 0.1mm放射断面 0.1mm接線断面 0.1mm  
 15. クリ 第4検出面溝2 杭No91

## 第Ⅵ章 調査のまとめ

### 1 城下町の町割りの変遷

本調査の平面積は 1,000㎡以上となり、これまでの松本城下町跡での発掘調査で最大規模のものとなった。同規模の調査に伊勢町 1 次調査の 920㎡の調査もあったが、多くの場合、町屋敷 1 軒分の調査にとどまっている。本調査のように、複数の町屋敷を同時に調査できるケースは非常に珍しいため、町屋敷の形成や歴史の変遷を詳細にみる機会になった。特に、城下町成立期から形成期までの事については、絵図や文献が少なく、不明な点が多かったため、今回の成果が城下町の歴史解明に寄与する部分は非常に大きいものである。以下のように変遷をたどることができる。

(1) A・B 区Ⅳ検は、出土遺物から 2 時期に分かれることがわかり、古い方の時期は 14～15 世紀代の生活面である。本調査地から西に約 80m 離れた伊勢町 1 次では、13～14 世紀の集落跡が見つかっており、そこの関連が考えられる。付近一帯に断続的に中世集落が営まれていたことが想像される。今回検出された方形状の区割りはこの頃に造られたと考えられる。

(2) A・B 区Ⅳ検の新しい方の時期は 16 世紀末～17 世紀初頭である。14～15 世紀に造られた集落の跡地を利用し、小笠原貞慶～石川親子時代に城下町として整備されている。近世城下町で見られるような短冊形の地割りはまだできてはいない。

(3) A・B 区Ⅲ検の調査で、17 世紀前半の慶長・元和期に大造成工事が行われたことがわかった。被熱した古い瓦や高級茶器が造成土に多量に含まれていたことから、城内で火災があり、その時の土が運び込まれた可能性が考えられる。この造成後に短冊形の地割りになっている。火災の後処理と地割り工事のタイミングが合った結果といえる。

(4) 方形地割りの面の上に厚さ最大 1m 近くの土で覆い、17 世紀中頃の水野氏時代までに、短冊形の近世城下町が完成したことがわかった。また、各屋敷で出土遺物の年代観に差が見られたことから、屋敷単位で盛土造成を行い建て直しをしていることも確認できた。

### 2 御使者宿について

今回、御使者宿の範囲内で初めての発掘調査を実施し、遺構・遺物を確認できた。これまで、数少ない文献資料からのみであったが、発掘調査により、その実態に迫ることができた。

**遺構** 礎石建ち建物であり、他の町屋とは違う。水道施設が他よりも頑丈に作られており、インフラ工事にもお金をかけ、力を入れていた。

**遺物** 高級なものがたくさん出た。懐石料理に使用していたような茶器類や、焼塩壺や海鮮食材など一般的な町人地では見られないようなものが出土している。松本での焼塩壺の出土は二の丸御殿跡で 59 点<sup>文献<sup>21</sup></sup>と本町の塩問屋で 1 点<sup>文献<sup>34</sup></sup>と、非常に限られた範囲でしか見られない。文献 7 によると、身分の高い人が御使者宿を利用しているのがわかり、接待に使われたものと推定できる。

今回の調査では御使者宿と断定できる文字資料などは出土していないため、本書では推定御使者宿としている。しかし、上記のようにこれらの検出遺構と出土遺物はほぼ間違いなく御使者宿があったからこそと言える。



### 3 寛永通寶鑄造関連遺物について

松本錢座の存在は以前からわかっていましたが、錢座の場所は特定できていなかった。今回の調査で初めて松本錢鑄造関連の遺物が出土し、錢座の様相を少なからず掴むことができた。鋳滓が多量に出土していることから、大鍛冶から小鍛冶まで松本で行っていたことがわかる。

未仕上げ寛永通寶の出土により、松本錢の基礎資料を得ることができた。これまでは、錢座請負元であった今井家に代々伝わる枝錢のみであり、今後の研究・分析により松本錢の特徴がより具体的にわかってくることが期待される。

今回の調査では、鑄造に関わる遺構については確認することができなかった。鑄造関連遺物の多くはⅠ検ないしはⅡ検を造る整地層から出土している。このことから、錢座が解体され、残った未仕上げ品や鋳滓が土と一緒に別の場所の造成に使われたことを示唆している。造成に使われた土がどこから持ち運ばれたかは不明であるが、費用対効果を考えるとそう遠くない場所から土を得ていると考えられる。このことから、松本錢座は今回の調査地周辺にあったと推定している。

近世の錢座は、図 68・69 で見るように、1 辺 100m 四方以上もある大規模な工房であることがわかる。これは、様々な作業工程を効率的に行うためにこれだけの敷地が必要であるためである。松本錢座も例にも

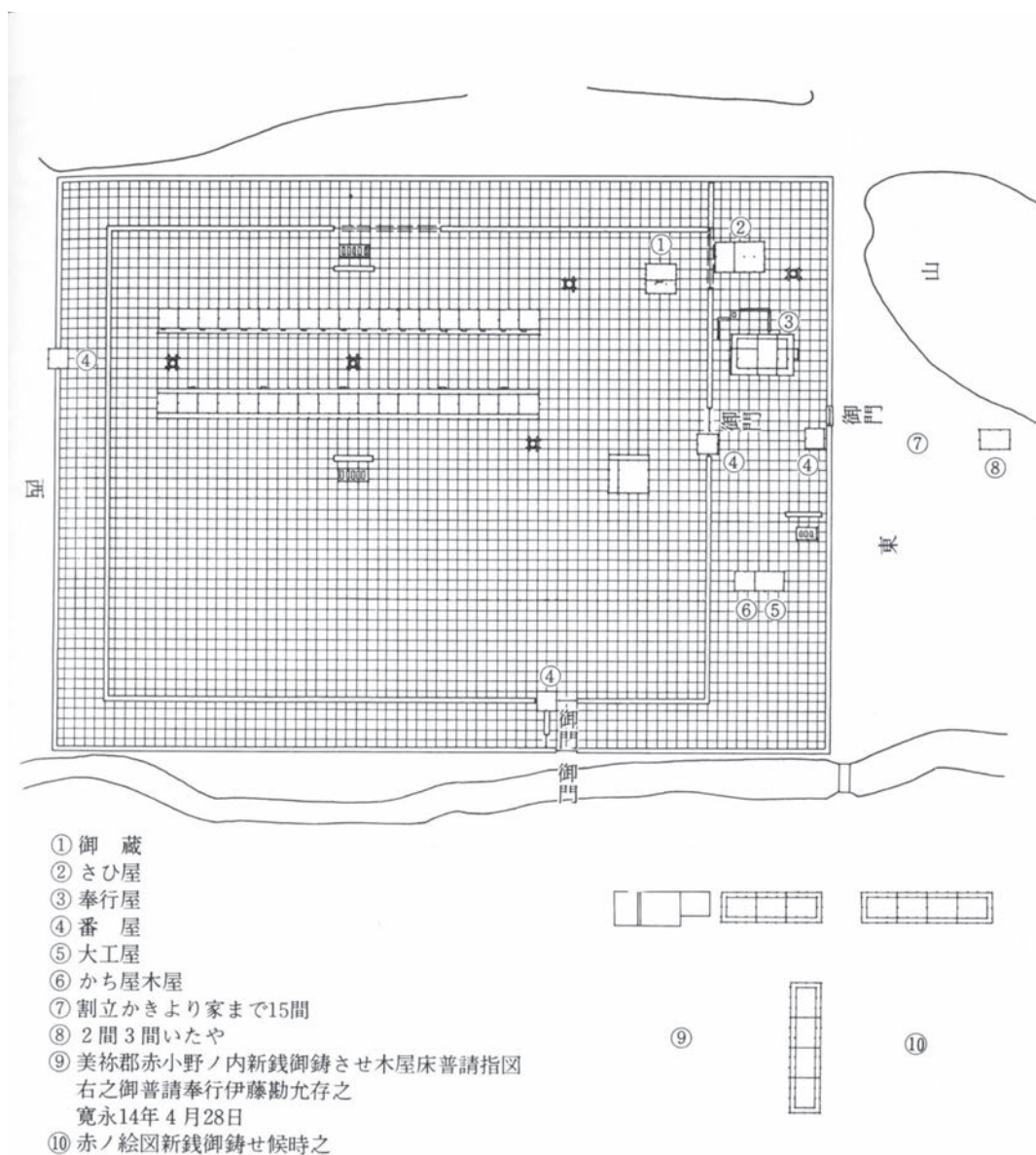


図 68 長州藩錢座図模式図 (文献 15 より)

れず同じような規模であったとすると、これだけの規模の工場の痕跡が全く無くなってしまったとは考えにくい。城下町跡での今後の発掘調査や古文書等の調査で銭座の痕跡を注意深く探っていく必要がある。また、松本城下町跡でのこれまでの調査において、伊勢町や小池町等で坩堝や鋳滓、羽口などの鑄造関係の遺物が多量に見つかっているため、過去の調査成果についても精査する必要が出てきた。



図 69 大坂「摂津国西成郡難波村鑄銭出張所之近景全図」(文献 15 より)

#### 参考文献 (文献番号は第V章の続き)

- 文献 34 松本市教育委員会 1997 『松本城下町跡伊勢町第 8・9・12 次 本町第 1・2 次発掘調査報告書』  
松本市文化財調査報告書 No.129

#### 結 語

本調査の実施と報告書作成にあたっては、信濃毎日新聞株式会社からは多大なご理解とご協力をいただきました。現場作業の際には本町 2 丁目と飯田町 2 丁目の各町会の皆様、各町会長の皆様、松本市本町商店街振興組合の皆様にはご理解とご支援を受け賜りました。文末になりましたが、記して深甚なる謝意を表するものです。

また本書をまとめるにあたり、例言にお名前を記した皆様からたくさんのご助言、ご教示を頂戴しました。しかしながら、編者の力量不足により、それらを本文中に十分反映することができませんでした。深くお詫び申し上げますとともに、改めてご協力に感謝申し上げます。





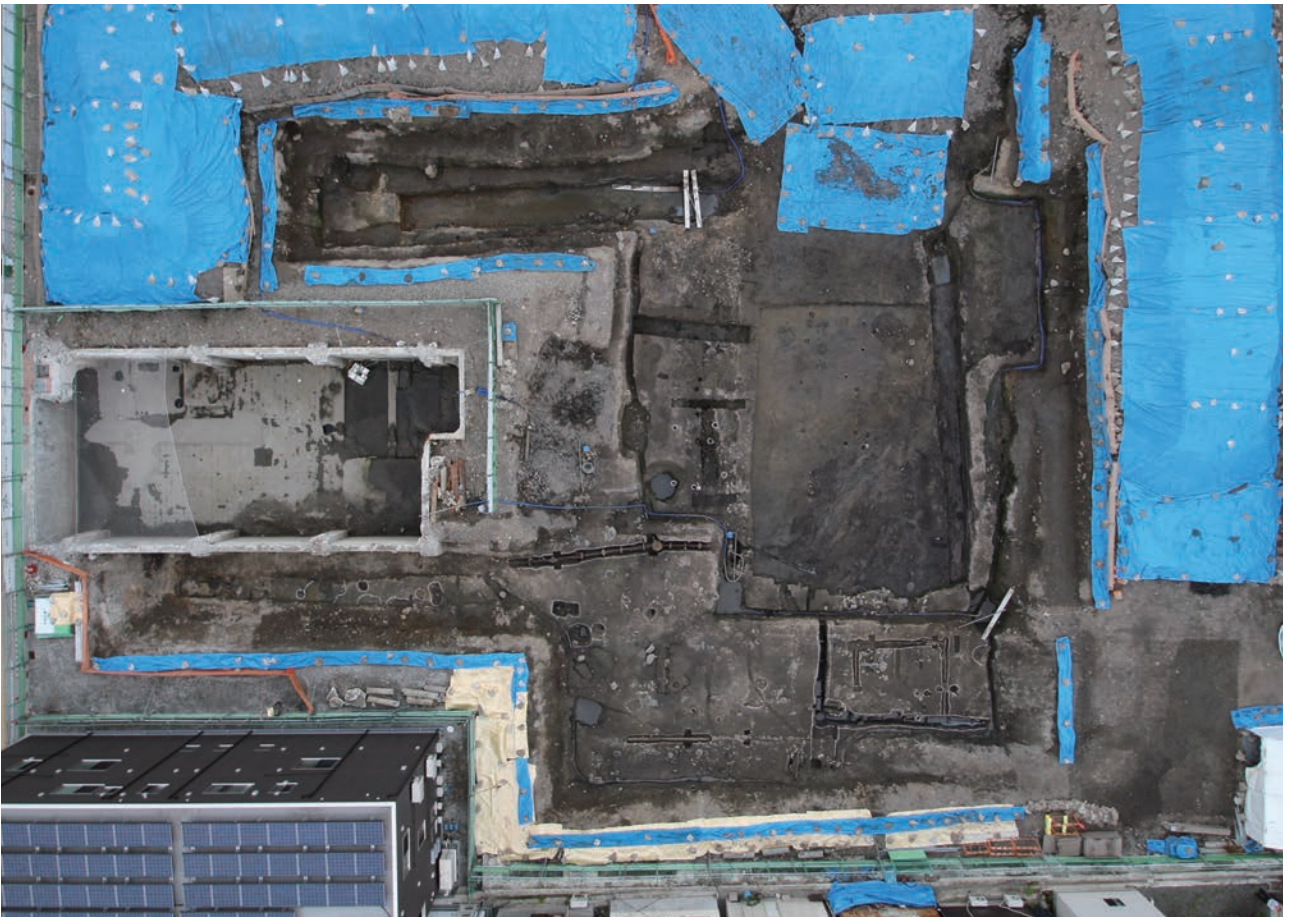
調査区から松本城を望む合成写真（北が上）



写真図版 2



A区I 検全景（北が上）



A区V 検・B区I 検全景（北が上）





A区I 検全景（南東から）



A区I 検建1（西から）



A区I 検建2（東から）



A区I 検土 60・76（南から）



A区I 検推定御使者宿（東から）



写真図版 4



A区Ⅰ検土72（北から）



A区Ⅰ検土73・75（東から）



A区Ⅱ検全景（南東から）



A区Ⅱ検石列1・水道3（北東から）



A区Ⅱ検水道8（東から）





A区II検水道 5~7・土 125 (西から)



A区II検土 82 (西から)



B区II検全景 (東から)



B区II検溝 1 (東から)



B区II検石列 1 (南東から)



写真図版 6



A区Ⅲ a 検炭 8～18 (東から)



B区Ⅲ a 検炭 2 (南から)



B区Ⅲ b 検土 3 (南から)



B区Ⅲ b 検土 3 (東から)



A区Ⅳ 検溝 2・3・7 (南から)





A区IV検溝1（東から）



A区IV検溝5（東から）



B区IV検全景（西から）



A区IV検溝2 杭列（南から）



A区V検全景（南から）



A区西壁（東から）



A区東壁（西から）



A区北西部トレンチ（南東から）



A区I検 町屋2



A区I検 町屋3



A区I検 町屋4





A区Ⅱ検 町屋5



A区Ⅱ検 町屋6



A区Ⅰ検 御使者宿①



A区I検 御使者宿②



A区II検 御使者宿



B区I検 御使者宿





B区Ⅱ検 御使者宿



A区Ⅲa検①



A区Ⅲa検②



B区Ⅲ a 検



A区Ⅲ b 検



B区Ⅲ b 検



A・B区IV検



A区V検



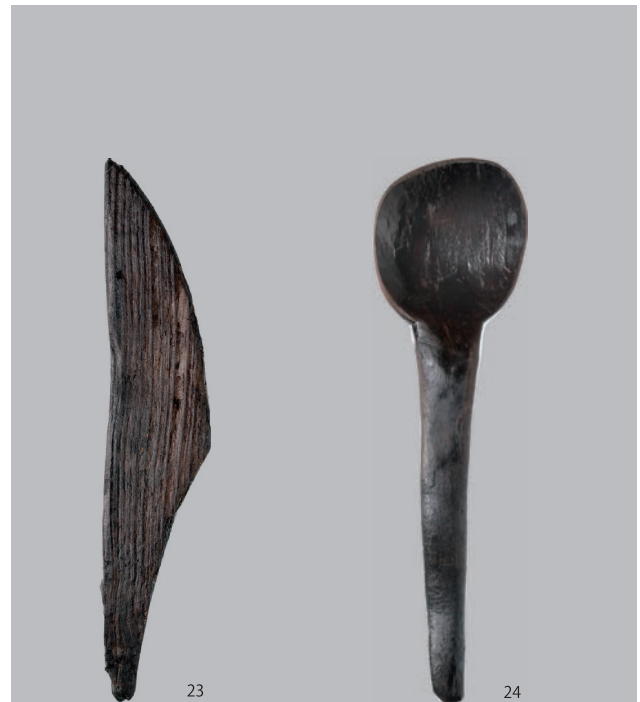
B区III b 検





木製品 (1) (S= 約 1/4、No. は実測図中の番号に同じ)





木製品 (2) (18 : S= 約 1/4、その他 : S= 約 1/3、No. は実測図中の番号に同じ)



26



27



28



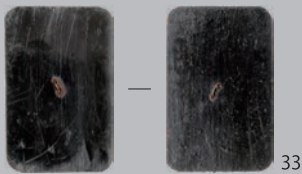
28(側面)



29



29(底裏)



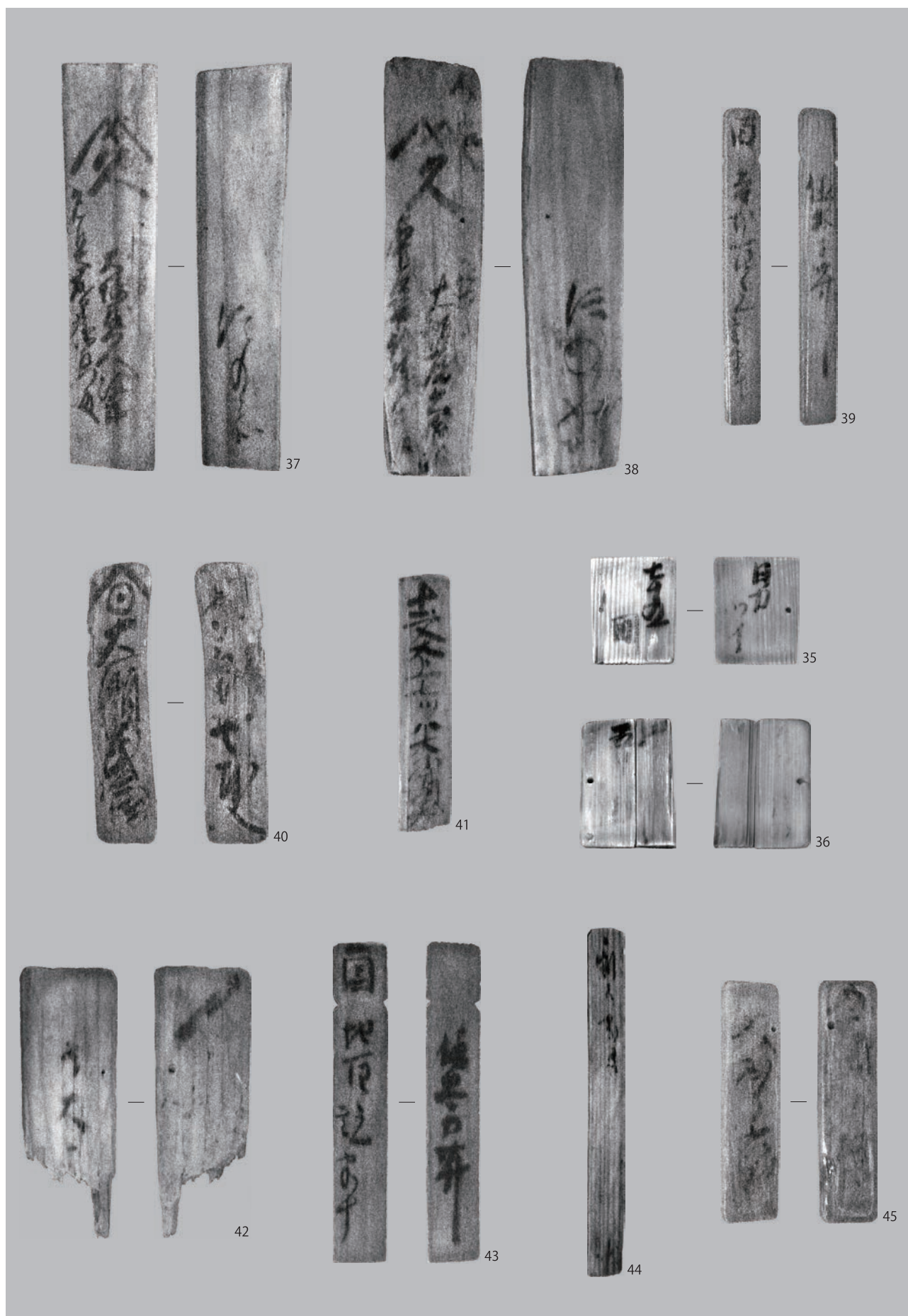
33



30



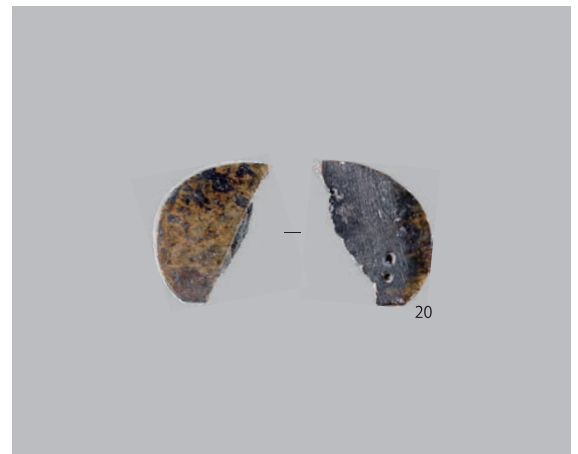
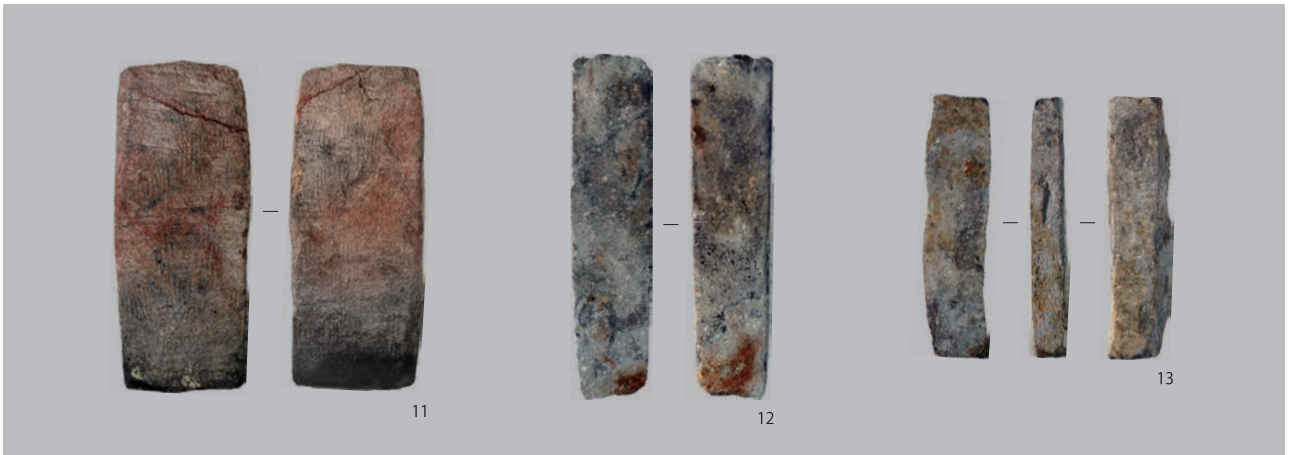
32



木製品 (4) (S= 約 1/3、No. は実測図中の番号に同じ)

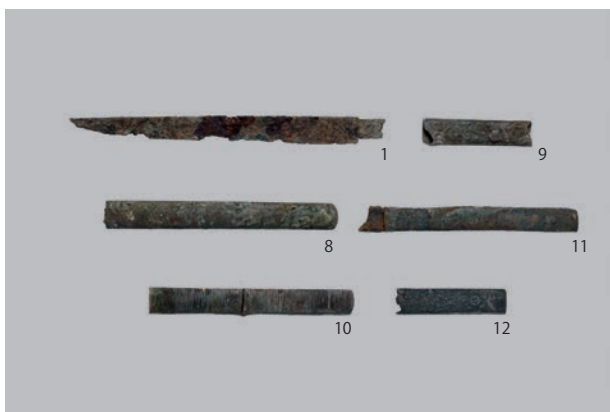


写真図版 18



石製品 (1 ~ 9・20 : S= 約 2/3、10 ~ 19 : S= 約 1/3、No. は実測図中の番号に同じ)





刀子・小柄



煙管・不明



煙管 (13)



分銅



釘・燧鉄



毛抜き・鋏

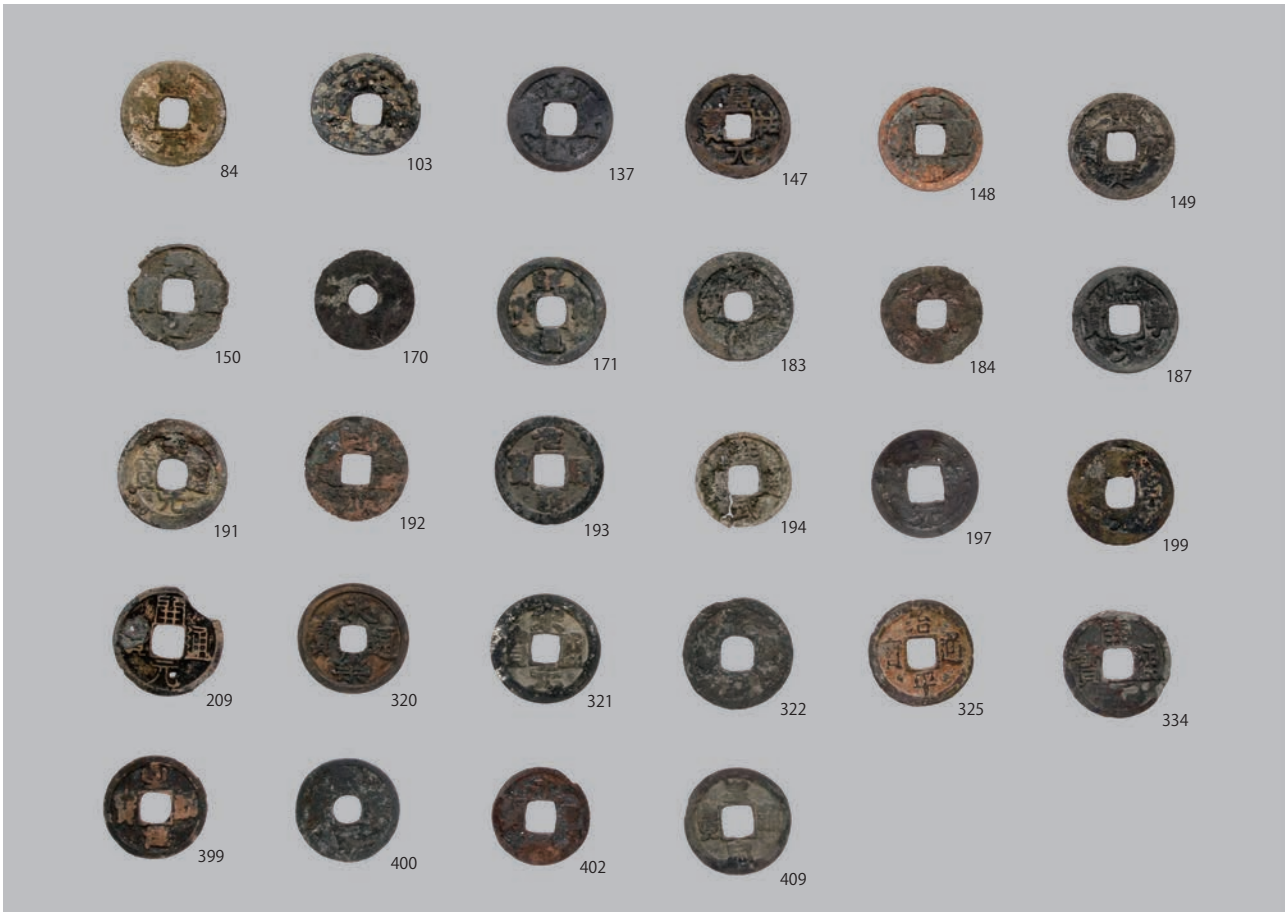


鈴・吊金具

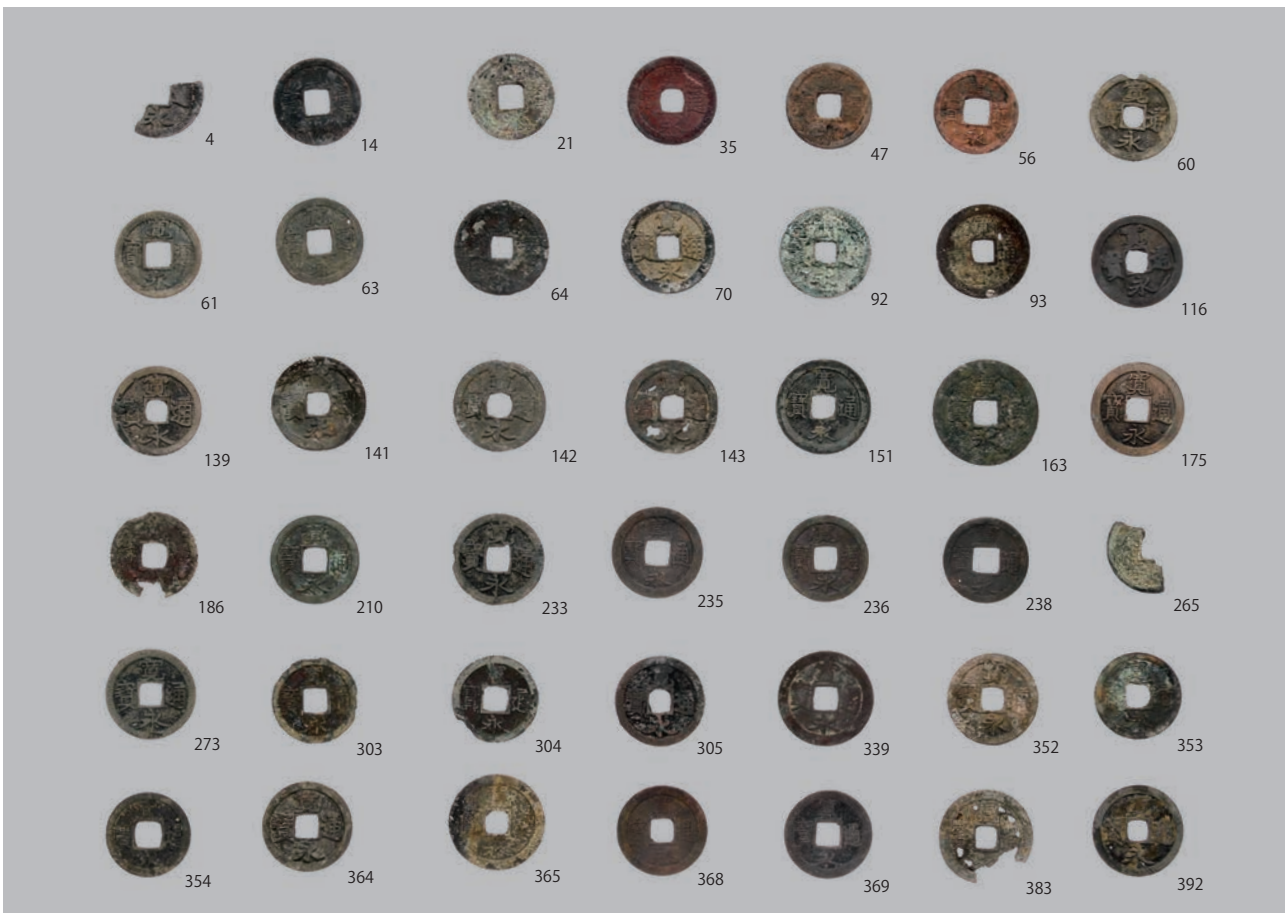


鏡 (23)

金属製品 (17・18 : S=1/2、その他不同、No. は実測図中の番号に同じ)

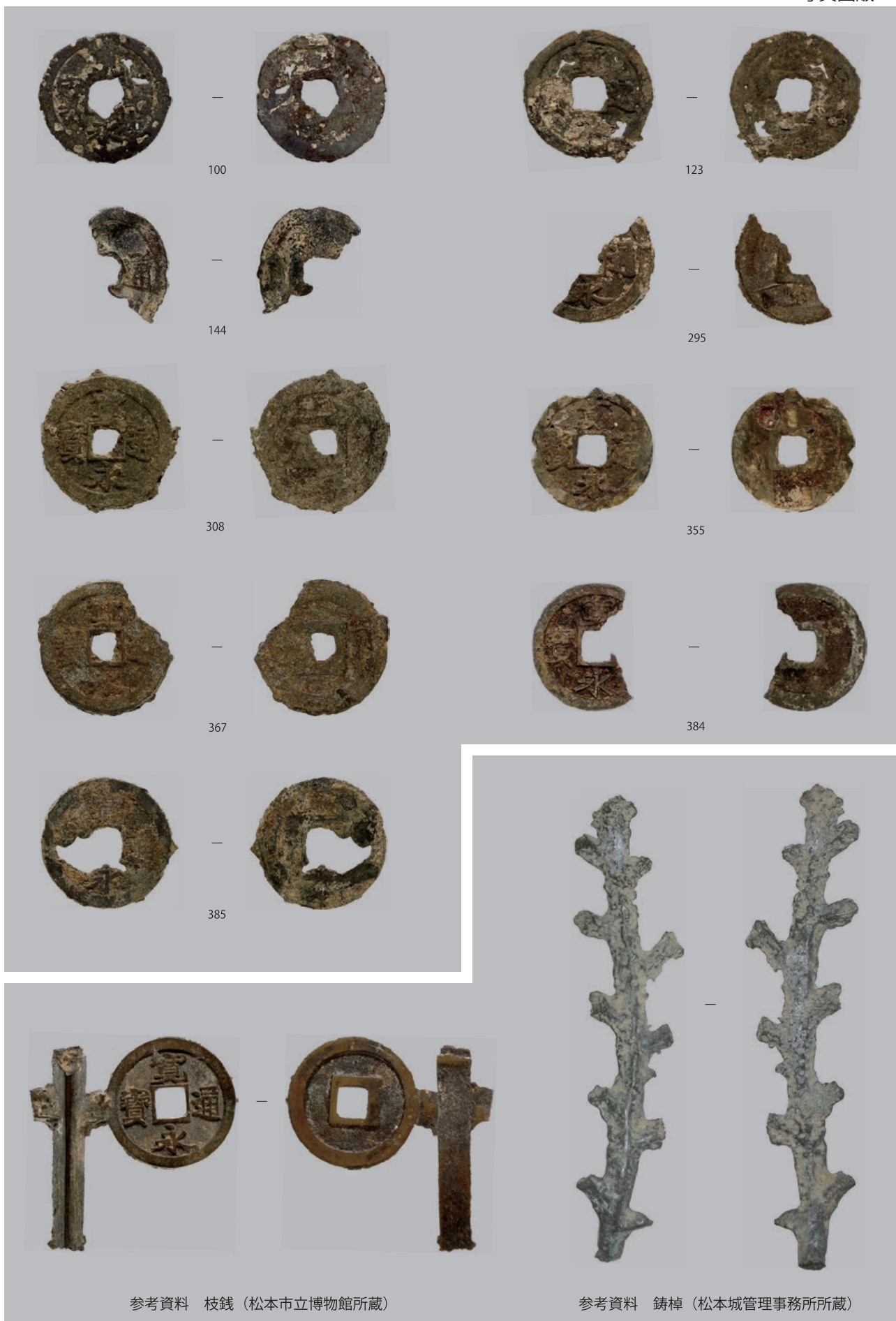


古銭（中国銭）



古銭（寛永通宝）

鑄造関連資料(1)（縮尺不同、No. は実測図中の番号に同じ）



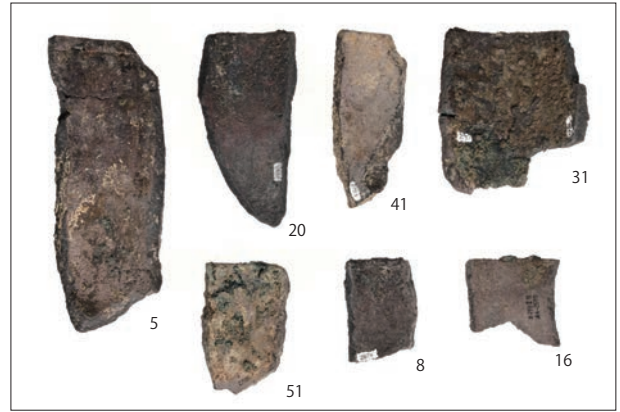
寛永通宝 (未仕上げ品・失敗品)

鑄造関連資料 (2) (S=1/1、No. は実測図中の番号に同じ)

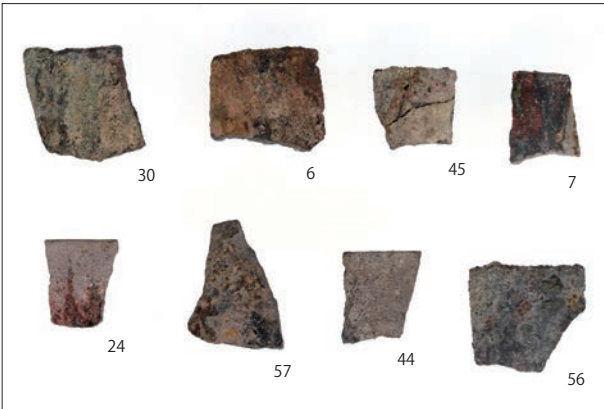




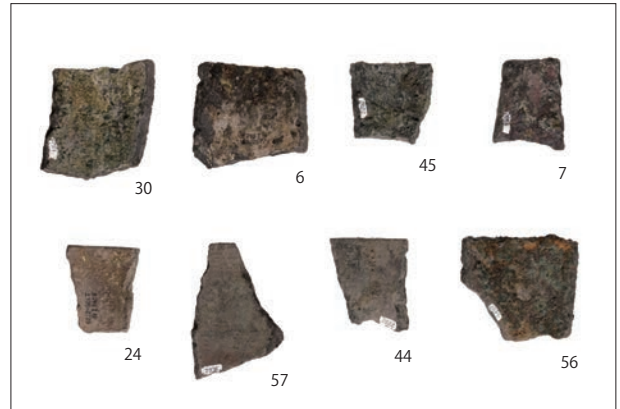
坩堝 (1) (外面)



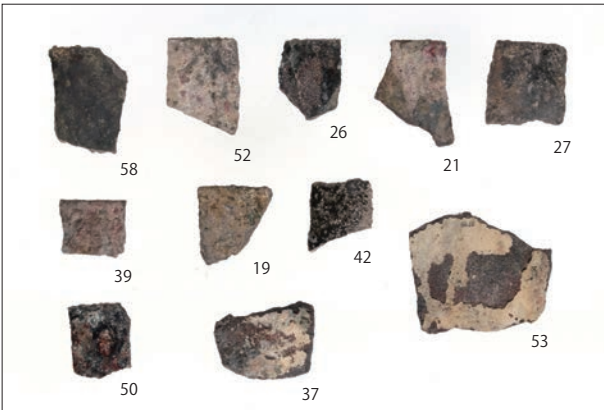
坩堝 (1) (内面)



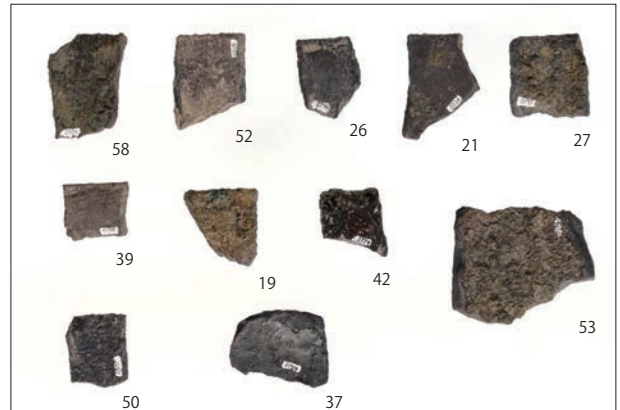
坩堝 (2) (外面)



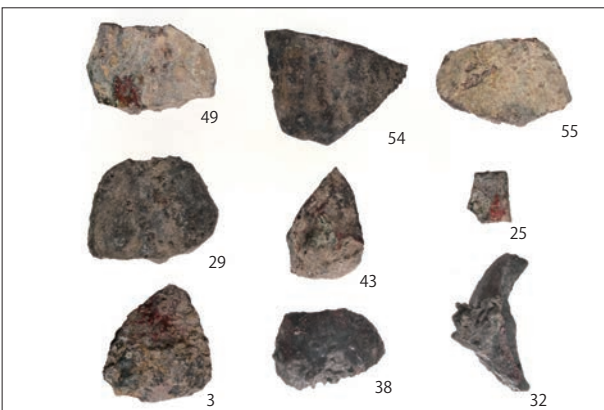
坩堝 (2) (内面)



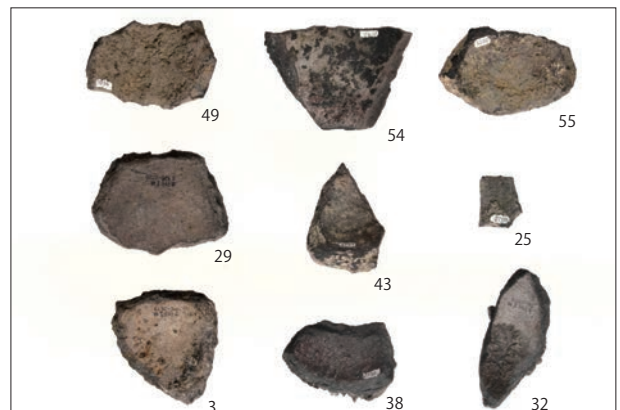
坩堝 (3) (外面)



坩堝 (3) (内面)

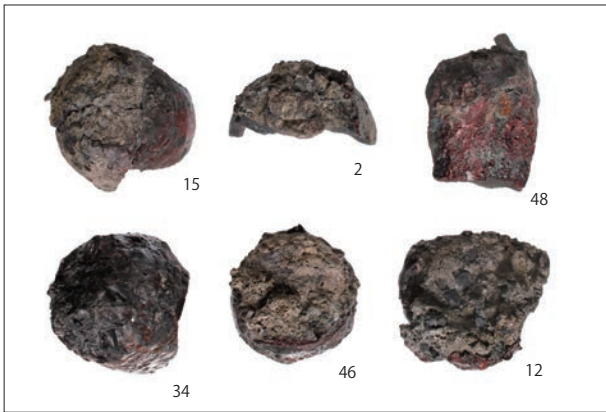


坩堝 (4) (外面)

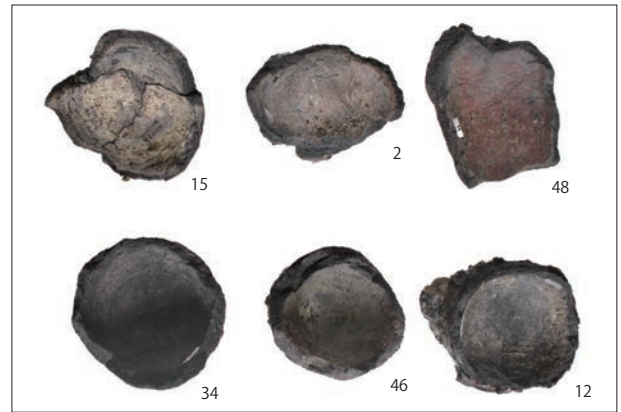


坩堝 (4) (内面)

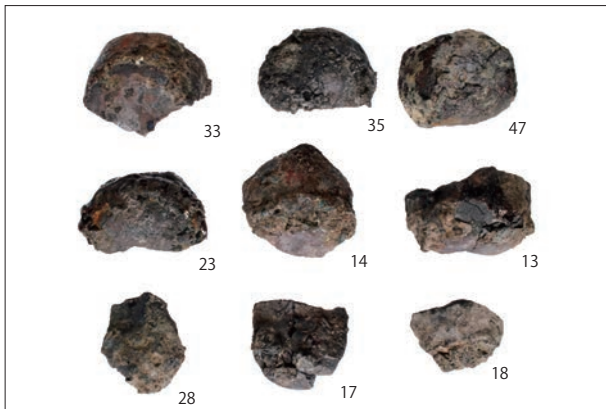




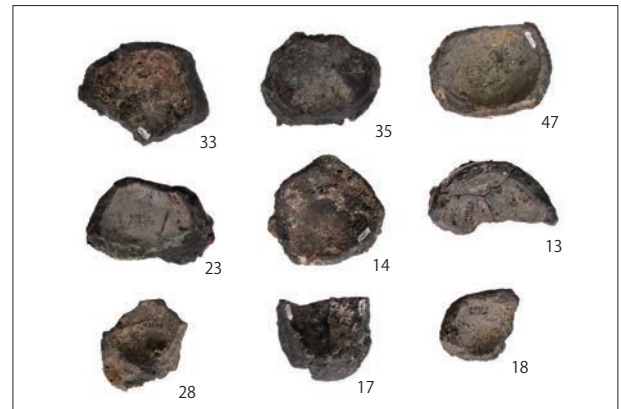
坩堝 (5) (外面)



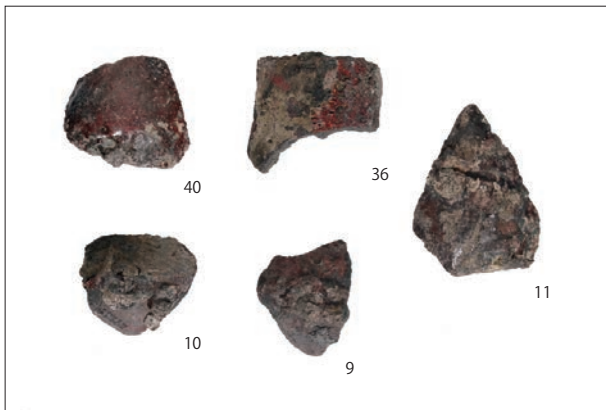
坩堝 (5) (内面)



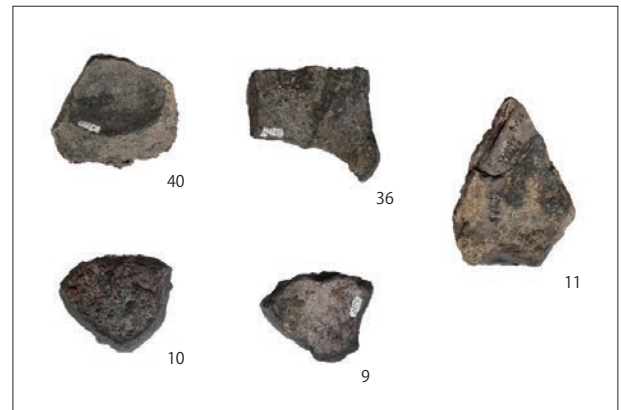
坩堝 (6) (外面)



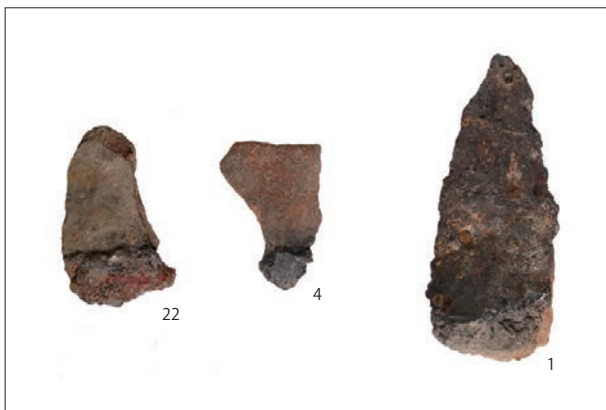
坩堝 (6) (内面)



坩堝 (7) (外面)



坩堝 (7) (内面)

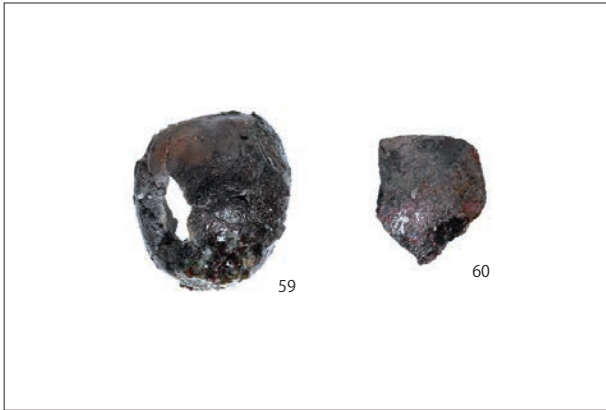


坩堝 (8) (外面)



坩堝 (8) (内面)

鑄造関連資料 (4) (縮尺不同、No. は実測図中の番号に同じ)



トリベ (取鍋)



トリベ (取鍋) (59)



サヤ (匣) (1)



サヤ (匣) (2)



金属片 (表)



金属片 (裏)



鉍滓 (1)



鉍滓 (2)

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしまつもとじょうかまちあとほんまちだい8じはっくつちょうさほうこくしよ							
書名	長野県松本市松本城下町跡本町第8次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.234							
編著者名	小山奈津実、鈴木仁美、高山いず美、竹内靖長、原田健司、宮下亮							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2019(平成31)年3月26日(平成30年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
まつもとじょうかまちあと松本城下町跡ほんまち本町	ながのけんまつもとしまつもとじょうかまちあと長野県松本市ちゅうおう中央2丁目20番2ほか	20202	157	36度13分58秒	137度58分11秒	2015年8月3日～ 2016年9月13日	のべ4,177㎡ (I～V検の合計)	民間建物 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松本城下町跡本町	屋敷跡(町屋)	戦国～江戸	A区I検 建物跡4軒、敷地境跡4条、石列6条、集石遺構6基、溝状遺構6条、水道遺構4条、礎石1、土坑82基、ピット18基 A区II検・B区I検 敷地境跡1条、水道遺構7条、溝状遺構9条、石列1条、土坑138基、ピット61基 B区II検 溝状遺構4条、石列1条、土坑21基、ピット15基 A・B区III検 溝状遺構3条、炭範囲32基、土坑4基、ピット9基 A・B区IV検 溝状遺構11条、土坑66基、ピット158基 A・B区V検 遺構なし		陶磁器 肥前産、瀬戸・美濃産、京都産、輸入磁器ほか 土器 土師器(古代)、須恵器(古代)、皿、内耳鍋、五徳ほか 木製品 漆器、下駄、男根状木製品、木札、箸ほか 石製品 基石、砥石、硯、石臼ほか 金属製品 煙管、鏡、分銅、銭貨ほか 鋳造関連遺物 古銭(寛永通宝)、坩堝、トリベ(取鍋)、鋳滓ほか		A・B区I・II検の御使者宿の推定地から、礎石建ち建物址や飛石遺構など通常の町人屋敷では見られない遺構が検出され、高級茶器や焼塩壺、海産物などの食材も出土している。 A・B区I・II検の整地層中から松本銭(寛永14～17年に松本銭座で鑄造された寛永通宝)の鑄造関連資料が出土した。 A・B区IV検では、杭列を伴う蛇行する溝が検出された。	
要約	<p>GLから150cm程度は攪乱により、調査はできなかった。攪乱直下から17世紀後半～18世紀後半の生活面(I検)を確認した。そこから城下町が成立する以前の堆積層(V検)まで1面ずつ調査を実施した。出土遺物から、各検出面の時期は、II検が17世紀前半～18世紀中頃、III検が16世紀末～17世紀初頭、IV検が14～15世紀・16世紀末～17世紀初頭、V検が14～15世紀以前と考えられる。</p> <p>今回の調査により、城下町成立時(16世紀末)の方形区画の屋敷割りから、段階を経て、17世紀後半までに近世的な城下町に発展していく変遷が確認できた。これまで、城下町初期の様子が不明確であったため、町の歴史の変遷を検討する上で貴重な資料となった。また、I・II検では、絵図上に記されている御使者宿(公的な宿泊施設)に帰属すると考えられる遺構・遺物が確認できた。</p>							

---

松本市文化財調査報告 No.234

長野県松本市

松本城下町跡 本町

—第8次発掘調査報告書—

発行日 平成31年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社二光印刷

---